



Title	生い立ち（暮した道）の話：第2巻 青年時代
Author(s)	カンチュガ, アレクサンドル//著; 津曲, 敏郎//編訳
Relation	アレクサンドル・カンチュガ著; 津曲敏郎編訳, ウデヘ語自伝テキスト: 2 青年時代 = БАГДИСЭ ХОКТО ТЭЛУНУНИ: 2 ГНАОНЗАКА ЭКИНИ. 北海道大学大学院文学研究科, 2010, 171p, (ツングース言語文化論集 = Исследования по Тунгусоведению, 50).
Citation	ツングース言語文化論集, 50, 1-171
Issue Date	2010-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56394
Type	report
File Information	04kanchuga.pdf



Bagdise Xokto Teluḡuni

生い立ち（暮した道）の話

Zuunti kniga

第二 巻

Naonzaka ekini

青年 時代

Naonzaka ekini! Xoytowe jou aja

青年 時代！ ほかのを、何の良いものが

biiweni baazaye? Naonzaka ekini!

あるのを 見つけるだろう？ 青年 時代！

Amidui, enidui, agazigedui, neḡunedui

父に、 母に、 兄たちに、 弟妹たちに

— zoḡimi onjoimi, saulegiesi mejesimi.

思い出して 書く、光をあてて 思い浮かべる。

I

Omo miḡga jei tangu tuḡaza aḡani. Zaa zuunti june. Buu, ilantunḡe
一 千 九 百 五 十 年 十 二 日 六 月。 私たち 三人の

njoulaziga: Sulaidiga Vasja, Suaḡka Mite, bii, — mutuemu nada klassawa.

少年、 スリヤンジガ・ワーシャ、スアンカ・ヴィーチャと 私は 終えた、七 年生を。

Mite lusa kejezini onjogimi "zubeme" baani, utemi bolotigie amjasaani.

ヴィーチャは ロシア 語 作文で 「二」を もらった、それで 秋まで 残った。

Sikie tindagiiti neḡini mundu dianḡiti: Pakula susu omo aanawe imeneeni,

夕方、 送別の 日に 私たちに 言った： パクラ おじさんが 一艘 舟を 置いて行った。

utazi buu Burlitetigi timana ejenelegeu, nuani utala alasizeḡeni munawa.

それで 私たちが ブルリトまで 明日 くだるように。彼が そこで 待っている、私たちを。

Sikie siasaḡazige aiwe solieti zikte ulizini, utemi xutaligile bisini.

夕方、先生たちが ウオッカを 割った、木イチゴ ジュースで、それで 赤い色 だった。

Umiemu buu skolawa mutuefi tugenzini. Kutu gwaci ai. Bii dilii ingule

飲んだ、私たちは 学校を 終えた ことで。 とても 苦い 酒だ。私の 頭は すぐに

xaunelieni. Amjala bii buala jaaktasineḡiemi. Mundu uti sikieni pjouwede

回り出した。 あとで 私は 外で 吐いた。 私たちに この 夕方 卒業証書を

esiti bugi, xaisi esiti gazi RONodigi. Nadezhda Andrevna diankini,
くれなかった。まだ持って来てなかった、地区教育部から。ナジェジュダ・アンドレーヴナが 言った、
buu zua geenegilegeu (nuani direktora esigieni taamati boloni. Materikinewe
私たちは夏に受け取れると (彼女は 校長に なった、 去年の 秋に。 マテリキンを
asitagieti. Imi asitagiemeti, bii amjala onjozepei).
やめさせた。なぜ やめさせたかを、私は あとで 書こう)。

Elena Petrovna Tat'jana Pavlovnade munzi gie ejenelegefi (1/2)

エレーナ・ペトローヴナと タチヤナ・パヴロヴナが 私たちと 一緒に 行くことに
nixeeti. Timadule buu, teegiesi, internatala teu seleme kanawa zakpagiesi,
した。 朝、 私たちは 起きると、寄宿舎で 全部 鉄の ベッドを 積み上げて、
gusiliemu ilantuje futbolewe. Goode eimi gusi, bii onoke ujaami montolowe
し始めた、 三人で サッカーを。 それほどしないで、私はどういうわけかしくじった、ボールを
banjalaimi, utemi bii daamalai jouke xegdegeibede bise. Eide uni, utemtu
蹴るのを。 それで 私の 腰の所で 何か ひねったみたいになった。痛くはなかったが、それから
bugdii tjak-tjañ suneeni. Goo utebede biseesi, gianaliemi. Utebede
足が つったようになった。 しばらく そんなふう だったが、歩き始めた。そうやって
gianakcami, cjolonololiemi, daamaile unii bixini. Amjala, dunsifi gaziesi,
歩こうとすると、足を引きずった。腰のあたりに痛みがあった。そのあとで 荷物を 運び、
ejeneliemu diintuje: bii jancaimi, Mite zuliemdini, dulanjiletene siasanazigewe
出発した、四人で。 私は 船尾に座り、ヴィーチャは 前に、 間には 先生たちを
teuwemu. Nuati xauntasiti mindule:
乗せた。 彼女らが 尋ねる、 私に。

— Sii ali noniliej aanawa jancaimi?

「あなたは いつ できたの、舟を 操るのを？」

— Nicadiginide. Bagdimie, ingule jancaliemi.

「小さいときからさ。生まれて すぐ 漕ぎ始めた」

Xatalaziga injeiti.

女たちは 笑う。

— Mite, sii ei noni jancaimi?

「ヴィーチャ、あなたは できないの、漕ぐのを？」

— Imi atami noni? Biide bagdimie jancaliemi. Buu, teu udie njoulanani,

「なぜ できないか？ ぼくも 生まれながらに 漕ぎ始めた。ぼくたち、皆 ウデへの 子どもは
asi pakizi xuliu aanazi ugdazide. (2/3)

大変 上手に 行く、 舟でも ボートでも」

— Odcaixini ile niasulelegemi muisiu?

「これから どこで 勉強しようと 思ってるの？」

— Bii xaisi eimi saa. Doktore edekceimi bii, — utebede diagiemi bii.

「ぼくは まだ わからない。 医者に なりたい、ぼくは」 そう 答えた、 私は。

— Zaa klassawa mutuuzeje, uti amjalani medinstitutale tatusiuzenje.

「十 年生を 終えるべきだ、その あと 医科大学で 勉強しなきゃ」

— Bii sebie lusa kejeweni nia ekzamenalazajai, uti amjalani isetemze, —
「ぼくは まず ロシア 語を また 受験しよう、 その あとで 考えるよ」

Mite guḡkini.

ヴィーチャが 言った。

— Aja, eziw weente tatusimi, — dianagieti mundu siasaḡazige.

「いいわ、投げ出さないで、学ぶのを」と答えた、 私たちに 先生たちは。

Utebede, jougu-jougu diasimie, iineemu Burlitele. Utala niadigi stancatigi
このように あれこれ 話しながら、着いた、 ブルリトに。そこで 岸から 駅まで、

dii kilometrawa loxoi gianauzeḡe damba ujelinide. Buu Mite zuḡe

四 キロを 歩いて 行かなくてはならない、堤防の 上に沿って。私たちは ヴィーチャと二人で

mene siasaḡafi duḡsiweti nexuemu stancatigi. Nuati mundu bueti ziawa, bii

自分の 先生の 荷物を 運んだ、 駅まで。彼女らは 私たちに くれた、お金を。私は

esimi zawa, Mite zawaani, nuani Imatigi ḡenelegemi nixeeni mene gugutigi.

受け取らなかったが、ヴィーチャはもらった。彼はイマンに行こうとしていた、自分のお婆さんの所へ。

Bii niatigi emuse emegiem. Pakula susu ceezi gaziḡeni zaawa, timana

私は 岸に 一人で 戻った。 パクラ おじさんが 荷馬車で 運んで来た、荷物を。明日

teugiesi, guḡḡizeḡeu soloixi. Bii susu zi omo (3/4) aanazi, Selidi Chundezi

また積んで 出発する、上流へ。 私は おじさんと 一艘の 舟で、セルジと チュンジェとは

gagda aanazi.

別の 舟で

Guḡḡilegemi deleu biseu buu, uti ekindini niatigi emeeni omo aanta.

出発しようとして いた、私たちは。その とき 岸に やって来た、一人の 女が。

Nuani Xuḡke aantani bisini, Kjalundiga seeni, gegbiweni oḡmoomi. Buu

彼女は ホルの 女 だった。 キャルンジガ 姓だが、名前のほうを 私は忘れた。 私たちの

aanalau unaani, munzi gie goundalieni. Selidi Chunde zuḡe amjasalieti.

舟に 乗った。私たちと 一緒に 漕ぎ始めた。 セルジと チュンジェの 二人は 遅れ始めた。

Utemi uti aanta nuati aanalati unagieni. Buu susu eimi xelinee goundau.

それで、この 女は 彼らの 舟に 乗り移った。私たちは おじさんと 急がずに 漕いだ。

Nuatide esiti amjasali. Ila dogboni aḡasiesi, iigiemu zugtigi. Bii omoti

彼らも 遅れなかった。 三 晩 野宿して、戻った、家に。 私は いつも

xauntasiemi susuwe, onode waagiemeti uti mafawa, zaanagimi xuliseemeti. Ei

尋ねた、 おじさんに、どうやって しためたのかを、あの クマを、仕返しに 行ったのかを。これが

susu teluḡuni:

おじさんの 話だ。

— Pete emegiseḡeni, minti zugḡḡkefi teu niintazige ḡeneemu zaanagimi

「ペーチャが 帰って来たとき、われわれの 一族は 皆 男たちが 出かけた、仕返しに

mḡoundezi, gidazi. Gootigide esini ḡene, utadufele bisini. Munawa dogdimie,

銃や 槍をもって。遠くまで 行かないうちに、そこに いた。われわれのことを 聞きつけて、

xokcogilieni. Uti xokcoiweni gidazi asaliemu, amjala zaa ila muda

かかって来た。 この 一撃を 槍で 迎え撃った、そして 十 三 発も

mjoundalagiemu budedexide. (4/5) Sebie, diliweni xwaijesi, loomu moo gaalani.
銃をお見舞いした、完全にくたばるまで。 まずは、頭を 切り離して 掛けた 木の 枝に。
Bejetigini amusigiesi, cjaktagesi, imenegiemu utebede. Kusima daajei coo ai
身体のほうには糞をかけ、小便をかけて、さらした、このように。 クジマ おじさんが 一番の 長老
bisini mundule. Nuani dianaini: «Buu teuniye uti amjalani xai nada mafa
だった、われわれの中で。彼は 言う、 「われわれ 皆 この あとで もう 七頭の クマを、
waasi elegeu diga, utebedetule, waasi, weentegilegeu. Utatene zaagizenefi.
殺して食うためじゃなくて、こうして 殺して さらにしておくために。これで復讐したことになる。
Uti amjalanitene uleweni, imoweni digauzeje. Sii, manganaasi, waateize
その あとなら 肉や 脂を 食ってもいい。おまえも 大きくなったら やつつけるがいい、
omomode meneese».
一頭ずつ、自分で」

— Nii bisini uti niinta, Mitewe ikpeleeni?

「だれだったの、その男は、ミーチャをけしかけたのは？」

— Xei, sii ei saa? Teeti, uti Selidi sanjaktaani, ñeleuse Kuinke siteni.

「なんだ、おまえは知らないのか？ ほら、あのセルジの糞つたれさ、腰抜けクエンカの息子だ。

Munzi gie ñeneeni. Akimide esini mute gidazi. Xokcogiweni iseimie, buu
われわれと 一緒に 行った。突くことも できなかった、槍で。かかって来るのを 見て、俺たちの
akalau digenegieni. Nii biininu uti, inai wooni? Sii amii nuamani gidazi
うしろに 隠れた。 人間 なのか、こいつは、犬のでき損ないか？ おまえの 父さんは 彼を 槍で
ketige akindeeni. Sii agai Pete dalikendini ei xai inixi biini.
あやうく刺さんばかりだった。おまえの兄さんのペーチャのおかげでこいつはまだ生きている。

Pete ilieni nuani zulieleni, dianaimide: (5/6) «Sii nuamani gidalaisi,
ペーチャが 立った、彼の 前に、 こう言いながら— 『あなたが 彼を 槍で刺したら、
baitañisezejei. Sindule ljasi egdi nica sitenei, nii nii edewenezejeeni utigetuwe,
罪に問われる。あなたにはとてたくさん小さな子どもがいる。だれが一人前にしてやれるか、彼らを、
sinawa balizele teusiiti. Sii nuamani waajisi, waagizeneninu Mite? Aja, abu,
あなたを監獄に送ったら。あなたが彼を殺したら、生き返るのか、ミーチャが？ いいか、父さん、
manjise. Onodo nixemi, ezenefi mudaniwene minti baatawa». «Janami xebuemi
こらえるんだ。どうしたって 戻って来ない、 うちの 子は』 『どうして連れて来たか、
bii uti inai woomeni menzi giede? Nuani eedekce bixini munjalimi
俺はこんな犬のでき損ないを、自分と一緒に？ 彼が 弱虫 なので あわれんで
xebuemi. Buzei sii, inai tugbeeni», — utebede mjawasieni sii amii. Selidi,
連れて来た。くたばれ、この 犬野郎め！』 こう 息巻いた、おまえの 父さんは。セルジは
xeñefuleesi, dianaani: «Minawa waami coo ele edezejeeni. Waajeu minawa,
ひざまづいて 言った。 『俺を 殺すのが 一番 いい だろう。 殺せ、俺を、
eimi bagdikcee caixi! Bii baitai uti sitewe gwaizima budeedexi
生きたいとも思わない、これ以上！ 俺のせいでこの 息子を クマに 死ぬまで
iktemesieweni. Waajeu minawa!» — utebede, mene njuktei tagdimi,
噛ませた。 殺してくれ、俺を』 こうして 自分の 髪を 引きむしりながら、

waawanakcaani uti niinta. Uti amjalani teumeni gaziemu nakta uleweni.
殺させたがった、この男は。そのあとですべてを回収した、イノシシの肉を。
Mite zakpume naktawa (6/7) waani emusede. Amiutene ciazawa tuleseeni,
ミーチャが八頭のイノシシをしとめていた、一人で。おまえの父さんは罠を仕掛けた、
niowe, soljowe egdime taawanikini. Niowe aaktasinzime waani.
クロテンとイタチをたくさん獲った。クロテンをもっぱら追い込み罠で獲った」

Bii zongiyemi, onode uti Selidi frontatigi njenemi ekindini, jaaj bali
私は思い出した、どうやってこのセルジが前線へ行ったときに、目を見えなく
edeweneemi. Dogbo ineji sojoooni eshelonele teujiti amjalani, izike jaaj
したかを。夜も昼も泣いた、軍用列車に寄せられたあと、何かで目を
bagbamide. Utemi balige edeeni. Zugtigi kajagieti, esiti waa nuamani udie
引掻いて。それで見えなくなった。家に帰して、殺さなかった、彼を、ウデへ
bixini. Utawa aantazigedu teluusiweni, nuati tundeimie, caixi esiti duisi.
だったので。これを女たちに話すのを、彼女らはつばを吐きながら、それ以上聞かなかった。
Utemi omo jaani caam biini. Ono nixezei utempi nii biweni. Xongtozide
それで片目が見えないのだ。どうしたらいいのだろう、こんな人間がいるのを？ ほかには
ezejei edewene. Bizeneni utebede!
どうしようもない。ほうっておくがいい、そのまま！

Uti zuani bii pedicala eteteliemi abugazi, Pabulikazi. Pedicawa
この夏、私は野外調査で働き始めた、父と、パヴリクとともに。野外調査を
taksaterizi gegbisieti. Munzi gie omo partijala eteteeti Sigde Isaula mene
木材数量調査と言った。私たちと一緒に同じチームで働いた、シグデ・イスラ、彼の
jaabama sitezii, (7/8) Kanchuga Sule, omo manmu aantani, gegbini Permenke
耳の聞こえない息子と、カンチュガ・ワロージャ、一人のナーナイの女、名前はペルメンコ・
Marusja. Buu zangjanju Gladyshev bisini. Utempi partija xai zube bisini.
マルーシャ。われわれの隊長はグラディシェフだった。こういうチームがほかに二つあった。
Utigutele njoulazigemei egdi. Buu Bjongologde Kajalulegde iinezejeu etetemi.
そっちでは若い連中ばかり多い。私たちはビョンゴやカヤルまで行くのだ、仕事をしに。

Buu gulineu zulieni niatigi fel'dsherica Zina Sidorina emeeni. Nuani
私たちが出発する前に岸に准医師のジーナ・シドリナがやって来た。彼女は
tausieni bii daamawai, utemi dianaani bii elegei uinde uguuwe, daamawai
診てくれていた、私の腰を。それで言いに来た、私が持ち上げないように、重い物を、腰を
aja tafjasilegeide dianikini.
よくいたわるようにとも言った。

— Sii goo bizeni buazegeleni? Ile tatusinezejei caixi? Bongo
「あなたは長いこと入ってるの、森に？ どこで勉強しに行くの、この先？ 一日
avgustadu ekzamenawa buiti texnikumatigi, ezi amjasaa.
八月には試験をするから、中学校への。遅れないようにね」

— Eimi saa bii, jouxide genezejei caixi tatusilegemi. Doktore edelegemi,
「わからない、ぼくは、どこに行くか、この先勉強するのに。医者になるには

sebie zaa klassawa mutuuzene, utatene medinstitutale niasuleuzeje tunja anani
まず 十 年生を 終えないと。それから 医科大学で 勉強するんだ、五 年
xulemiede. Eimi saa bii. Jouxide ezenjei nene bize. (8/9)
以上も。 わからないよ、ぼくは。どこにも 行かない かもしれない」

— Munjalie, baata. Ezi gjaŋda, xaulie, caixi tatusineje.
「もったいない、あなた。怠けないで、お願いだから、もっと勉強なさい」

— Inke. Eteteesi, isetemize, jouxide tatusinemi nenezeje.
「わかった。仕事が済んだら、考えてみるよ、どこへ 勉強しに 行くか」

Buu sebie bagjazala bii biasala eteteemu. Uti biasa wanini goo, ilaza
私たちは まず、対岸に ある 支流で 調査した。この 支流は 長さが あって、三十
xulemie kilometra. Biasa gegbini Daduŋe. Utauxi egdi biasaziga datanaiti:
余 キロあった。支流の 名前は ダドゥンガ。そこへ 多くの 支流が 流れ込んでいる。
Sagdi Biasa, Kuŋsu, Xou xontogutu. Zaama neŋini xuliemu. Buu zangjau
ボリショイ・クリュチ (大きい泉)、クングス、ホウなど。十 日間、 歩いた。われわれの 隊長
Gladyshev kutu agdaani saŋtaziga eteteiweti nuandini. Utigetutu teu saiti,
グラディシェフは 大変 喜んだ、年長者が 働くのを、 彼のために。彼らはすべて知っている、
ilede jou biiweni, utemi, zangja kartawa xwaiweni, belesiti. Nuati diankiti
どこに 何があるか。それで 隊長が 地図を 描くのを 助ける。彼らの 言った
culini xuliu, emnede eseu pama. Emne ljasitigdelieni. Buu aŋasilegemi
とおりに進んで行けば、絶対 迷わない。あるとき、激しく雨が降り始めた。私たちは野営するために
kektimewe baamu, utala gigdeemu egbenewe. Buu njoulemei utala aŋasilemi
小高い場所を 見つけた、そこに 張った、テントを。われわれ 若者だけが そこで野営することに
nixeeemu. Saŋtazige dianaiti, buu nuati kialati aŋanalageu, buu, injemi,
決めた。年長者たちは 言う、 私たちが 彼らの そばで 野営するように。私たちは 笑って
gunkimu:
答えた。

— Olo kutu gugda, uli mudemi, ezenjei iine (9/10) mundule.
「ここは 十分 高い、 水が 流れて 入り込むことはない、 私たちの所に」

— Suu, dogbogisini, saateuze, buu cezewe diankimu.
「おまえたちは、夜になれば わかるさ、わしらが正しいことを言ったと」

Buu esimude pekce. Nuatitene kjaile aŋalaati. Digasiesi, gusimi,
私たちは気にもとめなかった。彼らは小山の上で野営した。 食事をすませ、ふざけながら
ŋuagiemu, uli biasala ejeiweni duihimide. Tigde xai esini sigene. Utebede
横になった、水が 川で 流れるのを 聞きながら。雨は まだ 止まなかった。そうして
ŋuamu. Dogbo niike xeetiweni dogdiemi, utemi mjaŋdagiemi. Uti Sigde
寝入った。夜中に だれかが 叫ぶのを 私は聞いた、それで 目をさました。これは シグデ・
Sule (nuamani San'kazimegi gegbisiti) akai ulizi cimpeisini, mjaŋdagiesi,
サーシャ (彼をサニカとばかり呼んでいる) が、背中が 水で 濡れているのに 気づいて、
xeetilieni. Bii Pabulika akalani ŋalazi jouktesiemi, utemi medeemi uli
叫び声をあげたのだ。私は パヴリクの 背中に 手を あてた。そして 気づいた、水が

egbenewe ulaamani. Buu tugezi teegiemu, ingule susaliemu uixi. Santazige, テントを浸しているのを。私たちは すぐに 飛び起き、 急いで 逃げ出した、上に。 大人たちは injemi, teiti too kialani, diasimiede zangjazi.

笑って 座っている、焚火の まわりに、話しながら、隊長と。

—Tukca siteneni, ono bie? Imi eseu dogdi munawa? Buu tene

「坊やたち（ウサギの仔）、どうした？ なぜ聞かなかった、俺たちの言うことを？ 俺たちは今 bagdiliemu, munawa elegefi ceze? Odcaixini eziu zagbali, buu joude 暮し始めたか、俺たちを信じないほどに？ これからは さからうな、俺たちが 何を dianaisiu. Genegijeu dujsifi, elegeti eje. (10/11)

言っても。 持って来い、自分の荷物を、流されないように」

Dujsifi daudajalaami amjalani, buu, injemide, xagzandaamu. Timadule, 荷物を 引っ張って来た あと、 私たちは 笑いながら、恥ずかしがった。翌朝、 mjagdaasi, iseemu, onodo uli gadaamani buu aņatau udeweni. Uli ujeli 起きてから 見た、 どのように 水が 浸したか、私たちが 寝ていた あたりを。 水は上に ejelieni xenedigi gugdazi. Uti amjalani emnedee esimu zagbali santazigedu. 流れていた、ひざより 高く。 この あとで、 一度も さからわなかった、年長者に。

Daduņatigi datalini esimu jefine. Ziktelenku njoudigini zawaņdaamu

ダドゥンガに 河口から 入って行かなかった。木イチゴの生えた 湿原から 始めた、 etetelimi. Biki kektimeni xoondileni, naawa uleesi, luendeemu ii mooweni, 仕事を。 ビキンの 岸の 上で、 地面を 掘って、 立てた、 カラマツの 柱を、 waktawani kokpigiesi. Utala, ujewani njaņa conkindeesi, Sule onjooņi 皮を はいで。 それに、表面を 少し 彫って、 フロージャが 書いた、 lusamazi "MX — Magistral'nyj Xod". Utadigi toņdozi iineemu Daduņala, ロシア字で MX（幹線）と。 そこから まっすぐ 進んだ ダドゥンガまで。

moole waktawani xwaņindemiede, aja iseptelegeni, buu ilede ņeneemu. 木に 樹皮を 刻みながら、 よく 見えるように、私たちが どこへ 進んだか。

Gladyshev gaiwasieni, ilide ņeneuženewe, santaziga, Sule, San'ka suesezi グラディシェフが 指示した、どちらへ 行くかを。 大人たちと フロージャ、サニカが 斧で xwaņiti, buutene Pabulikazi liosiu ruletkazi. Uti wanileni wai metra. 刻み目を入れる。私と パヴリクは 測る、 巻尺で。 この 長さは 二十 メートル。

Pabulike, bii ekisii, weenteini ilakjamasa (11/12) saaktawa, biitene, utala パヴリクは、私が立ち止まっていると、置いて行く、皮をはいだヤナギの枝を。私は そこへ iineesi, taigimi. Zaama utempiwe taigisi, ekiu, zuu tangu metra edeini, 行って 回収する。 十本 これを 集めたら、立ち止まる。二 百 メートルに なる。

utala bii cingawa luendeesi, onjoimi, adide metra biiweni. Utebede そこに 私は 杭を 打ち込み、 書く、 何 メートル であるかを。こうして

liosiemu buu biasa wanileweni. Mindu zangja bui mooni juiweni 測った、 私たちは 支流の 長さを。 私に 隊長は マユミの 木が 生えている所を ilewesilegei diaņkini. Kakta minga metrawa iiwesi, woomi bii zegewe — zaa 調べるように 言った。 半 キロ メートルを 進んで、作った、私は 空間を、 十

metra wanileni, zaa metra enmeleni. Tiuwe luendeesi, onjogiemi: omo,
メートルの長さ、十メートルの幅で。棒を差し込んで、書いた、I、
zube, ilaazi... Pabulika minawa belesieni. Utawa pazi tamazanani.
II、III、と。パヴリクが私を手伝った。これを別に支払う。

Uti amjalani, omo nejnini deunceesi, gulineemu soloixi. Bengele eteteesi,
このあと、一日休んでから、向かった、上流へ。ベンゲで一仕事して、
nia caixi soloomu. Mitazawa, uti zulieleni Baiziewe Gladyshev onjogieni
さらにまた上流をめざした。メタヘザや、その手前のバイジヘザをグラディシェフは書いた、
kartawa santaziga dianaiti culinide. (Amjala menedielikcizi jouktesieti.
地図を年長者の言うとおりに。(あとで、飛行機で確かめた。
Gladyshev kartani asi tonjo, ceze bisini. Xontogututene bai bizi onjogieti.
グラディシェフの地図は最も正確で忠実だった。ほかの者たちはいい加減に書いた。
Njoulaziga ajazi esiti saa utigetu buawa, utemi cezezi esiti onjowene.)
若者がよく知らなかった、このような森を、それで正しく書かれなかった。)

II

Buu amiu omoti tatusini munawa, onode aanazi solouwe. Taa xegilini
私たちの父は、いつも教える、私たちを、どのように舟でのぼるかを。倒木の下を
njuxanalie, eziu zoko utadigi, eziu tungasi joudede bizeneni aana xoondileni.
通るなら、ぶつかるなこれに、触れるな何があらうと、舟の上方に。
Taa, uli mude amjalani, uile esigini, utawa njanga tungalalie, tinmeini
倒木は水かさが増したあとで、上に残っている。これをちょっと触ったら、落ちる、
aanatigi. Nica bimie, ezeneni kaktali aanawa, sagdi bimie, niuwede
舟に。小さければ、こわさない、舟を。大きかったら、人だって
aptalizeneni, aanawade depcem kaktalizeneni. Utawa eidexi zonjimi bii:
押しつぶすだろうし、舟を粉々にこわしてしまうことになる。これを今でもおぼえている、私は。
eli dogdi — gee baazai, gouzi santazige nanawasizeneti sinawa, odcaixini
(言うことを)聞かなければ、ひどい目に会うだろう。竿で大人はたたくだろう、おまえを、もう
utebede elegei nixe. Janami onjomi bii utawa? Utemi onjomi, emne
そんなふうにしないように。なぜ書くか、私はこれを？ こんなわけで書くのだ。あるとき
Pabulike onmoonu abuga alusiemeni.
パヴリクが忘れた、父が教えたことを。

Bjongole ele iineliew biseu, uti utebede buu aanatigiu taazige tinmeneni.
ビョンゴにもう着こうとしていた、まさにそんなふうな私たちの舟に倒木が落ちてきたとき。
Neji xegjelini buu aanau njuxanaixini, Pabulike utawa, tuge dulenelefi,
枝だまりの下を私たちの舟が通り抜けるときに、パヴリクがこれを、早く通り過ぎようと
ektigde zokooni, uti nejitigi nalazi tugaasi. Utemdu ese tinmei neji
強く押した、この枝だまりに手を伸ばして。そのとき落ちてきたじゃないか、枝だまりの

ujeleni (1/2) bii taa. Aanawa kaktai xaijeeni. Ketige kumteeni aana, zuke
上に ある 倒木が。舟を砕いてこわした。あやうく転覆しそうになった、舟は、何とか
kokpigiemu bitatigi agdaimi. Uli tapci soolooni. Abuga gouzi konkosilieni
やりおおせた、岸に 着けるのを。水が どんどん 入って来た。父は 竿で 打とうとした、
Pabulikawa, nuanitene kutu pakizi ailiwasieni, emnetelie nagdaani bogdoloni.
パヴリクを。彼は とても うまく よけた、 一度だけ あたった、肩が。
Abuga mangazi eini konko. Bii, goulani zawaasi, dianaami abugedu:
父は 強くは 打たない。私は 竿を つかんで 言った、 父に。

— Abuej, utebede aisigizejeinu aanawa. Gee xelibezi tandazafi bitatigi.
「父さん、そんなふうに 直すか、 舟を。 さあ、急いで 引き上げよう、岸に。

Sii paki ei bienu kolosimi sanawa.
あなたは 上手 じゃないか、ふさぐのが、穴を」

— Tukca siteni, ljasi dukteuzeje sinawa. Imi alide ei dogdi bii
「愚か者め、したたか打ちのめさなくては、おまえを。なぜ いつも 聞かないか、わしの
dianaiwei? Ilakjamanau xelibezi! Tugezi aisigizefi!
言うことを？ ヤナギの皮を剥いで来い、すぐに！ 急いで直すんだ！」

— Jou, baata amini, kolomi muteuzeje, manga esini kaktaga? — xauntasini
「どうした、おやじさん、ふさいで 済むなら、 ひどく こわれてはいないだろう？」 尋ねる
Isaula.
イスラが。

— Uliwe moogiesi, isetefize, onode edeemeni. (2/3)
「水を 汲み出して、見てみよう、どう なってるかを」

Uliwe moogiesi, iseemu, omo buala kaktagaamaani omo metra xeenkini.
水を 汲み出して 見た。 一 個所で ひび割れしていた 一 メートル 余り。
Abuga utawa, sebie lugbazi zifiesi, ilakjazi kologieni. Koloptineni buu
父は これを はじめに ボロ布で ふさいでから、ヤナギの皮を鋸で貼り付けた。鋸を 私たちは
xalugazi woomu, tiesinzewe xwaimide. Zuje eedigini kologiesi, akagiemu
槌で 作った、 針金を 平らにして。 両 側から 鋸打ちしてから、戻した、
aanawa, jouktasilegefi: muinies, sisi edeenies. Kutu aja aisigieni abuga,
舟を、 確かめるために、水漏りするか、ちゃんと直ったか。大変 よく 直した、 父は、
iledede uli esini sabda.
どこも 水は 漏れなかった。

Dujsifi teugiesi, gulineemu caixi. Ila kilometra xeenkini soloosi, ekiemu
荷物を また積み込んで、向かった、先へ。 三 キロ ほど のぼって、着けた
bitala, njou bagjanikileni. Utadigi daasa bisini Bjongo datani: omo tangu
岸に 湿原の 向かいに。 そこから 近かった、 ビョンゴの 河口が。 百
metra xeenkini soljozo eeleni. Uti bitala zube egbenewe gigdeemu,
メートル 余り 上流の あたりだ。この 岸に 二つの テントを 張った。
Gladyshev mendinemi paga gigdeeni nica egbenewe. Nuani omoti onjosini
グラディシェフは 自分用に 別に 張った、 小さな テントを。 彼は いつも 書いている、

mene tetradalai. Jouwe onjoiweni buu teu saamu: nuani omoti xauntasini
自分の手帳に。何を書いているかを私たちは皆知っていた。彼はいつも尋ねる、
santazigele, ile jou biasani ejeiweni.
年寄り連中に、どこにどんな川が流れているかを。

Manjmu aantani Sigdezige egbeneleti zaampai gigdeeni. Uti aanta waali
ナーナイの女がシグデたちのテントの中に蚊帳を吊っていた。この女は戦争の
(3/4) amjalani emeeni Sjainetigi, Martenov Borjatigini mafalaasi. Borja
あとでやって来た、シャインに。マルティノフ・ボリスのところに嫁に来た。ボーリャ（ボリス）は
nuamani Xabarska kialani biñei ajulieni, utemi, mamasalaasi, gazieni mene
彼女をハバロフスク地区にいたときに好きになった。それで結婚して連れ帰った、自分の
buatigi. Borja kile siteni, nuani agani Nikolai Imandu bisini waali ekindini.
故郷に。ボーリャはエウエンキ人の息子で、彼の兄のニコライはイマンにいた、戦争中に。
Marusja ei emuse esigieni — Borja taamati kuta unuguzini budeeni. Zugditigi
マルーシャが今一人残っている。ボーリャは去年、扁桃炎（喉の病気）で死んだ。家に
(Manjmu बातigini) ñenilemi ziawa taulagilemi etetelieni munzi giede: buu
（アムール地方に）戻るために、金を稼ぐために働くことになった、私たちと一緒に。私たちが
digalagau oloktoini. Marusja manjmu kejezinimegi egdizi dianaini. Nuamani
食べるのを料理する。マルーシャはナーナイ語だけでほとんど話す。彼女（の話）を
abugasene egzeini. Imi baaptalieni manmuzi? Unile bagdiñe nonilieni.
父だけがわかる。どうしてわかるか、ナーナイ語が？ アニユイに住んでいたときにおぼえた。
Uteugetu udiezige manmuzigezi omoti asagdisieti, manmutigi xulimi. Utemi
そこのウデヘたちはナーナイといつも行き来していた、アムールにやって来て。それで
abuga, njuñu añani utala bagdimi, manmusimi nonilieni. Manjmu kejeni
父は六年そこに暮して、ナーナイ語をおぼえた。ナーナイ語は
minti, udie kejeñile biini, jougu-jougu egzeu buude, njoulaziga. Utazi
私たちのウデヘ語に似ているので、何とか理解できた、われわれ若者も。これに
Marusja (4/5) xonooni: «Njoula bimie, idigi egzelieti manjmu kejeweni?»
マルーシャは「驚いた。「若いのに、どこでおぼえたの、ナーナイ語を？」
Utawa abuga alusini: «Udie manmude zaljamule niizige biiti, namuñkazigede.
これを父が教える。ウデヘとナーナイは親戚同士なのだ、オロチもだ。
Utemi kejeti beekule biiti».
だからことばが似ているんだ。

Bjonggole buu tuña neñini eteteemu, deelenigde iineemu, manga wanimide
ビョンゴで私たちは五日間仕事をした。水源まで進んだ、そんなに長くは
eini bie: zaa tuña kilometra. Sigde odo omoti xulini wakcanami, utebede
ない。十五キロだ。シグデじいさんがいつも行く、狩に。そうやって
ulewe digawanaini munawa. Bii daamai uniweni eimi pekce, timadule
肉を食べさせる、私たちに。私の腰の痛みを感じない、朝方
teegimitene unini njangade. Gianami aja, kuzumitene — unini, iligikcemi
起きると痛んだ、少し。歩くのはよい、かがむと痛む、起き上がろうとすると

manga. Utawa Pabulike omoti belesini. Nuani, nica bimide, kuixi biini.
 っらい。これを パヴリクが いつも 助ける。彼は 小さいが、 力持ち だ。
 Omoci zolowe uindeseini. ŋalai uti amjalani omoti temjekteini: kui juiweni
 いつも 石を 持ち上げる。自分の腕を この あとで いつも 触ってみる。力こぶが 出るのを
 jouktesini. Manga baata juini. Emne nuani minawa bitatigi tugbeeni
 確かめる。 たくましい 少年に なっている。一度、彼は 私を 地面に 倒した、
 mosonimi. Bii, tiŋmemi, isozii tugaami. Amjala njanja oulindeeni gjama.
 取っ組み合いをして。私は 倒れるときに 肘をついた。そのあと、少し 腫れた、 関節が。
 Eidexi buŋgabede biini. (5/6) Ei, baagdilie, omoti zoŋini utawa: «Ono
 いまだに こぶのように ある。 今でも 会うと いつも 彼は思い出す、これを。「どうやって
 boontileemie bii sinawa utelieŋini?»
 投げたんだっけ、ぼくは 君を、あのとき？」

Bjoŋgole eteteimi mutuimie, gulineemu caixi, soljotigi. Utadigi Suduŋgule
 ビョンゴで 働き 終えて、 向かった、 さらに 上流へ。そこからスドゥンガ川沿いで
 etetenezeŋeu. Utelieŋini Sagdiulie Kate dabauni eelini ejeeni. Utala kutu
 働く。 そのころ ビキン川は カテン 峠の 方に 流れていた。そこで とても
 manga tiononeini, utemi uli wee ogdotigini tungalaimie, kumtegini, utatene
 急激に 曲がっている。それで 水が 山の 側面に ぶつかり、 押し戻される。それで
 ljasi gugdazi jakineini, xuilulenemiede sagdizi. Aanawa, ugdawa ingule
 大変 高く 波を起こす、うずをまきながら、大きく。 舟を、 ボートを あっという間に
 kumteweneini. Utebede elegeni bie, bita kiatigini goundeu, utali duleneu uti
 ひっくり返す。 そう ならないように、岸の 方に 漕ぎ寄せる、そして 通過する、この
 gee buawa. Omoti temene biuzeŋe. Utawa duleneesi, caixi goundou,
 危険な 場所を。 つねに注意する必要がある。 ここを 抜け出たら、もう少し先まで 漕ぐ、
 amaixi eteŋiesi iseu, onodo katazi xuugiweni uli, weezi dakpisebede
 うしろを振り返って見る、いかに急激に向きを変えているかを、川が。山でせき止められているように
 biini sagdiulie, eimi saa, sebie muisiui: weewe tafu ejeini biini uli?
 なっている、大河が。知らない、はじめは 思う、 山を 突き抜けて 流れて いるかと、川が。
 Utebede bisini utelieŋini. Ei Biki xoŋto buali ejeini. Kate eelini sagdiulie
 そんなふうだったのだ、当時は。今ではビキン本流は別の所を流れている。カテンの方に沿って大河は
 xaagieni, (6/7) weeleni saaktainani, utemi uli wacazi ejeini uti eelini.
 浅くなった。 山側では ヤナギが茂った、それで 水量も 少なく 流れている、この あたりでは。

Buu sebie, utala iineesi, agdaamu ezjele. Saŋtaziga aanazigawa meneese
 私たちは まず そこまで 来て、 舟を着けた、下流で。 大人たちが 舟を 自分で
 goundeeti bita kilimde, zulieleni, xukuwe xekeesi, zawasiemu buu ŋalazi.
 漕いだ、 岸 沿いに、 前進した。 ロープを つないで、 支えた、 私たちは 手で。
 Ugdawatene bitali taŋdaamu. Kutu seunizi uli pontolini, ljasi jaidaini. Ila
 ボートは 砂浜を 引っ張って運んだ。大変恐ろしく水がうずまいている、すごく轟いている。三
 aŋazini amjala buude utebede ejenjiemu bita kialinide. Utelieŋini utebede
 年 前に 私たちも こうして 通った、 岸伝いに。 そのときは こんなふうでは

esini biebede bise. Ei kutu mangazi ejelieni uli: sagdiuliele mudendeeni.
なかったよう だ。今回は 大変 きつく 流れていた、水が。本流で 増水していた。

— Baata amini, suu oli susau ese bie xunxuze sunawa magilegefi

「おやじさん、あなたたちはここから逃げたんじゃなかったか、匪賊があなたたちを殺そうと
nixeñeti.
したときに」

— Aa, gosoo, buu teeti jakpali tuktiemu Ninjka biasani eetigini, utali

「ああ、おじさん、俺たちはずっと分流沿いにのぼった、キタイスキ・クリュチの方へ。そこから
weeleteemu Kateetigi. Bii nica bisimi xaisi, zaa zuu see iinelieni bisini
越えた、カテン峠を。俺は 小さかった、まだ、十 二 歳に なったばかり だった、
mindu, utemi kutu aja zoñimi bii utawa. Sagdi sitenedui teu teluñusiemi.
俺は。だから とても よく おぼえている、俺は これを。大きい 子には 皆 話した」

— Utawa biide aja saimi. Suu Unile baagiseu Kugdima siteneweti? (7/8)

「それを俺もよく知っている。あなたたちはアニューイで訪ねたんだろう、クグジマー族を？」

— Niiwede esimu dubda. Nuatiwe Kjalugudige igbeeti Xunjaratigi, utala

「だれにも 会えなかった。彼らを キャルンジガが 追いやった、フンガリに。そこに
bagdineeti, eidexi utadu biiti. Bii ñenekcei utauxi, uti Arsen'ev neugimi
移り住んだ。今でもそこに住んでいる。俺は行きたかった、そこに、このアルセーニエヴォを去って、
esimi kokpi, uti amjalani ingule banagiemu sebie Imatigi, utadigitene Bikitigi.
かなわなかった。この あとで すぐに 移った、まず イマンへ、そのあとは ビキンへと。
Imañkazige teluñusieti xunxuzewe teumeni igbegiemeti Bikidigi. Utatene
イマンの人たちが 話した、匪賊どもを 皆 追い出したことを、ビキンから。それで
emegiemu mene buatigifi. Dabaudu, ljası egdi olondowe baasi, bajanagiemu.
戻って来た、自分の 故郷に。峠で 大変 たくさん ニンジンを見つけて 一儲けした」

— Bii saimi utawa. Amjala xuliseu utauxi niade?

「俺は知っている、それを。その後 行ったか、そこに また？」

— Esimu, jañnai uti gootigini, ei utali eiti xuli, Bikilimeı sologiti.

「いいや、何しに行くか、あんな遠くへ。今じゃそこを通らない、もっぱらビキン沿いにのぼる」

— Alide isenemi aja bize. Ilekpenezefi?

「いつか見に行けたらいいだろうな。行ってみようか？」

— Bagdimie, isetefize, goso. Eitene bii zoboimi, ilede tatusinewezeñei

「生きてるうちに見に行こう、おじさん。今 俺は 心配している、どこへ 勉強しに行かせるか、
sitei.
息子を」

— Tatusineteze iledede.

「勉強しに行くだろう、どこかに」

— Etetemi mutuesi, isetefize. (8/9)

「仕事が 終わったら、見に行こう」

— Onomdu tatusiweneje Andaleñii, baata amini.

「どっちみち 勉強させろ、アンドレイを、おやじさん」

— Inke. Saina, Xabarovskatigi kajazemi bii nuamani.

「もちろんだ。たぶん ハバロフスクに やるだろう、俺はあいつを」

Utebede diasieti zuu santazige. Bii amidui diiza see edeeni, Isaule

こんなふうに話していた、二人の大人は。うちの 父は 四十 歳に なっていた。イスラ
odotene — njuuza zakpu.

じいさんは 六十 八だ。

Sikie iineemu buu Sudungule. Datalani enjme asa biini, utauxi jogosode

夕方、着いた、私たちはストゥンガ川に。河口の所が 広い 入り江に なっていて、そこに小川も
datanaini. Njanga ezjele wee, uli utauximei ejeini, teeleni kutu sunja,
そそいでいる。少し 低い 山があつて、水は その下にだけ 流れ込む。そこは とても 深い、
ejekteni manga eini bie. Wee eeleni omo tangu tunjaza metra xeenkini
流れは きつく ない。 山の方から 百 五十 メートル ほど
soljolo Sudungu biasani datanaini. Buu aŋalaamu bitadigi aja isepte.

上流に ストゥンガ 川が 流れ込んでいる。私たちの 野営している 岸から よく 見えた。

Bagjanileni bii jamata. Xai utebede gigdeemu egbenewe: buu, Sigdezige,

対岸に ある、ちょうど。 また このように 張る、 テントを。 私たちのと、シグデたち、

zangja pagade. Sikie, digasiesi, keptegiemu ŋualagafi. Abugatene zempuwe

隊長のも 別に。 夕方、 食べてから、横になった、 眠るために。 父は 入り江を

isenemi ŋeneeni ugdazi. Toosiliew bize mjoundeleŋeni, utemi mjagdagiemu.

見に行つた、 ボートで。 うとうとしかけていた、銃声が鳴り響いたとき。それで 目覚めた。

Saina, ulewe waani bize abuga. Timana ulewe digazaŋafi. (9/10) Abuga,

多分 獲物を しとめたのだろう、父が。 明日には 肉が 食べられそうだ。 父が

emegiesi, diankini, buu timadule geenegilegeu sigisawa zempule.

戻つて来て、言った、 私たちが 明日 回収するように、当歳アカシカを、入り江で。

Gagda neŋini, timadule, sigisawa, geenegiesi, siemu. Ei ule ilama

翌 日 朝、 アカシカを 運んで来て、皮をはいだ。この 肉で 三

neŋidu ele bizeŋe. Digaasi, gulineemu biasa duixini. Isaula, abuga niondo

日に 十分 だろう。 食べてから、出発した、 支流の 奥へ。 イスラと 父が 先頭を

ŋeneiti, zube Sulezige susezi akpiti moole, buu Pabulikezi liow. Uti

行き、ワロージャとサニカが 斧で 刻み目を入れる、木に。私と パヴリクは 距離を測る。この

neŋini ila kilometrawa iineemu. Gladyshev omoti onjosini tetradala.

日 三キロを 進んだ。 グラディシェフは相変わらず書き込んでいる、手帳に。

Timadule, sikie ljası egdi ŋamakta. Ineŋi imike waca edeiti. Saina,

朝 夕には ひどく たくさんの 蚊だ。 日中は どういうわけか、少なくなる。多分

suudigi digesiti bize woktole. Zangja pempuwe tiseini dililei, nemnecei sexi

太陽から隠れているのだろう、草の陰に。隊長は 蚊よけを かぶっている、頭に、薄い 生地、

adilizini. Utazi dakpiseini degdii, mioj, utemi eini mangasa utinizi.

網で。 これで 覆っている、顔と 首を。それで 悩まない、 痒いのには。

Ule malaptaisini, Iseula wakcalieni. Buu diixi cofu xuliemu. Nia

肉が 尽きると、 イスラが 狩に出た。 私たちは 奥へ さらに 分け入った。もう

omo-zube neḡini eteteuzeḡe esigieni, utemi zangja deumpi (10/11) neḡini
 一、二 日分の 仕事が 残っていた。それで、隊長は 休みの 日と
 edewenḡini. Buu ilantune: bii, Pabulika, San'ka ḡeneemu jogosotigi zouḡewe
 した。 私たち 三人、 私、パヴリク、 サニカは 出かけた、小川に コクチマス
 akinemi. Soloimi akimi bii emusede. Pabulika teini dulaḡkile, San'ka
 刺しに。 のぼる途中で、刺す、私は 一匹。 パヴリクは 座っている、真中に、サニカが
 jaḡcaini. Tjoḡowe duleneesi, iseemu siewe, uli utala ḡegzem biini. Utauxi
 舵をとる。 湾曲部を 過ぎて、 見つけた、入り江を。水が そこでは 透き通って いる。そこへ
 goundeemu, bii meḡme naizini anagimie, goundeimi, zouḡewede akimi. Sie
 漕ぎ入れた。 私は ヤスの 柄で 押して 漕ぎながら、 コクチマスを 突く。入り江の
 datani sunḡa, pjoḡgoloxi, ulini niom ḡegze. Utebede goundeimie, iseemi bii
 口は深く、穴みたいだ。 水は 青く 透き通っている。こうして 漕いでいるうちに、見つけた、私は
 zeliwe, sagdi zeli. Ono nixezemi, akizemi? Patanami, cuḡtigegizeḡeni
 イトウを、大きな イトウだ。どう しよう、 刺そうか？ あばれたら、はずれるかもしれない、
 meḡmedigi. Aa, ono bimiew, ono biteze. Gedigetigini zuugiesi, akindeemi.
 ヤスから。 ええい、どう だろうと なるがいい。 後頭部に 狙いを定めて 一突きした。
 Meḡme nagdaisini zeli ḡengem suneeni, einide patanaa. Zuke agbugiemi
 ヤスが 命中すると イトウは じっとしていた、あばれもせずに。 やつとのことで 引き上げた、
 aanatigi. Meḡme gedigeni niktalani doofo nagdaani, utemi ḡengem bisini.
 舟に。 ヤスは 後頭部の 椎骨に まさしく 命中していた。それで、おとなしくしていたのだ。
 Meḡmei asitegimi, iseemi, zeli omo jaazi bali biiweni. «Utemi (11/12)
 ヤスを 抜いて、 見た、 イトウは 片 目が 見えてないのを。 「だから
 esini ise bize minawa, utemi kule akiweneeni memi, tialikcemi esini
 見えなかったのだろう、ぼくを。それで 簡単に 刺された、 自分を 逃げることも
 kokpigi», — muisiemi bii. (Utawa amjalaa San'ka zoḡigimi, injektei bise:
 できずに」 思った、 私は。(これを あとあとまで サニカが 思い出して、笑って いた。
 «Balige zeliwe akienzi enducii tjaside».)

「片目の イトウを 刺して 見事にしとめたもんだ」と。）

Gagda neḡini timadule Marusja jouke abugedu maḡmuleiweni mjaḡdaamu.
 翌 日 朝、 マルーシャが何事か父にナーナイ語で話しているので、目がさめた。
 Utemdu abuga, ono mogzoi bisimi, ono baixi njumie, mjoḡndawa zawamie,
 すると 父は、まるで 裸同然の 姿で、 そのまま 外へ 飛び出し、銃を つかんで
 ugḡawa tjouḡieni. Gaiti solondoosi, baḡjaixi douweni Bikiwe. Buu zaampadigi,
 ボートを出した。 すばやく 流れをのぼって、対岸に 渡った、ビキンを。 私たちは 蚊帳から
 teeweni uindeesi, iseemu zube kjaḡa oḡkoiweti zempule, biasa dataḡkileni.
 すそを 持ち上げて、見た、 二匹の アカシカが 草を食っているのを、入り江で、河口の
 Abuga saaktaili digeeḡi buisilieni. Baḡjaḡkilini mjousesilieni. Sagdi kjaḡa
 父は ヤナギの茂みに沿って 忍び寄った。 対岸から 何発か撃った。 大きい アカシカは
 xaata xetijeḡieni uixi, sigisatene ulidufe tiḡmeeni. Abuga emegisini,
 すぐに 駆け上がった、上に、当歳アカシカのほうは 水中に 倒れた。父が 戻ってから、

genegiemu sigisawa. Bii xoktoweni jouktesineseemi: sakiade anci bise.
回収に行った、アカシカを。私は 足跡を 確かめた。 血のあとは なかった。

«Ujaani!» — muisiemi bii. Utawa siesi, janagiemu elegeni nia.

「しくじった」と思った、私は。これを 皮をはいで、塩をした、腐らないように。

Gladyshev (12/13) guneini: «Eineji nia deuncezeffi, bii teumeni onjogimi
グラディシェフが 言う。 「今日 また 休みにしよう。私は 全部 記録
esimi kokpigi. Timana aṇadu ṇezeṇefi diixi, amaixi mudanjiṃi goo. Zuu
できていない。 明日、 宿営地に 移動する、 奥へ、 それから 戻って来る、ずっと。二
dogboni aṇasiesi, emegizeṇefi elusimde njaixi, ulewe waasi ṇenizeṇefi zugtigi.
晩 泊って、 戻って来る、 徹底的に 岸伝いに。肉を 調達して 帰ろう、 家に。
Avgusta kakta biani duleneini, Andalewa tatusinelegeni kajazaṇafi xototigi».
八月 半 月が 過ぎた。 アンドレイを 勉強させては、 街に」

Isaula odowe, Marusjava imeneesi, gulineemu timadule. Mene xoktolifi
イスラ じいさんと マルーシャを 残して、 出発した、 朝。 自分たちの道沿いに
ṇenemie, nadaza xeeṇkini metradu kjaṇa budeemeni baagiemu. Uleni teu
進んで、 七十 余 メートルの所で、アカシカが 死んでいるのを 見つけた。肉は すべて
ṇoulieni. Siesi, neugiemu aṇatigi, Marusja oloktomi wagilegeni. Zube neṇjini
傷みかけていた。皮をはいで 届けた、宿営地に、マルーシャが 煮て干し肉にするように。二日間
eteteesi, mutuemu. Buu emegisiu ekindini Isaula ogbjowe waami teumeni
仕事して、終わった。 私たちが 戻った ときには、イスラが オオシカを ひとめて、全部
gazieni Marusjazi. Timanaṇi guliṇiemu zugditigi.
運んで来ていた、マルーシャと。明日は 帰る、 家に。

III

Zugditigi emegiesi, saami bii eniṇe dianaidigini: Duṇka Kolja omoti
家に 帰ってから、知った、私は、母が 言うことから。ドゥンカイ・コーリヤが 何度も
xauntasini minawa. Nuani minawa Xabarovskatigi xebulegemi nixeini, zakpu
尋ねていた、私に。 彼は 私を ハバロフスクへ 連れて行こうと している、八
klassala tatusilegei. Nuanzini gie taamati niasulelieti Mune Vera, Uza
年生のクラスで 学ぶために。彼と 一緒に 去年、 学んだ、 ムノワ・ヴェラと ウザ・
Genade. Gena Oloṇolo bagdini, nuani agani Mixail Vasil'evich ei aṇani
ゲーナが。ゲーナは オロンに 住んでいる。彼の 兄 ミハイル・ワシレーヴィチは 今年
Sjaiṇele etetelizeneni. Sjaiṇele nientileeti nadase tatusikci skolawa. Minzi
シャインで 学ぶことになっている。シャインに 開いた、七年 制の 学校を。 私と
gie mutuegetu dii klassawa, ila aṇa duleneeni amjalani tuṇainti klassala
一緒に 終えた連中は、四年生を、 三 年間 過ぎた あとで、 五 年生のクラスで
tatusilizeneti. Suanka Mitede nadanti klassala tatusilizeneni Sulaidiga Vasjazi
学ぶことになる。スアンカ・ミーチャも七 年生で 学び始める、 スリャンジガ・ワーシャや

Mamrovska Galjazide (Galja njuŋu klassawa mutuesi, nadanti klassala esini
ママロフスカ・ガーリヤと一緒に (ガーリヤは 六年生を 終えたが、七 年生には
tatusi, utemi ei aŋani tatusilizeneni). Gagda neŋini emeeni Duŋka Kolja,
上がってなかった。だから 今年 上がるのだ)。翌 日 やって来た、ドゥンカイ・コーリヤが、
dianaini:
言う。

— Minzi gie ŋenezeŋei (1/2) Xabarovskatigi. Utala pedinstitutala
「ぼくと一緒に 行こう、 ハバロフスクに。 そこで 教育大学まで
mintiwe tatusizeneti zakpunti klassala. Utalatu mutuzeŋefi zaanti klassawa.
ぼくたちを 教える、 八 年生のクラスで。 そこで 終えよう、 十 年生を。
Utadigi ingule institutele niasulelizenefi, lusa kejeweni tatusizenefi, amjala
それから そのまま 大学で 勉強するんだ、 ロシア 語を 学ぼう、 将来
siasaŋa edelegefi.
教師に なるために」

— Bii mene pjouj esimi gaagi Dabaule. Pjouwe geenegilei ekuzefi utala.
「ぼくは自分の卒業証書をもらってない、峠(の学校)で。証明書をもらうために残る、ここに」

— Pjoule ancizide zawaiti zakpunti klassatigi, amjala bugiteize. Mindu
「卒業証書が なくても 入れてくれる、八年生に。 あとで 渡せばいい。 ぼくに
bii amii aanawa buini Burlitala iinelegei, utala imenelegei. Minti zuje
ぼくの 父が 舟を くれる。ブルリトまで くだって、そこで 乗り捨てるように。ぼくたち 二人で
ejenezeŋefi, sii jaŋcai paki ei bie. Cialai?
行こう。 君は 舵をとるのが 上手 じゃないか。 そうしたいか？」

— Cialaimi. Ali gulinezeŋefi?
「そうする。 いつ 出発しようか？」

— Wai njuŋunti avgustadu. Einenji zaa jeinti neŋini. Nada neŋini
「二十 六日 八月に。 今日は 十 九 日だ。 七 日
biseesi gulinezeŋefi.
たったら 出発しよう」

— Inke. Asasa, Kolja, sii mindu belesiwei. Abuga ziawade bueni. (2/3)
「わかった。ありがとう、コーリヤ、君がぼくに助けてくれたことを。父が お金も くれた」

Abuga, eniŋe agdaabede bisiti. Eniŋetene dianaini:
父も 母も 喜んでいるよう だった。母が 言う。

— Goo tatusizeŋei ei. Niasulemi mutulie, elusim saŋtanazaŋai. Ajazi
「もっと 勉強するがいい、今。勉強し 終えたら ずっと 大人になるだろう。よく
niasuleje, sitei, nii edelegemi.
勉強しろ、息子よ、一人前に なるように」

— Niasulenemi ŋenemi, imi atami niasule?
「勉強しに 行くからには、どうして 勉強しないもんか」

— Deumpindeje omo aŋani, ei kutu nica bii xaisi, — uti abuga minawa
「休め、 一 年、 今は とても 小さいんだ、まだ」 こう言って 父は 私を

munjalini.

手放したがない。

— Jou culii sii, safaniede. ɲenezeɲeni xotolo tatusinemi. Jou nixezeɲeni

「何をいつまでもあなたは悩むの。行くがいい、都会へ 勉強しに。 何を するか、

omo aɲani kaide, — eniɲe ɲaɲsini abugawa.

一 年 まるまる」母は たしなめる、父を。

— Nica bixini dianaimize. Cialami, ɲeneteze, nii zawasini nuamani.

「小さいから言ってるんだ。 望むなら 行くがいい、だれが 止めるか、あいつを。

Kanimi eimi diana bii, munjalimi sitei.

やめさせようとは 言わない、俺は。かわいそうに思う、息子を」

— Ezi munjali, alide xai ɲenezeɲeni tatusinemi. Ezi dogdi amii

「かわいそうに思うな、いつかはまた出て行く、勉強しに。 聞くな、 父の

dianaiwani, kulezi ɲeneje, — eniɲe iɲamundemie dianaini mindu.

言うことを。気をつけて 行きなさい」母が 涙を流しながら 言う、 私に。

Mene ɲuɲsii konzolo teugiesi, alasiliemi, gulinei neɲiwe. (3/4) Abuga

自分の 荷物を 旅行鞆に 詰め込んで、待った、 出発する 日を。 父は

mindu omo miɲga tiezewe bueni. Bii sebie zawakcaami njuɲu tanguwe.

私に 一 千 ルーブリを くれた。私は はじめ もらおうとした、六 百を。

Abuga dianaini mindu:

父が 言う、 私に。

— Sitei, sii xototigi ɲenei ei bie? Sii aja tetiwe gadalagai nixeimi.

「息子よ、おまえは都会へ行くんじゃないか。おまえが いい 服を 買うようにしてやりたい。

Ei sii ɲuɲsilei dampimeɲi teti. Tue teiselegezeɲeide joude anci.

今 おまえの持ち物には古着ばかりの服だ。冬 着ようにも 何も ない。

Xabarovskala emeesi, gadaje imexi tetiwe: xeigiwe, mokcowe, botinkewe,

ハバロフスクに 着いたら、買え、 新しい 服を。 ズボンも、 上着も、 靴も、

mouzewe, jougu-jougu xoɲto ɲuɲsiwe. Ziaɲii gaiti malaptaze. Zawaje omo

帽子も、 何でもかんでも、ほかの 物を。 金は すぐになくなる。 持っていけ、一

miɲga tiezewe, uti jou egdinide eini bie. Minti ilantuje dii miɲga tieze

千 ルーブリを、これは 何も 多くは ない。 われわれは 三人で 四 千 ルーブリ

xulemie taulagiefi, zugdude egdi amjasagizeɲeni zia.

以上 もらった。 家に たくさん 残るだろう、 金は」

— Asasa, abu, ono dianai culini nixezeɲei. Tegenemide gadazaɲei,

「ありがとう、父さん、言う とおりに するよ。 服も 買うよ

xeigiwede, botinkewede, mouzewede, xoɲto ɲuɲsiwede.

ズボンも 靴も 帽子も、 ほかの 物も」

Timana gulineu. Suu aja biteuze, eniɲe, abuga, neɲuzige. Efrem xai

明日 出発する。みんな、さようなら、 母さん、父さん、妹や弟たち。 エフREMは まだ

nica, joude eini egze, Lenade sagdi eini (4/5) bie. Ljovatene sagdi

小さい、何も わからない、 レーナも 大きく ない。 リョーワは 大きく

eedeni. Aziga, Pabulike, ajazi tatusijeu, eniñewe, abugawa belesijeu.

なった。お嬢ちゃんやパヴリクも、よく勉強しなさい、母や父を 助けなさい。

Gwasanani Pete armijadigi emegizeneni. Teuniñe zugdu bizenju, biitene jouke

来年には ペーチャ兄さんが軍隊から帰って来る。みんな 家にそろうけど、ぼくは どこかの

bualani bagdinezenei. Ono nixezei, utebede biiweni. Caixi tatusineimi.

土地で 暮らすだろう。 どう しようもない、そうなるのを。 もっと 勉強しに行くんだ。

Gaa, bii timana gulineimi xototigi. Ei sebieni bii Imalasene bisimi omo

さあ、私は 明日 出発する、街へ。 今 まで 私は イマンには 行ったことがある、一

muda. Uti nadanti klassala tatusiñei, xuliemu buu ilantuñe neki kanikuleni

度。 それは 七 年生で 学んでいたとき、行った、ぼくたちは 三人で 春 休みの

biñeni. Burlitale iineesi, xuecezi ñeneemu Imatigi. Utala Suanka Mite

ときに。ブルリトまで くだって、汽車で 行った、イマンまで。そこには スアンカ・ミーチャの

guguni bagdieni, goulitigi mafalaasi. Ilientini Kanchuga Vitja bisini, nuani

おばさんが 暮していた、朝鮮人に 嫁いで。 三人目は カンチュガ・ヴィーチャ だった。彼は

tuñanti klassala tatusieni. Buu bonjo klassala gie zawañdaamu niasulemi.

五 年生で 学んでいた。 私たちは 一 年生のクラスで 一緒に 始めた、勉強するのを。

Nuani kutu gee tatusieni lusa kejeweni, utemi amjasaani. Ima — sagdi xotode

彼は とても 悪く 学習した、ロシア 語を。 それで 落第した。 イマンは 大きな 街では

esini bie, xai minti moome zugdifibede egdi. (5/6) Mite guguleni digasiesi,

なかった。まだ私たちの木造の家みたいなのが多い。 ミーチャのおばさんの家で食事を済ませて、

ñeneemu xotowe iselegefi. Iledexem xuliemu. Zugditigi ñenimi, xoktolo

出かけた、街を 見に。 隅々まで 歩いた。 家に 帰る 途中で

Kanchuga Vitja amidini asagdiemu. Nuani eineni feitijezi emeeni. Munawa

カンチュガ・ヴィーチャの 父に 会った。 彼は 今日、 飛行機で 着いた。 私たちを

iseesi, xonolieni:

見て、 驚いた。

— Ono emeu suu ouxi? Jou ziazini emeu xuecezi? Janñau?

「どうやって来たか、おまえたちはここへ。どんな金で来たか、汽車で。 何をしに？」

— Buu xotowe isenemi emeemu, Mite guguni odu bagdini, timancaalani

「ぼくたちは 街を 見に 来た。 ミーチャの おばさんが ここに 住んでいる。あさって

gulinizenju internatitigi.

戻る、 寄宿舎に」

— Bii xamaasi masinazi ñenizeni Pozharskatigi, minzi gie ñenijeu.

「俺は これから 車で 戻る、 ポジャルスコエまで。俺と 一緒に 戻れ」

— Bii amjasagizeni, — dianaini Mite Suanka.

「ぼくは 残る」 と言う、 スアンカ・ミーチャが。

— Andale, sii minzi gie ñenije, mindu emuse safani, — gunkini Vitja.

「アンドレイ、君はぼくと一緒に来いよ、ぼく一人じゃつまんない」と言った、ヴィーチャが。

— Inke. Bii sunzi gie ñenizeni. Jou nixezemi bii odu? — diagiemi bii.

「いいとも、ぼくは君たちと一緒に戻ろう。 何を するか、 ぼくは ここで」と答えた、私は。

— Eīneņi minti Dabaulegde masinazi ņenizeņefi, — guneeni susu. (6/7)

「今日 俺たちは 峠まで 車で 戻ろう」 と言った、おじさんは。

Susu — bii amii zalani. Nuani gegbini Kanchuga Mixail Taixeevich,
おじさんは 私の 父の 親戚だ。彼の 名前は カンチュガ・ミハイル・タイヘーヴィチ、
predsedatel' sel'soveta biini.

村ソヴィエト議長 だ。

Mite mene gugutigi ņenieni, buu Vitja zuņe alasiliemu, alide masina
ミーチャは自分のおばさんの所へ帰った。私はヴィーチャと二人で待った、いつ 車が
guliņizeņewe. Goo alasīemu, utaatene unaamu kuzoweleni, xulazi daigiesi
来るかを。 長いこと 待った。ようやく 乗り込んだ、車内に、 毛布で くるんで、
memi. Pozharskele iineesi, zeuwe digeiti zugdile saljasiemu, utadigi nia
自分を。 ポジャルスコエに着いて、食堂（食事をとる家）で 腹ごしらえした。それから また
alasiliemu nii aņataini zugdi kialani. Pozharske — buu raionau duliani,
待った、 ホテル（人を泊める家）の前で。 ポジャルスコエは 私たちの 地区の 中心地だ。
utalamei eteteiti zangjazige. Uti joxo maņa sagdide eini bie, Imadigi jou
もっぱらここで働いている、幹部らは。この村は それほど 大きくは ない。 イマンなどの
buadigini nica, utemtu buu duliaw biini.

場所より 小さいが、それでも われわれの 中心地 だ。

Suu ejeņini amjalani guliņiemu Pozharskadigi. Goo ņeneemu, buu uti
日 没 後 出発した、ポジャルスコエから。長いこと走った。私たちは その
ekindini ņuamu, njaņa gektindemi, mĵagdagiemu. Susu dianaini:
あいだ、眠っていたが、少し 寒くて 目が覚めた。 おじさんが 言う。

— Ele Dabaule iineliefi, sii, baata, munzi ņenezeņei Sel'pole aņasinemi.

「もうじき 峠に 着く。おまえは、坊主、俺たちと 行こう、 農村組合に 泊りに」

Joude esimi diana bii, saami: internata (7/8) kialani xetigeņizeņei bii
何も 言わなかった、私は。わかっていた。寄宿舎の そばで 飛び降りるんだ、私は、
naatigi, utadigi tuņaza metra buu internatatigiu.

地面に。 そこから 五十 メートルだ、私たちの 寄宿舎まで。

Muisiemi culini nixeemi. Masina uti udele ekee ņeneeni, bii ingule
考えていた とおりに した。 車が その 場所に ゆっくり さしかかった。私は すぐに
xetigeneemi. Vitja xeetigini:
飛び降りた。 ヴィーチャが 叫んだ。

— Timana emegimeseu giede!

「あした 戻ろう、 一緒に！」

Joude eimi diagi, tukjagiemi internatatigi. Bii iigisi, niidee ese
何も 答えずに、 走った、 寄宿舎に。 私が 入っても、だれも
mĵagdagi. Timadule, njoulaziga, bii ņuajwei isemie, sebunelieti:
目を覚まさなかった。翌朝、仲間たちは、私が 寝ているのを見て 不思議がった。

— Andale, ali emegiej sii? Imi esimu dogdi buu? Izi emegiej,

「アンドレイ、いつ帰ったんだ、君は？ なぜ聞こえなかったか、ぼくらは？ どうやって 来たか、

dieligiej? Imi emuse bii?

飛んで来たのか？ どうして一人なんだ？」

— Bii dogbo dulaṅkidini emegiemi masinazi, Suanka Mite Imandu

「ぼくは 夜 通し 乗って来た、車に。 スアンカ・ミーチャは イマンに
amjasagieni, buu Kanchuga Vitjazi nuani aminzini emegiemu.

残った。 ぼくと カンチュガ・ヴィーチャが 彼の 父さんと一緒に 帰って来たんだ」

— Sulaindiga Vasjawa eseu isee?

「スリヤンジガ・ワーシャを 見なかったか？」

— Esimu. Nuani Bikitigi ṅeneeni, uti amjalani eseu baagdisi. Niasulei

「いいや、あいつは ビキンに 行った。 その あと 会ってない。 勉強が始まる
zuliellini emegiteze.

まえには 戻って来るだろう」

Utebede tene iseemi xotowe. Onofi biini (8/9) Xabarovska? Kolja

こんなふうにして、初めて見た、街を。 どんなふうだろう、ハバロフスクは？ コーリヤが
dianaini:

言う。

— Sii dilii uixi uindeesi xulizeṅei uti xotoli, zugdigtu kutu gugda:

「君は 頭を 上に もちあげて 歩くだろう、この街で。 どの建物も 大変 高い。

dii-tuṅa kabau uixi.

四、五 階だ、上に向かって」

Ono bizeṅewenide, esimi saa. Onofi biini uti gugda zugdi? Adi

どんなふうであるかを、わからなかった。 どんな だろう、そんなに 高い 建物とは？ 何
metrazi uixi degdeini? Imala bii isei zuu kabau uixi bii zugdiwe. Asi
メートル 上に 突き出ているか？ イマンで 私は 見ている、二 階が 上に ある 家を。 それほど
gugdade ei bie. Goodigi zuke isepte. Xabarskatigi emeesi, isetemize, jou
高くも ない。 遠くから 何とか見えた。 ハバロフスクに行けば、わかるだろう、どのくらい
gugdanide biiweni uti zugdizige.

高さが あるかを、こうした 建物が。

Bii teu teugiesi konzolo, alasiliemi timana neṅiweni. Dogbo kutu gee

私は 全部 詰め込んで、旅行鞆に、待った、 次の 日を。 夜は あまりよく
ṅuami, utawamei muisiemi, ono ejenezeṅeu, ono xuecele unaasi sebie
眠れなかった。 こんなことばかり考えていた。 どうやってくだって行くか、どれか汽車に乗ってまず
Pozharskatigi ṅenezeṅeu bii komsomoladigi asitagilegemi uhotowe, adi neṅini
ポジャルスコエまで 行かなければ、ぼくは コムソモールから もらいに、証明書を。 何 日
ṅenezefi Xabarskatigi? Toosimde toosiemi bii uti sagdi xotowe. Ajazide
かかるんだろう、ハバロフスクまでは？ 夢の中でまで 見た、私は この 大 都会を。 よくは
esei zoṅigi toosiemi.

覚えていない、夢で見たのを。

Kolja sikie xulisegise (9/10) mintigi, salagami, temene bimies, eimies.

コーリヤは 昨晚、やって来た、 私の所に、様子を見に、準備ができて いるか どうか。

— Timana bazige ezenefi guline. Uti neḡini Oloḡolo aḡasizenefi. Mintizi
「明日は 早く 出なくていい。 この日は オロンで 泊ろう。 ぼくたちと
gie Sanegine Anasij Stepanovich ḡenezeneni. Nuamani Raikomatigi emeleḡeni
一緒にサネギン・アナシー・ステパノヴィチも 行く。 彼を 地区委員会に 来るように
geleeti. Ilantuḡe gulinezenefi, nuanitene Oloḡolo jouke nixelegemi ekizeneni.
求めている。三人で 出発しよう。 彼は オロンで 何かの 用を足すために 降りる。
Utala aḡasiesi, timancaalani bazige gulinezenefi Dabaule iineleḡefi. Xoktolo
そこで 一泊して、翌朝 早く 漕ぎ出す、 峠 めざして。 道中で
zeuwe digalagami zawaje.
食料を 食べるために 持って行け」

— Jou zawazami? Ule oloktosowe, umaktawe, nemiktewe, galjaḡawe.
「何を持って行こうか？ 肉を ゆでたのと 卵、 干し魚、 揚げパンを」
— Utebede bizeneni. Timana mene njaixi emeje zaa dii chasadu, bii
「そんなもん だろう。 明日 自分で 岸に 来い、 十 四 時に、 ぼくは
pekarne nialani alasizenei sinawa.
パン焼き場の そばで 待っている、君を」

— Inke. Emezenei zaa dii chasatigi, ezenei amjasa.
「わかった。行く、 十 四 時に、 遅れない」

IV

Gagda neḡini, sikiene, gulineemu buu ilantuḡe: bii, Kolja, Anasij
翌 日、 夕方近くに 出発した、私たちは 三人で。 私とコーリャ、それにアナシー・
Stepanovichede. Oloḡolo iineesi, aḡasiemu. Bii loulule aḡasiemi, nuandileni
ステパノヴィチと。 オロンに 着いて、 一泊した。 私は 祖母の家に 泊まった。彼女の所で
saami, Vasja gosoo gulineemeni Xabarskatigi. Aa, nuanide utala
知った、ワーシャおじさんが行ったことを、ハバロフスクに。ああ、彼も そこに
niasuleneeni! Kutu aja, gie tatusizenefi zakpunti klassala. Loulu dianaini:
勉強しに行ったんだ。とても いい、一緒に 学んだ、八 年生で。 祖母が 言う。

— Aja gulineje, baata, niasulaje, nii edelegemi. Ezi zuxele, aiwe ezi
「気をつけて行きなさい、坊や、勉強しなさい、一人前になるために。悪いことしないで、酒を
umnasi, gee uti.
飲んじゃだめよ、悪い、これは」

— Inke, loulu, pegetemize aja tatusimi. Xototigi onoko tatizemi.
「わかった、婆ちゃん。頑張るよ、しっかり勉強するように。街に 何とか 慣れるよ」

— Tatiteize, xontogutude tatiti ei bienu.
「慣れるとも、だれだって 慣れる じゃないか」

Timadule nia caixi gulineemu. Sanegine Kolja kialani unaasi, jouke
翌朝、 再び 先へ 向かった。 サネギンが コーリャの そばに乗って、何か

teluŋusini, mindu amjazanzi tala-olo dupte. Koljatene ljasi injeini, emugdei
話しているのが、私に うしろから 所々 聞こえた。コーリャは 大 笑いしている、腹を
zawasimiede. (1/2)
かかえて。

Bii egdimeni ajazi esimi baapta. Emne-emnee dogdimi, joude dianaiweni.
私は ほとんど よく わからなかった。とぎれとぎれに 聞こえる、何か 言ってるのが。
Duisikcemi ŋeleimi: omoti zuleixi isesimi, gee bua ljasi egdi, gjoukede,
ぶつかるのを 恐れている。たえず 前方を 見ている、難所が 大変 多い、流木や、
moŋode, dailaktaide, utemi omoti seudeimi tauxi-ouxi. Ali-ali Koljadu
枝だまりや、堆積物やら、それで 常に 漕いでいる、あちこちへ。ときどき コーリャにも
dianaami mene seuzi belesilegeni, moŋowe ailimi. Kolja, ali-ali Sanegine
言った、自分の櫂を使って助けるように、枝だまりを避けるのを。コーリャは、ときにはサネギンと
seudeiti, seudemi wadimie, Anasij Stepanovich, nia jouke teluŋusini.
漕ぐが、漕ぎ 終わると サネギンは また 何か 話す。
Koljatene omoti injeini. Uti neŋini, sikiene, Soljoxo Dabaule iineemu, utala
コーリャは たえず 笑いこけている。その日は、夕方近くにヴェルフヌィ峠に 着いて、そこの
maŋmuzigele aŋasiemu.
ナーナイ人の所で 夜を明かした。

Utadigi gagda neŋini Burlitele iineemu. Duŋsifi uŋtiesi, aanawa tagjaixi
そこから 翌 日、ブルリトに 着いた。荷物を 降ろすと、舟を 岸から
anaamu. Utawa isemi, omo lusa baatani guneeni:
押し出した。これを 見て、一人の ロシア人の 少年が 言った。

— Janami anau? Bii mendu gaagizemi utawa?

「どうして押し出しちゃうの？ ぼくが自分用にもらってもいい、これを？」

— Gaagije. Buu amaixi ezeŋeu ŋeni utazi. (2/3)

「やるよ。俺たちは もう 行かない、こいつで」

Stancatigi emeesi, utala baagdiemu Munezi. Nuani kokto waktawani taiti
駅に 行くと、そこで 会った、ムノフに。彼は キハダの 樹皮を 集める
kontoratigini emeeni ei zulieni. Verade utadu bisini aminzii, nuanide
事務所に 来た、この 前に。ヴェラも そこに いた、父親と。彼女も
Xabarskatigi gulinelemi nixeeni.
ハバロフスクへ 行こうと していた。

Buutene dogbo xuecele unaamu. Timadule ougiemu stanca Ljulinele.

私たちは 夜、列車に 乗り込んだ。朝方、着いた、リュリノ駅に。

Utadigi ila kilometra Pozharskatigi. Gaiti iineesi, ingule ŋeneemi
ここから 三 キロだ、ポジャルスコエまで。じきに 着いて、まっすぐ 出向いた、
Raikom komsomolatigi. Utala geenzi bii aantadu diaŋkimi bii pjouwe
コムソモール地区委員会に。そこで お腹の大きな 女性に 言った、私は、会員証を
kalalagani: Andale zeedigini Saunderizi onjogilegeni, bagdiemi pjoule
交換してくれるように。「アンドレイ」の代わりに「アレクサンドル」と書くように、出生証明書に

onjosobedeede. Aanta kalagieni bii komsomolei pjouweni. Uti amjalani,
 書いてあるとおりに。女性は 交換してくれた、私のコムソモール会員証を。その あと、
 saljasiesi, gulineemu Guberovatigi, utadigi, xuecele unaasi, Burlitatigi nenilefi.
 昼食をとって、向かった、グベロヴォまで、そこから 汽車に 乗って、ブルリトへ 行くために。
 Utala imeneemu mene dujsifi. Uteliejini ingule unaamu xuecele ilantuje: (3/4)
 そこに預けてあった、自分たちの荷物を。その日のうちに すぐ 乗り込んだ、列車に、三人で。
 bii, Kolja, Vera.
 私とコーリャ、ヴェラの三人だ。

Bii conjku kialani iliesi, bwaiximei isesiemi. Xuece xoktoni ogdolini
 私は 窓 際に 立って、外ばかり 見ていた。汽車の 線路 沿いに、
 moo, mooktoi, njou, wee, uli duleneiti. Xuecewe junjkalai parovoza omoti
 木や 茂みや 湿原、山や 川が 過ぎて行く。列車を 引く 蒸気機関車は たえず
 jalazi ediwesini. Sebie bii jailei sutuneeni, utemi dulenei eetiginimei
 火の粉を撒き散らしている。はじめ私の目にゴミが入った、それで 通り過ぎる 方だけ
 isesiliemi. Ali-ali Vera bii kialai ilindeini, nuanide conkutigi isesini.
 見るようにした。ときおりヴェラが私のそばに 立つ、 彼女も 窓の方を ながめている。
 Joudexem stancawani iseemi bii uti nenjini. Onofidexem biiti utigetut gegbiti.
 あらゆる 駅を 見た、 私は その 日。 いろいろ ある、それらの 名前が。
 Sebie zugdi ogdoloni iseemi onjosowe: "st. Alchan". Utadigi "st. Zven'evoj",
 はじめ 駅舎の 壁に 見た、書いてあるのを、「アルチャン駅」と。それから「ズヴェニエヴォイ駅」、
 uti amjatalini "st. Bikin". «Aa, — muisimi bii, — stanca zulientini buu xueceu
 その あとに 「ビキン駅」だ。「ああ、— 思う、 私は一 駅の 前で 私たちの 汽車は
 Sagdiuliewe doumili dougieni. Uti Biki bisini bubu. Bii Bikinji! Odigi
 ビキン川を 橋を渡って 過ぎた。 ここはビキンじゃないか、 私の ビキン！ これから
 caixi jouke buani bizenewenide eimi saa». (4/5)
 先 どんな 所が あるのかを 知らない」

Caixi bii stancazige gegbiweti ei adimeede onmogiemi. Ei zonjimi:
 その先にある 駅の 名前を 今まで いくぶん 忘れかけていた。今なら 思い出せる。
 St. Bojcovo, Gedike, Kruglikovo, Vedrino, Xor, Vjazemskaja... Xuece
 ボイツォヴォ、ゲディケ、クルグリコヴォ、ヴェドリノ、ホル、ヴァゼムスカヤ…。 列車は
 stanca taundileni ekusieni. Niizige ougiti, unaiti — utebede Xabarskalegde.
 駅 ごとに 止まった。 人々が 降りる、乗り込む。こうして ハバロフスクまで。

Stanca taundileni aantaziga, mafasaziga, njoulaziga joudexem zeuweni
 駅 ごとに 女たちや 老人たち、 子どもたちが いろいろな 食べ物を
 xudasiti: oloktoso tuduzewe, janasa fanguwe, pomidorawa, siguli ikteweni,
 売っている。ゆでた ジャガイモ、塩もみの キュウリ、 トマト、 カボチャの 種、
 sugzja kakcisewe, xonito digau zeuwe. Xuecezi nenektei niizige utawa, ziazi
 魚の フライ、 ほかの 食べる 物を。 汽車で 行く 人たちは これを 金で
 gadaimie, digaiti. Jamadaxem teuktewede egdi xudasiti. Buude, gadaasi,
 買って、 食べる。 あらゆる ベリーも たくさん 売っている。私たちも 買って

digasiemu.

食べた。

Suu ejenini zulieleni iineemu Xabarskala. Vokzaladigi Kolja munawa
日が 沈む 前に 着いた、ハバロフスクに。 駅から コーリャが 私たちを、
loxoï xebueni Lev Tolstoj ulicatigini, utala niide anci bisini. Teuniŋe (5/6)
徒歩で連れて行った、レフ・トルストイ通りに。そこには だれも いなかった。 みんな
institute zugdileni bagdineeti. Buu utadigi, Karla Marksa ulicatigini njugiesi,
大学 寮に 引っ越したのだ。 私たちはそこからカルル・マルクス通りに 出て、
ŋeneemu uti institutatigi. Omo zugdi kialani iineemu, ogdoloni onjoso
向かった、その 大学の方へ。 一つの 建物の 前に 着いた。 壁に 書いてある、
"ul. Karla Marksa, 64".

「カルル・マルクス通り 64」と。

— Olo bagdizenefi minti teuniŋe, — dianaini Kolja, — Dili imi esei

「ここに 住むんだ、 俺たち みんな」 と言う、コーリャが。「頭を なぜ

uindeesi uixi?

もちあげなかったか、上に」

— Manga gugdade eiti bie zugdizige. Teeti zugdiletene omo kico

「それほど 高くも ない、 建物は。 あそこの 建物だけ 一つ てっぺんが

gugda biini. Jou uti?

高い なあ。 何、あれは？」

— Aa, uti toowe suusigetu zugdini. Utala masina egdi, teu ulizimei

「ああ、あれは消防署（火を消す人の建物）だ。あそこには車が たくさんある、みな 水で
zaluptase. Shlangali kuŋgesiti too zegdeiweni.

いっぱいだ。ホースで 水をかけるんだ、火が 燃えているのを」

Buu utebede diasu agdandini, muntigi zube baata tukjaiti. Kolja

私たちがそうやって話しているあいだに、私たちのほうに二人の少年が駆けて来る。コーリャが
dianaini:

言う。

— Baagdisijeu, utigetu bii gagdau.

「紹介しよう、 これは ぼくの友達だ」

— Bii gegbii Andale, — dianaimi bii, ŋalai buumiede.

「ぼくの名前は アンドレイ」と言う、 私は 手を 差し出しながら。

— Bii Grisha.

「ぼくはグリーシャ」

— Bii Kime. (6/7)

「ぼくはキム」

Utebede baagdisiemu buu. Grisja seeni Dolgan, Kime seeni Gutchenson.

こうして 紹介しあった、私たちは。グリーシャの姓はドルガン、キムの姓はグトゥチェンソンだ。

Buu ingule gagdalaamu. Nuati kile niizige. Kime elu kile, Grishatene

私たちはすぐに友達になった。彼らは エウエンキ人だ。キムは本当のエウエンキだが、グリーシャは

kile bimide xonjtole bisini. Buu udiezige namunkazigebede bisini, lusa
エウエンキとは言っても少し違っていた。われわれウデへとオロチみたいなものだ。ロシア人は
nuatiwe ewenezi gegbisiti (kwaisimitene lamutazi gegbisiti). Bii uti dogboni
彼らを エウエンと 呼んでいる (軽蔑的に ラムートとも呼ばれる)。私は その 晩
Grisha kaḡalani ṅuami, nuanitene Kimezi omo kaḡala ṅuani.
グリーシャのベッドで寝た。彼は キムと 同じ ベッドで寝た。

Timadule, digami mutuesi, Kolja xebueni minawa zangjatigi. Uti zangja
翌朝、 食べ終わってから、コーリヤが連れて行った、私を 主事のところへ。この 主事の
gegbini seenide Nina Alekseevna Bogdanova bisini. Nuani mindule
名と 姓は ニーナ・アレセーヴナ・ボグダノワ といった。彼女は 私に
xauntasilieni:
尋ね始めた。

— Tatusineej? Sii pjouj sinzi biini? Zakpunti klassala tatusizeṅei, utempi
「入学するのね？ あなたの卒業証書は持っている？ 八年生のクラスで 学ぶのなら、
zuu biini, sii "A" klassala tatusizeṅei. (7/8)
二つある。あなたは A 組で 学ぶのよ」

— Bii pjouwei anci bixini esiti bugi. Ouxi emeimi esimi geenegise
「ぼくの卒業証書は ありません、もらってません。ここに来る途中 寄れませんでした、
goolo biini.
とても遠いので」

— Aja, gwasanani gaziteize. Eitene zeptelegemi talonawa taulagije.
「いいわ、来年もらってらっしゃい。この 食料配給券を 受け取りなさい。
Soktuwe, xulawa, zentuwe, prostenewe komendantala taulagiteize.
敷布団と 毛布、 枕、 シーツは 管理人から 受け取ってね」

— Asasa, Nina Alekseevna, aja biteize.
「ありがとうございます、ニーナ・アレクセーヴナ。さようなら」

— Aja biteize, baata. Niasulaje ajazide.
「さようなら、 坊や、 勉強するのよ、しっかり」

Utebede tatusiliemi bii Xabarskadu. Utala jamadaxem njoulaziga tatusieti:
こうして勉強し始めた、私は ハバロフスクで。ここでは いろいろな 子供が 学んでいた。
maṅmuzige, kilezige, ulichazige, nivxezige, namunkazige, chukchazige, aleutazige,
ナーナイ、 エウエンキ、ウリチ、 ニヴフ、 オロチ、 チュクチ、 アレウト、
udiezige, xontogutu. Sulaidiga Vasjade olo tatusilieni. Nuani "B" klassala
ウデへ 等々。 スリャンジガ・ワーシャもここで学び始めた。彼は B 組に
bisini. (8/9) Koljatene, fizikawa cilaimi, amjasaani. Minzi gie nia
いた。 コーリヤは 物理を 落として 留年した。私と 一緒にまた
tatusilieni zakpunti klassala.
勉強することになった、八年生のクラスで。

Tatusiuzene predmeta ljası egdi: lusa keḡeni, uti literaturani, algebra,
学習する 科目は とても 多い。ロシア語、 その 文学、 代数、

geometra, biologa, ximie, angle kejeni, fizkul'ture, geografe, charchene,
 幾何、生物、化学、英語、体育、地理、製図、
 fizike xontogutude. Bii Dabaule nemce kejeweni tatusiemi. Eitene angle
 物理 などだ。私は峠（の学校）ではドイツ語を学んだが、今度は英
 kejeweni keseimi. Nemce kejeleni, ono onjoimi, ono taniu. Angleletene
 語で苦しむことになった。ドイツ語なら書いてあるとおりに読めばよい。英語は
 joudexem kalani egdi. Utemi goo biseesi, egzeliemi, onode biuweni.
 いろいろな決まりが多い。それで長い時間をかけて、わかってきた、どのようなか。
 Fizikawa, ximiewe puga malule tatuwesiu, laboratorija gunaiti utawa, utala
 物理と化学は特別な教室で学んだ。実験室と呼んでいた、それを。そこには
 joudexem xazuni biini.
 いろんな器具がある。

Lusa kejeweni bii aja egzei bisei, Dabaula tatusiemi. Eitene xonto
 ロシア語を 私はよくできていた、峠で学んだときは。今度は別の
 siasanagiti (9/10) tatikceimi goo esimi mute. Tatusiini gegbini Ol'ga
 先生に慣れることが長いことできなかった。先生の名前はオリガ・
 Viktorovna, seeni Aristidi. Nuani grechanka bisini. Mamakanagieni. Anana,
 ヴィクトロヴナ、姓はアリスチジ。彼女はギリシャ人だった。初老にさしかかっていた。かつて
 sike bihee, saina, kutu alagdiga bisini. Nuani dianaini amjatali onjogimi
 若かったころは、きつととても美人だっただろう。彼女が言うあとで書き取るのは
 egdigetu eiti kokpigi. Biide esimi kokpigi. Buu dianau:
 ほとんどの者がうまくできない。私もだめだった。私たちは言った。

— Eke tanijeu. Buu eimu kokpigi onjogimi.

「ゆっくり読んでください。ぼくたちはできません、書き取るのが」

— Xeej, nia jou geleu. Tatijeu, aja, bimie kokpiliteuze. Ono

「おやまあ、また何を頼むかと思ったら。慣れることね、大丈夫、そのうちできるわよ。どう
 tatusieti sunawa, omo kejezi onjosilegeu?
 教えたらいいの、あなたたちを、一言ずつ書き取れるように？」

Jou dianazai! Utebede keseemu. Amjala, tatigiesi, kokpiliemu amjatalini
 何と言うべきか！こうして苦労したが、そのうち慣れてきてできるようになった、後について
 onjosimi.
 書き取ることが。

Bii bazarale xeiginemi, tegenemi, botinkanami gadaami. Xeigii elegeni
 私は市場でズボンと上着、靴を買った。ズボンが
 bombili, bii xejelegde (10/11) uindeseemi. Utawa emne iseeni Ol'ga
 しわにならないように、私は膝までたくし上げた。これをあるとき見た、オリガ・
 Viktorovna, utemi danšilieni:
 ヴィクトロヴナが、そしてとがめた。

— Uti jou biini, aa. Sii jou, mene zugdilei bii? Odu ljasi egdi nii,
 「それは何なの、一体？ あなたは何、自分の家にでもいるつもり？ ここにはとても多くの人が、

azigazigede biiti. Xagzafiezi, janami likpai xeigii? Daigije bugdii!

女子だっているのよ。恥ずかしくないの？ 何だってまくり上げるの、ズボンを？ 隠しなさい、足を」

— Elegen bombili, uindeemi.

「しわにならないように、まくり上げてるんです」

— Sii xai zagbalii. Ga, xelibezi daigije!

「あなたは何をふざけてるの。さあ、さっさとおろしなさい」

Bii tanđagiemi xeigii, uti amjalani, nuani urokalani emneede esei uindee.

私はもとに戻した、ズボンを。これ以後、彼女の授業のときは決してまくり上げなかった。

Xontogutu siasanazige joude esiti diana.

ほかの 先生は 何も 言わなかった。

Fizkul'tura urokani. Buu siasanau asi sagdi niinta, gegbini Aleksej

体育の 授業。 私たちの先生は とても大男で、 名前は アレクセイ・

Vasil'evich, seeni Sheremet'ev. Buu xetigesiemu, tukjawasiemu gjaņa

ワシリエヴィチ、姓はシェレメチエフ。 私たちは走ったり、 跳んだりした、いつも

fizkul'tura urokalani. Bii daamai unizini elusim eedekceeneemi. Azigazigade

体育の 授業で。 私は腰が 痛いので 全然 だめだった。 女子さえ、

minawa (11/12) niogiti tukjawasimi, wanimizi xetigesimide, mindigi gootigi

私を 抜かすし、走ると。 幅跳びしても 私より 遠くへ

xetigeneiti. Bii ljasi xagzaliemi. Dabaule tatusije, minawa Suaņka Mitetene

跳ぶ。 私はとても恥ずかしかった。 峠で学んでいたときは、私を スアンカ・ヴィーチャだけ

niogi bise tukjaimi, xetigesimi. Ono jaami bii? Imi eedeneemi? Emne

負かしていた、走っても 跳んでも。 いったいどうなったのか、私は。 なぜだめになったか。 あるとき

mindu Aleksej Vasil'evich dianaini:

私にアレクセイ・ワシリエヴィチが言う。

— Ezi xagza. Sii unii. Utemi eedekcee bii. Tausije daamai. Utemdu

「恥じることはない。君は病気だ。だから 力が出ないんだ。 治すんだ、腰を。 そのために

tatusije gimnastikawa, tukjasiwe, egbesiwe, selewede uindeseje (selewe

学べ、 器械体操や、 走り込み、 水泳を。 鉄を 持ち上げろ（重量

gantieliazi gegbisiti), santusije (utempi sekca bie). Neki, iseteize, elusim

挙げと呼んでいる）、ボクシングをやれ（そのための部もあった）。春には 見るがいい、すっかり

manganagizeņei.

頑丈になってるさ」

— Volejbole gusimi bii njaņa nonimi, basketbolawatane tene iseimi,

「バレーボール競技ならぼくは少しできますが、バスケットは初めて見ます。

utawa njumnisijeu.

これを教えてください」

— Inke, teumeni (12/13) njumnisizeņei bii, xontogutude.

「いいとも、何でも 教えてやろう、私は、ほかのもの」

Uti amjalani xuliliemi bii jamadaxem sekcatigi. Utebede ekeņesezi

それから 通い始めた、私は いろんな 部に。 そうして 少しずつ

manganaligiemi. Tuetene sportivne sugalazi duktemesiemi. Institutele zube
 力をつけていった。冬には 競技 スキーも した。 大学には 二つ
 sportzala bisini: uile, diinti etazhala, xegile. Uixi sportzalala volejbolawa,
 体育館が あった。上には 四 階に、 下にも。 上の 体育館では バレーボール、
 basketbolawa gusiti, xegjeuxeletene gimnastikalaiti. Utala turnike, bruse,
 バasketボールをやっている。下のほうでは器械体操をやる。そこには 鉄棒、 平行棒、
 xetigesikci banza, gimnastike muini, kozjolani, mata. Utawa teumeni tatisiu.
 トランポリン、 鞍馬、 跳馬、 マット、 これを 全部 覚えるのだ。
 Zuke kokpigimi bii utawa tatusimi. Utemi manganaligiemi. Gjaņa neņini
 何とかやりとげる、 私は これを 習うのを。そうして 強くなっていった。 毎日
 xanjanġutigi isesimi, kui juinies, einies. Utebede dianġini Aleksej
 鏡を 見る、 筋肉がついたか、 ついてないか。 このように言ったのだ、 アレクセイ・
 Vasil'evich.
 ワシリエヴィチは。

V

Minzi gie omo klassala omo maņmu tatusieni, gegbini Gosha, seeni
 私と一緒に 同じ クラスで 一人のナーナイ人が学んでいた、 名前はゴーシャ、 姓は
 Bel'dy. Anana nuani namuli xulieni juņgazi. Eitene nuanduni zaa jei see
 ベリドゥイ。以前、彼は 海に 行っていた、 見習い水夫として。今 彼は 十 九 歳
 bisini. Nuani mindigi tuge tukjawasini, xetigesini, santusimide tatusieni.
 だった。彼は 私より 速く 走るし、 跳躍もするし、 ボクシングも やっていた。
 Utemdu zuxule biini. Aiwe umnasini xonġto maņmuzigezi.
 それに 乱暴者である。 酒を よく飲む、 ほかの ナーナイ人たちと。

Emne, uti nadantie nojabrja bisini, buu Vasja zuņe kaņala teesi diasii
 あるとき、それは十一月七日 だったが、私は ワーシャと二人 ベッドに 座って 話して
 biseu, joude teluņusimi, injektesiemu. Gosha, iimie, bii kiatigi tukjaimie,
 いた。何でも 話しながら、 笑っていた。 ゴーシャが入って来て、私の方へ 駆け寄るや、
 sasalaani bii aaņaza sasalai. «Chou!» — ede bii kwailei.
 たたいた、 私の 右の 頬を。 ジーンと鳴った、私の 耳が。

— Jou tugundini ņanawanai minawa?

「何の 理由で たたくんだ、 ぼくを？」

— Tu-tu bije, sanjaktani!

「黙れ、 糞ったれ！」

— Jou geeweni nixeemi bii?

「どんな 悪いことを したか、 ぼくが」

— Nia dianaisi waazaņai bii sinawa! (1/2)

「これ以上しゃべったら殺すぞ、俺はおまえを」

Bii muisimi: «Lanzalani bançalaisi, xontogutu manmuzige emeimi, minawa
私は思う。「急所を 蹴り上げたら、ほかの ナーナイの連中がやって来て、私を
waazanati. Aja, tu-tu bizemi».

半殺しの目に会わせるだろう。いいさ、おとなしくしてよう」

Uti ekindini xonto manmu ijjeni, nuani gegbini Misha, seenide Biel'dy.
その とき 別の ナーナイ人が入って来た。彼の 名前は ミーシャ、姓はまたベリドゥイ。
Nuani gagda kursala tatusini, sagdi jegdige, mejeni aja. Gosha kiatigini
彼は 二年生で 学んでいる。大柄な 青年だが、気立ては 良い。ゴーシャの方に
emeesi, nuani palawani zawaani, dianaimiede:
近づくと、彼の 腕を つかんだ、こう言いながら。

— Jou zuxelei sii? Njoulewe janami sunzui? ñenizefi odigi.

「何を 暴れてる、おまえは？ 下の者にどうして乱暴するんだ？ 帰ろう、ここから」

— Nuani jou injeini minzi.

「こいつは 何を 笑ってるだ、俺のことで」

— Ele, ele, mene dianami, mene injeitize. Ga, xelibezi!

「もういい、もういい、自分らで話して自分らで笑ってただけだ。さあ、行くぞ」

Utebede anagieni Goshawa. Uti amjalani bii kwai unige adimeke neñini.
そう言って引っ張って行った、ゴーシャを。このあと 私の 耳は 痛んだ、何日か。

Bii muisiemi: (2/3) «Alasije, sanja xektieni, bii juñdezemi, mançanaasi,
私は思った。「待ってろよ、忌々しい、 ぼくが大きくなって強くなったら
zaagizeñei sindu, inai wooni». Vasja amjala mindu dianaini:
仕返ししてやるからな、おまえに、畜生め」。ワーシャがあとで、私に言う。

— Imi esei bançala lançalani? Bii alasiemi sii bançalaiwei, amjatali tiuzi
「どうして蹴り上げなかったんだ、タマを？ ぼくは待っていた、君が蹴るのを、そのあと 棍棒で
duktelege mi.
突いてやろうと」

— Minti ei nuatizi ezenefi galu. Nuati egdi. Zuñe minti ezenefi galu
「ぼくらはまだ 彼らと 対抗できない。 やつらはたくさんいる。二人じゃぼくらはかなわない、
nuatizi. Alasindeje, bii mançanazami.
彼らに。待ってるがいいさ、ぼくは強くなってやる」

Uti amjalani xai goo xauntasige Vasja, imide esime bançala. Eidexi,
その 後も また ずっと 尋ねた、ワーシャは、なぜ 蹴らなかったかを。今でも
zonigimi, xauntasini. Bii xai utebede dianagimi. Ele tuñaza see edelieni
思い出しては尋ねてくる。私も また このように 答える。 もう 五十 年になる、
utadigi, xai tiineni bisinibede bie.
あのときから。まだきのうだったみたいだ。

Mundu omoti buiti bise sugzja imoweni umilegeu. Kutu (3/4) jeemei
私たちに いつも 出していた、魚の 油を 飲ませるために。すごく まずい、
uti. Utemdu umnasiemu unjañazi. Bimie, tatiemu, liebazide digaliemu.
これは。それでも 飲んだ、 スプーンで。ようやく 慣れて、 パンと 食べるようになった。

Utebede tatiemu. Bii uti tueduni ljasi juemi. Saina, uti imowe umnasimi
そのように習慣にした。私は この 冬、 ずいぶん背が伸びた。たぶん、この 油を 飲んで
juemi. Nekitigie zaa nada santimetredun juemi. Egdigetun umimi cilaati, utemi
伸びたのだ。春までに 十 七 センチも伸びた。 たいていの連中は飲むことができなかった。それで
mundu, tatiegetudu, bugisieti. Amjala, liebazi cifosimi, digaliemu, kutu xei
私たち、飲みなれた者によこした。 あとで パンに 浸して 食べるようにした。なかなかうま
bise.
かった。

Xabarska taankileni ejme bua bisini. Utawa "Eje buazi" gegbisieti.
ハバロフスクの中心に、大きな 広場が あった。これを 「自由の広場」と呼んでいた。
Utelienini utala naamei bise, ajazi euse aisigi, esiti kokpi utawa tafjasimi.
当時 そこに 空き地があつて、よく 管理が行き届かず、できずにいた、これを 整備することが。
Munawa baatama njoulazigawa bolo nekide kajaduge buu belesilegeu ujeweni
私たち 少年を、 秋と 春に 駆り出した、私たちが手伝うように、表面を
gwancuizi nemisilegeu. Emne, bolo bise uti, buu eteteitigiu omo ibene (4/5)
スコップで平らにするように。一度、秋だった、これは、 私たちが働いている所へ一人の日本人
oficerani emeeni. Nuati bojoktoun bisiti, utemi gagda mejeleni "Telegrafa
将校がやって来た。 彼らは 捕虜 だった。それで 反対 側で、 「電信局
eeleni", paga eteteeti. Uti oficera, gugda, alagdiga jegdige, muntigi emeeni
側」で、別に作業をしていた。この将校は、背の高い、整った顔立ちの若者で、私たちの所に来た、
kelelegemi munawa, konvoj zangjawani baagiesi, dianalageu: nuatizige
頼みに、 私たちに 警護隊の 隊長を 探し出して、伝えるように。彼ら
(ibenezige) etetemi mutueti, utemi kazarmatigi kajagileti emegilegeni. Nuani
(日本人)は 仕事が 終わったので、 収容所に 向かわねばならない、帰るために。 彼は
lusamazi dianaani:
ロシア語で 言った。

— Bii eimi mute uti buadigi eletigi njeneimi, utemi keleneemi sunawa.

「私は できない、 この場からそちらへ行くことが。だから頼みに来ました、あなたたちに。

Nii njenezenije?

「どなたか行ってくれますか？」

— Ga, nii cialaini? — xauntasieni buu zangjau, — Sii, Andale, kutu gabzi

「さて、だれが行きたいか？」と尋ねた、私たちの班長が。「おまえは、アンドレイ、気が利く
bii, njeneje teeti xutaligi zugdi बातigini, bii isei, nuani utauxi njeneemeni.
から、行け、 あそこの赤い 建物の 所へ。 俺は 見た、 彼が そこへ 行くのを」

— Efili baagizeni bii nuamani. Biide isei, nuani utauxi (5/6) njeneemeni.

「では探しに行つて来ます、ぼくは彼を。ぼくも見ました、彼が そこへ 行くのを」

Tukjaami bii uti zugditigi. Utawa imike gegbisiti "Gospital'-1200". Zanza
走った、 私は その 建物へ。 それを なぜか呼んでいた、「千二百病棟」と。通用門から
duixini iimie, iseemi uti zangjawa. Pogoneleni diinzimeli waikte. «Aa,
中へ 入ると、見つけた、その 隊長を。 肩章に 四つずつの 星。 「ああ、

kapitane».

大尉なんだ」。

— Kapitan-bejeni, sinawa ibene oficerani galaktaini, kazarmatigi kajagilegei.

「大尉殿、あなたを日本の将校が探しています、収容所に帰るために。

Nuati mutueti eteteimi, — diankimi bii.

彼らは終わりました、作業が」と伝えた、私は。

— Axa, axa, ɲeneimi, xelineimi, — dianagimie, tukjagieni.

「そうか、そうか、行く、急いで」 答えると 走って行った。

Bii amaixi mudanagimie, muisiemi: «Ei ibene mindigi jou bualani gugda.

私は 戻りながら、 思った。 「あの日本人はぼくよりどういうわけか 背が高い。

Anana bii dogdigei niizige dianaiweti: Ibenedige teu nektesemei biiti. Imi ei
前に、 ぼくは聞いた、 人々が 言うのを。 日本人はみな背が低い人ばかりだ、と。どうしてあの
ibene oficerani uti gugdalanikini biini?»

日本の 将校は あんなに背が高いんだろう？」

Utawa bii amjala sagiemi. Onofide niile gugdade bie, nektesede bie,

これを私はあとになってわかった。 どの 民族にも 背が高い人もいれば、低い人もいる。

asi gugdade bie, asi nektesede (6/7) bie. Tuɲa aɲazini njoxo bii nia

すごく高い人だっている、すごく低い人だっている。 五 年 後に 私は また

iseemi ibenezigewe. Utawa amjala teluɲusizeɲei.

会った、日本人に。 それについてはまたあとで話そう。

Buu instituteu sportzalalani omocai geinigesieti volejbolawa basketbolawa

私たちの大学 体育館では、 いつも試合をしていた、バレーボールやバスケットボールを

gusimi. Nii mai! Utawa isesiemi bii gɲaɲa neɲini. Gugdanku jegdigezige

やって。どのチームが強いのだろう？ これを見物した、私は毎日。 長身の 若者たちが

adili ujelini niama montolowe dukteiti. Asi katazi paktanaiti ɲalazi.

ネット越しに 皮の ボールを 打つ。 力いっぱい たたく、 手で。

Montolo, maalibede, tulanaini xegixede. Utawa nii kokpigimi, nii uindegini

ボールは 弾丸のように 突き刺さる、下に。 それを だれかが受け止めてその人が高く上げる、

uixi, utadigi gagda eetigini, nia zuu muda tungalandaasi, tikpewe tikpeneibede

上に。それから 敵陣へ、 もう 二 回 触れるうちに、釘を 打ち込むように

nifandaiti aɲazaas zienzezes ɲalazi. Gagda eeleni elisiti kokpigi uindegimi,

たたき込む、右か 左かの 手で。 敵側が うまくレシーブできなければ、

montolo agdibede pala ujetigini tiɲmeini. Utebede gusiti. Omo setewe

ボールが 雷のように 床の 上に 落ちる。 こうしてゲームが進行するのだ。一セットを

gusimi waditi, (7/8) ali niide eeni zaa tuɲa muda mai edeisini. Utebede

やり 終わる、 どちらかが 十 五 点 取ると。 こうして

ilaas-tuɲaas setawa gusiiti. Nii eeni zuus-ilaas muda mai bixini gusimi

三セットか五セットを 競う。 どちらかが 二つまたは三つ 取ったら、 試合が

waditi.

終わる。

Kutu ajuleemi bii utebede gusiuwe. Anana Sjaingele isei bii niintaziga
とても気に入った、私はこのように競うのを。以前に シャインで見た、私は 男たちが
gusiiweti. Lusamazi xai ajazi esiti egze bize dianaimi. Utemi montolowe
競技するのを。ロシア語でまだよくわからなかったのだろう、話すのが。それで ボールを
gagda eetigini akpindemi «Mjachim grei» guneeti. Bii amjala egzegiemi,
敵 陣に サーブするとき、「ミャチム・グレイ」と言っていた。私は あとでわかった、
joude utebede gegbisiweti. Uti, ei sagimi, lusamazi «Mjach v igre» bisini.
何をこう言っているかを。これは今思えば、ロシア語で「ミャチ・ヴ・イグレ(プレイ・ボール)」だった。

Utemi ei zongigimi, kutu injemu edeini. Bii ajazide esei nonili,
そんなわけで今思い起こすととても可笑しくなる。私はあまりうまくはできなかったが、
santhagutu emuseemei gusikceiti. Mundu, njoulazigadu, asuli esiti buu
大人たちは自分たちでだけやりたがる。私たち 子どもには あまりやらせてくれなかった、
gusilegeu. Buu, njoulaziga, mene dolo gusimi, goode esimu gusi. Geekie
競技するように。私たち子どもたち 同士で やっても、長く 続かなかった。下手くそに
gusieti. Uixi degdei (8/9) montolowe xaatade esiti paktana, utemi montolo
やった。上に あがった ボールを きつくは 打てないので、 ボールは
ekee dielini. Utebede gusieti. Ljasi sebuneeti utempi gwezenewe. Gjaja
ゆっくり飛ぶ。そんなふうに遊んだ。とても 楽しんだ、 こうした 競技を。 いつも
sikieni, ljasi nii emekteesi, dogbogde gusiti. Bii utemi saami volejbola
夕方にはたくさんの人が集まって、 夜まで 遊ぶ。私はそれで知っていた、バレーボール
gusiiweni. Dabaule tatusijede ali-ali gusiemi. Nadezhda Andreevna aja
競技を。 峠の学校で学んでいたときもときどきやった。 ナジェージュダ・アンドレーヴナは上手に
gusii bise.
プレーしていた。

Baskebolawatene bii Xabarskala tene iseemi, ei zulieleni esimide saa
バスケットボールを私は ハバロフスクで初めて 見た。その 前には 知りもしなかった、
utempi gwezenje biiweni. Montolowe wesimi elusim esimi mute. Utemi
そんな 競技が あることを。 ボールを 投げ上げることも全くできなかった。 だから
muisiemi: «Alide ezenjei nonili utazi gusimi». Tue kai nonilikceemi,
思った。「いつになってもできないだろう、こんな競技は」。冬 一生懸命 練習した、
nekitene noniliemi montolowe uile cagbawa loositigi weesimi nagdalimi. Uti
春には、できるようになった、ボールを高い所に籠を掛けている所に投げ入れるのが。 この
gwezenjezide asi sebuleemi. (9/10)
競技も 大変 おもしろくなった。

Neki, ima caljaini amjalani, buu timeedule teegiesi tukjawasiliemu stadion
春、 雪が 融けた あと、 私たちは朝 起きて 走り始めた、 競技場
"Dinamo" buazegeleni. Buu: Kolja, Grisha, Kime, bii nia zubees-ilaas
「ディナモ」の公園で。 私たち、コーリャ、グリーシャ、キム、私とそのほか二、三人の
baatazige. Sebie aja bise. Amjala imike miawalai senmisilige. Imi
少年だ。 最初は 良かった。 しばらくするとなぜか心臓が刺すように痛んだ。どうして

sejmisilieni? Eikpesimde gee edeeni. Uti amjalani urokala omoti amai.
痛いんだろう？ 息をするのさえ苦しくなった。 その あと 授業では いつも 眠い。

Imi utebede edeeni? Esimi egzegi bii, utemdu nia tukjawasimi.
どうしてこうなったのか？ わからなかった、私は、 でも まだ 走っていた。

Emne baagdiemu lusa jegdigeweni. Nuani coo mai bisini tukjawasimi
あるとき、出会った、ロシア人の青年と。 彼は 一番 強かった、 走るのが
1500m Xabarska bualani. Nuani gegbini Chepurov Jura, fizkul'turewe
千五百メートルを、ハバロフスク州で。彼の名前は チェプロフ・ユーラ、体育を
tatusini, ilienti kursala. Eke tukjawasini, ali-ali gianadaa eini. Buu xaata
学んでいる、三年生で。 ゆっくり走り、 ときおり歩いたりしている。私たちが全力で
tukjaiweu isemie, dianaini:
走るのを 見て、 言う。

— Jouxu utebede tukjau xaatade? (10/11)

「どこへ そんなに 走るんだい、全力で？」

— Tatisiu tukjawasimi.

「トレーニングさ、走ることの」

— Janami utebede tugezi tukjau? Suu tene mjagdagieu ei bie.

「どうして そんなに 速く 走るんだ？ 君たちたった今日を覚ましたばかりじゃないか。

Miawautene ajazi esini mjagdagi, janami utebede kesuliu suu utawa,
心臓は 十分 目覚めてないのに、 どうしてそんなに痛めつけるんだ、君らはそれを、
ata unili? Mjagdai amjalani kakta chasawa eke xulijeu miawau elusim
病気になるぞ。目を覚ましたあとは、 三十 分 ゆっくり歩くんだ、心臓を すっかり
getenileni, utatene tukjawasijeu.
起こすように。それから走るんだ」

Baatazige, joude eimi diana, caixi tukjaktaati. Biitene ingule ekiesi,
少年たちは 何も 言わずに、 先へ 走り続けた。 私は すぐに立ち止まって、
nuandileni xauntasiliemi:
彼に 尋ねてみた。

— Bii miawai sejmisilieni. Cezenu, bii, utebede timeedule mjagdaasi,
「ぼくの心臓はちくちく痛むんだ。 本当なの、ぼくがこんなふうに朝 起きて
xaata tukjawasiemi tugundini unilieni.
全力で 走った ために 病気になるって？」

— Ceze. Sii teegiesi, baixi njuje, uti amjalani kakta chasawa gianaje
「本当だとも。君は起きて 外に 出る、 その あと 三十 分 歩くんだ、
eimi xelineede. Utatene tukjawasiliye, sebie zarjatkawa woosi.
急がずに。 それから 走り始めるんだ、まず 準備運動を してから」

— Asasa, odcaixini (11/12) utebede nixezejei.

「ありがとう。これからは そう するよ」

— Nii diankini sundu utebede tukjawasilegeu? — xauntasini Jura.

「だれが言ったんだ、君たちにそんなふうに走るように？」 尋ねた、ユーラが。

— Kolja diankini. Nuani mundigi ai. Goo tukjawasiuwe geinigesini,
「コーリャが言ったんだ。彼は ぼくたちより年上だ。長距離走を やっているから、
utemi cezeemu buu nuaduni.
それで 信じたんだ、ぼくたちは彼を」

— Memi mene tafjasije. Gee bixini, wadindeje, amjala nia ilekpesije.
「自分のことは自分でコントロールするんだ。具合が悪ければやめて、あとでまた試すんだ。
Sii tene zawayndai tukjawasimi, gusimi, xonitozi tatusimi, sebie miawai, bejei
君はようやく始めたところだ、走ることや競技を。ほかに トレーニングして、まず心臓と 身体を
tatiweneje, bai gaitizi eiti mangana. Zonije utawa, baata.
鍛えることだ。いきなり強くはなれない。 覚えとくんだな、このことを、坊主」

Uti amjalani wadiemi timadula tukjawasimi, zarjadjawasene wooliemi.
この あと やめた、 朝 走るのを、 準備運動だけをやるようにした。
Doozaj ajagieni.
身体の中が良くなった。

Ekzamenawa bugimi amjalani minawa jeinti klassatigi nenewenkiti. Kolja
試験を 課した あと、 私を 九年生に 行かせた。コーリャは
xai amjasaani zakpunti klassala. Xai (12/13) fizika tugundini. Utemi Kolja
またもやとどまった、八年生に。 また 物理のせいだ。 それで コーリャは
mindu diankini:
私に 言った。

— Ilienti anaduni minawa ezeneti tatusi, Birobidzhanala bie
「三 年目には 私を 教えてくれない。ビロビジャンに ある、
kul'tprosvetuchilishcha, utauxi nenezenei bii gwasanani tatusii anaduni.
文化教化学校が、 そこに 行くよ、 ぼくは来学期」

— Pegeneje. Utala, saina, fizikawa eiti tatusi. Bii olo zaanti klassawa
「そうするがいい。そこならたぶん物理も 教えてない。 ぼくはここで十年生を
mutusizenei, — diagiemi bii.
終えるよ」 答えた、私は。

Nuani ingule Birobidzhanatigi gulineeni, biitene zugtigi gulinjemi xuecezi
彼は すぐに ビロビジャンに 行った。 私のほうは家に 向かった、列車で
Burlitatigiede, utala minawa Pete aga alasizenei. Nuani waatanj emegieni
ブルリトに。 そこで 私を ペーチャ兄さんが待っているだろう。彼は 最近 戻った、
armijadigi, nadama see biseesi utadu.
兵役から、 七 年間 いた、そこに。

Caixi nia onjoso bie.
この先 まだ 書いて ある。

VI

Burlitetigi emegiesi, esimi baagi Petewa. Utala xonŋto sjainkezige bisiti.

ブルリトに 着いたが、 見つけなかった、ペーチャを。そこにほかのシャインの人たちもいた。

Nuatidigi saami bii Pete amjala ejenezeweni.

彼らから わかった、私は、ペーチャが遅れて来ることを。

— Xoktole baagditeuze, — gunkiti niintaziga, — munzi gie ŋenizeŋei sii,

「道中で 会えるさ」 と言った、男たちは。 「俺たちと一緒に帰ればいい、おまえは、

niide aanalani unagiesi. Timadule gulinizeŋefi. Eitene belesije zaawa

だれかの舟に 乗って。 明日の朝 出よう。 今は 手伝ってくれ、荷物を

teugiweu.

積むのを」

— Ono nixezei? Sunzi gie ŋenitemize. Bii goundalaimi esimi oŋmo, —

「どうにも仕方ない。あなたたちと一緒にいくとしよう。ぼくは竿で漕ぐのは忘れてないさ」

injeimi, dianami bii.

笑いながら答えた、私は。

Gagda neŋini, timadule, Kolja boonjieni minawa. Nuani pjouj nexuseeni

翌日、 朝 コーリヤが追いついた、私に。 彼は 書類を 届けて来たのだ、

Birobidzhanatigi, utala tatusilizeŋeni odcaixini. Utelieŋini ingule gulinjemu ila

ビロビジャンに、 そこで 勉強することになった、今後。 その日 すぐに 出発した、三艘の

aanazi. Dii neŋi sologiemu. Xoktolo Petezi baagdiseemu. (1/2) Minawa

舟で。 四日間、 川をのぼった。 途中で ペーチャに 会った。 私を

isemie, dianaani:

見て 言った。

— Eje, kutu manga juej sii, neŋu. Bii gugdalanjini edeej.

「おお、 随分 たくましくなったなあ、弟よ。 俺と 同じぐらいに背が伸びた。

Nia juzeŋei. Ono bii?

まだ 伸びそうだな。どんな調子だ？」

— Aja, aga, — agdami, dianagimi bii, — Zugdiŋkezige ono bagditi?

「うまくやってるよ、兄さん」 喜んで答える、私は。「家のみんなは どうしている？」

— Aja biiti. Neŋunefi jueti, sagdi edekteeti. Bii Pozharskatigi ŋeneimi.

「元気である。 弟たちも育って 大きく なったもんだ。俺は ポジャルスコエまで行く。

Utala voenauchotalani suegizeŋei, utatene emegizeŋei. Aja ŋenige!

そこで 兵役証明を もらう。 そしたら 帰るよ。 気をつけて帰れよ」

— Siide ajazi xulije, — zasimi bii.

「兄さんも気をつけてね」 言う、私は。

Kolja utelieŋini amaixi mudanjeni, xoktodu njoulaziga Waizatigi ŋeneiweti

コーリヤは今回 戻って来た、 途中で 若者たちが ウラジオストクに向かうのと

baagdigiesi. Nuani utigetuzi gie ŋeneeni ekskursatigi. Bii neŋui Pabulikade

出会って。 彼は この連中と一緒に 出かけた、旅行に。 私の 弟 パヴリクも

bisini uti jeneigetu njoulazigazi. Minawade gaisiduge amaixi, biitene
いた、この 行く 若者たちの中に。私をも 誘った、 戻るように。私は
asulide esimi (2/3) ciala.

あまり行きたいと思わなかった。

Zugdile deumpiliemi. Amjala uiwe canaliemi eninemule. Abuga
家で 休んだ。 そのあと、畑を 草取りした、母と。 父は
buazegetigini jeneeni wakcanaimi, xaisi uti Siwantaile xuliktesieni. Pete,
森に 出かけた、 獵に。 また あの シワンタイで 歩き回った。ペーチャは、
emegiesi, kinomexanike edeeni. Buu gjaṇa neṇini kinowe isesimu.
帰ってから、映画技師に なった。 私たちは 毎 日 映画を 見ていた。

Uti zuadu buazegeni zegdelieni. Utawa suusinemi ljas i egdigetu
その 夏に、 山火事が起きた。 これを 消しに行くのにとでもたくさん
sjaṇkazige ṇenekteeti. Abugade nuatizi jeneeni, wakcaidigi eimi emegiede
シャインの人たちが出かけた。父も、 彼らと 出かけた、 獵から 帰りもせずに、
zugtigi. Pabulika emegieni amjalani, soloomu uti Siwantaitigi. Zuṇe
家に。 パヴリクが 帰って来た あと、 のぼった、 この シワンタイに。 二人で
utelienṭulu iineemu. Miawa ezjelini bii jogosoli soloomu. Utawa ele
その日のうちに着いた。 祠の 下流に沿ってある支流を のぼった。 これを ずっと
welegiliew biseu, mafa uliwe buu zulieleu doulilieneni. Naniṇi xaata
のぼって いたら、クマが 川を 私たちの前で 渡り始めた。 ヒグマは ずんずん
wajanalieni. Buu bitatigi agdaasi, (3/4) tukjaliemu bita niatigini. Pabulika
泳いで行く。 私たちは中洲に 着けて、 駆け出した、先端に向かって。 パヴリクは
mjoundalee sacjaṇazi, uti amjalani mintigi xuugimie, kajagieni bii maaliwe
発射した、 散弾銃を。 その あと 私のほうを振り向き、 言った、 私が 弾を
genegilei aanala. Bii tukjanzime i geenegiem i maaliwa, omowe cokpoloimie,
取りに戻るよう、舟に。私は 走って 取りに戻った、弾薬筒を。一つを つかむと
tukjamazi nexuemi. Pabulika utawa zawaimie, injelieni, eimi teugide duixi.
走って 持って行った。パヴリクは これを 受け取ると、笑い出した、込めようとせずに、中に。
Uti ekindini mafa kektime xootigini xetigenieni, mooktoi duixini sim-sim
そうしているうちに、クマは岸の 上に 跳び上がった、茂みの 中に さっさと
jefineeni.
隠れた。

— Imi esei mjoundalagi niade? — tagdaimi bii.

「なぜ撃たなかったんだ、また？」と怒る、私は。

— Saazazi wauzenenu uti sagdilenṇini buiwe. Iseje, joude gaziemi, —
「散弾で しとめられるか、あんなでかい 獣を。 見ろよ、何を 持って来たか」
injemi, diagini Pabulika. Eitene iseemi bii, uti maali saazamawa. Utemi
笑いながら答えた、パヴリクは。 ようやく 見た、 私は この 弾薬筒の 散弾を。 それで
biide tjasi injeliemi.
私も 大笑いした。

— Aja, ezi munjali, neñuej, abuga ulewe (4/5) waamani geenegifi ei bie?

「なに、悔しがることはないさ、弟よ。父さんが肉を獲ったのを取りに行けばいいじゃないか」

— ajaktugimi bii.

気を取り直す、私は。

Egbenele iineesi, toowe ilagiemu. Amjala oloktoomu ulewe. Abuga zii
テントに 着いて、焚火を 起こした。 そのあと 煮た、 肉を。 父が、湧き
ulile ulaani, maabume maadaile teuvesi. Ljasi digaasi, ñuagiemu, egbene
水に浸しておいた、麻布の 袋に 入れて。 たっぷり食べて、 横になった、テントの
doloni zaampawa gigdegiesi. Sebie diasiemu.
中に 蚊帳を 張って。 初めは 話をしていた。

— Sasai, sii jouwe tatusizeñei zaa klassawa mutulie?

「サーシャ、君は 何を するんだ、 十年生を 終えたら？」

(Minawa bii zugdiñkei Sasazimeï gegbisilieti. Bii passportawa taulenïei

(私のことを私の家族はサーシャと呼ぶようになっていた。私がパスポートを受け取ったとき、
utebede onjogieti bagdiemi pjoule onjosobedede: Kanchuga Aleksandr
このように書いてあった、出生届に 書いてあったとおり、カンチュガ・アレクサンドル・
Aleksandrovich).

アレクサンドロヴィチと)

— Saina, bii tatusii nii edezeñei. Utadu tatusiigetü ingule pedinstitutala

「たぶん ぼくは 先生に なるさ。 あそこで学んだ連中は、そのまま 教育大学で
tatusiliti. Utemi biide tatui nii bilegemi tatusizeñei, — dianagiemi bii. (5/6)
学ぶ。 だから ぼくも 先生に なるために 勉強するよ」 答えた、 私は。

— Ee, bii eimi ciala tatui nii biimi. Kutu egdiwe miawasiuzeñe,

「げ、 ぼくは 思わないね、先生に なるなんて。 まったく苦勞するよ、
njoulezigewe alusimi. Njoula doloni wacanu zuxunku. Biide utempi biimi.
子どもを 教えるなんて。 子どもの中には 少ないもんか、 悪ガキが。 ぼくだってそうだ。

Utemi ezenïei ede tatui nii biimi, — injemi dianaani neñu.

だから なるもんか、 先生に なんか」 笑いながら言った、 弟は。

— Ono nixezei, emne utala tatusiliemi. Tatusiuzene sebie, zaa klassawa

「仕方ないさ、 一度あそこで勉強することになったんだ。 勉強しなきゃ、まずは十年生を
mutulegemi. Xai goo, onode caixi biiweni, isetefize, — biide injemie
終えるために。 まだ 遠い、 どう この先 なるか やって見ないとわからないさ」 私も笑って
dianagimi. Utebede, jougu-jougu diasimi, ñuagiemu.

答える。 こうして あれこれ 話しながら、眠りについた。

Timadule, suu uile gakpaisini, zeuwe oloktoosi, digasiemu. Uti amjalani,
翌朝、 日が 高くなってから、 食事を 支度して、 食べた。 その あと
abuga duñsiweni teumeni teugiesi, ulewe agbugiemu, aanala teugiesi, dukpuzi
父の 荷物を すべて 積み込んで、肉を 取り出して 舟に 積み、 ヤナギの枝で
daigiemu. Njanga teendesï, gulinïemu. Uti Siwantai jogosoni datadigini (6/7)
覆いをした。 少し 座ってから、出発した。 この シワンタイの 支流の 口から、

unaktanaini. Asi wanimide eini bie. Kakta kilometra xeenkini, uti mejeleni
まっすぐな流れが続く。あまり長くはない。半 キロメートル ぐらいだ。その 端に
biini miawa gulani, utadigi aanazatigi tjononeini, ejeixi ejenelie, utadigi
ある、祠の 絶壁が。そこから 右に 流れている。下流に くだって行けばそこから
elugini xaisi unaktazi. Utala iineesi, Pabulika dianaini:
蛇行し、また まっすぐだ。そこまで 来て パヴリクが 言う。

— Isenezefi, mafa ilede agdagieweni. Nagdaamde bie.

「見に行こう、クマが どこに 上陸したかを。 当たってたかもしれない」

— Kutu kektime kiatigini ezi seude, utala mooktoi, gjouke, moo nejnini

「あまり 岸辺に 近づけるな。 そっちは茂みやら 倒木やら、枝だまりが
ulitigi kuzueti, — bii, utebede dianaimie, aana amjawani tagjaixi ekpindeemi.
水に 倒れ込んでる」私は そう 言うと、 船 尾を 流れの中央に戻そうとした。
Nuanitene nifugewe kiatigi xuugiweneeni. Tunja metra xeenkini edeisini bii
彼は 舳先を 岸に 向けた。 五 メートル ぐらいに なって、私は
aana amjawani kektimetigi seundendeemi. Pabulikatene inj-inj kektimetigi
船 尾を 岸に 向けようとした。 パヴリクは 相変わらず 岸に向かって
seudeini.
漕いでいる。

— Janami seudei sii, efili xuugiweneje (7/8) tagjaixi nifugeweni.

「どうして漕いでいるか、おまえは。すぐに向きを変えろ、 沖に 舳先を！」

— Bii ajazi isekceimi mafa tuktigieweni, sienjemde bie.

「ぼくはよく 見たいんだ、クマが あがったのを。 けがしてるかもしれない」

— Minti aanafi kumteze, ei isenuu? Xelibezi seudegije.

「ぼくらの 舟は ひっくり返るぞ、見えないのか！ 急いで 漕ぎ戻せ！」

Gaiti meje baagimie, siata seudeligheni tagjaixi, utebede njanga

すぐに 気が ついて、 急いで 漕ぎ戻し始めた、沖に。 こうして 少し
seundendeesi, elumugiemu aanawa, amjazazini mooktoile kikpei tungalandaani.
漕いで、 立て直した、 舟を、 船尾が 茂みにあやうく引っ掛かるところだった。

— Sii, baata, imi utebede pagadii, aa? Tene xuliliejnu aanazi? —

「おまえ、坊主、なんでこんな馬鹿なことをしたんだ？ 初めて乗ったのか、舟に？」

dañsiliemi bii nuamani.

どなりつけた、私は 彼を。

— Ceze dianami, bii kektime xooloni, mooktoila jouke xoligi-paligi

「実を 言うと、 ぼくは 岸の 上に、 茂みに、 何か 黄色と黒の
ogdowneni iseemi. Utawa ajazi sagilemi nixeemi, Sasei. Ezi tagda, saina,
脇腹を 見たんだ。そいつを よく 確かめようとしたんだ、サーシャ。おこるなよ。ひょっとしたら
uti kuti bisini, utemi emnetee xetigenjieweni dogdiemi. Uti amjalani (8/9)
これはトラだったかもしれない、それで一回だけ跳びはねるのを聞いた。 その あとは
sim-sim edege, — Pabulika dianagini.
静かに なった」 パヴリクが 答える。

Biide dogdigei mooktoile jouke ugzaiweni. Ceze uti kuti bisini.

私も 聞いた、 茂みの中で何かが音をたてるのを。本当にこれはトラだったのかもしれない。
Utempi bui biini: emneete xetigeniweni dogdiu. Bii zonjigiemu abuga
そんな 獣 なのだ。一回だけ 跳びはねるのが 聞こえるという。私は 思い出した、父が
telunusiemeni.
話していたのを。

Anana, waali zulieleni, abuga zempule tiisieni kjanawa. Gougai luendeesi,
昔、 戦争 前に 父が 入り江で待ち伏せていた、アカシカを。竿を 突き立てて、
xekeeni ug dai utauxi: utebede nixeti dogbo wakcami. Amjaza ukiwe
つないだ、ボートをそこに。このようにしている、夜 狩をするのに。背中の 横木を
asiteesi, kepteiti nuanalagami. Abuga nuandaani. Mjagdamie, dogdieni,
はずして、横になる、うたたねするために。父は うとうとした。目が覚めて 聞いた、
jouke waktoli buisiweni kektime xooloni: utebede duipteini — safur, safur —
何かが 草を分けて近づいてくるのを、岸の方に。 このように 聞こえる、 サワ、サワと
waktowe bui anulisini niozi. Abuga, ajazi dui simie, egzegieni, joude
草を 獣が 分けている、鼻で。 父は よく 耳をすませて、わかった、 何で
biiweni: aa, uti kala biiniew, utebede (9/10) kuti buisini. Janami minawa
あるかを。ああ、これは何としたことか、 こんなに トラが近づいている。どうして俺の方へ
buisini? Sebu baini? Jouktesini, joude biiweni? Eje, goo ezenjei alasi,
近づくのか？興味をもったのか？ 調べているのか、何であるかを？ええい、長く待つまでもない、
onode edezeneweni. Ekee xukuwe asitagiesi, omo n'alazi mjoundei zawagiesi,
どうにかなるさ。 そっと 繫留の綱を ほどき、 片 手に 銃を もち、
gagdazini gougawa tan dagimie, anagieni tagjaixi, dianamiede: «Sii imi zuxelei
もう片方には 櫓を 握ると、漕ぎ出した、沖へ、こう言いながら。「おまえは何だって悪さをするんだ、
utebede, kuti mafa, bagdimi eluej? Bii sinawa waazanai efilide mjoundazi.
こんなふうに、トラ公、生きるのが退屈にでもなったか？ 俺はおまえを撃ち殺すぞ、すぐに銃で。
Suusigije xelibezi», — utebede dianaimie, zuugieni mjoundai kektime eetigini.
失せろ、さっさと！」 こう 言って、 向けた、 銃を 岸の 方に。
Uti amjalani kuti emneete xetigenegee mooktoiti. Amjala sim-sim edee.
この あと トラは 一度だけ 跳びはねた、 茂みで。 あとは シーンと なった。
Eku digeneeni? Eimi alasi, caixi joude bizeneweni, abuga aasawa datanjesi
こっそり隠れたのか？ 待たずに、 その先 何か あるのを、 父は 入り江を 抜けて、
sagdiulie bitalani nuanaani. Timadula iseneseeni (10/11) uti udewe.
本流の 岸で 夜を明かした。翌朝、 見に行った、 そのあたりを。
Kektimetigi tuktiesi, iseeni. Onode kuti emdezi kepteesi, sebzengkeeleni niizi.
岸に 上がって 見た。 どのようにトラが 腹ばいになって 観察していたか、人間の方を。
Utadigi xaata xetigeneeni waktotigi, utadigi nia zuu muda xetigeneeni, uti
そこから 思い切り跳び移った、 草地に。 そこから さらに 二 度 飛び跳ねた。その
amjalani goo ilieni, dui simide, utaasitene gianazi nenieni caixi.
あと長いこと立ち止まった、耳をすませて。そうしてからゆっくりと立ち去っていた、遠くに。

Utawa zoŋiesi, diŋkimi bii:

そんな話を思い出しながら、言った、私は。

— Odcaixini utebede ezi nixe, baata, neŋuej.

「これからはこんなふうにするなよ、坊や、弟よ」

— Inke aga, Sasai, caixi utebede ezenei pagadi, mjoundalazaneŋi ingulede,
「わかったよ、サーシャ兄さん、もうこんな馬鹿なことはしない。撃つとするよ、すぐに」

— injemi, dianagini Pabulika.

笑いながら 答えた、パヴリクは。

Tue bii pasportawa tauleemi. Bii bagdiemi pjoule ono onjooti bixini

冬に 私は パスポートを 受け取った。私の 出生 届に どう 書いて あったか、

bii gegbiwei, utebede onjogieti pasportala: Saundari, Saundari siteni. (11/12)

私の名前を、 このように書いていた、パスポートに。アレクサンドル・アレクサンドロヴィチと。

Utemi bii zugdiŋkei minawa Sasazimeŋi gegbisilieti.

それで 私の 家族は 私を サーシャとだけ呼ぶようになっていたのだ。

Ejeŋimie, Pabulika caŋalalieni:

川をくだりながら、パヴリクは歌いだした。

— Aja Moskva zegeleni,

「すばらしい、モスクワの広場は

Kreml' biaktazigani gikpesiti buala,

クレムリンの星が 光る、 空に

biasaziga namula baagditibede,

川が 海で 出合うように、

utebede niizige Moskvala asagditi!

そのように人々は モスクワで 出会う」

— Tei tawaje! Sii jou jeŋkpenei, baatai! Buiwe igbesii.

「ちえ、忌々しい！ おまえは何を騒いでいるんだ、坊主！ 獲物を逃がしているぞ」

— Janami gelei buiwe? Ulede aana dulugaafa bie. Nia waalie, ono

「どうして 探すんだ、獲物を？ 肉も 舟 半分 ある。これ以上獲ったら、どう
nixezeŋi, niajsizeŋi? Cuŋai, ezi mudousi minawa, caŋalakcaimi.

するんだ、腐らせるのか？ 黙ってろ、邪魔するな、俺を。 歌いたいんだ」

Bii, injemie, joude esimi diagi, nuani cezewe dianaini, janami wauzeŋe,

私は 笑って、 何も 答えなかった。彼は 正しいことを 言っている。どうして獲るか、

ule bixini. Bii, saina, elusim tatiemi bize buazegeleni temene xuliwe.

肉があるのに。私は 多分、 すっかり癖になっているのだろう、森では 警戒して 行くのが。

(12/13) Utebede caŋalaani jamadaxem jexewe.

こうして 彼は歌った、あらゆる 歌を。

Zaali unaktalani baagdiemu zuu aana soloiweti. Utitule Xulutu, Kuudige

トホロ水系で 出会った、二艘の舟がのぼって来るのに。これはフルトゥことククチェンコ・

Vasja-starshina jaabazi, bii gagdai Geonke Olega Tjaasu Kaudigazi. Nuati

ワーシャ親方がおしと、（もう一艘は）私の友人ゲオンカ・オレグとカンチュガ・チャニシだ。彼らは

zeuwe, aiwe nexuiti too suusigetudu.

食料やウオッカを届けるところだ、山火事の消火隊のために。

— Ali iinezeŋeu Xailaŋkule?

「いつ着くんだ、ハイランクには？」

Xailaŋku udeleni zegdeini bua. Starshina njaŋga umindeesi biini. Utemi
ハイランク 地区で 燃えている、山が。親方は 少し 飲んで いた。それで
kutu zanazi dianaini joudexemde. Bii zongigiemi, onode nuani teemeti
とても 陽気に 話している、いろいろと。 私は 思い出した、どのように彼が おとし
sologimi teluŋusieweni joudexem, waali udeleni biŋe. Utemi bii, nuatigini
上流へのぼりながら話したかを、いろいろと、戦争中のことを。 それで 私は 彼の方を
isesimi, njumdi baimi. Jaabatene bii telii biini. Nuani seeni Sigde San'ka,
見ていた、ほほえましく思いながら。おしというのは私と同年輩だ。彼の 姓は シグデ・サニカ、
buu taamati gie eteteemu pidicale. (13/14) Nuamani bii nicadigi saimi.
私たちは去年 一緒に 働いた、 調査で。 彼を 私は 小さいときから知っている。
Mitazala buu gie tukjawasigeu, geinigesiemu. Nuani mindigi zakpu biazi ai.
メタヘザで私たちは一緒に駆けっこしたり、力比べをした。彼は 私より 八か月だけ 年上だ。
Nica biŋe, nonige dianaimi. Zenzezi unii amjalani jaabanaani. Buu Olega
小さいときは、できた、話すことが。 はしかにかかってから、 おしになった。 私は オレグと
zuŋe tatusiemu San'kawa onjomi nonilegeni. Utemi nuanzini xaujele onjosimi
二人で 教えた、 サニカを 書くことができるように。 それで 彼とは 紙に 書いて
diasimi muteuzeŋe.
話すことができる。

— Ali iinezeŋeu suu zegdei buala? — xauntasimi bii.

「いつ 着くんだい、君たちは火事の現場には？」 尋ねた、 私は。

— Eineŋi sikiege sololie, saina, Ulimala aŋasizeŋeu, utadigi nia zuu

「今日、晩まで 漕げば、 多分 ウリマで 夜を明かして、そこから もう 二
neŋini ajazi solouzeŋe. Uile ejekteni manga edeini, utemi tugezi solomi
日 たっぷり漕ぐことになる。上流は流れが きつく なるから、 速く のぼることが
cilazaŋau, — diagieni Olega.
できない」 と答えた、オレグが。

— Janami egdime aiwe xebuu?

「どうして たくさん ウオッカを運ぶんだ？」

— Utawa Muna iŋ-iŋ teuweŋkini aanala. (14/15) Nuani magazina xeŋte nii

「これを ムノフが せつせと積み込ませた、舟に。 彼は 店長
bimi nixeini. Anana wacama gaxisieti aiwa, eitene ljaŋsi egdiwe juŋkjalagiti.
だから(そう)する。前は 少しだけ 仕入れていた、ウオッカを。今はたっぷり 持って来る。
Sjaŋe niineti omoti umilieti. Muna naŋdazi buini dogbo-ineŋi. Utebede
シャインの連中はいつも飲むようになった。ムノフがつけて売ってくれる、夜も昼も。そうやって
aja nii edekceini. Niizige aiwe umiesi, sagdi uniawa uindeesi, dianaiti:
いい人になりたいんだ。 みんな ウオッカを飲むと、親指を 立てて、 言うんだ。

«Mune woo!». Utebede mentigi cuegini Sjaɪŋkewe, utemi nuati ele Munawa
『ムノフ万歳!』と。そうやって自分に引き付けている、シャインの人を。それで彼らはじきムノフを
aptel' zangjanani edewenezeneti.

組合 長に ならせるだろう」

— Ei zulieni bii esei ise niizige egdime aiwa umnasiiweti. Minawade

「この前まで ぼくは見たことがない、人々がたくさん酒を 飲むのを。 ぼくにも
bii Xabarskadigi emeginei Samandiga Arkadi mentigi gelesi umiwenkini.
ぼくがハバロフスクから帰ったとき、シマンチュク・アルカジーが自分の所に呼んで飲ませた。

Bii eninei tjasi dānsige minawa, — bii dianagimi gagdadui.

ぼくの母さんはたいそう怒った、ぼくを」と 私は 答えた、 友人に。

VII

— Ga, gulinezefi caixi, eineni Ulimala iinelegefi, — xelinelieni Xulutu.

「さあ、出かけよう、先へ、 今日 ウリマまで 着くように」 せきたてた、ワーシャが。

— Buude ekezi ejenizeneu. Ma, ulewe digalafi zawau. Pabulika,

「俺たちも ぼちぼち くだるとしよう。さあ、肉を 食うのに 持って行ってくれ。パヴリク、
xwaindaje euntilewe.

切ってやれ、肋骨のところを」

Nuati sololieti, butene ejeniliemu Zaali unaktawani. Zuliele nequ

彼らは上流へ出発し、私たちはくだり始めた、トホロ水系を。 前で 弟が

seudeini, bii njanga-njanga seuzi ugimi. Pabulika xaata seudelieni. Nuani kutu
漕ぎ、 私は 少しずつ 櫂を 動かす。パヴリクが 強く 漕ぎ始めた。彼は 大変
manga kuidesini. Saini utebede egdi kui edeiweni.

力いっぱい身体を動かす。知っているのだ、そうすることでたいそう強くなるのを。

Ejenimie, ziktelenku bitalani agdaamu. Utala mogzoi egbesiliemu. Uli

くだりながら、クロマメノキの岸に 着けた。 そこで 裸で 泳ぎ始めた。 水は

xai gilile bisini, utemi goo egbesimi esimu mute. Njanga sunjaimi,
まだ 冷たかったので、 長く 泳ぐことは できなかった。 少し 震えながら

tetigiesi, (1/2) xaata seudegiemu Sjainelegde.

服を着て、 急いで 漕いで戻った、シャインまで。

Ulewe, dūnsiwe ei doudaŋalazaŋau gookie edeeni. Buu cailaa bagdiliemu.

肉や 荷物を 今度は 引っ張って行くのが遠く なった。私たちは引っ越していたのだ、
Suaŋkazige zugdileti. Abuga neki, Dulja budeeni amjalani, banagieni uti
スアンカの 家に。 父は 春、 ドゥーリヤが死んだあと、 移った、 この
kenku edeeni zugditigi. Utala, zugdi egelie ui egdi, utemi banagieti. Buu
空家に なった 家に。こっちのほうが家のまわりに畑がたくさんあったので、移ったのだ。私たちの
zugdiutene kenkunegieni. Buu Pabulikazi emegiew amjalani Pete guŋkini:
家は 空家になった。 私と パヴリクが 着くと、 ペーチャが言った。

— Emne olo bagdineefizi, aisigizefi ei zugdiwe. Sebie uiwe tafjasigizefi:
「一度ここに住むと決めたからには、修繕しよう、この家を。まずは 畑を 手入れしよう。

canagiesi, goutalagizefi.

草を取って、土寄せするんだ」

— Ono aisigizefi uti zugdiwe? — xauntasiemi bii.

「どうやって修繕するの、この家を？」 尋ねた、 私は。

— Sebie zugdi xooweni naadazañafi, uti amjalani ogdoweni, — utebede

「はじめに 家の 天井を 塗ろう、 それから 壁だ」 そんなふうに

Pete, bodosimi, diankini.

ペーチャは計画して 話した。

— Ali zawañdazafi? (2/3)

「いつ 始めようか？」

— Uiwe mutuesi, ingule zawañdazafi.

「畑を 終えたら すぐに 始めよう」

— Aja, aga.

「いいとも、兄さん」

Gagda neñini bii agazi bejeliemu uiwe. Sebie tuduze uiweni, amjala

翌日、 私たちは兄と土寄せし始めた、畑を。まずは ジャガイモ畑を、それから

boulimiwe, utatene xontogutuwe. Ui sagdi bisini. Teu zugdi kialanimei.

トウモロコシを、そして他のものを。 畑は 広がったが、 すべて家の そばだ。

Gaiti mutuemu, omo neñini. Buu agazi geinigesiemu, nii niondo mutuze.

すぐに 終えた、 一 日で。 私たちは兄と 競い合った、 だれが先に 終えるか。

Utebede nixeimi gaiti mutuemu. Gagda neñini naadaliemu Pete zuje

そんなわけで、仕事が早く終わったのだ。 翌日から 塗り始めた、ペーチャと二人で

cherdakawa. Uliwe ziqedigi Pabulika daudañalaini zuu sagdi melexizi. Nuani

屋根裏を。 水を 井戸から パヴリクが 運んだ、 二つの大きな バケツで。 彼は

zaasazi etetelieni, utebede kui egdi edelejeni nixeini. Sikiege naadaamu,

嬉々として働いた。 こうして 力が 強く なるように している。 夕方まで 塗った。

mutuguesi, jogosolo egbesineemu. Goode eimi egbesi, Pete wadieni, buutene

終わってから、支流に 泳ぎに行った。 長くは 泳がずに、 ペーチャはやめたが、私は

Pabulikazi ljası wajamasıu. (3/4)

パヴリクと 長い間 泳いでいた。

— Imi tuge wadiege egbesimi, agai? — sebuneemi bii.

「なぜ すぐ やめたの、泳ぐのを、兄さん？」 気になって尋ねた、私は。

— Tiñelei jouke sekini, — dianagieni Pete.

「胸が 何か刺すように痛むんだ」 答えた、ペーチャは。

Bii amjala saami, nuani armijadigi unuguzi emegiemeni. Euteni unilieni.

私は あとで わかった、彼は 軍隊から 病気で 戻って来たのを。 肺の 病気だった。

«Utawa tausimi umnasiniew jamaka oktowe», — muisimi bii. «Saina, armijala

「それを治すのに 飲んでいたのか、何か 薬を」 思った、私は。 「たぶん 軍隊で

xanalaami esini mede, utawa eimi tausigi, eutei unilieweni esini mede.

風邪を引いたのに気づかないで、それを治さずに、肺の病気になったのに気づかなかったんだ。

Dianazami nuaduni, caixi elegefi naadaa zugdi ogdoweni. Tausizeneni ajazide,

言おう、彼に、もう塗らないように、家の壁を。治してもらおう、しっかりと、

bejei eimi cimpeweside gili ulizi», — mejei baagimie, muisiemi bii.

身体に浴びないようにして、冷たい水を」 気を取り直して、考えた、私は。

Sikie diankimi bii Petedu, nuani, sebie teutu bindeesi, amjala diankini:

晩に話した、私はペーチャに。彼ははじめ少し押し黙って、そのあと言った。

— Sii cezewe dianai. Eimi ciala bii ei (4/5) zugdile bagdimi. Minti

「おまえは本当のことを言っている。望まない、俺はこの家に住むことを。俺たちの

zugdifi xai ajagde biini. Bolo, uiwe aisigiesi, banagizenefi amaixi.

家は まだ 十分 住める。秋に畑を収穫したら、引っ越そう、もとの所へ。

Pabulikade ese ciala ouxi banauwe. Ezenefi aisigi jewedede. Aja, bii

パヴリクだって望んでいなかった、ここへ移るのを。修理はやめよう、一切。大丈夫だ、俺は

tausigizenefi ajazide, oktwo egdime gaziemi.

治そう、ちゃんと。薬も たっぷり もらった」

— Goo tausizenefi, aga, aja, maniseje, — guneemi bii.

「ゆっくり治して、兄さん、大丈夫、がまんして」 言った、私は。

— Inai uleweni digami tugezi aasigiti. Biitene ezenefi diga. Bologisini

「犬の肉を 食ったらすぐに 良くなるそうだ。俺は 食わない。 秋に

Dabau ezjetigini nenelegemi nixeimi, utala tonjo bie, uti ulileni ljasie egdi

峠の 下流まで 行こうと 思う。そこには湖があつて その水には とても たくさん

wanba. Wanba sakiawani umimi, tugezi aasigizenefi. Bii ilekpeñezemi.

亀がいる。亀の 血を 飲めば、すぐに 直るさ。俺は 試してみよう。

Eitene, oktwo umimi, aja edeeni doozei, utemdu ali-ali tije lei sekindeini.

今は 薬を 飲めば 楽になる、身体が。それでも ときどき胸が刺すように痛むんだ。

Aja, neju, tausigizenefi, gwasanani (5/6) mangagde esigizenefi. Sii tatusije

大丈夫だ、弟よ、よくなるさ。来年には 健康に なる。おまえは勉強しろ、

ajazide. Biitene ezenefi tatusine, etetezenefi, nejunefi tafjasizuene. Minti enifi

しっかりと。俺は勉強するわけにはいかない。働こう、弟や妹を育てなければならない。うちの母さんは

nia geenzi biini, tue jatasizenefi. Iseje, adi sitezigewe niedeweneuene.

また おめでたで、冬には 生まれる。 見ろ、何人の 子どもを 育て上げなければならないか。

Tatusimi mutuesi, belesiteize.

勉強を 終えたら、手伝ってくれ」

Ga, utebede bizeje.

もちろんそうなるがいい。

Tigde! Ljasi tigdeini. Kutu aja suusieni buazege zegdeiwani.

雨だ！ ひどく 降っている。大変 うまく消した、山火事を。

Sjainkezige emektegieti teude. Abugade emegieni, nia banzawa laasilieni.

シャインの人々は戻って来た、みな。 父も 戻って来て、再び板を切り出す作業にかかった。

Laami mutuesi, Zaalile wakcanaani. Jeewe waalagami neneeni ugdazi. Njunu
切り出し終えてから、トホロへ狩に向かった。袋角を 獲りに 出かけた、ボートで。六
nenini wakcaasi, emegieni, jeewe gadineesi tuja gaaxiwe.

日間 狩をして、帰って来た、オスジカを獲って、五枝の角のを。

Sikie abuga telujusieni, onode wakcaami:

夕方、父は 話してくれた、どんなふうに狩をしたのか。

Sebie emenjei imexizi ouwemeti xoktoliti (6/7) saami. «Ga, — muisimi —,
まず 着くと、新しく 出て来たのが 足跡で わかった。 「よし」 と思った。
ei dogbonitule tugbuzenjei omomodeli». Tiisiemi timeedegi. Joude ese ougi.
「今晚 倒すぞ、 一匹でも」。 待ち伏せた、朝まで。 何も 出て来なかった。
Imi esiti ougi? Minawa ujeeti? Ali ujezeneti? Bii inenji xuliseemi, kjaŋa
なぜ現れなかったのか？ 俺を嗅ぎつけたのか？ いつ嗅ぎつけるだろう？ 俺は昼間着いたし、シカの
jeenji inenji asulide eini digaa, utemi diilemei biiti. Nia gagda dogboduni
オスは 日中 わざわざ食いに来ることはないから、森にいるはずだ。 また 次の 夜にも
tiisiemi. Xai joude anci. Ono biini? Timadule ejenjiemi bii biasa datatigini.
待ち伏せた。また何も現れない。 どういうことだ？ 朝、 下ってみた、俺は 河口のほうへ。
Tjonowe dulenemie, iseemi kjaŋa jeeweni. Utemdu imike taa ujelini gianaini.
湾を 出た所で、見つけた、シカの 角を。 しかし なぜか 倒木の 上を 歩いている。
Aja etenjimie, kuti igiwe tagdagiami. Uixe uindegiesi, kicom zawasimi taali
よく 見ると、 トラの 尾だと 気付いた。(尾を) 上に突っ立てて、ピンと 持ち上げて 倒木伝いに
biasawa doujini. «Aa, — muisimi bii —, utemi esiti ougi buizige, temene
川を 渡っている。「ああ」 と思う、俺は。 「道理で出て来ないわけだ、獣たちが。用心
bisiti. Utebede biiweni sazanai bii ei». (7/8) Mjoundei zuugimie, tikewenkimi
していたんだ。そういうわけだったのをわかった、俺は今」。銃を 狙いを定めて 撃った、
bii. Kuti deuxini taadigi ulitigi tiŋmee. Nia uindegimie, tukjalieni taalide.
俺は。トラの 尻が 倒木から 水に 落ちた。 再び あがると、 走り出した、倒木伝いに。
Utawa mjoundalegiemi. Uti amjalani nia tiŋmee, xai tuktigiesi taatigi caixi
それを また撃った。 そのあと また 落ちたが、再び あがると、倒木めがけて
nenelieni, bii nia mjoundaleemi, uti amjalani nia tikewenkimi diinti mudazi.
進んで行った。俺はまた撃った。 その あと さらに 撃った、 四発目を。
Xuktimege woktolide diixi. Bagjaza kektimele agdaasi, bii alasiliemi
(トラは) 走り出した、草むらに沿って遠くへ。対岸に 舟を着けて、俺は 待つことにした、
budeiweni. Goode eimi bie, diele xokonolieni. Ga, aja nanŋi baawanaami
トラが死ぬのを。しばらくして、 あたりでうめき声がし始めた。よし、もうじき楽にしてやるぞ、
bii nuamani. Ei ezenjei tukti isenemi, mooktoi manga, nikte asi gugda,
俺はそいつを。 今は 出て行けない、 見に。 茂みは 深いし、シダはとても背が高い。
utemi ei isepete joudede. Seuni, timanani isenezenjei. Ejenjesi, nuami sikiede,
それで 見えない、 何も。 恐ろしい、明日 見るとしよう。下ってから、眠った、夕方まで。

dogbo xon̄to buala tiisineseemi, utala baibimei ougiseeti. (8/9) Esimi mjousasi
夜 別の 場所に 行ってみた。そこにはふつうの(角なしの)シカばかりいた。撃たなかった、
utigetuwe. Gagda neñini iseneseemi kutiwe sien̄isiemi. Taadigi ougiesi, caixi
そいつらを。翌 日 見に行った、トラを 傷つけたのを。(トラは)倒木から降りて、先へ
mikinzi ñenieni mooktoi duixini, mikieni amjalini l̄jasi egdi sakia ejeeni.
這って 行った、茂みの 中へ。 這った あとに沿って、大量の 血が 流れていた。
Omo tangu metra xulemie mikindeesi, boloktoile, simoktotigi niuxi anaasi
百 メートル 余り 這って行って、茂みの中に、谷地坊主に 鼻先を 押しつけて
budeeni.
死んでいた。

Kiatigini esimi ñene, amaixi mudan̄jiemi. Eitene sagizemi bii, uti
そばまで 近づかずに 戻った。 このときになって気づいた、俺は、こいつが
igbesienies, xon̄tozi ñeleme esiti ougies jeezige. Uti amjalani nia elele
追い払ったのか、ほかのを恐れて 現れなかったのか、オスジカたちは。このあと 別の 場所で
tiisineseemi, xai baibimei on̄kooti. Ineñi sugzjamasasaasi, ñuami sikiedede.
待ち伏せした。また「角なし」ばかりが来た。日中 魚獲りをしてから、眠った、夕方まで。
Mjagdagiesi, digasiemi, utatene soloomi Zaali duixini. Solomie, jouktesiemi,
目がさめてから少し食べ、そして さかのぼった、トホロの奥へ。 さかのぼって、確かめた、
ilede (9/10) xuliliemeti jeezige. Kuti budeeni eeleni l̄jasi egdi gaiziga
どこかに 出て来てないかオスジカが。トラの 死んだ あたりで たくさんの カラスが
gaiwanaati.
鳴いていた。

Zaalixe datalanigde soloomi. Ila udele iseemi jeezige ougieweti ei
マーロエ・トホロの河口までのぼった。三ヶ所で 見つけた、オスジカが現れたのを、今
dogboni. Utala, dogbo dulan̄kitiginie ñuasi, ejen̄iliemi. Ekee meguzi
晩。 そこで 夜 半まで 眠ってから、くだり始めた。静かに小櫓で
megudeimi, duīsimide temenezi. Kakta chasa xeen̄kini ejen̄imi dogdiemi jee
漕ぎ進めながら、耳を澄ませた、注意深く。半 時間 近く くだって、聞いた、オスジカが
zempule «sua-sua» luktewe ulidigi tagdiiweni. Uli taan̄kileni digaini. Ekee
入り江で「サクサク」と 水草を 水から 引き抜くのを。川の真ん中で草を食っている。静かに
megudemi, kialanigde iineemi. Dilīi ulitigi bagbandaisini dup̄te: komoktosini
小櫓を動かしながら、そばまで近づいた。頭を 水に 突っ込むと、聞こえる。音をたてている、
«buli, buli, buli», luktewe iktezi coboloimie, tugezi dilīi uindegi, (10/11)
「ブク、ブク、ブク」。水草を 歯で くわえたまま 勢いよく 頭を あげて、
utemi «sua, sua, sua!» jaidaini. Utebede nia bagbandaini agdanduni,
そして「サクサクサク」と 音をたてる。 こうして 再び うつむいている間に、
mjoundaleemi. «Tofoli» tin̄mege ulidufumei. Emnekcem waami. Elegeni eje,
撃った。 「ザブン」と倒れた、水の中に。 一発で しとめた。流れてしまわないように、
xekeemi sukiezi dailaktatigi. Nia waamusei uti dogboni. Emuse biimi,
しばりつけた、細ひもで低木に。 もっとしとめることもできた、この夜。一人だったので

eseide wakcana ezjetigi. Bii sagdi ugdawa woomide ezeneni degde zuu kjaṇa
狩に向かわなかった、下流へ。俺は大きいボートを作っていたが、積めないだろう、二匹のアカシカの
uleweni. Utemi, ugdai gjoukatigi guesi, ṇuami. Suu gakpailisini mjaḡdaami.
肉を。そこで ボートを丸太にしぼりつけてから 眠った。日の出とともに 目がさめた。
Njaṅga keptendeesi, wenkilegiemi bitatigi kjaṇawa. ṇamaktatene ljaṣi egdi suu
少し 横になってから、引きあげた、岸に アカシカを。蚊が とても 多い、日が
gakpaani amjalani, utemi saṇmisiemi. Buiwe siesi, teugiemi ugdalai. Uḡda
出た あと、それで、煙でいぶした。獣を 皮を剥いで、積み込んだ、ボートに。ボート
tapci edeeni jee uleni, utemdu pisigde esini edee. Bii ugdawa woomi,
一杯になった、オスジカの肉が。でも（水面は）船縁までは達しなかった。俺はボートを作っていた、
bodosiemi ogbjo uleweni teugiemi teṇ (11/12) bilegeni. Utemi ei xoloṭtooni
考えて、ヘラジカの肉を 載せても 大丈夫な ように。だから 今 余裕があった、
diiniṇe-tuṇaniṇe xeenkizini.

（水面まで）指四、五本分ぐらい。

Utadigi ejenimie, dogdiemi gaizige ljaṣi egdzi omosiemeti kuti budeeleni.
そこからくだりながら、聞いた、カラスがとたくさん集まって来たのを、トラが死んだ所に。
«Uti aja, gaiti digami mutuzeneti. Ezenenide ṇouj buazegeleni» — muisimie,
「これはいい、早く 食ってしまうがいい。臭わないだろう、森が」と 思いながら、
seudegimi datatigini. Eitene elusim sagiemi, uti kuti ṇelewesiemeni buiwe.
漕ぎ進んだ、河口へと。ようやく、すっかりわかった、このトラが寄せ付けなかったのを、獣たちを。

— Munjalie, janami wai sii utawa, igbegimi kule emuse bie.

「かわいそうに、なんだって殺したの、あなたはそれを。追い払えば十分じゃないの。

Tikewesiede em aja, — utebede eniṇe diankini.

撃ちさえすればいいんだから」そう 母は 言った。

— Uti jou jeeweni wauzeṇe, enitieṇ, jeewe digawanazaṇafi sitefi. Bii aja

「じゃ、どんなオスジカを獲るんだ、母さん、オスジカを食べさせるのに、子どもに。俺はよく
nixeemi utawa waimi. Kutu ljaṣi egdi edekteeti. Anana utebede nixeeti,
やった、そいつを 殺して。トラはとても 増えてるんだ。昔は こうしたものさ。
egdi edelisini, xonto bui waca esigini, (12/13) utemi adimede kutiwe magiti.
増えるにまかせたら、ほかの獣が 少なくなる。だから 少しだけ トラを 退治している。

Utebede eimi nixe, einenṇi joude buini wacai bimuse, niizigede, kutizigede
そう しなかったら、今ごろ 何でも 獣が 少なくなつて、人も トラも
lalimi budegidumese, — abuga bodomi guṇieni.

飢え死にしていただろう」父は 考えながら答えた。

Anafi niizigede mejexi bisiti. Bii dogdigei abuga teluṇusiweni xontogutu
昔の 人は 利口だったのだ。私は 聞いたことがある、父が 話すのを、ほかの
niintazigedu, onodee sienise kutiwe njenjesigieweti nuati.
男たちに、どんなふうに手負いのトラに とどめをさしたかを、彼らが。

Utebedede wakcaimi odoozige endemi siejieti kutiwe. Utawa wagilegemi
 さて 猟に出ていた老人たちがうっかり手負いにした、トラを。これを しとめるために、
 abugawa geleeti belesilegeni. Nuani Imadigi emegieni tue bisini. Zuu
 父に 頼んだ、助けるように。彼が イマンから 戻った 冬 だった。二人の
 mafasazige inaiwati xuktueni uti kuti. Xoktolini uzami, boonooti digaiwani
 老人の犬を引きずって行った、このトラが。道に沿って追いかけて、追いついた、食っているところに
 inaiwe. Utawa ɲelewesimi, mjoundaleeti dilini (13/14) xoondilini. Endemi,
 犬を。これを おどかさうと、発砲した、 頭の 上に。 うっかり
 ilenike nagdaati. Kuti, xaata xetigenemie, susaani. Bindeesi, iseneeti.
 どこかへあたってしまった。トラは急に跳び上がって 逃げた。 少したってから見に行った。
 Siejisiet, ilenike maali nagdaani. Utadigi tugezi susagieti zugtigi. Seuni
 傷を負わせていた、どこかに弾があたったのだ。そこから急いで 立ち去った、家に。 怖く
 edeisini, geeneti abugawa. Nuandileni kutu aja mjounda bisini. Utebede
 なって、 迎えに来たのだ、父を。 彼には とても いい 銃が あった。 こうして
 ilantune wagnagieti siektu kutiwe. Zuu sagdjan̄ku inaiwe xebuati. Nia nica
 三人でしとめに向かった、手負いのトラを。 二匹の 屈強な 犬を連れて行った。 もう一匹小さい
 inaizige bisini. Utawa imeɲieti, esitide xebu. ɲeneimie, dogdieti uti nica
 犬が いたが、 そいつは 残して、 連れて行かなかった。出発してから、聞いた、この 小
 inai amjali tukjaiweni, boonien̄i nuatiwe. Ilezei sii munzi ɲenei. Mudanije
 犬がうしろから走って来るのを。 追いついた、彼らに。 何しにおまえは私たちと行くんだ？ 帰れ、
 amaixi! Igbegikcemi cilaati. Ee, jan̄zalai utawa, aazaɲani, kutiwe ɲeimi,
 うしろに！ 追い返せなかった。 まあ仕方がない、 こいつは。 好きにするがいい、 トラの臭いがしたら
 (14/15) susagizeɲeni amaixi. Zuu sagdi inaizige, sebie gabzizi tukjaati.
 逃げ戻るだろう。 二匹の 大きな 犬は はじめ 元気よく 走っていた。
 Goode eimi bie, nii bugditi xegileni digenekcelieti. Mafasazige ikpeleiwetide
 しばらくすると 人の 足 元に 隠れ始めた。 老人たちは 追い立てた、
 eiti pekce. Tjasi ɲelekcemi amaixi tukjalieti.
 気にもとめずに。(犬は) とても恐がって、もと来た方へ走り出した。

Abuga utawa iseimie, meje baani: saina, kuti goolo eini bie, ele
 父は、 これを 見て、 感づいた。 多分 トラは 遠く ない、 すぐに
 xokcogilize. Mjoundai zawagiesi, alasileni. Utemdu nica inai xaata tukjage
 襲ってくるだろう。銃を 手に取り直して、待ち構えた。 すると 小 犬が 急に 走り出した、
 zuleixi. Goode eimi bie, bono tin̄meinibede, goolien̄i. Utadigi amaixi
 前に。 やがて、 あられが打つように、 吠え始めた。 それから うしろへ
 tukjagilien̄i, amjatali kuti aini. Bou taa bisini abuga zulieleni.
 駆け戻って来たが、うしろからトラが追いかけて来る。太い倒木があった、父の前方に。

Mafasazigatene alusiti:

老人たちが 言って聞かせる。

— Baata, omo ɲalalai gidawa zawasije, gagdazini mjoundalaje. (15/16)
 「坊主、一方の 手に 槍を 持って、 もう一方で 撃つんだ」

— Aja, saimi, ono nixeuzeŋewe. Suu temene bijeu.

「大丈夫、わかってる、どうすべきかを。あんたらは気をつけていろ」

Gidai luendeesi, mjoundai zuugiesi, alasilieni. Inai taa xegilini

槍を地面に突き立てて、銃の 狙いを定め、待った。 小犬は 倒木の 下へ

njuxaŋimie, ouze eelini goolieni. Kutitene uti taatigi zulieze bugdizi iligieni,

もぐり込み、別の 方向から、吠えたてた。トラは この 倒木に 前 足を かけ、

aŋmai zoonjesi. Uti ekindini abuga mjoundaleeni kuti aŋmani culini.

口を 開いた。 この とき、 父は 発砲した、 トラの 口 めがけて。

Ancigde tiŋmee uti kala. Abuga iŋgule gidai zawagieni. Sim-sim edee.

すぐに 倒れた、このならず者は。父は ただちに 槍を ひつつかんだ。静かに なった。

Inaizigetene tjasi goolieni taa caazalani. Kuti einide eemesi. Budeeni!

小犬が 激しく 吠えたてた、倒木の反対側で。トラは 唸り声もあげなかった。死んだのだ！

Abuga amaixi eteŋieni. Mafasazigetene, xeŋefuleesi, dilifi naatigi

父は 後ろを 振り向いた。老人たちは 膝まづき、 頭を 地面に

kuzugiesi, ŋalazifi dajeeti gedigefi. Sagdjaŋku inaizigetene (16/17) cofu

垂れて、 両手で おおっていた、うなじを。大きいほうの犬どもは すっかり

susagieti.

姿を消していた。

— Ele, iligieu odozige, kuti budeeni, — abuga, injemi, siugieni

「もう大丈夫、起き上がって、爺さんたち。トラは死んだよ」父は、笑いながら声をかけた、 mafasazigewe.

老人たちに。

— Tukca siteni! Janami luendei gidai? Buu muisiemo, kuti sinawa

「この愚か者！ 何だって突き立てておいた、槍を。わしらは思った、 トラがおまえを emnekcem niŋmezeŋeni, utemi eku biemu, xeŋkimide. Aja, utawa emnekcem 一息で 飲み込むと。 だからじっとしていた、膝まづいて。よかった、こいつを一発で wai, — iligimi, daŋsiliyeti abugawa.

しとめて」起き上がりながら、小言を言った、父に。

Utebede wagieni abuga kutiwe seuni eimi baade. Uti nica inaizitene

こうして しとめた、父は トラを、 恐れることなく。 この 小 犬には

xonooni: ono esini ŋele uti kala. Utebede biini bize: galuigetutene manga

驚いた。 どうして恐れなかったのか、こいつを。こんなことなのだろう。馴染みのない者が 強い

biiti. Utempi bisini uti inai. Manga! Manga!

のだ。 そんなふうだったのだ、この子犬は。偉い、偉い！

Abugedu utelieŋini zaa jei see bisini.

父は そのとき 十 九 歳 だった。

VIII

Eniŋe ulewe janagiiweni kasuŋisiiweni imoweni sewegiiweni buu Pabulikazi
母が 肉を 処理するのや、干すのや、 脂肪を溶かして油にするのを、私はパヴリクと
belesiemu. Abuga belesilieni jeewe oloktoiweti. Xontogutude waati jeewe, utemi
手伝った。父は 手伝い始めた、袋角を 煮るのを。ほかの人たちも獲って来ていた、袋角を。それで
tugezi kokpigilefi ilantunje etetelieti. Utawa lusamazi "konservirovat" guneiti.
早く片付くように三人でやることにした。これをロシア語で「防腐処理をほどこす」と言っている。
Abuga belesimi alasieni gagdai emegiiweni wakcaudigi. Nuati xai banzawa
父は、手伝いながら、待った、相棒が 帰って来るのを、狩から。 彼らは また 板を
laazaŋati Saundiga Aleksejzi. Nuani ele-ele emegizeneni. Saina, jeewe
鋸で切り出すのだ、スンジガ・アレクセイと。彼はもうじき戻って来るはずだ。たぶん、袋角を
wakcaini bize, utemi amjasaani zuu-ila neŋiduni.
狩しているのだろう。だから、遅れていた、二、三日。

Pete jakutazi kinowe iseweneiti. Jakute gegbini Avvakum Petrovich
ペーチャはヤクート人と映画を見させている。ヤクート人の名前はアヴァクム・ペトローヴィッチ・
Ivanov. Nuani taamati emeeni Sjainetigi kino xazuweni xebuesi. (1/2)
イワノフだ。彼は 昨年、やって来た、シャインに 上映機材を 持って。
Nuani frontala sie baani, utemi adimede ountilei nodooni, utemi butause
彼は 前線で 傷を負った。それで いくつか 肋骨を 失った ため 身障者
biini. Pete nuani belesinkuni edeeni. Njoulazige gjaŋa neŋini kinowe
だ。ペーチャは彼の 助手に なった。子どもたちが 毎日、 映画を
isesiti.
見ている。

Sikiegisini teu Sjainkeziga volejbolawa gusiti. Tuŋa-njuŋu komanda
夕方になるとすべてのシャインの人々がバレーボールに興じる。五つか六つのチームに
edeini, utemi, nii eede edeimi, nii alasini mene kulefi iineiweni. Utebede
なって、そして だれかが負けると、 その人は待つ、 自分の 順番が 来るのを。 そんな
gjaŋa neŋini. Tigdelisini, klubala gusiu dominowe, bil'jardawe, shaxmatawa,
毎日だ。 雨が降ると クラブで 遊ぶ、 ドミノや ビリヤード、 チェスで、
nii nonimi garmoshkalaiti, balalaikalaiti, gitaralaiti. Ali-ali mosoniti buala,
だれかできる人はアコーディオンやバラライカ、ギターを弾く。ときどきレスリングをする、外か
kluba doloni.
クラブの中で。

Utebede bagdiemu zua. Zavklubom omo aanta bisini, nuani gegbini
そんふうに過ごした、 夏は。クラブの管理人として一人の女性がいた。彼女の名前は
Luker'ja, ilaza see njaŋga xulee nuanduni. Uti buxgalter (2/3) Sergeev
ルケリヤ、 三十 歳を 少し 過ぎていた、彼女は。これは会計係 セルゲエフの
mamasani. Nuaduni diiza tuŋa see bisini. Gegbiweni onmoomi. Utigetule
妻だ。 彼のほうは 四十 五 歳 だった。名前を 私は忘れた。 彼らには

zuu sita, buu bagdiu soljozoloni bagdieti, Sanegina zugdileni, utauxi tunjaza
 二人の子どもがいて、私たちが住んでいる所の北に住んでいた、サネギンの家で。そこまで五十
 metra xeenkini Suanqazige zugdidigini. Anasij Stepanovich bolo, tue, neki
 メートルほどだ、スアンカの 家から。 アファナシー・ステパノヴィチは秋、冬、春に
 zavmaga bisini. Ljasi nangdagieni, utemi balizele elegeti teu, xudasieni
 店長 だった。大きな欠損を出したが、そのために刑務所に入れられないよう、売りに出した、
 zugdii, uti ziazini tamagieni. Eitene Saneginezige Sienkele bagditi Chause
 家を。その お金で 清算した。今 サネギンたちは シゴウで 暮している、チャウソフの
 bagdieni zugdile, utalade kiu goboweni igisiti. Sanegin amjalani Mune I. K.
 住んでいた 家で。そこでは 蜜蜂を 飼っている。サネギンの後は、 I. K. ムノフが
 esigieni magazina zangjanini.
 なった、店長に。

Enije sikie dianaani mundu:

母が 夕方、言った、私たちに。

— Timancaalani ziktewe tailizenefi. Minzi gie xulizeŋeu Sasa, Pabulike.

「あさって ブルーベリーを集め始めるよ。私と 一緒に 行こう、サーシャ、パヴリク。

Ugdazi ilantunje xulizenefi njoutigi. (3/4)

ボートで三人で行こう、湿地まで」

Uti sikieduni ljasi njoulaziga mosonieti. Bii niizide esimi mosoni. Emne
 その晩たくさんの子どものレスリングごっこをした。私は誰ともやったことがなかった。一度
 ilekpesiemi, Gambu Peterjini in-in mosonikceiweni minzi. Nuani minawa
 試してみた、ガンプの（息子の）ペーチャがしきりにやりたがるのを、私と。彼は 私を
 tuelemi boontileeni, bii xezezii iliemi, nuani minawa dijegilisini, esimide
 ひつつかんで投げた。私は 膝をついてくずれたが、彼は私を 押しつけ、私はできなかった、
 anuse. Utebede sagiemi bii xai waca kuixi biimi. Pete mindigi ai omo
 抵抗することが。こうして知った、私はまだ わずかな力 だと。 ペーチャは私より年上だ、一
 see xulemiezi. Nuanduni zaa zakpunti see edeini. Bii gagdai Olega, utawa
 歳 あまり。彼は 十 八 歳になっている。私の友人の オレグが これを
 isemi, esini ali. Nuanide Petewe tuelemi boontileeni. Lopco painibede
 見て、我慢ならなかった。彼は ペーチャをひつつかみ、投げ飛ばした。綿毛のように
 tulanaa uti Pete. Mindu munjalie ese nuamani. Olega kuini ljasi egdi,
 ふっ飛んだ、このペーチャは。私はかわいそうになった、彼のことが。オレグの力は とても強く、
 nuani teunijewe mosonimi tugbuini. Niide eini galu nuandini. (4/5)

彼は だれをも 組み 伏せる。だれも 勝つことはできない、彼に。

— Bii jalu utebede nixeemi. Janami mosonieni sinzi, eini isenu sii xai

「ぼくはわざとこうしたんだよ。どうしてあいつは戦ったか、君と？ 彼は見ないか、君がまだ
 ede biiwei, — amjala dianaani gagdai mindu.

弱そうなのを」あとで 言った、友は 私に。

— Aja, gagda, bii mosoniwede tatusizeŋei, santusiwede tatusizeŋei,

「いいさ、友よ、ぼくはレスリングも 習うし、ボクシングも 習うよ。

gwasanani isetefize, nii manga biiweni, — gunkimi bii.

来年 見てろ、 だれが強いかを」 言った、 私は。

— Ono manganazanai gaitide? Omo anani waca. Ilima anani xeenkini

「どうやって強くなるか、すぐに? — 年じゃ 足りない。三 年 以上

tatusiuzene. Utatene kuinemi baazanei. Ei sii ljasu konoktu bii. Ei tueni

トレーニングしなくちゃ。そしたら力がつくだろう。今 君は とても やせて いる。この 冬

manga juej, utemi, saina, eedekcele bii. Manga juimi, utebede biini. Biitene

とても丈が伸びたから、 多分 弱々しいんだ。よく 伸びると、そんなことがある。ぼくは

caixi ezenei juu, mindu zaa zakpu see edeeni.

もうこれ以上伸びない。ぼくは 十 八 歳に なった」

— Aja, gagda, juzenei xaisi. Bii saimi, baatama sitezige wai tunu

「大丈夫だ、友よ、背は伸びるさ、もっと。ぼくは知ってる。男の子は 二十 五

seegde juiti, — utebede diasimu (5/6) uteliini.

歳まで 伸びる」そんなふうに話し合った、 そのとき。

— Olegai, suu aja iineu zegdei buatigi? Adi nenini solou suu?

「オレグ、君らはちゃんと行って来たんだろう、山火事の現場に? 何日のぼったんだ、君らは?」

— Gaiti iineemu. Ilienti nenidini sikiege goundeemu. Kutu agdaati

「すぐに 着いたよ。三 日目の 晩まで 漕ぎ通しだった。大喜びした、

Sjainkezige. Omo dogboni kai umnasieti aiwe. Soktoosi, niintazige, aantazige

シャインの人たちは。ひと晩ぶっ通しで飲んだ、ウオッカを。酔っ払って、男も女も

tikpesilieti. Bii njanga umindeesi, jamda saami, nuami. Deuwemi jaza.

めちゃくちゃになった。ぼくはちょっと飲んだら、いつしか眠り込んだ。疲れていた、もちろん。

Timadule mjagdaasi iseemi, niizige iledexem nuajweti. namakta digaiweni

朝、 目が覚めてから、見た、 人々が 所かまわず 寝ているのを。蚊が 食うのを

esiti pekce. Baixi nenemi mooktoitigi, utala omo aanta nuajni elusim

かまわない。 外へ 出た、 茂みへ。 そこで 一人の 女が 眠っている、すっかり

mogzoi, bugdini baabade, waatigini tukuluwe niike bagbandaani. Bii utawa

裸で、 足を 広げて、 股の間に 瓶を だれかが突き立てていた。ぼくはこれを

ekee tanjagiemi, ulitigi weendeemi. Diankimi "starshinadu", nuanide unuseini

そっと 引き抜いた、 川に 捨てた。 報告した、「曹長」に。 彼も 苦しんでいる、

(6/7) aiwe umiemi amjalani. Bii dianaiwei dogdimie gunkini: «Niidude ezi

ウオッカを 飲んだ あとで。 ぼくが言うのを 聞いて、 言った。《だれにも

diana: baita uti. Tutu bije. Minti eineni gulizeneffi. Izide daigei?»

言うな。罪だ、これは。黙っている。俺たちは今日発つ。何かで覆ったか?》

«Daijeemi», — diankimi bii.

《覆いました》と答えた、ぼくは」

— Bii abugeide umieni?

「うちの父さんも飲んだの?」

— Sii abugei, nia ilantune santaziga bua zegdeini udeleni bisiti, etusieti,

「君の 父さんと あと 三人の 年長者が 山 火事の 現場に いた、当直していた。

utemi bii utigetuwe esimi baagdi. Sii amii eini umi aiwe, — injemie,
だから ぼくは彼らとは 会わなかった。 君の 父さんは飲まない、ウォッカを」笑いながら
dianagieni Olega.

言った、オレグは。

— Nii saazanani, bixini, imi ata umi, — biide injeemi, — Odoi doozoni
「だれだって知ってるさ、あればなぜ飲まないのか」私も 笑った。「おじいさんの健康は
ono bie?
どうだい？」

— Aja, mangagda bie. Iktenitene anci esigieni. Bai utebede niñmeini
「大丈夫、元気だ。 歯は なく なった。 ただそのまま飲み込んでいる、
zeuwe, eimi saade, — Olega guzjesimi dianagini.
食べ物を、噛まずに」 オレグは 悲しげに 答える。

— Kutu mai mafasa. Bagdimi omo tangu seede juuze. (7/8)
「とても 元気な じいさんだ。生きて 百 歳にも なるだろう」
Niide esini saa uti zuñefeti gie anci edezeñeweti. Dii añani duleneisini
だれもわからなかった、この二人が ともに亡くなることを。 四年 過ぎると
sebie odo memi mjousaleeni, bonggo majadutene Olega sandjousaleeni. Utawa
初め、おじいさんが自分を銃で撃った。五月一日には オレグが 首を吊った。 このことを
amjala onjogizeñei.
あとで 書こう。

Julide malaptalieneni. Enige, bii, Pabulika ziktewe taineemu soljoxo njoule.
七月も終わろうとしていた。母と 私、パヴリクはブルーベリーを集めに行った、上流の湿原に。
Sjañe jogosoni datadigini zuu tangu metradu kutu manga ejektenelieneni, gou
シャイン支流の 河口から 二 百 メートルで、とても強く 流れ始めた。 竿が
zuke tugdai bise. Buu utawa Pabulike zuñe esimu mute duleneimi. Ugda
かろうじて届いていた。 私は これを パヴリクと二人でできなかった、乗り切ることが。ボートは
sagdi, ugui, utemi eimu kokpigi goundaimi. Seuzide seudeemu, bai cilaamu,
大きく、重い、だからうまく行かない、竿で漕ぐのが。 櫂でも 漕いだが、まるでダメだった。
omonzide solokcomu, esimu mutegi. Meinmewe xebui bisie, mutegiuzeñe
一人ずつ のぼりきろうとしたが、できなかった。ヤスを 持って来ていれば、できたかも
bise. Eniñe dianaini omotide: (8/9)
しれなかった。母は言っている、たえず。

— Eziu kesee, baatazigei. Diili tanđau teeti soljotigiede, utadigi
「無理しないで、息子たち。 岸伝いに引っ張りなさい、あそこの上流まで、そこから
jogoneini. Ga, xelibezi, adi muda dianazanai bii sundu!
流れがゆるくなる。さあ、速く！ 何回 言えばいいの、私はおまえたちに」

— Buu etezeñeu onodeede, — zanjanžalau buu, utemi niade pegeu. Bai, bai
「ぼくたちは乗り切ろう、何としても」意地を張った、私たちは。それでまた頑張った。空しく
pegeu, xai amaixi ejenju. Buu utebede kesekceu ekindini, munawa Pianka
頑張ったが、またうしろに流される。私たちがこうして難儀しているとき、 私たちに ピアンカ・

Gjagdu boonjieni. Nuani emuse ugdazi soloini. Buu bai kesekceu isemie,
ギャグドウが追いついた。彼は一人でボートでのぼっている。私たちが無駄に頑張っているのを見て、
injelieni:
笑い出した。

— Suu mejele anci biunu? Eniu ceze dianaiweni imi eu dogdi? Biide
「おまえたちには知恵がないのか？ 母さんが正しいことを言っているのをなぜ聞かない。俺も
digefe jun̄kjalazanjai ugdañi, — utebede dianaimie, agdaani ugda. Ukieleni
岸伝いに引っ張るぞ、ボートを」 こう 言いながら、 岸に着けた、 ボートを。 ボートの横木を
zawamie, jun̄kjalaani digefede.
つかむと、 引きずった、 岸伝いに。

— Oli teuniñe dabausiti, eiti kesekce. Baata enini, unaje
「ここではみな引きずって行くんだ、無駄な抵抗をせずに。(息子の) 母さん、乗れよ、
bii ugdalai. (9/10)
俺のボートに」

— Asasa, aziga amini, bii mene sitenezi solotomze. Efili nuatide diili
「ありがとう、(娘の) 父さん、私は自分の息子たちと一緒に行くわ。今度は彼らも岸伝いに
tan̄dazanjati ugdawa, — eniñe diagieni.
引っ張るでしょう、ボートを」 母は答えた。

Gjagdu caixi goundalilieni amjalani, buude jun̄kjalagiemu xoktoti culini.
ギャグドウが先へ竿で漕ぎ出した あと、 私たちも 引っ張って行った、道すじに沿って。
Utadigi xaata goundaliemu Pabulike zune, eniñe ugda dulan̄kileni teini,
そこから 懸命に 竿で漕ぎ始めた、パヴリクと二人。 母は ボートの中央に 座って、
injekteini. Buu gaiti boonjiem Gjaduwe.
時々笑っている。私たちはすぐに追いついた、ギャグドウに。

— Eje, baata enini, sii sitenei elusim manganaati bubu, gaiti boonjieti
「やあ、 母さん、あんたの息子らはすっかりたくましくなったじゃないか、すぐに追いついた、
minawa, — Gjagdu, ekindeesi, gun̄kini eniñedu.
俺に」 ギャグドウは一息入れて、言った、 母に。

— Xai elusim esiti mangana, utemi uti ejektewe esiti etee, — eniñe
「まだ 全然 強くないわ。 だから この 流れを 乗り切れなかったのよ」 母は
diagieni nuanduni.
答えた、彼に。

Buu inglule niogiemu mafasawa (nuanduni ele njuñuza see iinelieni).
私たちはただちに追い越した、老人を (彼は もうすぐ 六十 歳を 迎える)。
Mogolin̄ku datani soljozoloni Daduñja jogosotigini xuugiemu. (10/11) Biasa
モゴリンク 河口の 上流で、 ダドゥンガ支流に 入った。 小川の
datalani agdaasi, kektimetigi tan̄daamu ugdawa. Utala niide esini taine.
口に 着けて、 岸へ 引き上げた、ボートを。そこはだれも採りに来ていなかった。
Ezjeuxe njoutigimei nenekteeti Sjañkezige. Buu olo emuse taizen̄eu.
下流の 湿原にばかり 行っていた、シャインの人たちは。私たちはここで一人で集めるだろう。

— Ei njoutigi niizige asuli eiti ziktelene. Moktoi, simokto egdi bixini
「この 湿原には だれも あまり 採りに来てないわ。茂みや ヤチ坊主が たくさん あるから
gasaiti. Minti olo taizenefi, simokto texeni, mooktoide tunaza metra xeenkini
来ないのよ。私たちはここで集めましょう。ヤチ坊主の原っぱや茂みは五十メートルほど
biini, caixi njoumeide, weelegde,—eniye, utebede dianaimi, njoxo neneini. Buu
あって、その先は湿原だけよ、丘まで」 母は こう 言いながら、先に立って進む。私たちは
amjatali gianau. Ga, zikte niom biileni iinemu, utawa ingule tailiemu.
そのあとに続く。さあ、ブルーベリーが青くなっている所に着いた。これを早速 採り始めた。
Eniye komoxiwe talu waktazini wooni. Komoxiwe, xukuzi xekeesi, miolofi
母は かごを 白樺の 樹皮で 作っていた。このかごを 紐で 結んで、首に
loogiemu. Zalupteisini, melexitigi untigiu. Utebede taijeemu, gootigide eimi
かけた。 いっぱいになると、バケツに あける。 そんなふうを集めて、 遠くまでは
nene. Melexifi imeneemu (11/12) bou ii texeleni, gaalani xulaligi lugbawa
行かない。バケツを 置いた、 太いカラマツの木の近くに。枝に 赤い 布切れを
looni eniye, aja iseptelegeni.
ぶら下げた、母が、よく見えるように。

Suu ljasi kakcini, edide anci. Bii Pabulikazi pigosiu edinelegeni.
太陽が強く 照りつけ、 風も ない。 私は パヴリクと 口笛を吹く、風を呼ぶために。
Njanga edinendeesi, xai sim-sim esigini. Bii utawa eidexi eimi meje baa:
少し 風が吹くが、 また 静まりかえる。 私は これを 今まで 気にもとめなかったが、
pigosimi, imi edinelini? Uiwe canamide, goutuleimide, utebede asi xukui
口笛を吹くと、なぜ風が吹くのか？ 畑を 草取りしたり土寄せするときも、こうしてひどく暑い
bilisini, pigosiu. Utebedede edi edinelini. Omoti pigosiulie, omoti edineini,
ときは、口笛を吹く。するとやはり 風が吹き始める。 いつも 口笛を吹けば、 いつも 風が吹く。
ceze mangazi eini junda. Utemdu aja, manga ei xukui, etetemide enimece
本当に 強くは 吹かないが。 それでも いい、ひどく暑い思いをせずに、働くのが 楽に
biini.
なる。

Ine dulanqidini saljasiemu. Eniye joudexem xebueni digalagafi: ulewe,
昼 過ぎに 昼食をとった。 母は いろいろ 持って来た、食べるために。肉や、
fanguwe, kaccimewe, oloktoso umaktawa. Buazegeleni digamitene kutu xei!
きゅうり、パンケーキ、 ゆで卵を。 森で 食べるのは とても おいしい！

IX

Saljasii ekindini eniye nimasilieni:
昼食をとるときに、 母は お話をし始めた。

— Anana-anana, omo jegdige bagdieni. Nuani gegbini Solomo. Enini
昔々、一人の若者が暮らしていた。彼の名はソロモ。母と
aminide sagdañieti. Nuani nuatiwe tafjasieni. Emnee Solomo mamasanani
父は年老いていた。彼が彼らを世話していた。あるときソロモは妻として
omo believee geeneseeti. Belie gegbini Janza. Sebie aja aantabede bisini.
一人の女を迎えた。女の名はヤンザ。はじめは、いい嫁のようだった。
Bagdimie, mafai omoti niamalieni. Joude nixelisini, teu gee. Solomo
暮すうちに、夫をいつも罵るようになった。何をやっても、全部だめだ。ソロモは
muisini: «Jou ambani doogieni bii mamasai doozoloni? Imi inaibede eemesini
思った。「何という悪魔が忍び込んだのか、私の妻の中に。なぜ犬のように怒鳴りつけるのか、
mintigi? Saina, ogzoxi biini. Dianazami eniñedu, ogzosigizeñeni».
私に向かって。多分、悪魔がついているのだ。話そう、母に、悪魔を追ひ払うだろう」

Esini kokpi. Mamasani gidalaani zokponi culini. Waasi, ogdjo duixini
できなかった。妻は槍を突き刺した、彼の喉にそって。殺してから棺の中に
teuweni, egbeweni tikpeneesi, ulitigi zokooni. (1/2) Janza ogdjo ejeini amjatali
寝かせた。蓋を釘で打って、川に押し流した。ヤンザは棺が流れるうしろから
dianagieni: «Ejeje, ejeje, mafa, aja xatala baisini, waagiteize. Bii sinawa eimi
言った。「流れろ、流れろ、夫よ、いい娘を見つけたら、生き返るがいい。私はあんたを
aju, bii aanta eimi bie, bii sulai biimi». Dilili kungelimie, sulai esigieni.
愛しちゃいない、私は女じゃない、私は狐だ」頭からとんぼ返りをすると、キツネになった。

Ejenie ogdjo ulili. Omo xatala bagdieleni, kiatigi agdaani. Xatala
流れて行った、棺は川に沿って。一人の娘の住む所で、岸に着いた。娘は
utawa iseimie, meinmezi anagieni tagjaixi. Caixi ejeeni ogdjo. Uli xebuini
これを見て、ヤスで押し戻した、沖へ。またもや流れて行った、棺は。川は運ぶ、
datatigi, utauxi xai goo. Nia omo belie bagdileni lengeeni. Belie utawa
河口へ、そこまでまだ遠い。また一人の女の住む所でひっかかった。女はこれを
tagjaixi zokogieni. Xai caixi ejeini ogdjo, goo ejeini. Niide eini agbugikce
沖へ押し戻した。また先へと流れて行く、棺は、遠くへ流れて行く。だれも引き上げようとしない、
utawa. «Ciliñ, ciliñ, ciliñ», moole, ugbele tungasimi ejeini.
これを。《チリン、チリン、チリン》木の所で（触れて）、早瀬を音をたてながら、流れて行く。

Omo xatala uliwe geenemi ouweni njaixi, utemi iseeni (2/3) ogdjo
一人の娘が水を汲みに来た、岸に。そして見た、棺が
ejeiweni. «Niidige imi kule ejeweneiti uti ogdjowe, utala, saina, nii budeemeni
流れているのを。「人々はなぜそのまま流れさせるのかしら、この棺を。そこにきっと人が死んだのを
teuweti. Agbugizemi bii naala bugelegemi, budemide, imi kesezeñi niide bimi».
寝かせてある。引き上げよう、私は、土に埋葬するために。死んでも、なぜ苦しめるか、だれであれ」
Uli xenelegde edeitigini olooni. Ogdjo ogdoloni zawaasi, tañdagieni diixi.
水が膝まで来る所に入った。棺の側面をつかんで、引っ張りあげた、岸に。
«Kutu enimece biini, jou, ogdjo kenkuzi ejeeni?», — utebede muisimi, nientileni
「とても軽いわ。まさか棺がからで流れて来たのかしら？」そう思いながら、開けた、

egbeweni. Ogdjo doloni joude anci, nii njukteni, omo nica uniatane
 蓋を。 棺の 中には 何も なかった。人の髪の毛と 一つの 小指だけ
 xoloptooni. «Niinta njukteni, sikee bisini ei nii. Nii wenteeni ogdjoweni
 残っていた。「男の 髪、 若かった、 この 人は。だれが投げ入れたのかしら、棺を
 ulitigi? Idigi ejeni mindulegde? Aja, pegezemi waagiweneuzeŋe», — utebede
 水に? どこから流れて来たのか、私の所まで。よし、試しに、生き返らせよう」 そう
 gunkini belie. Nuani sama bisini. Pudenkuwe woosi, toowe ilagieni, senkiewe
 言った、女は。彼女はシャーマンだった。人形を 作り、 火を 焚きつけ、イソツツジを
 dagasimi, sewesilieni, (3/4) njuktewe, nica uniawa soktu ujeleni nedeesi.
 燃やししながら、シャーマンの儀式を行い始めた、髪の毛と小指を ベッドの 上に 置いて。

Sebie xenefuleesi, untuwe gjouzi tungalaani. Untu «tuŋ» ugzandaani. Caixi
 まず 膝まづき、 太鼓を ばちで 叩いた。太鼓は《トゥン》という音を放った。また
 utebedem eke dukteeni gjouzi «teŋ, teŋ, teŋ». Ekee ŋaisilieni mene
 こうして 静かに 叩いた、ばちで《テン、テン、テン》と。 小声で 呼んだ、自分の
 belesinjuwei: «Zinzi, zinzi, zinziej, bii niiwe waagiwenekceiwei belesijeu, egeweni
 助手を。「ジンジ、ジンジ、ジンジよ、私が 人を 生き返らせるのを 手伝って、彼の魂を
 mintigi xebujeu, bii goo tausizenjei nuamani. Sebie dilini bagdigije, njukteni
 私の所に連れて来て。私はずっと 治します、この人を。 はじめに 頭が 生えろ、 髪の毛が
 lagbanagije, amjala bejeni sisinegije, ŋalani juugije, bugdini aasigije, teu bejeni
 くっつけ。 そしたら 身体が もとに戻れ、腕が 生えろ、 足が くっつけ、すべての身体が
 teŋe esigije, ae, ae, ae. Mindule xulaligi uli bie, utadigi swatigasizenjei
 ちゃんとなれ、あー、あー、あー。私には 赤い 水が ある。これを 振りかけましょう、
 bejetigini, utaatene inixi esigizenje. Ilama neŋini ilama dogboni, kesiwe
 身体に。 そしたら 生き返る。 三 日 三 晩 幸運を
 gelezenjei, bua, bua, bua, xaulie belesije». (4/5)
 祈ります。 天よ、天よ、天よ、どうか お助けください」

Utebede untusieni belie ila neŋini, ila dogboni eimide deunce, eimide
 こんなふうに太鼓を叩いた、女は 三 日 三 晩、 休みもせず、
 diga. Bongo neŋini dilini bagdigieni, njukteni lagbanagieni, gagda neŋini
 食べもせずに。一日目に 頭が 現われ、 髪の毛が くっつき、 二日目には
 bejeni bagdigieni ŋalani juugieni, ilienti neŋini bugdini sisigieni. Utebede
 身体が できあがり、腕が 生え、 三日目には 足も ついた。 こうして
 jegdige, asi alagdiga, soktule ŋuajbede, kepteeni. Belie nuatigini xulaligi
 若者が、大変な 美男子が、ベッドの上に眠るように横たわっていた。女は 彼に 赤い
 uliwe maasieni. Utemdu Solomo jaaj nientilegieni, sampiktezi ugindeeni, amjala
 水を 振り注いだ。すると、 ソロモは 目を 開けた。 まばたきをして、 それから
 dilii uindegieni, xauntasimide:
 頭を 持ち上げた、 尋ねながら。

— Eje, ile biimi bii? Sinawa, xatala, tene iseimi. Nii bii sii? Imi bii
 「おや、どこにいるのだろう、私は。あなたを、娘さん、初めて見る。だれなの、君は。なぜ私の

kialai xenjelei? Ile biini bii mamasai?

そばで膝まづいているの？ どこにいるの、私の妻は」

— Eimi saa bii, joude mamasawai, sii bii niatigi ogdjozi ejenei. Uti

「知りません、私は、どんな奥さんも。あなたは私の岸に、棺で流れ着いたのよ。その
doloni (5/6) sii njuktewei, omo nica uniawatene baami. Ilama nejini, ilama
中に あなたの髪の毛と 一つの 小 指だけ 見つけた。三 日 三
dogboni sewesiemi, buala kesiwe gelemide. Ilienti dogboni duleneisinitene
晩 儀式を行った、天に 幸運を 願って。 三日目の晩が 過ぎるころ、
sinawa sisi edewenkimi, utatene xulaligi ulizi ekpisiemi. Uti amjalanitene
あなたをもとに戻した。 それから 赤い 水を 振りかけた。 そしたらようやく
mjagdageij. Telunusije, sii nii bii, ile bagdiej.

目がさめたのよ。聞かせて、あなたはだれなの？ どこで生まれたの？」

— Aa, utebede biiniew! Alasinde njangade, bii zongizemi.

「あー、そうだったのか！ 待って、 ちょっと。私は 思い出そう」

Soktule teesi, xanasilieni. Gookie dili kuzugiesi, nalazi gedigei zawaasi,
ベッドに 座って、考え込んだ。 長いあいだ、頭を垂れて、 両手で 頭の後ろをかかえて、
teeni, jaaj nifindeesi. amjala nalai asitagieni, soktudigi iligieni, belie kiatigini
座っていた、目を半ば閉じて。それから手を 離し、 ベッドから 立ち上がり、娘の ほうへ
emeeni, nalalani zawaani, uindegieni nuamani.
近づき、手を とって 起こした、 彼女を。

— Bii enije, abugei bagditi bii bualai. Bii mamasai gegbini Janza.

「私の 母と 父は 住んでいる、私の故郷に。 私の 妻の 名は ヤンザ。
Emne bii iseemi (6/7) nuani minawa gidalaiweni, uti amjalani jamda saami
あるとき、私は見た、 彼女が 私を 槍で刺すのを。そのあと 何もわからなく
edeemi, eitene mjagdagiemi. Bii mamasai minawa waani? Jou baitazini? Eimi
なった。 今 目が覚めた。 私の 妻が 私を 殺したのか？ どんな罪のために？
saa, muisimide bii cilaimi. Sinawa ono gegbisiti? Mafaxi bii?
わからない、考えることさえ私はできない。君をどう名付けているか？ 夫は いるのか？」

— Bii gegbii Tausima, mafai anci. Nia izi sabunei? — injemi, diagini

「私の名はタウシマ。夫はいないわ。ほかに何か知りたいことは？」 笑いながら、答える、
xatali.
娘は。

— Sii kutu alagdiga bii, Tausima, utemi tausimi paki, minawa joude

「君は とても 美しい、 タウシマ、それで 治す(tausi-)のがうまい。私を 何も
ancizi wagiwenei. Eitene xanasiye, bii saakcaimi, joude nixeiweni bii mamasai,
なしで生き返らせてくれた。今度は占ってみてくれ、私は知りたい、何をしているかを、私の妻が。
inixi biitide enije, abugei. Xauliede.
生きているかも、母と 父が。 お願いだ」

Tausima xanasilieni. Goo, jaaj nifiesi teeni, dili kuzugiesi, nalazi tugaasi
タウシマは占い始めた。長いあいだ目を閉じて座っていた。うつむいて 頬杖をつき、

teesini ekude. (7/8) Ali-ali dilizi ekee gigjaini. Solomo alasini. Bimie,
座っている、静かに。ときおり 頭を 静かに 振っている。ソロモは待っている。しばらくして
Tausima jaaj nientilegieni. Nia teendeeni adimekede ekini, utaa dianalieni:
タウシマは目を 開いた。そのまま座っていた、いくらかの 時間。そして 話し始めた。

— Sii mamasai sulai biini. Ei buazegefe tukjawasini, bigala sinjewe
「あなたの妻は キツネよ。 今、森を 駆け回っている。草原で ネズミを
galaktaini, mooktoile tukcawa aaktasini.
探し、 茂みで ウサギを 追い回している」

— Janami gidalaani minawa?

「なぜ 槍で刺したんだ、私を」

— Sindu cezewe dianakcami azanaani, ŋeleeni sii ezenjewe ceze. Sii elu
「あなたに真実を 話すのを 気がねした。 恐れた、あなたが 信じないのを。あなたが 本当の
mamasanami baalagai nixeeni. Utebede aja sindu bilegeni, ogdjo doloni
妻を 見つけるように、そうした。このように良くあなたにあれと思って、棺の中に
teuweri, zokoni ulitigi. Sii zuu muda agdasai xatalazige nialati. Nuati tagjaixi
入れて 押し流した、川に。あなたは二度 引かなかった、女の 岸に。彼女たちは沖へ
anagieti sinawa ugia baami. Sii sologilie, ekuteize nuatile. Eitene
押しやった、あなたを嫌って。 あなたは帰るとき、立ち寄りなさい、彼女らの所に。今は
deumpindeje mindule, (8/9) zala baagiesi, gulinjiteize.
休みなさい、 私の所で。 力を貯えてから、出発しなさい」

Bagdileni Solomo Tausimele. Wakcai, sugzjamai nixeeni. Bimie
暮し始めた、ソロモはタウシマのもとで。狩や、 魚獲りを した。 やがて
gagda-gagdawa ajulieti Solomo Tausimede. Mamasalaani jegdige. Manjanagiesi,
お互いを好きになった、 ソロモとタウシマは。 嫁にもらった、 若者は。 元気になってから、
zugditigi gulinjieti aanazi. Ila nenjini solomi iineeti belie bagdileni.
家へ(彼らは) 出発した、舟で。 三 日 川をのぼって 着いた、女の 住む所に。

— Ekujeu, niizigei! Jouxi solou? Anasijeu mindule. Telunusijeu, niide
「止まって、お二人さん。どこへのぼって行くの? 泊まって、私の所に。話して、 だれ
biifi, — ekuweneni nuatiwe belie.
なのか」 止まらせる、彼らを 女は。

— Injke. Digasiesi, telunusizenjeu teumeni, — Tausima dianagini.

「いいでしょう。食べてから、話しましょう、すべて」 タウシマは 答える。

Sikie telunusieni Tausima. Utawa samie, ei belie doozosi uniselieni:
夜に 話した、 タウシマは。これを 知って、この 女は 内心 後悔した。
«Imi esimi agbugi bii uti jegdigewe? Kutu mai, alagdiga mafa bimuse.
「どうして引き寄せなかったのか、私はこの若者を。とても 強く、美男子な 夫に なったのに。
Xeree, xeree, pagadiemie, bua, waaje minawa». (9/10) Tjasi unuseini. Timadule
あー、あー、 しくじったわ、神様、 殺して、私を」 ひどく 後悔する。翌日
caixi gulinjieti Solomo Tausimede. Uti belietene xukuzi memi xukalaani.
さらに先へ出発した、ソロモとタウシマは。 この 女は 紐で 首を吊った。

Nia ilama neḡini solomie, iḡkiti gagda belie biileni. Utide giantawanaini
さらに 三 日 のぼって、やって来た、もう一人の女の住む所に。この女も客として招待する、
nuatiwe:
彼らを。

— Agdajeu bii nialai. Aḡasijeu mindule. Teluḡusijeu mefi, bii saakcaimi,
「舟を着けて、私の岸に。泊まって行って、私の所に。聞かせて、身の上話を。私は知りたい、
suu niide biiweu, jouxi solou.
あなた方がだれなのかを、どこへのぼっていくのか」

— Emne sikiegiemeni imi atamu ekuu. Digami mutuesi, teumeni
「もう夕方になったものを、どうして止まらないものか？ 食べ終わったら、すべてを
teluḡusizeḡeu, — utebede ḡunemie, Tausima agdawaḡkini aanawa. Solomo omoti
話しましょう」 こう 言いながら、タウシマは 近づけた、 舟を。 ソロモは ずっと
teutu biini.
黙っている。

Digamie, teluḡusieni Tausima, onode bisiwe. Uti belie doozonide
食べながら、話した、 タウシマは、どうであったかを。この 女も 内心
unuguleeni, utawa saami. Dogbo kai unuseeni. Timadula, nuati (10/11)
後悔した、 これを 知って。 夜どおし、 悔やんだ。 朝、 彼らが
ḡuliḡieti amjalani, xukuwe moo gaalani xekeesi, saḡdjouseleeni memi.
出た あと、 紐を 木の 枝に 結びつけ、 首吊りした、 自分で。

Biga bagjalini ḡoundaimi, iseeti sulaiwa. Nuatiwe iseesi, aantanaḡieni.
草原の対岸にそって竿で押して行くと、見た、キツネを。彼らを 見て、 女の姿になった。
Ekuleḡeti ekpieni ḡalazi.
止まるように合図をした、手で。

— Solomei, ezi tagda mintigi. Bii saami, sinawa Tausima uisigizeḡeweni,
「ソロモ、 怒らないで、私を。 私は知っていた、あなたをタウシマが助けてくれるのを。
utemi ḡidalaami. Bii sulai bimi, ali-ali nii aantani esigimi. Sulai niidigi
それで 槍で刺した。 私は キツネだけど、ときどき人間の女に 化ける。 キツネは人から
alide ezeḡeni sitewe baa. Sindu Tausima suḡelezeḡeni egdime baatama,
決して 子を生んだりしない。 あなたのためにタウシマは生んでくれる、たくさんの男の子と
azigama sitewe. Eitene xelibezi ḡenijeu zugtigi, utala sunawa eniḡei, amii
女の子を。 さあ、 急いで 戻って、 家に。そこであなた方をお母さんとお父さんが
tjasi alasiti.
ずっと待っている」

— Bii teu saimi, utemi eimi tagdaa, aja bagdije, kesiwe zasimi sindu,—
「私はすべてわかったから、怒ってはいないよ。 達者でな、 幸運を 祈る、おまえに」
Solomo diagieni. (11/12)
ソロモは 答えた。

— Bii tafjasiemi sii eniḡewei, abugewei. Aja biiti nuati. Aja biteuze! —
「私は 面倒みた、あなたの母さんと 父さんを。 元氣でいる、彼らは。さようなら！」

utebede dianamie, bigatigi tukjagieni, utadu sulainegieni.

こう 言って、草原に 駆け出した。そこで キツネの姿に戻った。

Solomo mamasamule gaiti iigieti. Enini, amini, soŋomi, asaliyeti nuatiwe.

ソロモと 妻は 大急ぎで（家に）入って行った。母と父は 泣きながら 出迎えた、彼らを。

— Sitei, goo alasiemu buu sunawa. Gjaŋa neŋini Janza mundu teluŋusieni

「息子よ、長いこと待っていたぞ、わしらはおまえたちを。毎日 ヤンザは わしらに 話した、
suu sologiu. Buu omoti ezjetigi isesiu, miojde suuneeni, — guŋkiti enini

おまえたちが戻ると。わしらはいつも下流を見ていたから、首も伸びた」 と言った、母と
aminide.

父は。

— Odcaixini aja bagdizeŋefi. Bii sugzjamazaŋai, wakcazaŋai, Tausima egdi

「この先 幸せに 暮そう。 私は 魚獲りや 狩をしよう。タウシマはたくさんの
sitewe baazaŋani, sundule egdi suŋze bizeŋeni. Eziu soŋo, agdajeu, — Solomo
子を生むだろう。あなた方にはたくさんの孫ができるだろう。泣かないで、喜んでください」 ソロモは
dianagieni.

答えた。

Goo bagdieti Solomo Tausimazi, egdi sitewe baati. Kesizi bagdieti.

長生きした、 ソロモと タウシマは。たくさんの子どもをもった。幸せに 暮らした。

X

Buu tuŋa neŋini xuliemu ziktewe tainemi. Deumpii ekindini, egdime

私たちは五日間 出かけた、ブルーベリーを集めに。 休憩時間に、 たくさん
eniŋe teluŋusieni joudexem jouweni. Uteliŋini tene saamu buu Pabulikazi,
母が 話した、 何でもいろいろなことを。 その時 初めて知った、 私と パヴリクは
niide bisimeti nuani amini eninide.

だれ だったかを、彼女の 父と 母が。

Eniŋe kutu tuge taini ziktewe. Nuani dianaini, tugezi tailie,

母は とても 速く 集める、ブルーベリーを。彼女は言う、 すばやく 集めるには
boocideuzeŋe: «Zikte mooktoiweni zawaasi, melexitigi bagbandaiti, utala gigjaiti
木を揺らすことだ。「ブルーベリーの枝を つかんで バケツに 突っ込み、そこで 揺さぶるのよ、
zikte teu tiŋmelegeni. Utebede minti ezenefi tai — sutuu egdi: abdja, njoljo,
実が 全部 落ちるように。でもそんなふうに私たちはしない、 ゴミが多いから。葉っぱ、虫、
lendi zikte, xoŋto sutuu, utemi asitaiti omo kiledigi zaa ila procentawa.
未熟な 実、 ほかのゴミ。それで（売るときに）引く、一キロから 十三パーセントを。

Minti kikazi taijefidigi — omo procentawa».

私たちがきれいに集めたのからは一パーセントを（引く）。

Saljasii ekindini buu omoti xauntasiemu eniŋewe: (1/2)

食事の 時間に 私たちはいつも尋ねていた、 母に。

— Eniej, nii bisiti sii amii, enii? Buu esimude dubda nuatiwe. Imi
「母さん、だれだったの、あなたの父母は。ぼくたちは会ったこともない、彼らに。なぜ
xontogutule jejede bie, nainide bie, loujede bie, loulude bie, mundule anci?
他の人には父方の祖父もいる、祖母もいる、母方の祖父もいる、祖母もいるのに、うちにはいないの？」

— Onode emuseu dubda. Bii enii budeḡeni mindu zakpu see bisini.
「どうしても(おまえたちとは)会えなかったんだよ。私の母が死んだとき、私は八歳だった。
Nuani omo aḡa xabausieni suu Laicai (lusamazi Vasja) gosoweu, katazi
彼女は一年間乳を飲ませた、おまえたちのライツァイ（ロシア語でワーシャ）おじさんに。急に
unuguleesi, budeeni. Bii nuani buḡieweni Sasadu isewenei Sieḡkele. Neḡui
病気になって、死んだ。私は 彼女の墓を サーシャ [著者のこと] に見せた、シゴウで。弟を
bii niedewewḡkimi. Bii amiitene Oloḡolo budeeni. Nuani, minawa xudasiami
私が育て上げた。 私の 父は オロンで 死んだ。彼は私を売った（売るように嫁がせた）
amjalani, Oloḡotigi banagieni, utala budeeni, omo minga jei tangu ilaza
あと、 オロンに 引っ越して、そこで 死んだ、 一 千 九 百 三十
zunti aḡaduni, zua bise uti, xai ei ekindini Mitedu ila bia bisini. Buu
二 年に、 夏だった、これは。まだこのときミーチャ [著者の兄] は三ヶ月だった。私たちは
Zanatigi xuliemu. Amaixi emegiesi, saami nuamani bugeemeti. (2/3) Oloḡolo
ビキンに 出かけていた。あとで 戻ってから、知った、彼を 葬ったことを。 オロンに
biini buḡieni. Suu amidui ila see bisini nuani enini budeḡeni, jei seedu
ある、彼の墓は。おまえたちの父さんは三歳だった、 彼の 母が 死んだとき。九歳で
amile anci edeeni. Utebede bisini, utemi sundule anci biiti mamau, odou.
父も 亡く なった。 そんなわけだったので、おまえたちにはいないんだ、 祖母も 祖父も」

— Janami xudasieni? Adi see bise sindu?
「何のために（母さんを）売ったの？ 何歳だったの、あなたは」
— Kartazi gusimi, sueni, utawa tamagileni, xudasieni Kaudigadu. Mindu
「トランプで遊んで、負けた。これを 返すために 売った、 カンチュガ家に。私は
zaa ila see bisini. Naiba, Pete amini, ingule gazieni minawa Kajalutigi,
十 三 歳 だった。 ナイバ（ペーチャの父）はすぐに 連れて行った、私を カヤルへ。
utadu bagdiemu, utala bii Petewe, Kaḡsibuwe, kabauzigewe, Mitewe, sinawa,
そこで 暮した。 そこで 私は ペーチャ、コースチャ、 双子、 ミーチャ、おまえを、
Sasa, baami. Siitene, Pabulika, Metazala bagdiej, Waḡsili zugdileni.
サーシャ、生んだ。おまえは、パヴリク、メタヘザで 生まれた、ワンシリの家で」

— Bii saimi utawa, eniḡei, eidexi aja zoḡimi, — bii injeimi, — sexizi
「ぼくは知っている、それを、母さん、今でもよく覚えている」私は 笑う。 「布で
kaptasawa timadule mḡagdagimi iseemi bii bilici kialani neḡuwe. (3/4) Uti
くるまれたのを朝 目が覚めて 見た、ぼくは、暖炉の そばで 弟を。 その
amjalani emneede esei gele xabalagami, sagiemi bii, uti nica baata
あと 一度も 欲しがらなかった、おっぱいを吸うのを。わかった、ぼくは、今度は小さな弟が
xabazaḡawani.
おっぱいを吸うのを」

— Inke, utebede bisee. Bii amii omoti suusi bise. Zua buu ljasu
「そう、そのとおりよ。私の父はいつも負けていた。夏、私たちはとても
egdiwe uideew: tuduzewe, boulimiwe, woguwe, manzjanawa, tuliwe, siugawa,
たくさんものを植えた。ジャガイモ、トウモロコシ、カボチャ、カブラ、インゲン豆、スイカ、
fanguwe, xonjo caiwede. Bolo zu-ila zali tapci jaagise boulimiwe teugiu
キュウリ、そのほかの野菜を。秋には二つ三つの倉庫いっぱい結わえたトウモロコシを入れて
biseu. Teumeni nanja tugundini bugisi bise. Neki digauzenede anci zeu.
いた。全部借金のかたに取られていた。春には食べるにもない、食べ物が。
Niile idumesimi bagdiemu. Nanjai elisini tamatene, dukteeti, xeigiweni
人から借りながら暮した。借金を払えなくなると、人々はぶった、ズボンを
asiteesi, kanala kepteweneesi, aileni. Utempi bisini bii amii. Utemdu omoti
脱がせて、寝床に寝かせ、彼の尻を。そんなふうだった、私の父は。それでもいつも
gusii bise kartazi. Minawatene ila tangu tiezezi xudasieni, suu injanauwe
遊んでいた、トランプで。私を三百ルーブリで売った。おまえたちの伯母さんを
(lusama gegbini Marusja) adizi xudasiemenide eimi (4/5) saa. Exewe
(ロシア名 マルーシャ)、いくらで売ったかを知らない。(この)姉を
Sulaidigedu xudasieni. Nuanduni zaa dii see bisini. Uti amjalani baatama
スリャンジガの所に売った。彼女は十四歳だった。そのあとは男の
sitenezimei bagdilieni. Bii agai Laiza (lusama gegbini Saunderi), neɲunei —
兄弟しかいなくなった。私の兄ライザ(ロシア名 アレクサンドル)、弟
Faacai (Semjon), Laicai (Vasja). Niŋka bualani bagdimi, niŋka gegbizinimei
ファツァイ(セミョーン)、ライツァイ(ワーシャ)。中国で暮していたから、中国風の名前でばかり
gegbisieni. Nuani niŋkade esini bie. Daaze bisini. Waize soljoloni bii
名付けた。彼は中国人でもなかった。ターズだった。ウラジオストクの北にある
namu kialani bagdieni. Zaa tuŋa see bisini nuani niŋka buatigini banagisini.
海岸で生まれた。十五歳になって彼は中国に引越す。
Utala mamasalaani, dii site baani mamasani. Utadigi ouxi susaani. Olo
そこで結婚し、四人の子どもをもうけた、妻は。そこからここへ逃げてきた。ここで
mamasalaani. Bii eniŋei Dajane odou exini, — eniŋe wadieni teluɲusimi,
結婚した。私の母は「ダヤン 祖父さんの姉だ」母はやめた、話すのを。
saina, guzjesieni, teu zoŋimi.
多分、悲しみにとらわれたのだ、すべてを思い出して。

— Nuani seeni ono bisini?

「彼の姓は何だったの？」

— Lougodja Gelime.

「ロウゴジャ・ガリマ」

— Imi sii azigemei seej Sulaidiga bisini? (5/6)

「どうしてあなたの娘時代の姓はスリャンジガだったの？」

— Buu pjouleu eniŋe seezinimei onjogieti. Utemi buu teuniŋe Sulaidigamei

「私たちの戸籍に母の姓でだけ書いたからよ。だから私たちはみなスリャンジガばかり

biiw. Njoula bñei sagdi unuguzi uniemu buu. Bii degdilei gabawa eu
なの。小さかったころ 天然痘に かかった、私たちは。私の 顔に そばかすを
isenu, uti aasigimi amjalani utebede gabanaani teuninge, egditeni waagieti.
見ないか？ これは治ったあと、こんなふうにそばかすになった、皆に。たいていは生き延びた。
Enijetene budeeni.
母は 死んだ」

— Abuge zugdiñkeninee imi egdizi budekteeti?

「父さんの 家族は どうしてたくさん死んだの？」

— Nuati, udiezige, xai soliktu esiti bie, ei zulieleni utempi unugu anci

「彼らは ウデへ人で、まだ混ざっていなかったから、このときまで そんな 病気が
bisini nuatile. Utemi egdizi budekteeti. Amiu xamulenitene uti unuguzi
なかった、彼らには。だから たくさん 死んだ。 父の 兄弟姉妹は この 病気に
asuli esiti uni. Suu amiude esini unuse sagdi unuguzi.
別にかからなかった。おまえたちの父さんもかからなかった、天然痘に」

— Abu mindu, Mitedu teluñsige utawa. Saina, alike lusa sakiazini

「父さんがぼくとミーチャに話してくれた、そのことを。きっといつかロシア人の血が
solietizi aliseeti uti unuguwe. (6/7)
混じったので、ふせいだ、この病気を」

— Utebede bisini. Mindulede egdi sakia soliktu, utemi esini waa

「そういうことね。 私にも 多くの血が混じっているから、それで殺さなかった、
minawa, bii xamulaiwei uti unugu. Sovetske giani oktowe, ñalala
私や 私の 兄弟姉妹を、 この 病気は。 ソヴィエト政府は 薬を 腕に
cuundeesi, kuñgedeeti udiezige nia elegeti uni utempi unuguzi. Sundulede
傷つけて、 入れた、 ウデへ人がこれ以上かからないように、こんな病気に。おまえたちにも
bie utempi okto. Suu ñalalau kaljanagieni cuundese.
ある、そんな 薬が。 おまえたちの腕に 残った、 傷跡が」

Bu enijeu coo aja enije! Nuani mejeni kutu aja, munawa ajazi

私たちの母はとても素晴らしい母だ！ 彼女は気立てがとてもいいし、私たちを よく
tafjasini. Eide, geenzi bimide, taini ziktewe, uti ziazini bii Xabarskatigi
世話する。今もお腹が大きくても、集めている、ブルーベリーを。このお金で私がハバロフスクに
ñenilegei tatusinegimi. Buu neñuneu Aziga (Zina) ejeini. Abuga, banzawa
行くように、勉強しに。 私たちの弟や妹たちはアジガ（ジーナ）が子守りしている。父は板を
laami mutuesi, imexi internata zugdineni woolieni xonito niintazigezi. Pete
鋸で挽き終えて、 新しい 寄宿舍の 建物を 建てていた、ほかの 男たちと。 ペーチャは
kinowe isesiweneini Sjainjele, Oloñole Dabaulede. Utebede bagdiemu. (7/8)
映画を 見せている、 シャインや オロン、 峠で。 こんなふうに暮していた。

Enije, abuge damisiti. Emne bii xauntasiemi enigewe:

母と 父は タバコを吸う。あるとき、私は 尋ねた、 母に。

— Eniej, sii ono damisiliej? Jou aja bixini damisii? Utemi

「母さん、あなたは どうして吸い始めたの？ 何のいいことがあるの、タバコを吸って。だから

ljasi simpil. Weendegije, bii weendeemibede.

ひどく咳が出るんだ。やめなよ、ぼくがやめたみたいに」

— Kutu aja sii weendeej damisimi. Bii sagdanjimi, utemi eimi mute; eli

「とても いい、おまえがやめたのは、吸うのを。私は 年とっているから できない。

damisi, xanjami simpimi. Ono noniliemi? Mafai daiweni taiwanami tatiemi.

吸わなかったら、苦しくて咳が出るよ。どうして覚えたかだつて？ 夫のパイプに火をつけて覚えた。

Teu aantaziga utebede nonilieti.

みんな女は そうやって覚えるんだ」

Enije mene uise damiwe damisini. Abdjawani wagisiti, ogouwe cimieji,

母は 自分で 植えた タバコを 吸っている。葉を 干し、乾いたのを 細かく刻み、

utawa kaptaiti xaujezi, utatene taiwaneesi, damisiti. Sanjawani eutezi

それを 巻いて、紙で、そして 火をつけて 吸う。煙を 肺に

simindeiti, eikpesimi, tindagiti amaixi. Utebede kesuliti mefi. Amjala dami

吸い込み、吐いて 出す、また。そうして 苦しめる、自分を。あとで タバコの

sanjani kutu pijdizi njolini. (8/9)

煙は とても 臭くなる。

Bii anana eimi damisi, utemi dami sanjawani ugjaimi, kutu eemei. Bii

私はだいたい前から吸っていない。だから タバコの 煙が 嫌いで、ひどく吐き気がする。私は

eidexi xonoimi, ono damisiemi ei zulieleni tjaside. Utawa zonjimi, nilifi

今でも あきれる、どうして吸っていたか、この前まで たくさん。これを 思い出すと恐ろしく

edee. Pabulika eini damisi, Pete eini damisi. Ceze dianami, nuatide

なった。パヴリクは 吸わないし、ペーチャも吸わない。実を 言えば、彼らも

ilekpesieti, anmalai gwaci bisini, weendegieti.

試してみたが、口に 苦味を感じて、やめたのだ。

Enije, telunusimi, damisini. Bii tjasi munjalimi, ono nixezei utebede

母は、話しながら 吸っている。私はとても 残念に思うが、どうすべきだろう、こう

biiweni.

であるのを。

Emnee enije diankini, injektemiede:

ある日母は話した、ほほえみながら。

«Udiezige lusazige bagdilieleleti xototigi omoti xulieti aanazi. Aanta

《ウデへ人はロシア人が住み始めた 町に よく 出かけた、昔は。女が

jancaini, niintatene zuliezele kepteini. Utebedemei bise anana. Aanta, jancaimi,

舵をとり、男は 前で 寝転がっている。いつもこうだった、昔は。女が 舵をとりながら

seudei jaza. (9/10) Niinta zuliele kepteini, canjalaini, kunkaidaini. Ejenemi,

漕ぐのだ、もちろん。男は前方に寝そべって、歌を歌ったり、口琴を弾いたりする。くだつて行くのは

utebede gianisieti. Lusazige, utawa sebie isenje, ljasi xonooti:

こういう決まりだった。ロシア人は、これを 初めて見たとき、とても 驚いた。

— Niintai, sii imi keptei eimi seudei? Imi ei munjali mamasai?

「おい旦那、おまえはなぜ横になつてるんだ、漕ぎもしないで。なぜ大切にしないんだ、妻を？

Nuani aanta biini, kuini waca.

彼女は 女だぞ、 力が 弱いんだ」

— Eziau danule, — aanta gunkini, — nuani muisizeneni, onode caixi

「邪魔しないで」と 女は 言った。「彼は 考えるだろう、どうやってこの先
bagdiuzenewe, biitene ekenesezi seuzi gigjaimi.

生きていくかを。私は 少しずつ 櫂で 漕いでいるわ」

Lusazige sebie injeeti, amjala sagieti, utempi kooli biiweni udiezigele».

ロシア人は はじめ笑ったが、その後で 知った。こういう 決まりがあることを、ウデへには》

Avgusta bialani cwaيدا ajazi aadaini. Ei anani kutu egdi bagdieni,

八月には エゾノウワミズザクラもよく熟する。今年は とてもたくさんなって、

ljasi limbim biiti, paamde. Utawa zikte taijeemi amjalani gegbeliemu: enije
すごく垂れさがっている、真っ黒に。これをブルーベリーを採ったあと、 集め始めた。 母は
cimini, amjala galjanajisini, suule waxisini. (10/11)

押しつぶして、そのあとまるく広げ、陽にあてて乾燥させる。

Buu Pabulikazi mootigi tuktiesi, buktasimu wesimu naatigi. Ljasi tugbuliesi,

私と パヴリクは、木に 登り、 小枝を折り、投げ落とす、地上に。 十分 折ったら、

ougimu, enijezi gie cuegimu melexitigi. Emne Pabulika cwai mooni

降りて 母と 一緒に 集める、バケツに。 あるとき、パヴリクはエゾノウワミズザクラの木の

duelenigde tuktieni, gaawani buktalimi, onoko imi tinmelieni. Gaawa nalazi

てっぺんまで 登り、 枝を 折っていて、ふとした拍子に 落っこちた。 枝を 手で

zawasimi, tinmegini naatigi, xetimidde lusamazi: «Voo dajot!». Bugdizi iligieni
つかんだまま、落ちて来た、地面に、叫びながら、ロシア語で「そら、行くぞ!」と。足で着地した、

naale, bejeni ujetigini gaa cwai mende tinmegieni. Asitegisini, iseemi nuani

地面に。身体の上 枝が 実ごと 落ちてきた。彼が振り払ったとき、見た、彼が

injeiweni. «Aa, — muisimi, — aja, esinide sie baa». Nenui amjala egdizi

笑っているのを。「ああ」と思う、「大丈夫だ、怪我してはいない」。弟は その後 何度も

tuktiseeni, esede nia tinmee.

登ったが、二度と落ちなかった。

Jaagagiesi, enije waxisini suule, amjala, ogondoisini, loogieni zalile, utala

まるく伸ばしてから、母は干す、陽に。 それから 少し乾いたら、吊した、 倉庫に。そこで
ceņzeleimi caixi ogolieti. (11/12)

ぶら下げたままさらに乾燥させた。

Cwaiwe taijeemi amjalani buu Pabulikazi sugzjamaamu. Jaljawa, gwezewe

エゾノウワミズザクラを採ったあと、私とパヴリクは魚獲りをした。 ウグイやカワカマス

taawanjimu adilile. Kutu sebzenke jaljasimi. Aasa datatigini ekee jefineesi,

つかまえた、 網で。 とても おもしろい、ウグイ獲りは。入り江の河口に そっと 近づき、

adiliwe, eimi koptowene, tuleesi, aanawa seuzi, gouzi tungasiw, uti jaidaisini,

網を 物音ひとつ立てずに はって、 舟を 櫂や 竿で たたく。こうして音を立てると、

jalja susagini datatigi, utadigi Bikitigi, utemi taiti adilile. Jabadawa,
ウグイは逃げる、河口へ、そこからビキンへ。そして引かかる、網に。 ラッドや
sonsonowede eimi igbesi, taawanau. Teu sugzjawa asitagiesi, aasa xugeleni
ニゴイも、 追い立てずに、つかまえる。 全部の 魚を 外してから、入り江の端まで
iineesi, gouzi dukteu, ulitigi bagbasimie igbegiu zounewe, gwesewe,
行って、竿で 打ったり、水面に 突き立てたりして追い立てる、コクチマス、カワカマス、
njugusawe, zeliwe. Zounetene adilidigi njanga amaixi mudaniti, utawa isemi
カワヒメマス、イトウを。コクチマスは 網から 少し 後戻りする、 これを 見て
egzegiti gee edezeneweni. (12/13) Amjala, onode igbesimi, ezeneni taa
わかる、あぶなくなるのを。 そうなるとどんなに追い立てても、かからない、
adilile. Utemi, uli xeedigini naaduguweneesi, igbesiu. Xakti baimi, zoune
網に。 そこで 水の 底から 濁らせて、 追い立てる。暗くなると、コクチマスは
eini ise joude, utemi njuxanaini adilitigi. Utebede sugzjamaaw. Meinmezi
見えない、何も。 それで 入る、 網に。 そんなふうにして魚獲りをした。ヤスで
biasala uimesiu zounewe, zeliwe.
小川で 刺す、 コクチマスやイトウを。

Emne, bii gazetawa tanji ekindini, buu uketigi emeeni nimenke aanta.
ある日、私が 新聞を 読んでいるとき、うちの 中庭に 来た、 隣家の 奥さんが。
Nuanduleni melexi, utala seune, mafai tegeweni tetieni. Seunezi jouke
彼女は バケツを持って、その中にはスカーフ、夫の上着を着ていた。スカーフで何か
zeuweni daijeeni. Nuani eninedu dianaini:
食べ物をくるんでいた。彼女は 母に 言う。

— Senjei, baatanji tindaje minawa besilegeni cwaiwe tainaiwei.
「おばさん、息子さんを貸して下さい、私を助けるように、エゾノウワミズザクラを採るのを。
Nuani, mootigi tuktiesi, buktasimi, weesilegeni cwai gaawani.
彼が 木に 登って、 折って、 投げるように、エゾノウワミズザクラの枝を」
— Zugdu Sasasene biini. Xebuje nuamani. (13/14) Pabulika zugdu anci,
「家に サーシャだけいる。 連れて行って、彼を。 パヴリクは 家に いない、
umasineeni, — enije dianagini.
魚釣りに行った」母は 答えた。

— Sasa, besineje, suu egdiwe taijeu, biide omo melexiwe taikcemi, —
「サーシャ、手伝って、あなたたちはたくさん採った、私も一つのバケツ分を 集めたいの」
keleini Lusha minawa.
頼んだ、ルーシャは私に。

— Gjanjaimi bii, gazetawa tanjimi, — gunkimi bii.
「面倒くさいな、ぼくは新聞を読んでいる」 と言った、私は。
— Besineje, sita, amjala tanjiteize, — enije kajaini.
「手伝いに行きなさい、息子よ、あとで読みなさい」母が促した。

Sharovarai tetigiesi, neneemi Lusha amjatali, nica melexiwe menzi gie
裾のしまったズボンをはいて、行った、ルーシャの後について。小さなバケツを自分と一緒に

zawaami. Xoktoli ŋenemi, aanta jouke teluŋusini ukraine-lusa kejeweni
持つて。道に沿って歩きながら、女は 何か 話している、ウクライナとロシアの言葉を
solimide. Bii gookie amjalani gianaimi, utemi tawa-awa dogdimi.
混ぜながら。私は 少し 後ろを 歩いているので、 ところどころ聞こえる。

Cwai bagdileni iineemu, mootigi ingule tuktiemi, utadigi, buktasimi,
ウワミズザクラが生えている所に着くと、木にすぐ 登り、 そこから 折って
weesiemi xegixi. Aanta jouke (14/15) dianami, taigiini cwai tukteweni
投げた、 下に。 女は、 何か 言いながら、集める、エゾノウワミズザクラの実を
melexitigi. Egdime buktasiesi, deunceliemi moo xooloni. Egelie xonŋto moo
バケツに。 十分 折ってから、休んだ、 木の てっぺんで。 周囲に ほかの 木は
waca: tala-olo cizjaŋkja, kokto mooni, talu mooni bisiti. Caixi isesimi
少ない。ところどころにニレ、 キハダの木、 白樺の木が ある。 遠くに 見える、
uimei suu ejeŋini eeleni, gakpaine eelenitene Biki ejeini. Ei udele tjaŋsi
畑ばかり、日の沈む 方向に。日の昇る 方向には ビキンが流れている。あのあたりでは強く
ejekteneini. Egelie niwede eimi isee. Cindazige dieliwesiti tauri-auri,
流れている。 まわりにはだれの姿も見えない。 小鳥たちが 飛びまわっている、あちこちへ。
moktoile caŋalaiti, pigositi, ŋaugdaiti. Edi njaŋga-njaŋga edineini. Bii
茂みの中でさえずっている、ピーピー、チュンチュンと。風がわずかに 吹いている。私は
nieŋesieimi, utemi edi asaptigi teimi, nieŋe ogogileni. Kutu aja! Dieli
汗だくになっていたの、風に向かって座る、 汗が ひくように。とても気持ちいい！ 飛んで
bisie, asi kule bimusee! «Imi cinda dieliwesini, niizige, buizige eiti mute?
いたら、どんなにすばらしいことだろう！「どうして鳥は飛べるのに、人や獣はできないんだろう？
Imi eini bagdi mundule daktja?» — utebede muisimi, teimi gaala. (15/16)
どうして生えないんだろう、我々には翼が？」そんなことを考えながら、座っていた、枝に。
Omo cinda bii kialii dieliweni iseemi, zogzoloŋi cwaiwe zawaani. «Aa,
一羽の小鳥が、私のそばを飛んで行くのを見た、くちばしにウワミズザクラをくわえて。「ああ、
jaanŋisilemi nixeini. Isesizemi, jou abdjalanŋi lagbanawanazaŋani». Cinda gagda
保存食を作ろうとしている。見てみよう、どんな葉っぱにくっ付けるのか」。 鳥は ほかの
cwai gaalanŋi dooni, utala, tauri-auri eteŋiseesi, abdjatigi lagbanawaŋkini cwai
ウワミズザクラの枝にとまり、そこであちこちを見まわしてから、葉にくっ付けた、ウワミズザクラの
tukteweni. Utempiwe egdime abdjala iseu. Utebede zakpasini cinda amjala
実を。 そんなのを たくさんの葉で 見る。 こうして 貯えているのだ、鳥はあとで
zogzoglemi.
ついでに。

Lusha ele melexiwe zalulieni. Bii, nia buktasiesi, ougiemi, menzinemi
ルーシャはもうじきバケツをいっぱいにする。私はもう少し折ってから、下りた、自分でも
tailegemi.
集めるために。

— Jouwe isei sii uile? — xauntasini.
「何を見てたの、あなたは上で？」と尋ねる。

— Egelie ui, Biki, buazege, omo niide ei isepte, — dianagiemi bii.

「まわりは 畑、ビキン川、森、 一人も 見えない」 答えた、 私は。

— Ga, taigije cwaiwe, utaatene saljasizegefi, zemuliej bize, sainade, —

「さあ、集めて、ウワミズザクラを、そのあとで食事にしましょう。お腹がすいたでしょう、きっと」
injeini Lusha. (16/17)

笑う、ルーシャが。

Melexiwe zalumi mutuesi, saljasiemu. Aanta omoti jouke dianaini.

バケツをいっぱいにし終わってから、昼食にした。女は たえず 何か 話している。

Umakta oloktoso, lieba, cuje, wagia imoni, fangu. Bii asuli esimi digakca,
卵を ゆでたもの、パン、タマネギ、豚の 脂身、キュウリ。私は あまり 食べなくなかった。

utemi waca digaami. Digasiesi, Lusha dianaini:

それで 少しだけ食べた。 食事の後、ルーシャが言う。

— Bii njanga deuwwemi, keptendezemi, sii teeje bii kialai.

「私は 少し 休んで 横になっているから、あなたは座ってて、私のそばに」

Goode eimi kepte, dianaini:

長くは 横にならずに、言う。

— Bii jaalai sutuu, maa seunewe, duezini tandagije, kutu idai.

「私の 目に ごみが (入った)、麻のスカーフを、端っこで取って、すごく痛いのに」

Bii nuani sampikteleni uniazi zawaasi, seune mejezini sigilikceej sutuuwe

私は 彼女の まつげを 指で つまみ、 スカーフのはじで ぬぐった、ごみを

gaagilemi. Nuani bii njalawai tjak-tjan zawamie, mintigi isesilieni. Aanta

取るために。彼女は 私の 腕を 強く つかみ、 私のほうを見つめた。 女の

degdiweni, jaawani bii tene utebede daasadigi iseemi. Nuani jaani injektemi

顔や 目を、 私は 初めて こんなに 近くから 見た。 彼女の 目は ほほえんで

biini. Ingule bii gedigelei zawamie, minawa njugasilieni. (17/18)

いる。 すぐに 私の 首筋を つかみ、 私に キスし始めた。

Uti amjalani bii jougu-jougu bai zukee zoŋimi. Mene ujelei

その あとで 私は 何とか ただ かすかに覚えている。自分の 上で

kepteweneesi, bii xeigiwei asiteeni, uti amjalani bugdizi golindegiesi, tjasi

寝かせて、 私の ズボンを 脱がし、 それから 自分の足を からませ、 激しく

ugilieni. Mindu sebie wooloi jouke idaindeeni, amjala ikci edelieni, gaiti

動き始めた。私は 初め あそこが 何か 痛むように感じたが、やがて気持ちよくなり始め、すぐに

nanŋti baami. Uti amjalani, njanga biseesi, gee baaliemi. Imike baaptaliemi

終わった。 そのあと、 少したってから、いやな気持ちになった。なぜだか鼻に付いた、

nieŋe ŋouweni uti aantadigi, kutu pinŋdi, soljobedede. Bii nuandigi ogdozii

汗の 匂いが、 この 女から、 とても 臭い、イタチみたい。私は 彼女に 背を

ougiesi, akandagiemi, jaaj nifiesi, nuani seuzinezini dilii dakpiemi. Utebede

向けて、横になって 目を 閉じ、 彼女の スカーフで 自分の頭を覆った。 そうして

keptemi ekude. Nuani dianaini:

横になっていた、じっと。彼女が言う。

— Sii tene ilekpee, utemi tuge mutuej. Aja, bii kokpigiemi. Sii bii
「あんたは初めて体験したから、すぐに 終わった。大丈夫、私はよかったわ。あんたは私の
amjatali ezi emegi, niidude, alide ezi diana, bii kiatigide alide ezi emee.
後ろからついて来ないでね。だれにも 絶対 内緒よ。 私の そばに 決して近づかないで」
(18/19)

Bii xai goo kepteemi, saina nuandaami bize. Adime nuami? Eimi saa.
私はもうしばらく横になって、多分 眠っていた ようだ。どのくらい眠ったか？ わからない。
Eemeibede bie. Utebede aantazi nixeiweti bii anana saami: sap tazige mene
吐きそうな気がした。こんなふうになんと するのを 私はとっくに知っていた。大人が自分たち
dolo telunusiweti, jegdigezige alusiweti. Mene ilekpesimi xagzaami, l'jasi
同士で話すのも、 若い連中が 教えてくれるのも。自分で やってみると気まずく、とても
xagzama. Mindu zaa nadanti see, bii teliniemi! Xontogutu baatazige zaa see
恥かしいことだ。私が 十 七 歳で、私は 初めて知った。他の 少年たちは 十 歳を
zuke duleneisini, dilimasiliti azigazigazi, aantazigazi. Bii neñui Pabulika anana
どうにか越えると、済ませていた、少女や 大人の女と。私の 弟 パヴリクもだいたいまえに
tikpesilieni. Biitene imike xagzafi nii biimi. Ei amjalani omo aantatigide
終えていた。私はというと、なぜか内気な 人間だ。 このあと、 ひとりの女性へも
ezeñei kiakca. Xai eidexi xagzafi. Uti amjalani ñeleliemi aantazigazi bii.
近づこうと思わない。まだ 今でも 恥かしい。 この あと 苦手になった、女性が、私は。
Niidude, alide esimi telunusi. Eninetene nagbueni.
だれにも、一度も 話さなかった。 母は 気づいていた。

X I

Avgusta malaptalisini bii gulinjiemi. Minawa Pete Kja Borja zuñe
八月の終わりに私は出かけた。私をペーチャとキャ・ボーリャが二人で
neugieti. Sebie Oloñolo anasiemu. Pete utala kinowe isewen'kini. Borjatene
連れて行ってくれた。はじめオロンで一泊した。ペーチャはそこで映画を見せた。 ボーリャは
spirtawa gadaani omo nica tukuluwe — zuu tangu tunjaza gramma bikciwe.
ウォッカを買った、 一本の 小瓶を、 二 百 五十 グラム 入りのを。
Bii utelienjini tene umiemi utempi aiwe, utemi soktondoo. Niatigi ñeniesi,
私は そのとき 初めて飲んだ、そのようなウォッカを、それで酔った。 岸辺まで 行って
nuami Suan'ka Aleksej zugdini cherdakala. Timadule eemei bise, utemi
眠り込んだ、スアンカ・アレクセイの家の屋根裏で。 朝 吐き気がした、それで
joude esimi diga. Amjala Borja emegiesi bii kialai nuagieni. Pete
何も 食べなかった。 あとで ボーリャが来て、 私のそばで 寝た。 ペーチャが
timadule emegisini, gulineemu caixi. Bii aanala kepteimi, nuami. Goo nuami.
朝 戻ってから、出発した、先へ。 私は 舟に 寝転がり、眠り込んだ。長い間 眠った。

Mjagdagisi, Pete dianaini:

目が覚めたとき、ペーチャが言う。

— Imi goo n̄uaj? Xatalawa baaj Oloṅolo? — utebede injemi dianaini. (1/2)

「どうしてずっと寝てるんだ？ 女でも見つけたか、オロンで？」 そんなふうにふざけて言う。

— Xa-xai, aga, jou azigani? Bii sikie Borjazi spirtawa umiemi, utemi

「おいおい、兄さん、どんな女の子だい？ ぼくはタベボーリャとウォッカを飲んだ、それで
amai baimi, — diagimi bii.

眠たいんだ」 答えた、私は。

— Janami umii? Eniṇe, abuge salisisiti minawa ata dansidunu. «Ono

「何だって飲むんだ？ 母さん、父さんが知ったら 俺を 怒らないか。 どうして
esei medeu?» xauntasiliti, bii jou diagizemi. Ezi umi odcaixini. Sii, Borja,
見張ってなかったんだって聞かれたら、俺は何て答えるんだ。飲むな、もう。 おまえも、ボーリャ、
janami buej umilegeni? — Pete miawasilieni.

何だって与えたんだ、飲むように」 ペーチャは怒った。

— Odcaixini ezen̄ei umiwene, aga, ezi tagda, — guneeni Borja.

「もう 飲まないよ、 兄さん、怒らないで」 言った、ボーリャは。

— Sii, aga, ezi diana eniṇedu, abugadu, bii ezen̄ei umi nia alide, —

「ねえ、兄さん、言わないで、母さんと父さんには。 ぼくは飲まないから、もう 絶対」
kesi geleimi bii Petele.

許しを 請う、 私はペーチャに。

— Inke, ezen̄ei diana. Sii ezi umi odcaixini, ajazi esii mangana.

「よし、言わないでおこう。 おまえ、飲むなよ、もう。 ちゃんと強くなれないぞ。

Digaje, amjala jancanagije, bii deumpizeṇ̄ei. Soljoxo Dabaule aṇasizeṇ̄efi,
食べろ、それから 舵をとれ、 俺は 休む。 ヴェルフヌィ峠で 泊るとしよう。

utadigi (2/3) timadule bazige guliṇ̄ilefi Ejeuxe Dabaule sii pjouwe geenegilefi.

そこから 朝 早めに 出発しよう、 ニジヌィ峠に おまえの 書類を 持って行かなくちゃ」

Janṇaliemi bii, digami mutuesi. Pete n̄uagieni, Borja zuliemdini.

舵をとり始めた、私は、食べ終えてから。 ペーチャは眠り、 ボーリャは前で進路を見張る。

Utebede ejeneemu. Sikie Soljoxo Dabaule ekiemu. Gusiel'nikele aṇasiemu.

そんなふうにしてくださった。夕方 ヴェルフヌィ峠に 着いた。 グセリニコフの所で一泊した。

Nuani mamasani anana buu gimuu bisini, gosou Laicai mamasataani balizele
彼の 妻は もとは 私達の義理のおばだった。おじ ライツァの 妻だった。(彼が) 刑務所に

teezeṇ̄e zulieleni, utemi uti aanta Petewe saani. Buu gosou balizele teiweni,
入る までは。 だから この女はペーチャのことを知っていた。私達のおじが 刑務所に いるのを

uti aanta teluṇ̄usieni. Goso zaa see tezeṇ̄eni balizele, eimi saa, jou tuguleni
この女は 話してくれた。おじは 十年間 いる、 刑務所に。私は知らない、何の 罪で

teeweṇ̄kiti. Bii utawa amjala sagiemi. Nuamani sekretsotrudnika edeweṇ̄kiti,
入れられたか。私はこのことについてあとでわかった。彼を 秘密工作員に させていた。

utemi tjasi enducilieni, aiwe umiesi. Niike xapcieni milicetigi, utemi zaa see
それでさかんに自慢話を始めた、ウォッカを飲んで。誰かが密告した、警察に。 それで 十年

bueti, elegeni culi egdime. (3/4)

科した、口外しないように、それ以上。

Timadule gulineemu Ezeuxe Dabautigi. Utala iineesi, neneemu agazi
翌朝 出発した、 ニジヌィ峠に向けて。 そこに 着くと、歩いた、 兄と
skolatigi, niadigi ila kilometra utauxi. Gaiti iineemu. Nadezhda Andreevna
学校へ、 岸から 三キロ そこまで。 すぐに着いた。ナジェジュダ・アンドレーヴナは
mene kabinetalai bisini.
自分の 部屋に いた。

— Aa, Andaljusa, kutu goo esei geenegi mene svidetel'stvanj.

「ああ、アンドリュージャ、ずいぶん長いこと取りに来なかったわね、自分の卒業証書を。

Taulagije, ono tatusilegei zawaati sinawa pjoule ancizi?

持って行きなさい。どうして教えるのに受け入れてくれたのか、あなたを、証明書もなしに」

— Bii gwasanani xebulegei gunkiti. Tala egdi njoulaziga pjoula ancizi

「ぼくは一年後に持ってくるように言われました。あそこでは多くの少年たちが、証書なしで
tatusiti, utala jamadaxem niizige tatusiti, elusim sajtada bie. Nadezhda
学んでいます。そこにはいろんな人が 学んでいて、まったくの大人さえいます。ナジェジュダ・
Andreevna, bii pasportalai Saunderizi onjoso, utemi utebede onjogijeu,
アンドレーヴナ、ぼくのパスポートではアレクサンドルと書いてあるので、そう書き直してください」
— dianami bii.

話した、 私は。

— Saimi, efili onjogizeŋei. Sii tatuinii edezeŋei amjala. (4/5) Sii

「知ってるわ。今 直します。 あなたは先生に なるのね、 将来。 あなたは
pedinstitutala tatusii ei bie.

教育大で 勉強するんでしょう」

— Eimi saa. Xai goo tatusizeŋei. Amjala isetefize.

「わかりません。 まだ もっと 勉強してみなくちゃ。そしたらわかるでしょう」

— Aja, tatuinii edezeŋei, bii saimi. Sii mejexi baata bii, — diankini

「大丈夫、先生に なるだろうと、私はわかります。あなたは賢い子だから」 言った。

direktore.

校長先生は

— Ga, aja bimue, Nadezhda Andreevna, ŋeniu njaixi. Eineni Burlitala

「じゃ、さようなら、ナジェジュダ・アンドレーヴナ。戻ります、岸に。 今日 ブルリトまで
iineuzeŋe.

行かなくてはなりません」

— Aja ŋeniteize, baata! Tatusimi mutuesi, olo etetenegije, — zasini

「気をつけてね、あなた。勉強が終わったら、ここに働きに来なさい」 励ましてくれる、
Nadezhda Andreevna. Munawa zinetigie nexueni, utadigi buu Petezi meese
ナジェジュダ・アンドレーヴナは。私たちを井戸の所まで見送った。そこから私とペーチャだけで
gianjiemu niatigi.
歩いた、 岸まで。

Omo neḡini kai seudeemu. Eli datanagimi, eli elekteni waca edeini
一日 ずっと 漕いだ。だんだん河口に近づくにつれて、流れがゆるやかになった、
Biki, utemi tjasi eteteu seuzi.
ビキン川は。それで懸命に漕いだ、櫂で。

Ei udele ilede anci zolomo bita, onjoktomomei. Ulide kutu suṅta. (5/6)
ここらへんはどこにもない、岩の 岸は、砂岸ばかりだ。 川も とても 深い。
Buu Borjazi, egbesimi, pegeemu uli xeeleni onjoktowe cobolomi, esimu
私はボーリャと、泳ぎながら 試した、 川 底から 砂を つかもうと、
iine doloni, kutu suṅta. Pete guneeni, tuṅa metra xeenkini suṅtani Biki
届かなかった、底まで。とても深い。ペーチャが言うには、五メートル余りの深さだ、ビキンの
dulaṅkileni. Buu bai cilaamu xuimesimi, emnede eseu iine xeeṭigini.
中ほどでは。 私たちは空しく試した、潜るのを、 一度も 届かなかった、底まで。

Odu lḡasi egdi sugzja, jamadaxem sugzja: gwese, jabada, soṅsoṅo, jalia,
ここにはとても多くの魚、 あらゆる 魚がいる。カワカマス、ラッド、ニゴイ、ウグイ、
kaktia, gaṅtjoude bie, guneiti. Utawa olo bagdiigetū lusaziga adilizi
コイ、 チョウザメもいるという。 これを ここに 住む ロシア人は 網で
sugzjamaiti. Nuati temtizezimeḡ xuliti ulili, omo-zube aanade bie, udiezige
つかまえる。 彼らは ボートでだけ行く、流れに沿って。一. 二艘、ウデヘ式の舟もある。ウデヘ人が
suṅeleiti mene gagdadufi. Buu, Burlitetigi iinelimi, ila lusawa iseemu
贈っている、自分たちの友人に。 私たちが ブルリトに 近づくと、三人のロシア人を見た、
adilisiweti.
網で漁をしているのを。

Niala Borjawa imeneesi, ḡeneemu Petezi stancatigi. Nuani minawa
岸に ボーリャを残して、 行った、 ペーチャと 駅へ。 彼は 私を
poezdala unawanaasi, Pozharskatigi ḡenezeṅeni. (6/7) Stancala, poezdawa
汽車に 乗せてから、 ポジャルスコエに 出発する。 駅で 汽車を
alasimi, Pete mindu teluṅusieni, onode nuanzini Lusha xuktuluḡweni. Nuani
待ちながら、ペーチャは私に話した、 どのように 彼と ルーシャが散歩したかを。 彼女は
ajuni bii agawai. Biitene joude esimi diana, teutuzi duiṣiemi. Xagzafi bise
好きだ、私の兄を。 私は 何も 言わず、 黙って 聞いた。 気がとがめて いた、
mindu tjaside. Emneete xauntasiemi:
私にとって、とても。一度だけ 尋ねた。

— Sii mamasalazaṅai nuatigini?

「兄さんは、結婚するの、彼女と？」

— Janami? Nuani mindigi zakpu seezi exii, zuu sitee. Ele mafani

「まさか。 彼女は 俺より 八歳も 年上で、二人の子持ちだ。もうすぐ夫が
Ukraine eetigini ḡuliṅizeṅeni, Lushawa sitenezii ezeneni amjasawana. Ilezemi
ウクライナの方に 行くんだ。 ルーシャを 子供と一緒に置いて行くわけないさ。 何で
bii uti mamakazi, sike aanta ancinu? Lusa xatalazigenide Pozharskala egdi.
俺がこの 年増と。 若い女がいないわけじゃあるまいし。ロシア女も ポジャルスコエには多い。

Bii eimi xeline mamasalami, sebie tausigizegei unuguwe. Ei aja esigieni
俺は 急いで結婚することもない。 まず 治さなくちゃ、病気を。 もう よく なったんだ、
doozei. Amaixi nenimi wanjbawa baazañai, sakiawani umizegei. Sii ajazi
俺の体は。あとで 出かけて 亀を 見つけよう、そいつの血を 飲むよ。 おまえはしっかり
tatusije, ezi zuxele. (7/8)
勉強しろ、ぐれちゃだめだぞ」

Ujexe kanatigi tuktiesi, nuagiemi utala. Timadule iinezeneni poezda
上段の 寝台に よじ登り、眠り込んだ、そこで。 翌朝 着く、 汽車は
Xabarskala. Adimeke nuami bii, imike mjagdagiemi. Parovoze stanca
ハバロフスクに。どれくらい寝たか、私は。なぜだか目が覚めた。 機関車は 駅
taundileni pigosini, guliñimi zulieleni. Coo xegjeuxe kanjala, zuezele zeuwe,
ごとに 汽笛を鳴らす、発車の 前に。 一番 下の 段で、 テーブルに食べ物と
aiwe nedeesi, dii lusa niintanani teiti. Aiwa umimi, teluñusiti, onode namuli
ウォッカを並べて、四人のロシア男が座っている。ウォッカを飲みながら話している、どうやって海を
xuliefi. Teluñuweti duisimi nuajmi, tala-olo baaptaimi. Omo niinta, onode
行き来したかを。彼らの話すのを聞きながら寝ていて、ところどころわかった。一人の男が、どれほど
aantazigazi nuami, teluñusiweni dogdiemi, utemi elusim mjagdagiemi.
女たちと一夜を過ごしたかについて話しているのが聞こえてきた。それですっかり目が覚めた。
Namudigi mudanñimi egdi aantazigazi nuami enducini. Omo aanta esini
航海から 帰って、 多くの 女と一夜を過ごしたのを自慢していた。一人の女性が
ciala nuanzini nuakcami, xai xatala bisini. Mamasalaisi, buzeñeni. «Buu
拒否した、彼と 寝るのを。まだ 娘 だった。 結婚したら 許すだろう。「俺たちは
namu kialini, onjoktoli giamasimi, diasiemu. (8/9) Goo geleemi. Cilagiemi!
海辺に沿って、 砂浜を 歩きながら 語り合った。 長い間口説いたが、むだだった。
Utagde bii anaami nuamani ulitigi. Xatala xengelie olooni namutigi. Bii,
それで 俺は 押しやった、彼女を 水辺へ。 娘は 膝まで 入った、海の中に。 俺は
bugdii elegeni cimpe, amjatali esimi ñene. Utebede ilieni ulile. Gaisiliemi
足を 濡らさないように、ついて行かなかった。 そうやって彼女は立っていた、水の中に。呼んだ、
bii nuamani, zugtigini neugilemi. Eini njugi, soñoini. Bii tagdaami, utebede
俺は彼女を、 家に 送るために。動こうとせずに泣くばかりだ。俺は腹をたてて、そうやって
ulile iliiweni imeneemi, ñeneemi xonito aantatigi. Saimi, gee nixeemi, esimi
水の中に立っているのを置き去りにして、出かけた、ほかの女の所へ。わかっている、悪い事をした、
meje baagi utempi mamasatene cezezi alasizeñeni mafai. Pagadiemi. Uti
気づかなかった、こうした妻こそ 誠実に 待つもんだ、夫を。 失敗した。 この
amjalani minzi baagdikcemi esini ciala, isemie, eletigi susaini. Utempi
あと 俺と 会うのを 避けて、 見ると すぐ 逃げる。 こんな
aantade bie, utigetuwe aja xeleneuzeñe, manga ajuuzeñe».
女もいるんだ。こうした女は 大事にして、しっかり愛さなければならない」

Niinta, aiwe kuñgedemie, umieni. Uti amjalani teutu esigieni. Saina,
男は ウォッカをついで、飲み干した。 そのあと 黙り込んだ。 たぶん

utawa zonjigimi, keselieni doozosi. (9/10)

これを思い出して、苦しくなったのだ、心が。

Bii muisiliemi uti telunusiemeni. Onofi niinta biini utempi: aantawa
私は考えた、この話を。 どうして男はこうなんだろう？ 女を
janami bouseini, nuani kuinide waca, sitewe baasi, xabausini, mene ŋalazi
何のために傷つけるのか？ 女には力も ない、子どもを生み、乳をやり、自分の手で
nii edeweneini, unilisini, dogbo-inenji tafjasini. Geemei nii biiti utempi
一人前に育て上げ、病気のときは昼も晩も 世話をする。悪いやつだ、こんな
niintaziga, saina, xonjo niintazigezi waalimide eedekce biiti, utemi aantawa
男たちは。たぶん、ほかの男と 戦っても 弱い ので、 女を
bouseimi mangasiti. Mundulede utempi niintazige bie. Mamasafi jouke
傷つけて 強がっている。私たちの所にもこういう 男たちは いる。妻を 何かに
tugezini konkositi, dukteiti. Jamadale aanta ŋalalani uniati campiktu, butause.
つけて なぐり、打ちのめす。何人もの 女が 手の中に指を折って（拳を握って）耐えている。

Eniŋele xauntasiemi, imi utebede biiweni. Nuani diagieni: «Mafati,
母に、尋ねたことがある、どうしてこうなのかを。 彼女は 答えた。 「夫が
duktemi, cikaati uniawati. Jou tugezini? Eimi saa bii, imi konkoiti
なぐるのに、握った、指を。 何のために？ わからない、私は、どうしてなぐるのか、
mamasafi. Suu amiu emnede ese konko minawa. (10/11) Bai ali-ali santui
自分の妻を。おまえの父さんは一度も なぐらなかつた、私を。 ただ ときには 拳を
bii degditigi dagbuwene. ŋanawanami eini ŋanawana. Niamagimie, injelini».
私の 顔まで 持ってきた。 なぐったりは しない。 悪態をついて、あざ笑うだけよ」

Utebede muisimi, zonjimi, eimi saa ŋuagiemi.

そんなことを考えたり思い出したりしているうちに、知らずに寝入った。

Timadule mjagdagiemi, wagonala etetei aanta siugisini: «Grazhdanie,
朝、 目が覚めた、 客車で働く女（車掌）が 呼び起こす。「皆さん、
tegijeu, ele Xabarska bizeneni!」。Xegixi etenjiemi. Niintaziga tene mjagdagiti,
起きて下さい。まもなくハバロフスクです」下の段を覗いた。男たちはやっと目を覚ましたばかりで、
tel'njashkazi ŋuati. Bii, njaŋga keptendeesi, ougiemi, baixi ŋeneemi, degdii
青縞のシャツ[水兵の肌着]姿で寝ていた。私は少し横になっていてから、降りて、室外へ出て、顔を
ouwemi. Conkule iseimi xoto zugdiweni. Suu gakpaani. Poezde ekenesi
洗った。 窓から 見る、 都会の 家並みを。 陽が 昇った。 汽車は ゆっくり
siktesini, stancatigi kiakcaini. Vokzalala ekisini, njugiemi, duŋsii zawagiesi.
ブレーキをかけて、駅に近づいた。 駅に 止まってから、降りた、 荷物を 持って。
Ingule, gianazi, ŋeniemi bagdiu zuktigi. Gagdazige xai ŋuati.
まっすぐ 徒歩で、 戻った、 寮に。 友人たちは まだ 寝ていた。

X II

Chukotkala, Kamchatkala, Magadana udeleni bagdiigetun joulazige eiti neni
チュコトカや、カムチャツカや、マガダン 州に 住んでいる 子どもたちは 帰らない、
zugtigifi. Xoktoti asi goo, utemi nuati lagerla deunceiti zua. Ei zuani
実家に。 道が 非常に遠いため、 彼らは キャンプ地で静養する、夏は。 今年の夏、
majmuzige bualani bisiti, raiona centralani, utawa Troickazi gegbisiti.
ナーナイの 土地に いた、 地区の 中心に。 これをトロイツコエと言っている。
Kanikula malaptaani, utemi teu Xabarskatigi emegieti. Bii gagdanau Grisha,
休みが 終わったので、 みな ハバロフスクに 戻って来た。私の 友人 グリーシャと
Kime gie deumpieti Troickala. Nuati bii soktuwei taulagieti, alasiti
キムは、一緒に休んでいた、トロイツコエで。彼らは私の寝具を代わりに受け取って、待っていた、
bii emegiiwei.
私が戻って来るのを。

Uti nejiture cirkatigi jeneemu. Neki sagdjan ku niintaziga mosonilieti bise.
その 日 サーカスに 行った。 春には 巨漢の 男たちが 取っ組み合いを始めていた。
Utempi mosoniwe "klassicheska bor'bazi" gegbisiti. Imike coo sagdjan kumei
この 戦いを 「古典式レスリング」と呼んでいた。 なぜか 一番の大
niintazige mosoniti. Nuati uguiti omo tangu xulemie kilogramma bisini. (1/2)
男ばかりが戦っている。 彼らの 体重は 百 キロ以上 あった。
Bii ei onmogiemu nuati gegbiweti, omo-zubewese zonjimi. Coo ugui
私は、今 忘れてしまった、彼らの名前を。 一人二人なら 覚えている。一番 重たかったのは
Ezerskij, Braverman. Nuati Poddubnezide ei zulieni mosonieti, utebede
エゼルスキーとブラヴェルマンだ。彼らはポッドゥブニともこの前 戦った。 そのように
omoti dianaini konferans'e.
いつも話している、場内アナウンスが

Buu xuliew nejini tene mosonilieni Saunderi Tochonyj, Tixookeanskij
私たちが行った日、ちょうど試合を始めた、アレクサンドル・トチョーニが。太平洋
flotadigi emeeni. Nuani, xontogutu niintadigi, jou bualani enimese, jeiza diite
艦隊から 帰還した。彼は ほかの 男たちと比べて はるかに 軽く、 九十 四
kile, utemi, gugda bimide, utigetun kialani njoulabede biini. Mosoniweti
キロしかないのに、背は高いが、 ほかの連中のそばでは子どもみたいだ。 彼らの闘いを
isesimtene, kutu njumdi baami. Emdeti pukcemzi biiti, utazi anuseiti mene
見て、 とても 驚いた。 お腹がでっぴりして、それで押し合っている、自分たち
dolo, ljasi eikpesiti, nienesiti, nalazifi gagda-gagda nalafi tjak-tjan zawakcaiti,
同士で、激しく息を荒げ、汗をかき、 手で 互いの 手を 強く つかみ合いながら
utebede pontoliti egeliede.
そうして 回っている、ぐるぐると。

Buu alasiemu Tochonyj mosonizeneweni. Ga, nuani bagjauni kutu bou,
私たちは待っていた、トチョーニが試合を始めるのを。さあ、彼の 相手は とても太っていて、

(2/3) jou buazini ugui. Braverman omo tangu ilaza nada kile, Tochonyj — はるかに 重い。ブラヴェルマンが 百 三十 七 キロ、トチョーニは jeiza diite. Sebie gookie pontolieti egeliede. Tochonyj eini kiakcawane 九十四キロだ。最初は 長いこと 回っていた、ぐるぐると。トチョーニは 近づかせない、 mentigi, uimesini. ŋalalani zawaisini, xaata ekpindegiesi, cuptigegini. 自分に、身をかかわしている。手を つかむと、すばやく 引いて はずす。 Braverman tagdai bedede biini, uniazi ŋelewesini, kiakcaini. Asi gabzizi ブラヴェルマンは怒ったようにして、指で 挑発しながら近づいて行く。とても 巧みに xetigenemie, cokpolooni ŋalawani, utadigi ingule mene bogdoloji xoondilini 飛び上がり、 つかんだ、 腕を。 それから すぐに 自分の 肩 越しに weendeeni. Tochonyj kwaptilebede tulanaani, kuŋgelimiede, doumineweneeni 投げ飛ばした。トチョーニは木っ端のように飛んだが、ひっくり返りながら、ブリッジにした、 mene bejezii. Emdeni eelini ŋalazi tjak-tjaŋ tueleesi, uindeeni nuamani 自分の 体で。 腹の 脇を 手で しっかり つかまえて、持ち上げた、彼を Bravermane, bogdololoi neegiesi, pontolilieni mene egeliede. Lek ekimie, ブラヴェルマンは。肩に 載せ、 回転させ始めた、自分をぐるぐると。急に 止まって、 weendeeni xegixi. Tochonyj nia doumizi iligieni. Utebede nia zuus-ilaas 投げつけた、下に。 トチョーニは再び ブリッジで 立った。 こんなふうにもう 二、三 muda nixeeti. Uti amjalani njaŋga deuncendeeti. Seuzinezi (3/4) nieŋefi 回 やった。 その あと 少し 休憩となった。 タオルで 汗を oundegiesi, nia mosonilieti. Eitene Tochonyj Braverman dilileni zawaasi 拭いて、 また 戦い始めた。 今度は トチョーニがブラヴェルマンの頭を つかんで、 bogdoloji xoondilini weesieni ila muda. Mosoniweti tafjasikci nii ekiweneeni 肩 越しに 投げた、 三 回。 試合を判定する人（審判）が 止めた、 dilimasiweti, zuŋefeti ŋalalati zawaasi, uixi uindeeni, diaŋkini: «Gie biiti 戦いを。 両者の 手を つかんで、 上に あげて、言った。 「同じだ、 kuiti!» Uti amjalani teuniŋe mosoniget u njusieti dilimasilemi gagda gagdazi. 力が（引き分け）！」その後、全 選手が 登場し、 競い合った、 互いに。

Bii kutu sebzeŋkeleemi cirkala artistazige gusiiweti. Onofidexem artistaziga 私はとても 興味を持った、 サーカス 芸人が 演ずるのを。 あらゆる 芸人が bisiti. Nicaŋku niizigede bisiti, utigetuwe liliputazi gegbisiti. Uixi jukcemi いた。 小 人も いた、 これを リリパットと呼んでいた。上に伸びることが cilaiget u, utemi asi nektezezi biiti. Sikie kai arenatigi klounazige できない者たちで、それでとても背が低いままだった。毎晩、舞台に 道化役者が injesilegemi njuseiti. Jamadaxem buizigede (4/5) arenala pakizi gusiti: 客を笑わせるために出演する。いろいろな 動物も 舞台上で 上手に 演じる。 inaizige, xeuzezige, muizige, lewazige, kutizige, slonazige. Sentjabr'du xai 犬、 猿、 馬、 ライオン、 トラ、 象など。 九月は まだ njamai, utemi cirke eteteini. Uti malaptaitiginiede. Tatusiliemu amjalani, 暖かいので、サーカスは開いている。 この 月末までだ。 新学期が始まってからも、

omoti xuliemu kinotigi, cirkatigi. Kutu sebzenke isesimi jamadaxem
いつも 通った、映画や サーカスに。とても おもしろい、見るのは、いろいろな
artistazige cirkala gusiiweti: gimnastazige, akrobatazige, pistoletazi mjousasigetu,
芸人が サーカスで演じるのを。体操選手、 アクロバット、 ピistol射手、
selewe uindeigetü fokusnikezigede.
重量上げ選手、 魔術師など。

Emne arenatigi omo artista xaata njueni, nuani tegini mioloni xukuzi
ある日 舞台に 一人の芸人がつかつかと登場した。彼の マントが首に 紐で
xeke sewe emnekcem asitagiesi, amaixi, aka eetigini weenteeni. Uti amjalani
結び付けられたのを一度に 解いて、 後ろに、 背中の方 に 投げた。 その あとで
iseeti teuniŋe biigetü, zuñefeti ŋalani anci biiweni bogdologdode. Izi
見た、 皆 いた人は、彼の両 手が ないのを、 肩から。 どうやって
asitegieni xukuwe? Niide ajazi esini egzegi. Uti amjalani xuakci sexiwe
ほどいたのか、紐を? だれも さっぱりわからない。 その あと 描くための 布を
nexuseeti (5/6) arenatigi. Xuan̄ku zawami xuasilisini, iseemu, izide eteteiweni.
運び入れた、 舞台に。 絵筆を とって 描き始めたとき、わかった、どうやるのかを。
Bugdizi xuajini! Artistazige etetezeneweti medewenei nii dian̄ka nuani
足で 描いている! 芸人が 演じるのを 紹介する人(司会者)が告げた、彼の
seeweni. Bii ei on̄mogiemi, gruzine seeni bisiweni zoñjimi. Xuasawa
名字を。 私は 今 忘れたが、 グルジアの名字 だったのを おぼえている。描いたのを
iseweneeti niizigedu: zugdi, uti egelie moozige juiti abdja niomde. Uti
見せた、 観客に。 家、 そのまわりに 木が 生えている、葉も 青々と。 その
amjalani arenatigi nexueti shchitawa jamadaxem bekume lampochkawa.
あと、 舞台に 運んだ、 ボードを さまざまな 色の 電球を。
Utigutuwe, pistoletazi mjousasimi, teumeni picetei cikagieni, emneede ese uja.
これを ピistolで 撃ち、 すべてを 木っ端微塵に砕いた、 1回も 外さずに。
Kutu xonoomi bii, teu xon̄to niizigede xonooti: ono nonilieni bugdizi
とても 驚いた、 私は。すべてのほかの人たちも 驚いた。どうやって学んだか、足で
mjousasimi, xuajiwe, papirosawe taiweneimi, cudenewe zegdeliwenemiede. Bii
撃つのを、 絵を描くのを、煙草に 火を付けるのを、マッチを 擦ってまでして。 私は
utawa amjala sagiemi, imide ŋalaxi anci edeemeni. (6/7) Waali ekindini siewe
これを あとで 知った、 なぜ 両腕がなく なったかを。 戦争中に 傷を
baani zuñefeti ŋalalai. Gjamani teu pice-pice camnaani, utemi, elegeni
負った、両方の 腕に。 骨は すべて 粉々に 砕けてしまい、それで、
budee, xirurgazige xwaijetei zuñefeti ŋalawani bogdolonigdede. Kutu mai nii
死なないように、外科医が切断した、両 腕を 肩から。 非常に 強い 人
bisini uti niinta. Utebede tatusieni bugdizi eteteimi.
だった、この 男は。 あのように 訓練した、 足で 働くのを。

Egdi muda xuliemi bii cirkatigi, egdi artistazigawa iseemi, jamadaxem
何 度も 行った、 私は サーカスに。多くの芸人を 見た、 さまざまなのが

bisiti: "Vozdushnye gimnaste" xunazimule Kox, selewe uindeigetu,
いた。「空中体操」の コーフ姉妹、 重量挙げ選手や、
akrobatazige xontogutude. Sentjabr' malaptaisini mutugieti eteteimi injeni
アクロバット など。 九月 末、 終えた、 営業を、 寒く
bixini. Tatusiliemu ekindini adike muda kolxozatigi kajasaduge munawa,
なって。 勉強の 期間、 何 度か コルホーズへ 行かせた、私たちを、
tuduzewe ulegileweti belesilegeu.
ジャガイモを掘るのを 手伝うために。

Ali ekele bixini, ali gusiu volejbolawa, basketbolawa. Mundu
いつでも暇があれば、いつもやる、 バレーボールや バスケットボールを。 私たちに
sportzalawa voskresenie nejniduni bueti. (7/8)
体育館を 日曜の 昼間に 貸してくれた。

Bii nia adike baatazige omo nejnini tai gusiu, saljasinemide eimu xuli.
私ともう 何人かの仲間は 一 日中 ずっとやる、 昼食をとりさえ 行かずに。
Xontogutu baatazige mundu sportzalatigi digasilegeu zeu xebuseeti. Utebede
ほかの 仲間が 私たちのために体育館に 食べるように 物を持って来てくれた。そんなふう
bisini. Kinoteatrala kino isesiemu. Kutu ajuliemi bii kinowe "Smelye
だった。 映画館で 映画も 見た。 とても 気に入った、私は 映画を、「勇敢な
ljudi", utala Sergej Gurzo gusieni. Tene nemcazi waalilieti ekiweni
人々」、そこに セルゲイ・グルゾが出演していた。はじめにドイツと戦争した ときを
puundeeti uti kinowe. Egdi muda isesiemi bii uti fil'mawe. Sebzenke,
撮った、 この 映画を。 何 回も 見た、 私は この 映画を。 おもしろく、
seuni! Bii utawa omocai muisimi: janami waaliti? Imi magiti mingazini,
恐ろしかった！私はこれをいつも考える、何のために戦争するのか？ なぜ殺すのか、何千人も
tumuzini? Naa wacanu? Utawa titimesimi waaliti? Janami tiikceiti xontogutu
何万人も？ 土地が足りないのか？ それを 奪い合って 戦うのか？ どうして 奪うのか、他国の
buawani? Saina, bajazigemei waalisiti, zonkuzigewe, mene armijatigifi zawaasi,
領土を。 たぶん 金持ちが 戦争を始め、貧しい人々を 自分の 軍隊に 取って、
magisiwenetei meen dolo. (8/9) Bii knigawa tanjimi, saliemi, utebede biiweni.
殺させているのだろう、互いに。 私は 本を 読み、わかった、そのとおりだと。
Eli manga baja bimi nii, eli wacabede bie utempidu! Ei waali amjalani
より大金もちであるほど人は、ますます少ないと思うのだ、これほどに！ あの 戦争の あと、
buu udiew niintanani jegdigeni dulugaafe xulemie uuweti, esiti emegi zugtigifi.
私たちウデへの男たち、 若者たちの 大半が 亡くなり、帰っていない、家に。
Siteneti aagazanaati, utemi njoulaladigi etetelieti, caixi, dii klassawa mutuesi,
子どもたちは孤児になったため、幼いときから働かなければならず、その先四年生を終えただけで、
tatusimi wadieti. Minti, udiezige, utemzi asi waca, odigi caixini belee
勉強し 終えた。 私たちウデへはそれだけでなくとても数が少ないのに、この先なおさら
waca esigizenjeu.
少なくなってしまうだろう。

Emne bii zhurnalala tanjemi, onode uti kinowe puundeemeti. Uti
あるとき、私は 雑誌で 読んだ、どのように この 映画を 撮影したかを。 その
amjalani egzegiemi kinofil'mele teu cezezi esimeti puundee. Utala bise omo
あとで わかった、 映画では すべて本当に撮影しているわけではないと。そこにあった、一つの
epizoda, ile egdi muizige tukjaiti gulama kektimetigi, ele-ele teu
シーンが。そこではたくさんの馬が駆けて行く、崖のふちに向かって。あやうく 皆
xetigenezeneti (9/10) uti guladigi xegixi. Utemde Vasja, muilei unaasi,
落ちそうになる、 この 崖から 下へ。そこで (主人公) ワーシャが馬に乗って、
niogieni utigetuwe, guladigi eleixi xuktiwenkini mene muiji. Uti amjatalini
追い越した、これらを、 崖と 反対側へ 導いた、 自分の 馬で。 この 後ろから
teu xuugieti kektime kiankilini, omode esini tiñme. Utawa puundeeti udeeni
皆 向きを変えた、崖の 縁で。 1 頭も 落ちなかった。これを 撮影した 場所は
bigamei bisini, jou gulanide anci, jou kektimenide anci. Kinoletene xudozhnik
草原ばかりだった、何の 断崖も なく、何の 絶壁も ない。映画の中では 画家が
xuagieni uti gulawa, uti kektimewe. Bii utemi eimi cezesiemi kinofil'mele
描き足した、この断崖を、 この 絶壁を。 私は それで 信じなくなった、 映画の中の
utempi epizodawa iseimi. Uti amjalani kutu safani baaliemi kinotigi xulimi.
こうした シーンを 見ても。それから 何だかつまらなくなった、 映画に 行くのが。

Zugdidigi onjowe baami. Pete onjoini: sentjabr'le ljasi tigdeeni, uli tjasi
家から 手紙を 受け取った。ペーチャが書いている。9月に ひどく雨が降った。川がひどく
mudeeni, tuduzewe zuke kokpigieti ulegimi. Uli waktinisi iseeti: dawa tjasi
あふれた。ジャガイモをкаろうじてできた、掘り出すことが。水が引いてから見た。サケがたくさん
emeeni, (10/11) iledexem gadilieni, kutu egdime dawasieti, ljasi nemiktegiati,
来て、 いたる所に 産卵した。とても 多くの サケをとって、たくさん おろして、
maalanisieti, janagieti. Pete Pabulikazi, abugazi moowe mologieti, imanaidigini
干したり、塩付けにしたりした。ペーチャはパヴリクや父と 薪を 切り出した。初雪が降るまで
ele bizeneni.
十分 だろう。

Bii muisimi: «Tuñaiti añani bii eimi akisi dawawa, saina, oñmoomi
私は 思う。 「五 年も ぼくは刺していない、サケを。 おそらく 忘れてしまった
bize, onode akisiuzenewe. Tatusizeneti xai goo, uti ekindini elusim
かもしれない、どうやって刺すかを。勉強するだろう、まだ長く。そのうち すっかり
oñmogizeneti meinmezi akisimi. Onoke bize caixi? Eimi saa».
忘れてしまうだろう、ヤスで刺すのを。 どうなるんだろう、この先? わからない」

Pete nia onjooni: mene zugditigifi banagieti. Pabulika unuguleeni, utemi
ペーチャはまた書いていた。自分たちの家に 引っ越したと。パヴリクが 病気になって、それで
esini ali utala caixi bagdimi, utemi niondo ñenieni mene gaitigifi. Amjala
持ちこたえなかった、そこにずっと住むのに。それで まっ先に 戻った、 自分の 家へ。 その後、
teunije banagieti, duñsifi teumeni daudanieti.
全員が引っ越した、自分の持ち物を 全部 運んだ。

X III

Xabarskala bii enjme udeewe asfal'tazi nemeeti. Buu bolo nekide
ハバロフスクにある 大きな 広場を アスファルトで敷いた。 私たちが 秋と 春に
eteteleu xuawa uijeti, egdi xua. Utiget uisiti sagdjan ku onjozi uijetizi aja
労働奉仕した所に花を植えた、たくさんの花。これらが咲くと、大きな 字で 植えたものがよく
iseptelieni «Slava KPSS!», «Da zdravstvuet tovarishch Stalin!» Kutu
見えるようになった。「連邦共産党に栄光あれ!」「スターリン同志万歳!」 とても
alagdiga bua edeeni. Utawa Stalina gegbizini gegbilegiyeti. Xuazi sagdjan ku
美しい場所になった。これをスターリンの名前で名づけた[のちにレーニン広場と改名]。花で 大きな
portretazigewe xuagieti: Marksa, Engel'sa, Lenina, Stalina — dia-dia edewenkiti.
肖像画を 描いていた。マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンが一行に並んでいた。
Utempi uligdigi bua esigieni.
そんな 美しい 広場に生まれ変わった。

Ei anjani zaanti klassala tatusilieni Sune Volodja. Nuani enizii bagdieni
今年、十年生のクラスで学び始めた、スン・ヴァロージャが。彼は母親と暮らしていた、
Xabarskala. Seenemi Sunewe zawaani enini mafani seeweni. Uti njika
ハバロフスクで。自分の姓としてスンを 名乗った、母の 夫の 姓を。 彼は 中国人
bisini, eteteeni KGB-le, njikadigi lusamazi, lusadigi (1/2) njikamazi
だった。働いた、国家保安委員会で中国語からロシア語、 ロシア語から 中国語へと
dianagisieni. Taamati nuamani njika buatigini kajaati, utala etetelegeni.
翻訳していた。 去年 彼を 中国へ 派遣した、そこで働くように。
Volodjatene tunjainti skolala tatusieni. Utadigi mundule zaanti klassala
ヴァロージャは 第五 学校で 勉強していた。そこから 私たちの 十年生のクラスで
tatusineeni, enini kolxozala bagdineeni, "Kontonskaja kommuna" uti kolxoza
勉強しに来了。母親はコルホーズへ移った。 「カントン・コミュニン」が そのコルホーズの
gegbini.
名前だ。

Buu Volodjazi emneete baagdiseu, uti diiza zakpuntini anja bisini.
私はワロージャと一回 会ったことがあった。それは四十 八 年 だった。
Utelienjini buu abugazi zimaseemu Olojole. Utala Vasja gosozu, Volodjazi
そのとき 私は 父と一緒に遊びに行った、オロンへ。そこで、ワシヤおじさんやワロージャと
buu niizige uileti siugawa, sjongazawa diganasaamu. Bii utelienjini kutu
私たちは人の 畑で スイカや 瓜を 食べに行った。 私は そのとき とても
xonoomi: ono xuliti xontogutu uiliti mene uilefibede. Xagzafie bise. Bii
驚いた。 どうして入るのか、他人の 畑に 自分で 植えたみたい。気がとがめた。 私は
joude esei zawa, nuati kusigezi sanasiesi, jouktesieti: aadanies, esinies. Lendi
何も 採らなかったが、彼らはナイフで 穴をあけて 確かめた、 熟しているかいまいか。青い
(2/3) bilisini, eiti gadaa, aadani bisini, asitaiti, amjala digasieti, biide gie
なら 採らない。 熟していれば、 採って あとで 食べた。 私も 一緒に

digaami. Utebede sebie baagdiseemu. Ei, minawa isemie, tagdagieni:
食べた。そうして初めて（ワロージャと）出会った。今、私を見て、彼はわかった。

— Andale, sii kutu manga juej. Minawa ele boonjiliej. Utelienini sii
「アンドレイ、君はとても大きくなった。ぼくをもう追い越すんじゃないか。あの頃君は
nicai bisei. Bii sinzi omo komnatale bagdizenjei. Baagdifi.
小さかった。ぼくは君と同室で暮す。よろしくな！」

— Volodjei, baagdifi. Gie bagdizenjei. Ono biini sii enii? Bii nuamani
「ワロージャ、こんにちは。一緒に暮そう。どうしてる、君のお母さんは？ぼくは彼女に
emnedee esei ise. Bii enije telujsieweni saimi, sii enii anana olojolo
一度も会ったことはない。ぼくの母さんが話していたのを知っている、君の母さんが以前オロンに
bagdiemeni, sinawa utala jatasiemeni. Bii Mite agasizini omo anani bagdiew.
住んでいて、君をそこで生んだのを。ぼくのミーチャ兄さんと同じ年に生まれた。
Mite anci edeeni, nuamani gwaizime waani.
ミーチャは亡くなった、彼をツキノワグマが殺したんだ」

— Bii dogdigei utawa. Aja. Tatusije ajazi.
「ぼくは聞いた、それを。仕方ないよ、勉強するんだ、しっかり」

— Asasa, tatusimi. (3/4)
「ありがとう、頑張るよ」

Utebede bagdiliemu omo komnatale. Munzi gie nia bagdilieti zaa ila
こうして暮すようになった、同じ部屋で。私たちと一緒にさらに暮し始めた、十三人の
baatazige. Teunije buu komnatalau zaa tunja baatazige bigdisieti.
少年が。総勢 私たちの部屋には十五人の少年が暮した。

Volodja — boksore. Nuani zunti razrjadazi santumasini. Gugda baata,
ワロージャはボクサーだ。彼は二級で戦っている〔技量で三階級に分かれた〕。背の高い少年で、
omo metra nadaza tunja santimetra. Buu gagdalaamu. Vexodnoj nejidini
一メートル七十センチあった。私たちは友達になった。休みの日には
nuani enitigini xuliktesiemu zimasimi.
彼の母親の所へよく行った、ご馳走になりに。

Jeinti klassala caixi tatusiliemu lusa kejeni koliwe, literaturawa,
九年生のクラスでさらに勉強し始めた、ロシア語 文法、文学、
matematikawa, fizikawa xontogutu disciplinazigawa. Ei anani enimecezi
数学、物理学などの科目を。今年はもっとやさしく
tatusiliemi. Udie kejeweni tatusizenjei niide anci, utemi manmu kejeweni
学べるようになった。ウデへ語を教える先生がいないので、ナーナイ語を
tatusiliemu: manmuzige, udiezige, ul'chazige, namunkazige. Utigetü kejeti mene
勉強し始めた、ナーナイ人、ウデ人、ウリチ人、オロチ人は。彼らの言語は自分たち
dolo (4/5) bekule biiti. Sebie eude egze biseu. Amjala sagiemu: manmu
同士、よく似ている。最初はよくわからなかったが、あとでわかった、ナーナイ
kejeni, coo zaasa xontogutu kejedigini. Tunguso-man'chuzhska gruppani biini
語が一番簡単だ、ほかのことばより。ツングース・満州のグループだ、

udie, namun̄ka, kile, ul'cha, negidala, lamuta giede, utemi bekule biiti.
ウデへ、オロチ、エヴェンキ、ウリチ、ネギダル、エヴェンとともに。だから 似て いる。

Munawa maṇmu Kile Kiris Kanganovich tatusieni. Nuani ilenti kursele
私達を ナーナイ人 キレ・キリス・カンガノヴィチが教えた。 彼は（教育大学の）三年生で
tatusieni, utemi eteteeni munzi. Uti niinta mamasaxi, sitexi, frontala waalieni,
学んでいて、それで教えていた、私たちに。この男は 妻帯者で 子持ちだ。前線で 戦って、
ordenaxi, medaliaxi bisini.
勲章と メダルをもらっていた。

Utebede tatusiemi maṇmu kejeweni. Kiris Kanganovich omoti onjowone
こうして 勉強した、ナーナイ 語を。 キリス・カンガノビッチはいつも 書かせて
bise minawa udiemezi. Bii onjoosi, lusamazi onjogisiemi, utadigi saani
いた、私に ウデへ語で。私は 書き終わると、ロシア語へ翻訳し、 それで わかった、
nuani, bii joude onjoomei.
彼は、 私が 何を 書いたか。

— Sii wakcaumei (5/6) onjoi, utemi saimi, sii amii wakcauni biini, —
「君は 狩猟のことばかり 書いているから、わかった、君の お父さんが猟師 だと」
guneeni Kirisa Kanganovich.
と言った、キリス・カンガノビッチは。

— Aa, xulini buazegetigini bii amii, nicadigi teu xulini, pakizi
「はい、出かけます、森へ、 私の父は、小さいときからずっと行ってます。上手に
wakcaini, teu saini, joude buazegeleni biiweni, — dianagisii bii.
狩りをします。すべて知っています、何でも森で起こることを」答える、 私は。

— Mai sii amii. Waalieni nemcazi?
「強いんだね、君の父さんは。戦ったのかい、ドイツとも？」
— Waalieni. Ketige esini iinee Berlinala. Sie baami gospiṭalala tausieni,
「戦いました。かろうじて入らなかった、ベルリンには。傷を負って 病院で 治療しました。
uti ekindini waalimi wadieti.
そのあいだに 戦争が 終わりました」

Ei bii onjomi, onode abuga buazegeleni ketige memi esimeni waa.
今 私は 書く、どのように 父が 森で 危うく 自分を 殺さなかったかを。
Abuga, buiwe uzaimi, omoti weewe tuktiwesieni. Emne, kaige kjamatigi
父は 獣を 追って、いつも 小高い山を 登っていた。 あるとき 急な 坂を
tuktimi, mjoṇdazi tiuzibede anausieni. Tuktimie, mjoṇdai dueleni zawaasi
登りながら、銃を 杖のように ついていた。 登りながら、銃 口を つかんで、
(6/7) ekti anakcaani. Utemdu ese tikei mjoṇde, kwai kialini maali cou
強く 押そうとした。 突然、発射したではないか、銃が。 耳の そばを 弾がビュッと
dielieni, utemi abuga jamda sami pekce-pekce tulanaani, moo textetigini
通り過ぎて、 父は 思わず ひっくり返ったが、 木の 前に
tiṇmeeni, utemi esini pooligi weedigi. Uti amjalani, mejei baagiesi, xwaijieni
倒れたので、 転げ落ちずにすんだ、山から。 その あと、 我に帰って、 削った、

zenze moowani tiunemi. Uti amjalani alide esini tiude mjoundazi. Ei bii
ハシバミの木を 杖として。それ 以来、 決して 杖代わりにしなかった、銃を。今、私は
dianaimi, eziu tiude alidede mjoundazifi. Aja, bai tikeisini, ono bizegenie
言う、 支えに使うな、決して 銃を。 良い、ただ 発射しただけなら。どうなるか、
nagdaisini. Ingule budelie aja, sie baaline ono nixezenei? Kesezenei ljaside!
弾があたったら。すぐに 死ねば いいが、負傷したら どうするか？ 苦しむだろう、おおいに！
Aja, nii uisizeneni. Elisinine? Utebede buazegeleni budezenei, ljasi keseesi.
良い、だれかが助けてくれたら。さもないか？ こうして森の中で死ぬしかない、大変苦しんで。
Nilifie!

恐ろしいことだ！

Bii kutu ajuliemi ximijawa. Laboratorijala onofidexem opetawa wou.
私はとても好きになった、化学を。 実験室で いろんな 実験を する。
Kutu sebzeŋke. (7/8) Zadachawade kutu pakizi woliemi. Amjala minzi omo
とてもおもしろい。 問題を とても うまく 解けるようになった。あとで私と同じく
maŋmu aziganise galui bise, uti Gejkere Zina. Nuani mindigi njanga
ナーナイの少女だけが競っていた。 これはゲイケル・ジーナだ。彼女は 私よりも 少し
tugezi mutui bise. Omo urokadu tuŋa muda "tuŋawa" bai biseu. Tatusii
早くできたかもしれない。同じ 授業で 五 回「五」(満点)をもらっていた。先生は
nii omo mamaka bisini, seeni Sorokina, gegbiweni ei oŋmogimi. Nuani,
一人の 年配の女性で、 姓は ソロキナ、名前を 今 忘れた。 彼女は
buu zadachawa mutui siu, omoti "tuŋawa" nedeini zhurnalala. Utebede
私たちが問題を解答するとすぐ、 いつも 「五」を 書き入れた、成績簿に。 こうして
geinigesiemu Zinazi.
競争していた、ジーナと。

Sportzalala omoti trenirovalau volejbolazi, basketbolazi gusiuwe. Buu
体育館では いつも練習をしていた、バレーボールやバスケットボールのプレーを。私たちの
institutau komandalani gusieti Red'ko Pete, Maslov Igore, Kondrashove
大学 チームで プレーしていた、レジコ・ペーチャ、マスロフ・イーゴリ、コンドラショフ・
Jura xontogutu. Ei aŋani fizika fakul'tetalani tatusilieni Chmutine Gosha.
ユーラなどが。 今 年 物理学部で 勉強し始めた、チュムチン・ゴーシャが。
Nuani xotolo bagdieni. Nektesele, bogoule jegdige bisini. (8/9) Nuanide
彼は 市内に 住んでいた。背が低くて、太った 若者 だった。 彼も
institute komandalani gusilieni volejbolawa. Nicadigi gusiliemi, aja gusii
大学 チームで プレーし始めた、バレーボールを。小さいときからやっているの、うまくできる、
jaza. Nuatiwe trenirovalaani Buda Anatolij Sergeevich, prepodavatel'
もちろん。彼らを コーチした、 ブダ・アナトリー・セルゲーヴィチという教師が、
fizkul'ture. Bejenide gusieni komandala.
体育の。 彼自身も プレーしていた、チームで。

Bii xai esimi nonili nuatitibede gusimi. Ali ekele bimi, ali xulimi
私は、まだできなかった、彼らのようにプレーすることが。いつもひまがあれば、行く、

sportzalatigi xontogutu njoulazigazi giede. Sulaidiga Vasjawade alusiemi aja
体育館に、ほかの 若者と 一緒に。スリヤンジガ・ワーシャを 教えた、よく
nonilegeni volejbolawa, basketbolawa gusimi. Nuani kutu ajueni shaxmatazi
できるように、バレーボールやバスケットボールをプレーするのが。彼はとても好きだった、チェスを
gusimi. Utemdu eini weente sportzalatigi xuliiweni.
するのが。いっぽうであきらめない、体育館に 通うのを。

Nuanzini gie omo klassala tatusieti nivxa Chaikun Kolja, kile Luk'janov
彼と 同級で学んでいた、ニブフ人のチャイクン・コーリヤ、エヴェンキ人のルキアノフ・
Gosha. Amjala utigutuzi gie bii aja mai komanda edeweneemi. Buu tijelev
ゴーシャが。その後 彼らと 一緒に 私は 良い 強い チームを 作った。 私たちの 胸には
maikala (9/10) onjogiemu "O.N.S". Utebede gegbisiemu mene komandafi
シャツに 書いてあった、ONS と。 そのように名付けた、 自分たちのチームを
"Otdelenie Narodov Severa".
「北方民族部」と。

Emine bii baagdiseemi Marshala Malinovskazi. Bugdilei tetisilegemi
ある日 私は 会った、 マリノフスキー元帥に。 足に 履く
tapochkawa gadalagami, njeneemi Seresheva ulicatigini. Utala "sportmagazina"
運動靴を 買うために、 出かけた、 セルイシェバ 通りに。 そこに スポーツ用品店が
bisini utempiwe xudasisieti. Vokzala eedigini gianaimie, shtaba kialani
あった、そんなのを売っていた。 駅の 方から 歩きながら、 司令部のあたりで
gianaini mintigi asagdi. Ekee gianaini, njalai akalai neegiesi, dilii kuzugiesi.
歩いて来る、私の方に向かって。ゆっくり歩いている、手を 背中で 組んで、 頭を 下に向けて。
Amjalini zaatuna metrazi zuu polkovnikaziga gianaiti. Niizigede tala-olo xuliti.
後ろから 十五メートルほどには二人の陸軍大佐が 歩いている。 人々が あちこち行きかっている。
Bii, nuani kialani iinesi, «Baagdifi, Rodion Jakovlevich!» gunkimi. Marshala
私は 彼の そばに 寄って、「こんにちは、ロヂオン・ヤコブレヴィチ」と言った。 元帥は
diliu uidegimie, minawa iseeni. «Baagdifi, baata! Nii bii sii?» «Udie
頭を 上げ、 私を 見た。 「こんにちは、若者。だれだい、君は？」 「ウデへ人
biimi». «Aa, Fadeev» caixi ingule gianalieni. (10/11) Zuu polkovnikaziga,
です」「ああ、ファデーフの」『最後のウデへ人』で知られる作家] 先へそのまま歩いた。二人の大佐は、
njalafi kitele karmalani zawasimi, temene bisiti. Bii nuatizi baagdiseemi.
手を 詰め襟服のポケットの中に入れながら警戒していた。 私は 彼らにも 挨拶した。
Nuatide dilizifi baagdiseeti minzi.
彼らも うなずいて返した、 私に。

Obshchagatigi emegiesi, telunusiemi bii baatazigedu. Cezeetide bisiti, eiti
寮に 帰って、 話した、 私は 仲間たちに。 信じた者もいれば、
cezeetide bisiti. Marshala Malinovskij uti ekindini coo sagdi zangja bisini
信じようとしなない者もいた。マリノフスキー元帥はこのとき 総 司令官 だった、
Dal'nij Vostoka waalikci buala. Utemi buu omoti iseemu nuamani tribunala
極 東 軍 管区の。 だから 私たちはいつも 見ていた、彼を 演壇で、

kolonnazi ġeneimi demonstracijala nadanti nojabr'la, bonġo majala. Uti coo
 縦列で 行進しながら パレードで 十一月七日や 五月一日に。 それは一番
 zana ġunġau bisini mundule. Kutu egdi nii omosimesieti demonstracijala.
 楽しいお祭りだった、私たちにとって。大変 多くの 人々が 集まった、 パレードに。
 Gusii, caġalai, leulei eeġti niizige. Iledexem xudasieti (11/12) zeuwe, aiwe,
 遊んだり、歌ったり、踊ったりした、人々は。 いろいろ 売っていた、 食べ物やウォッカ、
 tegewe xonġo xazuwe. Amjala kolonnazi tribuna kialini ploshchadili ġianau.
 衣服、 そのほかの物を。 その後、 列になって 演壇の 前を 広場に沿って 行進する。
 Tribunele biigetuzi zaġġaziga asagdi, dianamie «Da zdravstvuet družba
 演壇に いる 指導者たちが 迎える、 言いながら「民族友好万歳！」
 narodov!», «Vperjod, k pobede kommunizma!», «Da zdravstvuet sovetskij
 「共産主義の勝利に向かって前進せよ！」 「ソヴィエト人民万歳！」
 narod!», «Uraa!» Buude xeetiu «Ura!» Ljasi egdi nii ġianaiti
 「万歳！」 私たちも叫び返す、「万歳！」と。とても多くの人が歩いている、
 ploshchadili, teunije utebede xeetiti «Ura-a-a!» Utebede ġwanialaamu
 広場を通して、皆 このように叫んでいる、「万歳！」と。このように祝った、
 uteliġini.
 その頃は。

Bii aiwa uteliġini esimi umi, kutu ġwaci amjala jeemei jaaktasiweneini.
 私はウォッカをその頃飲まなかった。とても苦くて、あとで気持ちが悪くなって、吐くからだ。

XIV

Muntigi omocai xuliti bise studentazige selemexoktokci institutalani
 私たちの所へよく 来ていた、 学生たちが、 鉄道 大学で
 tatiwesigetuzi ġiantanami. Nuati munzizi ġie ġusieti. Emne omo jeġdige
 学んでいる連中が、客として。 彼らは 私たちと一緒に 遊んだ。 あるとき一人の若者
 (lusa jeġdigeni), sebie mindule xauntasieni:
 (ロシア人の若者) がまず 私に 尋ねた。

— Udie bii sii?

「ウデへ人かい、君は？」

— Udie biimi, ġou medee?

「ウデへだよ。 どうして？」

— Joude ei bie. Bii bai omo anekdotowe teluġusilemi nixeimi sindu.

「何でもなし。 ぼくはただ 一つ 小話を 言おうと 思って、 君に」

— Jou anekdotani?

「どんな小話？」

— Udiwe anekdotalaiti. Duisije: Ilazanti aġaduni Xabarskala konferencija

「ウデへ人を小話にしている。 聞いて。 三十 年代に ハバロフスクで会議が

bisini. Teuniŋe delegatati emekteeti: kile, maŋmu, ul'cha, nivxe, chukche, あった。全民族の 代表が 来ていた。エヴェンキ人、ナーナイ人、ウリチ人、ニブフ人、チュクチ人、korjaka, itel'mena, namuŋka xontogutude. Nii taundini teluŋusieti, onode コリャーク人、イテリメン人、オロチ人など。 人 ごとに 話した、 どのように bagdifi. (1/2) Zugdile bii kjaŋawa egdime igisilieti, kilezige, chukchazige, 暮しているか。家庭にいるシカ（家畜トナカイ）をたくさん飼いだめた、エヴェンク人、チュクチ人、Korjakaziga. Sugzjawa egdizi taawanaiti maŋmuzige, ul'chazige, nivxezige. コリャーク人は。魚を たくさん 獲るようになった、ナーナイ人、ウリチ人、 ニブフ人は。Udiezigene ono bagdiliētie? Omo udie tribunadigi dianaini: «Buu ei kutu ウデへ人は どう 暮らし始めたか？ 一人のウデへ人が演壇から 言う。「私たちは今 非常に aja bagdiliemu. Anana ŋamakta utiniezi mooktoila tei amtasimi, eitene kutu すばらしい生活になりました。昔は蚊に食われながら 茂みに 座って大便をしました。今では大変 kule: zugdolonifei amusiu, kutu aja!»

便利で、家の中でさえ大便できるんです。なんてすばらしい！」

Bii xonoomi: idigi saini nuani udiewe? Xauntasiemi utawa:

私は 驚いた、 どうして知っているのか、彼はウデへ人を。尋ねた、これを。

— Sii idigi sai udiewe, utempi anekdotowe teluŋusii?

「君はどこから知ったの、ウデへ人を。こんな小話を 話すなんて」

— Bii Arsen'ewe taŋiemi "Dilichi Ouzala", Fadeeve knigawani "Coo

「ぼくはアルセーニエフを読んだ、『デルス・ウザーラ』やファデエフの本 『最 amjauxa udiele".

後のウデへ人』を」

Bii dogdigei utempi kniga biiweni. Taŋimi esimi taŋi, (2/3) utemi,

私は聞いたことはあった、そんな本があるのを。 読んではいなかった。 そこで

bibliotekatigi ŋeneesi, zawaami Arsen'eva knigawani "Dilichi Ouzala". Taŋimi 図書館に 行って、 借りた、 アルセーニエフの本 『デルス・ウザーラ』を。読み

mutuesi, muisiliemi: imi Dilichi gol'dazi gegbisieni memi? Esini saa nuani

終わってから、考えた。なぜデルスがゴリドと名乗ったのか、自分のことを。知らなかったのか、彼は

utebede lusazige injektemi gegbisieweti teu minti niiwe? Udiede bizeneni,

こんなふうにロシア人が軽蔑して呼んだのを、すべて私たちの民族を？ ウデへであれ、

maŋmude bizeneni, namuŋkade bizeneni, daazade bizeneni xontogutude.

ナーナイであれ、 オロチであれ、ターズ[中国化したウデへの一派]であれ、他の人たちも。

Utelienini bii xai ajazi esimi saa, imide daazazi gegbisieweti ezjele

そのとき 私はまだ よく 知らなかった、どうして ターズと 呼ぶのか、 南に

bagdigetu udiezigewe, utemi esimi egze, imide Fadeeve knigalani udie

住む ウデへたちを。だから わからなかった、どうしてファデエフが彼の本でウデへの

gegbineni bisiti Sarle, Ljurle. Bii amjala sagiemi utempi gegbi daazazigele

名前としていたのか、サルルやリュルルを。私はあとになってわかった、そんな名前がターズ人に

biiweni. Teŋ ele bisini nuani onjooni udele daazaziga bagdieleti. (3/4)

あるのを。ちょうどぴったりだった、彼が書いた 場所に ターズ人が 住んでいる。

Daazaziga anana udiezige bisiti. Niŋka kialani bagdimi, utigetū kejezini
ターズ人は かつて ウデヘ人だった。 中国人の近くに 住んでいて、彼らの ことばで
dianalieti, utemi ei niŋkalaiti.
話すようになり、それで今では中国化している。

Delichuwe waamatitene kutu munjaliemi. Nii waani? Eidexi niide eini
デルスを 殺したのを とても 残念に思った。だれが 殺したのか、今でもだれも
saa, buŋienide anci edeeni. Ono biini uti? Jou geeweni nixeeni? Niidu
知らない。墓さえ なくなった。 なぜなのか、これは？ 何か 悪いことを したのか？ だれかに
daŋuleeni uti mafasa. Buazegeleni mene bagdimuse. Nuamani waati amjalani,
邪魔をしたか、この老人が？ 森に 自分で住んでいればよかったのに。彼を 殺したあとで、
zū aŋa duleneisini, bii amii bagdieni. Nuanide Arsen'evazi eteteeni Unile
二 年 たってから、私の 父が 生まれた。彼は アルセーニエフと 仕事をした、アニユイで
bagdiŋe. Teluŋusigeze Delichuzi xuliemi buazegeleni. Arsen'eve kutu ajazi
暮していたとき。(彼は) 話しただろう、デルスと歩いたのを、森を。アルセーニエフはとてもよく
onjogieni Delichu pakiweni. Udie kejeweni onjomitene teŋ esini onjogi.
書いた、 デルスの 技量を。 ウデヘ語を 書くのは 正確に 書かなかった。
Ono dogdimi, ono onjogieni, utemi (4/5) Fadeevde udie kejeweni teŋ esini
聞いたままに 書きとめた。 だから ファデーエフもウデヘ語を 正しく
onjogi. Lusa giazini onjosieni. Saina, udiemezi ajazi esini egze, utemi
書きとめていない。ロシア文字で書いているが、たぶんウデヘ語をよく理解していなかったために、
utebede onjogieni.
あのように書いたのだ。

Bii utelienjini tene saami utempi kniga biiweni. Uti amjalani galaktaami
私は そのとき 初めて 知った、こんな 本が あるのを。それ 以来、 探した、
xoŋto knigawa minti udiefi bagdiweti onjosowe, omomode esimi baa.
ほかの 本を、 私たち ウデヘ人の 生活を 書いたのを。一冊も 見つからなかった。
Muzejatigide xuliseemi, udiezige xazuwetide iseemi. Muzej ukelenitene sagdi
博物館にも 行って、 ウデヘの 物も 見た。博物館の 前庭には 巨大な
waŋba biini, kadazi woso. Utawa Ussurijske kialani baati, ouxi gazieti.
亀が ある、岩で 作られていた。これを ウスリースクのあたりで発見して、ここに運んだ。
Anana anana jouke "Aisin Guruni" bisini, minti saŋtafi. "Aisime golowe"
遠い昔に 何か 「金帝国」が あったが、私たちの先祖だ。「金帝国」を
Chingisxane magieni, uti amjalani jou golonide anci edeeni. (5/6) Utebede
チンギス・ハンが破壊し、その 後、 どんな 国も なく なった。 こうして
njanja-njanja saandaami bii mene saŋtafi bagdiemeti. Saina, uti amjalani
少しずつ わかるようになった、私は自分の 先祖の 生活について。たぶん、この あと
xoloptogieti niizige susaati namu kiatigini, utala xoŋtozige niizi solikteeti.
生き残った 人々が 逃れた、海岸の 方へ。そこで ほかの 人々と混じり合ったのだ。
Utebede bisini bize.
そういうことだったのだろう。

Literaturawa tatusimi jamadaxem knigawa tanjuzeŋe. Taamati, zakpunti
 文学を 勉強するには、いろいろな 本を 読むべきだ。 去年、 八年生の
 klassala, lusa teluŋuweni, anana bagdieti ekiweni onjosowede tanjimu.
 クラスで ロシア人の話を、 過去の 生活の 時代を 書いたのを 読んだ。
 Utebede tatusiemu programmala obolieteti: Lomonosowe, Radishchewe,
 こうして 学んだ、 教材を。 ロモノソフ、 ラジシシェフ、
 Fonvizinowe, Karamzinowe, Griboedowe, Pushkinowe, Lermontowe, Goglewa,
 フォンヴィジン、カラムジン、 グリボエドフ、 プーシキン、 レールモントフ、 ゴーゴリ、
 Belinskowe, Dobroljubowe. Nuati onjooti egdi knigawa nii bagdieni xoktowe.
 ベリンスキー、ドブロリュボフなどを。彼らは書いた、多くの本を、 人々の暮した 歴史を。
 Sebzŋkezi onjooti. Utawa tatusimi, meje baagiu. (6/7)
 おもしろく 書いている。これらを 読めば、 知恵が つく。

Ei tatusiuj aŋaduni, jeinti klassala, munawa burjata aantani tatusilieni.
 今 学 年、 九年生のクラスで、私たちが ブリャート人の女性が教え始めた。
 Seeweni zoŋimi, gegbiweni imike oŋmogiemi. Saina, sagdaŋimi dilii dujeni
 名字は 覚えているが、名前を なぜか 忘れた。 たぶん、年をとって 頭の 先端が
 gee etetelieni bize. Elegemi cimne, eimi onjo gegbiweni. Seenitene
 働かなくなったのだろう。 嘘にならないよう、書かないでおく、名前を。 名字は
 Ulanova bisini. Nuani mafani Gaxanove matematikawe tatusieni fizmate
 ウラノワ だった。 彼女の 夫 ガハノフは 数学を 教えていた、物理数学部の
 studentazigeweni. Uti tatumni aanta omoti xauntasii bise, onode bizeneweni
 学生に。 この 女の先生は いつも 尋ねて いた、 どう であるかを、
 udiemezi joudekke kejeni. Bii dianaisii, dilizi gigjaimi gunei bise:
 ウデへ語で 何かの 単語が。 私が 答えると、 首を 振りながら、言っていた。
 — Xoŋto, bii kejelei utebede eini bie. Utemi imi gegbisiti sunawa
 「いいえ、 私のことばではそうではありません。 それなのにどうして呼ぶの、あなた方を
 udezi? Buu coo sagdi xotou Ulan-Ude biini. Iseinu, suu ude, buu
 ウデと？ 私たちの一番大きな 都市は ウラン・ウデです。 ほら、あなたたちはウデで、私たちの
 xotoude ude. (7/8)
 街もウデでしょう」

— Buu memi udiezi gegbisii. Udezi munawa lusaziga gegbisiti, utemi
 「私たちは自分のことをウデと言います。 ウデと 私たちを ロシア人も 呼びます。 でも
 eimi saa, joude biiweni "ude".
 わかりません、何であるのかを、ウデというのが」

Nuani dianka, onozie lusamazi biiweni ude. Oŋmogiemi bii ei, utemi
 彼女は 言った、 どう ロシア語ではなるのか、ウデが。 忘れた、 私はこれを。 だから
 joude ezeŋei onjo, jou kalanide biiweni uti "ude".
 何も 書かないでおこう、 何 者 なのかを、この ウデというのが。

Nuani omoti dianai bise, bii izlozheniwe diktantawe onjoomei jouktesiemi
 彼女は いつも 言って いた、 私が 作文や 書き取りを 書いたのを 調べた

amjalani:

あとで。

— Aja onjoliej, nia caixi temene bije, sii elegemi pagadi.

「良く書けるようになりましたね。これからも気をつけなさい、あなたは間違わないように」

— Asasa, ezenjei pagadi. Bii ei egdi knigawa tanjimi.

「ありがとうございます。間違わないようにします。ぼくは今たくさんの本を読んでいます」

— Tanisewe telunusigije paizini. Utatene ajazi nonilizenjei lusamazi

「読んだことを話さない、章ごとに。そうしたらうまくできるようになります、ロシア語で dianaimi. Onjogimide jougu paiweni aja bizeheni. (8/9)

話すのが。書き写したら、各章を、なおさら上手になります」

«Tanjuij — uti asi aja tatusin̄ku!» Utebede ceze biiweni, bii sagiemi

「読書、これは一番良い勉強だ！」それが本当だと、私はわかった、 knigawa tanjimi. Bii jamadaxem gazetawa, zhurnalawa tanjimi, kinotigi, 本を読みながら。私はいろいろな新聞や雑誌を読んだり、映画館や teatratigi xuliemi, geinigesiwetide ajuliemi isesimi. Coos sebzen̄ke niizige 劇場に行ったり、競技を好きになった、見るのが。一番おもしろいのは、人々が volejbolawa, basketbolawa gusiiweti isesimi. Coos manga komanda バレーボールやバスケットボールをやるのを見ることだ。最強の（バレー）チームは "Lokomotiv". Utala studentaziga tatumnizigede selemexokto institutalani 「ロコモチフ（機関車）」で、そこには学生たちや教師たちも（いた）、鉄道大学で niasuleigetū, tatusiigetū. Adol'f Mager, Viktor Pasternak xontogutude kutu 学ぶ者、教える者が。アドルフ・マーゲル、ヴィクトル・パステルナークなどが、ものすごい seunizi dukteiti adili loosely xondilini mjachiwe. Buu institutau komandalanide 勢いでたたき込む、ネットを掛けた上からボールを。私たちの大学のチームにも、 bisiti aja gusiigetū: Igor' Maslov, Anatolij Buda, Pjotr Red'ko いた、いい選手が。イーゴリ・マシロフ、アナトリー・ブダ、ピョートル・レジコ xontogutude. (9/10) など。

"Lokomotiv" "Iskrazi" mai. "Iskra" — uti buu institutau komandawani

「ロコモチフ」は「イスクラ（閃光）」より強い。イスクラ、これは私たちの大学チームを gegbisiti utebede. Nuati jegdigeti asi gugdan̄ku: egdigetu omo metra 呼んでいた、そのように。彼らの選手たちは非常に背が高く、大きいのは一メートル zakpuza santimetra xulemie biiti. Mager gugdani omo metra jeiza zuu 八十センチ以上がいます。マーゲルの身長は一メートル九十二 santimetra, utemi nuati blok xondilini dukteiti. Buu eeleu omode anci omo センチあって、それで彼はブロックの上からたたく。私たちの方には一人もいない、一 metra zakpuza santimetradu, coo gugda Maslov, Red'ko — omo metra メートル八十センチに（届く者が）、一番背が高いマシロフやレジコで — メートル nadaza njūu santimetra. Utebede bisini. 七十センチだ。こんふうだった。

Emne buu institutau sportzalalani gusineeti voennazige. "Iskra" asagdieni
ある日、私たちの大学 体育館に 試合に来た、軍のチームが。イスクラが迎え撃った、
nuatizi. Bii muisiemi, oficerazi pakile biiti. Buu jegdigeu nuatigi jou
彼らを。私は 思った、将校たちのほうが強いだろうと。私たち若者のほうが彼らより
bualani (10/11) ajazi gusiti. Oficeraziga ilaza see xulemie bisiti, utemi
ずっと うまく やる。将校たちは 三十 歳を 越えて いて、それで
bogoloo emugdeti jueti. Nuati utemi gabdizi esiti gusi. Sueti "Iskradu"
太った お腹が 出ていた。彼らはそれで すばやく 動けなかった。負けた、イスクラに
0 : 3. Mene olindi "Iskra" amjala sueni "Lokomotivedu" 2 : 3. Utebede
0 対 3 で。自分たちの方イスクラも あとで 負けた、ロコモチフに 2 対 3 で。このように
omoti "seleme" maiktueti, nuati chempiona Xabarske eeleni bisiti. Xontogutu
いつも鉄道大学のチームが最強で、彼らがハバロフスク地方のチャンピオン だった。ほかの
komandazigede suusieti "Lokomotivedu". "Iskratene" maizi geinigesieni nuatizi
チームも かなわなかった、ロコモチフには。イスクラだけが何とか競り合っていた、彼らと
gie-gie. Utebede bise utelienini.
そこそこ。そんなふうだった、当時は。

Bii muisiemi, alide ezenei nonili utebede gusimi. Ono zawauzene uti
私は 思った、決して できないと、こんなふうにプレーするのは。どう受け止めるか、この
mjachike pou maalinibede dieliweni. Biduge jegdigezige, utawa lek
ボールが 大砲の 弾のように 飛んで来るのを？ いたのだ、選手が、これを 巧みに
asagdigetu. (11/12) Buu institutau komandalanide bise utempi naonzaka.
受け止めるのが。私たちの 大学 チームにも いた、そんな 選手が。
Chmutine Gosha nuani gegbini. Nekteseide gugalani, njanga bogoloode,
チムチン・ゴーシャが彼の 名前だ。低いぐらいの 身長で、少し 太っていたが、
utemdu nuani xaata tikeweneeti mjachiwa uixi uindegii paki bisini. Taamati
それでも 彼は 猛烈に 打たれた ボールを 上に あげるのがうまかった。去年
nuani "Dinamola" gusieni. Skolala tatusimi mutuesi, fizmatala tatusilieni,
彼は 「ジナモ」でプレーしていたが、学校を 卒業して 物理数学部に入った。
utemi "Iskra" eeleni gusilieni.
それで イスクラの方で プレーするようになった。

Bii xonto baatazigazi gjaņa deumpii nejiduni gusiu sportzalala,
私は ほかの 少年たちと一緒に毎週 日曜日に 練習する、体育館で、
nonilikceemu utebede gusimi. Omo neņini tai gusiu, sikiegixini tjasi deu.
うまくなろうとしている、こうして練習して。一日中 練習して、夜は ぐたくただ。
Ali gifali neņini sportazala bixini, ali gusiu. Sulaidiga Vasjawade,
いつでも空いている日が体育館に あれば、すぐに練習する。スリヤンジガ・ワーシャにも、
xontogutu njoulazigawa, tene tatusilneweeti nonisiu. (12/13) Utebede omo
ほかの 若者たち、今年勉強に来たばかりの連中にも教えた。こんなふうに一
tueni kaide. Ekenesezini noniliemu. Utemdu xai geele gusiu.
冬 中も。少しずつ 慣れてきたが、それでも まだ へたくそだった。

Dekabr' malaptaileni, buu kanikula nejiduni zugtigi ŋeniemu. Sexime
 十二月の 終わりには 私たちは冬休みで 実家へ 帰った。 布の
 sinala xoktola digalagafi zeuwe teugiemu, njoulaziga zugdile digasilegeti
 リュックに道中で食べるために 食料を 詰め込んだ。子どもたちが 家で 食べるために
 prjanikawa, pechen'ewa, konfetawa gadaasi, sikie xuecele unalagami gulinjiem
 お菓子や クッキー、 キャンデーを 買って、 夕方、 列車に 乗るために 出発した、
 avtobusazi vokzalatigi. Pjouwe gadaasi, alasiliemu. Muna Vera minawa
 バスで 駅へと。 切符を 買って 出発を待った。ムノワ・ヴェーラが私に
 keleenii bii bulochkawa bufetala gadalagai. Sinai nuati kialati nedeesi,
 頼んだ、私が 菓子パンを 売店で 買うように。リュックを彼らのそばに 置き、
 geeneemi. Uti ekindini teulieti poezdala niiwe. Biitene agduseemi Vasjatigi,
 買いに行った。その とき 乗せ始めた、列車に 人を。私は 当てにしていた、ワーシャや
 Veratigi bii sinawa tafjasilegeti. Zeuwe gadaasi, emegiemii uti udetigi, ile
 ヴェーラが私のリュックを持って行くのを。食べ物を買ってから、戻った、 その場所に、(そこに
 ilieleti. Niiwede (13/14) esimi baagi. Teuniŋe njukteeti wagonala unalagafi.
 さっき) 立っていた。だれも 見当たらない。みな 行ってしまった、列車に 乗るために。
 Bii duŋsiide anci. «Saina, menzi gie xebueti», — muisiemii bii. Wagonala
 私の 荷物も ない。「きっと 一緒に 持って行ってくれたんだ」と思った、私は。列車で
 xauntasiemi, ilede nedeemeti bii sinawai.
 尋ねた、 どこに 置いたかを、私の リュックを。

— Eseu zawa buu utawa. Utala amjasaani», — dianagiti nuati. Bii amaixi
 「持って来てないよ、ぼくたちはそれを。あそこに置いてきた」と答える、彼らは。私は戻って
 tukjagiemii, iledexem galaktaliemi, esimide baagi. Mindu dianaati:
 走り、 あちこち 探したが 見つからなかった。私に(周りの人が) 言った。

— Sii gagdanau gaagietii, ei bie.
 「君の 友達が 持って行ったんじゃないの」

— Esiti, — guneemii bii.
 「持って行ってないんだ」と答えた、私は。

— Uta niike zomieni, safani, bai ezi galakta, ŋenie wagonatigi,
 「それなら、誰かが盗んだんだ。仕方ない、むだに探すな。 戻りなさい、列車に、
 amjasaidele.
 遅れないうちに」

Bii utawa egzegimie, tukjagiemii tugezi wagonatigi. Vasja, Vera, utawa
 私はそのとおりだと思い、 駆け戻った、すぐに 列車に。 ワーシャとヴェーラはこれを
 saimie, diankiti:
 知って、言った。

— Aja, xoktolo digazaŋafi egdi, ele bizeneni teuniŋedu».
 「大丈夫、道中 食べられるさ、たくさん。十分あるよ、みんなに」

X V

Utelienjini xuecezi Burlitala iineesi, eugiu utala. Caixi Fedos'evkali

このときは列車でブルリトに着くと、降りる、そこで。そこからフェドシエフカを通して
 ɲeneew Blagoveshchenka kialinide, utadigi Bikiwe zugeli dougiesi, Ezeuxe
 行った、ブラゴベシチェンカのあたりを抜け、そこからビキンの氷上を渡り、ニジュヌイ
 Dabaule sakiene iigiu. Utala aɲasiu. Gagda neɲini Soljoxo Dabautigi ɲeniu.
 峠に 夕方には 着く。そこで 一泊する。翌日には ヴェルフヌイ峠に 着く。
 Buu obozawa esimu dubda, ɲenimi, asagdizeɲeu xoktolo, eitene loxoi
 私たちは馬櫓の列に出会わなかったが、進みながら、会うだろう、道中で。今度は 徒歩で
 gianaliemu timeedule, suu gakpaidigini. Vera aziga bimi, gaiti deuweni, bii
 出発した、 朝、 日の出とともに。ヴェーラは女の子で、すぐに疲れてしまったので、私が
 nuani sinawani xebuimi. Sikie iineemu Googula bualani. Utala aɲasiemu.
 彼女の リュックを持つ。 夕方に たどり着いた、ゴングラザの所まで、そこで一泊した。
 Xai utitule maɲmu mafasani etusini uti zugdiwe. Igu-odo digawanaani
 いつもどおり ナーナイの 老人が番をしている、この小屋を。イエゴルじいさんが食べさせてくれた、
 munawa. Bii deuweni nɲangade, utemi ingule esimi ɲuagi. Goo teemi bilici
 私たちに。私は 疲れていた、少しだけ。それで すぐには 寝なかった。ずっと座っていた、炉の
 kialani, Iguzi jougu-jougu (1/2) diasimide. Utemdu dogdimi buala niike
 そばで、イエゴルじいさんとあれこれ 話をしながら。突然 聞こえた、外で だれかの
 kejeweni. Njuesi, dogdimi abuga kejeweni xontogutuwede, mui simpiweni,
 声が。 出してみると、聞いた、 父の 声と ほかの人のや、 馬の 鼻息、
 maafali imala ugzaiweni. Abuga dianaini:
 櫓が 雪に きしむ音を。 父は 言っている。

— Niintazigei, oli douzefi, diami zuge olo.

「おいみんな、ここを 渡ろう、 厚い 氷だ、ここは」

— Ezeɲefi compo?

「落ちないか？」

— Aja, mai zuge, tjak-tjaɲ biini, ɲeneweneu muiwe.

「大丈夫だ、硬い 氷だ、しまっ ている。 行かせろ、 馬を」

Bii kektimewe ouwemi, abugatigi ɲeneemi, bagdigiem. Abugatene mindu

私は 川べりを 降りて行って、父に 近づき 声をかけた。 父は 私に

dianaini:

言う

— Sii jou nixei olo?

「おまえは何してるんだ、こんな所で？」

— Bii tene waatanɲi emeemi Dabaudigi, — diagiemi bii.

「ぼくは つい さっき 着いたんだ、峠から」 答えた、私は。

— Xeej, tukca siteni, imi esimi tagdagi bii mene baatanɲi, aa? Eje, bii

「おやまあ、こいつときたら、何で気づかなかったのか、俺は自分の息子に？ おい、俺は

sitezii baagdigiemi!

息子に 会ったぞ！」

— Uti aja, kesixi bii sii, baata amini. (2/3)

「そいつはよかった、幸せ者だな、父さん！」

— Abuej, ali mudanizeñeu amaixi? Imexi aṇawa ile asalizeñeu? Imi

「父さん、いつ 帰って来るの、また？ 新 年は どこで迎えるの？ どうして
zugdu eseu asali? — xauntasimi bii abugei.

家で 迎えないの？」 尋ねる、 私は 父に。

— Timana iinezeñeu Ezeuxe Dabaule. Timancaalani, zaawa teugiesi,

「明日 着く、 ニジュヌィ峠に。 あさって 荷物を 積み込んでから、
Soljoxo Dabautigi emegizeñeu utala asalizeñeu imexi aṇawa. Uti omo minga
ヴェルフヌィ峠に 戻って、 そこで 迎えよう、 新 年を。 これが 一 千
jei tangu tuṇaza zuunti aṇa edezeñeni. Sii, site, niizi emegii?

九 百 五十 二 年に なるだろう。おまえは、息子よ、だれと帰るんだ？」

— Buu ilantune gianau, Vasja Verade minzi gie ñeniiti zugditigi. Ei

「ぼくらは 三人で 歩いてる。ワーシャとヴェーラがぼくと一緒に帰る、 家に。 今は
ṇuajiti zugdile.

みんな寝てるよ、小屋で」

— Aa. Ei aja ñenizeñeu, xoktowe ajazi woogiemu. Ga, ñenije,

「ああ、そうか。今はらくに歩けるだろう、道がよくできたから。 まあ、戻れ、
ñjamsinegiye, gektiej bize. Buu, muiwe luktagiesi, digalagati buesi, emezeñeu.
体を暖めるんだ、寒い だろう。俺たちは、馬を はずして 餌を やってから、行くよ」

Uti sikieni buu abugazi goo esimu ṇua, diasiemu. Obozaṇkuzige

その 晩、 私と 父は 遅くまで 寝ずに、 話をした。 馬轡の御者たちが
timadule (3/4) dii chasala teegieti, lṇasi jēnpenezi diasiti, niike oloktoini,
朝の 四時には起き出して、大声でにぎやかに 話す。だれかが食事の支度をすれば、
xontogutu, teemi damisiti, joudexem sebzeñkezi teluñusimide, utemi tṇasi
残りの連中は座って煙草を吸いながら、いろんなおもしろおかしい話をして、それで 大
injeiti.

笑いしている。

Digasimi mutuesi, obozaṇkazige, muifi alugimie, gulineeti caixi. Buutene

食べ 終わると、 御者たちは 馬に 轡をつけて 出発した、 先へ。 私たちは
alasiliemu suu gakpaiweni, njamaizi ñenelegefi. Suu zee gakpaisini,
待った、 日が 昇るのを、 暖かく 行けるように。 日が まさに 昇ると、
gianaliemu maafali xoktoni culinide. Ei kutu aja edeeni, kulezi gianau.
歩き出した、 轡の 道に 沿って。 今はとてもいい天気になって、快調に進む。

Buu einenṇi bodosiu Oloṇole iinelegefi. Googula Oloṇo agdalini nia bise
私たちは今日 考えている、オロンまで行くことを。 ゴングラザとオロンの 間に また あった、
omo zugdi, utauxi kakta neñizini iineu. Janami aṇasizemu utala bazizi,
一軒の小屋が。そこまでは 半 日で 着く。 どうして 泊まるか、 そこに、急いで。

utemi utala iineesi, saljasiemu, uti amjalani njanga deuncendeesi, gulinjimu (4/5)
 それで そこに 着いてから、昼食をとった。そのあと 少し 休んで、 出発した、
 caixi. Utadigi Cinde jogosolini welegde xoktonisieti. Caixi gianaimie, Vera,
 また先へ。そこからチンタファの流れの入り口まで道ができていた。 先へ進みながら、ヴェーラが
 deuvesi, omoti amjasaini. Buu Vasjazi eke njeneu, alasiu nuamani. Azigatene
 疲れて、 絶えず 遅れている。 私と ワーシャはゆっくりと歩いて、待つ、彼女を。 少女は
 omoti in-in teekceini imala. Buu kaniu. Vasja nuani amjalani gianalieni,
 常に 何とか 座りたがる、雪の上に。私たちは許さない。ワーシャが彼女のうしろに付いて、
 biitene zulieleni ekenesezi njeneimi. Weleleni iineliew biseu, mui simpipweni
 私は 先頭を ゆっくりと 行く。 支流の口に近づいて来たころ、馬の 鼻音が
 dogdijei. Utemi, ekiesi, amaixi etenjiemi, dianalagami, muizi niike asagdi
 聞こえた。 そこで、立ち止まり、後ろを振り向いた、言おうとして、馬でだれかが向こうから
 emeiweni, nuatiwetene esimi ise. Uti bii, gianaimie, esimi mede nuati
 やって来ることを。彼らは見当たらなかった。これは私が歩きながら、気付かなかった、彼らが
 amjasaamati. Alasixi ekindini, mui dilini ilaktanaa, amjatali bejeni, maafali,
 遅れていることに。待っていると、 馬の 頭が 現れ、 そして 体、 櫓、
 utalatene Vasja (5/6) agani Ljounja, nenjuni Pete teiti. Minawa isemie,
 そこには ワーシャの 兄 リョーニャ、 弟 ペーチャが座っている。私を 見て、
 ekiweneeti muiwe.
 止めた、 馬を。

— Baagdifi, Andale! Ile biiti Vasjade Verade? — xauntasini Ljounja.

「やあ、アンドレイ。 どこにいるんだ、ワーシャとヴェーラは？」 尋ねた、リョーニャが。

— Nuati njanga amjasaati. Vera ljasi deuweni. Bii esimi medee

「彼らは 少し 遅れて来るよ、ヴェーラがとても疲れてるんだ。ぼくは気づかなかった、
 amjasaamati. Efili tjoŋo caazadigini ilaktanazaŋati, — injemi, diagimi bii.
 彼らが遅れたことに。もう曲がり角から 現れるころだ」 笑いながら答えた、私は。

Goode eimi bie, ilaktanaduge, Vera zuke gianaini. Utawa isemie,

しばらくして、 見えて来たが、ヴェーラはようやく歩いている。それを見て

muisimi: «Esiti asali bisie, ono dogbouzeŋeu buu, gektimi budemuseu,
 思った。 「もし会わなかったら、どうやって夜を過ごせただろう、ぼくらは？ 凍え死んだだろう、
 sainade».

きっと」

Pete nadanti klassala tatusieni. Sjajele, kutu jueni, mindigi gugda

ペーチャは七年生のクラスで勉強していた。シャインで、とても背が伸び、私より高く
 edeeni, utemdu kutu koŋoktu bisini.
 なっていたが、 とても 痩せて いた。

Ljounja diankini:

リョーニャが言った。

— Obozaŋkazige, Soljoxo Dabaule iineesi, (6/7) telefonali sawaŋkiti

「御者たちが ヴェルフヌィ峠に 着いてから、 電話で 知らせてくれたんだ、

Munedu.

ムノフ [ヴェーラの父] に」

Utemi nuani Ljounjadu diankini asalilegeni munawa. Kutu aja!

それで 彼は リョーニャに 言った、迎えに行くように、私たちを。本当によかった！

Gektimuseu buu! Utadigi xai zaa zakpu kilometra bisini Olojotigi. Buu

凍え死んでいただろう、私たちは！ ここからまだ十八キロも あった、オロンまでは。私と

Vasjazi iinemuseu dogbo, Verawatene emuseu weente. Ljounja Petezi

ワーシャは着いただろう、夜に。ヴェーラを残して行くことはできなかった。リョーニャとペーチャは dianaiti:

言った。

— Suu gianau caixi ekenesezi, buu boonizeŋeu sunawa efilide. Buu

「君たちは行って、先に ゆっくり。ぼくらは追い付くから、君らに すぐ。 ぼくらは teetile dawawa teugiesi, aagizeŋeu sunawa.

あっちでサケを 積み込んでから、追いかけるよ、君たちを」

— Bii eimi mute gianaimi caixi, — guŋkini Vera.

「私は 歩けないわ、 これ以上」 と言った、ヴェーラは。

— Utemi alasindeu olo njangade, buu gaiti mudanizeŋeu.

「そしたら 待ってて、ここで ちょっと。 ぼくらはすぐ 戻るから」

Imali igbelieti muiwe. Sto metra xeenkini ŋeneimie, mudanietii.

雪道に沿って走らせた、馬を。 百 メートル 余り 走ったところで、戻って来た。

— Aa, ima sunta, mui deuzeŋeni, safani, unagijeŋeu, guliŋizefi (7/8)

「ああ、雪が 深くて、馬が 疲れてしまう。仕方ない、乗って。 行こう、

xelibezi, dogbogini.

急いで、 日が暮れる」

— Odigi adi chasala iinegizeŋefi Olojolo, — xauntasiemi bii.

「ここから 何 時間で 着くかな、 オロンに？」 尋ねた、 私は。

— Ei dii chasa, xoloptosoxoktowe ila chasa xeenkini tukjanzi, giananzi

「今 四 時だから、残った 道を 三 時間 ほど 駆け足、 並足で

ŋenelie duleneteze. Mundule aŋasizeŋeu, dogbo jouxide ezeŋeu ŋene, timana

行けば 過ぎるだろう。うちに 泊って行けばいい、今晚はどこにも 行かないで。 明日

bii sunawa Sjainetigi neugizeŋei.

ぼくが君たちをシャインまで送ってやるよ」

Vera ingule woktozi soktuse maafalile keptegieni, jaaj nifigiesi. Nuamani

ヴェーラはすぐに干し草を 敷いた 櫓の上で、横になった、目を 閉じて。 彼女に

Ljounja daijeeni subazi. Goode eimi bie aziga ŋualieni. Buutene eku teew,

リョーニャが掛けてやった、毛皮外套を。じきに少女は眠ってしまった。私たちはじっと座っていた、

diasimiede. Mui ali-ali tukjanzi ŋeneini. Buude, elegemi gekti, maafali

話しながら。 馬は ときおり 駆け足で 行く。 私たちも 寒くならないよう、櫓の

amjatali tukjau. Peitegisini iinjemu Olojolo. Timadule, suu uile degdegisini,

うしろを 走る。 夕闇の迫ったころ着いた、オロンに。 翌朝、 日が 高くなってから、

gulinjimu zugtigi. (8/9)

向かった、家に。

Ljounja omoti tukjawanaini muiwe. Xoktowe dulugaafa iineisiu, asagdigi
リョーニャが絶えず 急がせる、馬を。道を 半分来たところで、こっちに向かって
mui tukjaini. Maafalile Pete Ljubazi teejiti, munawa Oloṅolo geenegilemi
馬が 走って来る。櫓には ペーチャとリューバが乗って、私たちを オロンまで 迎えに
ṅeneiti. Ljuba Vera xunazini, nuani nadanti klassala tatusini. Xokto
来るところだった。リューバはヴェーラの姉で、彼女は七年生のクラスで学んでいる。道の
kialani Sienke jogosoni ejeini. Utala muiwe umiweneiti ulizi. Baagdigiesi,
脇に シゴウの 支流が 流れている。そこで 馬に 飲ませる、水を。出会ってから、
Ljounja Petezi xuugiweeneeti muiṅifi amaixi. Buu Petezi, Ljubazi Sjainetigi
リョーニャとペーチャは向けた、馬を 元の方へ。私は ペーチャ、リューバとシャインヘ
ṅeniu, Ljounjatene Oloṅotigi mudanjini.
帰る。リョーニャは オロンに 戻る。

Muiwe umiweneesi, Pete xaata tukjawanaani xelibezi njamisigileni: gili
馬に 水を飲ませてから、ペーチャは懸命に走らせた、早く 暖めるために。冷たい
uliwe umieni ei bie. Xokto aja bixini gaiti iinjemu zugtigi. Neṅunei teu
水を 飲んだ じゃないか。道が いい ので、すぐに 着いた、家に。弟や妹たちがみな
agdaati, biitene jouwede esimi gazi, xagzafie bise. Njoulaziga egzeeti, utemi
喜んだが、私は何も持って来れず、申し訳ない気持ちだった。子どもたちはわかってくれて、それで
bii emegiewei (9/10) tjasi agdaati. Biitene nuatidu diankimi, zua emegilie,
私が帰って来たのを とても 喜んでいた。私は 彼らに 言った、夏に戻って来るときには、
egdime gazizeṅei, kompetawa, prjanikawa, pecenewa. Eniṅe injamundeeni,
たくさん 持って来ると、キャンデイやお菓子、クッキーを。母は 涙ぐんだし、
Pabuliketene kui egdi edeemeni iseweneeni. Mai baata juini, kagbali-kagbali
パヴリクは 力が 強く なったのを見せた。強い 子に なった、たくましく
edeeni. Pete muiwe neguseesi, emegimie, xonṭo tegewe tetigieni. «Efil
なった。ペーチャは馬を 引いて行って、戻って来ると、別の 服に 着替えた。「すぐ
emegizeṅei», — gunemie, baixi njueni. Eniṅe ele-ele jatasizeṅeni, emdeni
戻る」と言い残して 外へ 出て行った。母は もうすぐ 子どもが生まれるので、もう
sagdi biini, bii munjalimi nuamani, nuanduni diiza see, xai sitewe baini.
大きなお腹をしている。私は氣遣った、彼女を。彼女は 四十 歳で まだ 子どもを生むのだ。
Teuniṅe gie saljasiemu. Pabulika Zinede imexi aṅawa skolala guanjalaiwatide
みな 一緒に 昼ご飯を食べた。パヴリクとジーナは 新 年を 学校で 祝ったのに、
esimi dubda, nuati tiinenṅi aiṅeleeti imexi aṅawa asalimi. Pabulikazi moowe
私は出そびれた。彼らは 昨日 祝った、新 年を 迎えるのを。パヴリクと 薪を
laagiemu ziuṅzi, zugtigi daudaṅalagiemu (10/11) inṅulede, ilama neṅidu ele
切り出した、鋸で。家まで 運んだ、すぐに。三 日は 十分
bizeṅeni.
もつだろう。

Pete, emegiesi, gaisini minawa Munezigele imexi aṇawa asalilegefi.

ペーチャは戻って来ると、誘った、私を、ムノフ家で 新 年を 迎えようと。

Ivan Konstantinovich, xaulie, emelegeu diaṅkini. Eniṇe diaṅkini ṇenelegei.

イワン・コンスタンチノヴィチ [ムノフ] がどうか来るように言った。母は言った、行くように。

Sikiegixini, Petezi xuliseemu Munatigi. Digauzeṇe jamadaxem zeu oloktooni

夕方 ペーチャと出かけた ムノフの所に。食べるように たくさん ご馳走を用意していた、

Vera enini. Sebie aiwa umindeemu buu, uti amjalani digaliemu. Bii ei

ヴェーラの母が。最初 ウォッカを 飲んだ、私たちは。それから 食べ始めた。私は それ

zulieni aiwa asuli esimi umnasi, gwaci bixini, galuemi. Eitene, umiemi

まで ウォッカをあまり 飲まなかった。 苦い ので 嫌いだった。今、 飲んだ

amjalani, dilii xau edeeni, degdii (mindu Pete diaṅkini) xutaam edeeni, dilii

あとで、 頭が ボーッとして、 顔が (私にペーチャが言ったのだが) 赤く なり、 頭が

xaunilieni. Bii nadanti klassawa mutuemi amjalani emneete umiemi bolo

くらくらした。私は 七年生を 終えた あと、 一度だけ飲んだことがある、秋に

tatusinemi ṇeniṇei Kja Borjazi (11/12) Oloṇolo. Ei umimi njaṅga

勉強しに 行くとき、キャ・ボーリャと オロンで。 今 飲んで、 少し

soktondoomi. Uti ekindini niizige omoti xuliti aiwe geenemi. Muna zugtigi

酔っぱらってきた。このときは 人々が 絶えずやって来た、ウォッカを目当てに。ムノフが家に

gazieni magazinadigi aiwa. Biseesi Saudiga Genade emeeni aiwa gaṇṇami:

持って来た、店から ウォッカを。しばらくするとスンジガ・ゲーナも来た、ウォッカをねらって。

nuani mamasalaini einenṇi, mamasaninitene Suanṅka Roza, nuani minzi gie

彼は 結婚する、 今日。 花嫁は スアンカ・ローザだ。彼女は 私と 一緒に

tatusige skolala, einenṇi mafalaini. Bii Genawa ajazi bagdileni zasiemi, egdi

勉強した、学校で。 今日 嫁に行くのだ。私は ゲーナが 幸せに 暮すよう 祈った、たくさんの

sitewe baalagani. (Niozi dianaimi, ceze egdi sitewe baati — zaa omowe

子どもにも恵まれるように。(前もって言っておくと、本当にたくさんの子どもをもった、十一人もの

azigawe, baatawe). Bii, zugtigi emegiesi, ṇuagiemi.

女の子、男の子を)。 私は 家に 帰って、 寝た。

Timadule goo ṇuami. Njoulazige teu teegieti, eniṇezi bienciwe woiti.

朝は ずっと 寝ていた。子どもたちは みな 起きて、 母と ギョウザを作っている。

Bii mjagdagisi, eniṇe sagdi moxo tapci nedeeni mindu bienciwe. (12/13)

私が 目を覚ますと、母は 大 皿 いっぱいに入れてくれた、私にギョウザを。

Pete zugdile esini aṇasiti, nuani mene gagdazigezi omo dogboni kai

ペーチャは家で 寝なかった。 彼は 自分の 友達と 一 晩 中、

asalieti imexi omo minga jeitangu tuṇaza zuunti aṇawa. Eniṇe nakta

迎えていた、新しい一 千 九百 五十 二 年を。 母は イノシシの

ulewenide oloktooni tuduzezi, lobaizi. Obozazi ṇenemi zulieleni abuga Pete

肉を 煮た、 ジャガイモ、大根と。 荷物運びに 出る 前に、 父とペーチャが

zune waṇnasaati buazegeleni naktawa kjaṇawade, utemi ule egdi bisini. Bii

二人で 仕留めた、 森で イノシシとアカシカを。 だから 肉は たくさんあった。私は

omo neŋi tai digaami bienciwe ulewede. Eniŋe joudexem digawanaini
 一 日 中 食べた、 ギョウザや 肉を。 母が 何でも 食べさせてくれた、
 minawa. Uti neŋini bonŋo janvari bisini, imexi aŋa tene zawaŋdaani.
 私に。 この 日が 1月1日 だった。 新 年がまさに 始まった。
 Imexi aŋazi! Aja bagdijeu, imexi aŋaduni imexi kesizi!
 新年おめでとう！ よく 暮そう、 新しい 年に 新しい 幸福とともに！

XVI

Abuga ilienti janvarjadu emegieni. Bii asaliseemi obozawa. Anana,
 父は 1月3日に 帰って来た。 私は 迎えに出た、 馬櫓の列を。 昔、
 njoula biŋeibede, ŋeneemi bii Pabulikazi Siŋkelegdede. Cooniondo buu
 子どものときのように、行った、私は パヴリクと シゴウまで。 先頭を 私たちの
 amiu muiŋini gianaini, gookie imeneeni xontogutu muiwe. Uti mui eniweni
 父の 馬が 進んで来る、 遠く 離して、 他の 馬を。 この 雌馬を
 Selivanixezi gegbisieti, imi utebede gegbileemetide, eimi saa. Kutu tuge
 セリワニハと 呼んでいたが、どうしてそう 名付けたのかは 知らない。 とても 速く
 gianaini. Baagdigimie, unaamu maafalile, abugazi tuelegiesi sebie. Xontogutu
 駆けて来る。出会うとすぐ、跳び乗った、櫓に、 父と 抱き合ってから、まず。 ほかの
 muizige cofu amjasaati, eitide isepte. Abuga eini tiise Selivanixewe, utemi
 馬は ずっと 遅れていて、見えもしない。 父が手綱を控えないので、セリワニハの、それで
 uti tugezi gianaini. Maitaŋala iinegisii, Ljova munawa asalieni.
 こんなに速く駆けているのだ。マイタンまで来ると、リョーワが私たちを出迎えた。
 Unagiweneesi, daijeemu subazi, elegeni maŋga gekti. Xontogutu njoulaziga
 そりに乗せ、かけてやった、毛皮外套を、ひどく凍えないように。 他の 子どもたちは
 caixi (1/2) tukjaati asalinemi.
 もっと先へと、走った、 出迎えに。

— Abuej, ono asaligeu suu imexi aŋawa? — xauntasiemi bii.

「父さん、どうやって迎えたの、あなたは新年を？」 尋ねた、 私は。

— Soljoxo Dabaule asaliemu, utala aŋasiemu, sikie njanga umindeemu

「ヴェルフヌィ峠で 迎えたよ。あそこに 泊まって、 夜 少しだけ 飲んだ、

aiwe. Gee egdime umimi, timadula bazigee guliŋizeŋeu, utemi esimu umi
 ウォッカを。良くない、たくさん飲むのは。朝 早く 出発するから 飲まなかった、
 egdiwe. Utadigi nada chasala guliŋiemu, xai uti ekindini buala poupu biini.
 多くを。そこから 七 時に 出たんだが、まだ その とき 外は 暗かった。

Googulala aŋasiemu, tiineŋi utadigi Oloŋolo iinjiem. Eineŋi eimi xelinee
 ゴングラザで一晩泊まり、昨日 そこから オロンまで 来た。 今日 急がずに

emegiew, — teluŋusieni abuga.

来たよ」 話した、 父は。

Bii, njoulaziga obozawa asaliweti isemie, injemi zonjigiemine mene nica
 私は子どもたちが馬轡の列を迎えるのを見て、ほほえましく思い出していた、自分の小さ
 bisimi ekiweni. Xai utebede tukjaamu buu obozawa asalilegefi. Ali dulenee
 かった頃を。やはりこんなふうに行ったものだ、私たちは轡の列を出迎えに。いつ過ぎたのか、
 uti njoula ekini? Eide cezepte, bii santanaimi. Nojabr'du zaa nada see
 そんな少年時代は？信じられない、私が大人であるのを。十一月に十七歳に
 juveni mindu. (2/3) Ee, elusim jegdigeneemi bii, utemdu njoulabede bie bii
 なっていた、私は。そう、確かに青年になった、私は。でも子どもみたいだ、私の
 dooj. Saina, utebede biini bize: njouladigi naonzakanami ei medee, utadigi
 心は。きっとそういうものなのだろう。少年から青年になったのに気づかない、そこから
 jegdigenegimide eu medee. Njanga guzje. Aja, ezi zoboo, baata, utebede
 一人前になっても気がつかない。ちょっと寂しいが、大丈夫、くよくよするな、坊や、そんな
 biini bagdimi. Ataide mede, alide santanazajai. Tee biini bagdiule.
 ものだ、人生は。知らないうちに、いつだって大人になるんだ。そういうものだ、人生とは。

Abuga muinjini gaiti iinke zali kiatigini. Buu Pabulikazi belesiemu
 父の馬はすぐに着いた、倉庫の前に。私はパヴリクと手伝った、
 abuga unsiweni zaawa. Xontogutude emektegieti. Buu utigetuwede belesiemu:
 父が降ろすのを、荷物を。残りの連中も到着した。私たちは彼らの手伝いもした。
 omo oboza zaani esini bienu, abugatene oboza brigadirani bisini. Mui
 同じ班の荷物じゃないか。父が班長だった。馬
 xuiweni olo woogieti, pekarnja ezjeleni, utemi gaiti neugiemu muiwe utauxi.
 小屋を向こうに作ってあった、パン焼き場の下流に。それで、すぐに追いついた、馬をそちらへ。
 Zugtigi emegiesi, digasiemu bienciwe: (3/4) enije azigazi tjasi wooti.
 家に帰って、食べた、ギョウザを。母が娘とたくさん作っていた。
 Sikiegisini, buu Pabulikazi neneemu klubatigi Pete kinowe iseweneiweni
 夜になって、私とパヴリクは行った、クラブに、ペーチャが映画を見せるのを
 belesilegefi. Bii pjouwe xudasiemi, Pete Pabulikazi elektrostancijawa
 手伝いに。私は切符を売り、ペーチャとパヴリクは発電機を
 tikegiweneeti. Kino amjalani bii amjasaami klubala, Olegazi diasiemu.
 始動させた。映画のあと、私は残った、クラブに。オレグと話をした。
 Nuani gaisini minawa timana sualazi sigosinelegefi Madagule, utauxi njunu
 彼は誘う、私を明日スキーで滑ろうと、モジゴウで。そこまでは六
 kilometra. Bii cialaami. Munzi gie San'ka, Gena, nia ila naonzakazige
 キロだ。私は賛成した。私たちと一緒にサニカ、ゲーナともう三人の若者も
 neneiti. Bii abuga sualawani tetiemi. Pabulike Petewe belesini kinowe
 行く。私は父のスキーを付けた。パヴリクはペーチャを手伝う、映画を
 Olojotigi xebulegeni, utemi munzi gie esini nene. Olega dianaini mindu:
 オロンに持って行くための。それで私たちと一緒に行かなかった。オレグが言う、私に。

— Sii, Andale, saina onmooj bize wakcau sualazi duktemesimi, sigosimi.
 「君は、アンドレイ、きっと忘れただろう、狩猟用のスキーで走ったり、滑ったりなんて。

Munzi (4/5) gie duktemeimi kokpizeŋei?

俺たちと 一緒に 走ることが できるかな？」

— Bii eimi saa, onode tukjazami ebempi sualazi. Xabarskala

「ぼくはわからない、どうやって走るか、 そういう スキーで。ハバロフスクで
duktemesiemi adike muda sportivne sualazi. Zaa kilometrawa tuŋaza minutezi
走った、 何 回か 競技 スキーで。十 キロを 五十 分で
tukjaami dekabr'le. Pegetemize, — guŋkimi bii.
走った、 十二月に。とにかくやってみるさ」答えた、私は。

Taamati geinigesiemu xontogutu njoulazigazi Xabarskala. Utelieŋini zaantizi
去年、 競走した、 他の 若者たちと ハバロフスクで。 そのとき 十着に
emegiemu zaa kilometrala: tuŋaza nada minuta duleneisi mutuemi tukjaimi
入った、 十 キロ競技で。 五十 七 分 かかって、終わった、 走るのが
sportsualazi. Dekabr'dutene njuŋuntizi emegiemu. Onoko bize wakcau sualazi
競技スキーで。 十二月には 六着で 着いた。 どうだろうか、狩猟用の スキーで
duktemeimi: omooto tiuzi anauseu. Sportivne sualazitene zube tiuzi zokou
走るのは。 1本の スtockで押すのだ。 競技 スキーなら 2本の スtockで押す、
memi, utemi xaata juŋdaiŋi utempi suala.
自分を。だから 早く 滑る、 こういうスキーは。

Timadule gulineemu (5/6) njuŋu naonzakazige, Olega njoxo, San'ka
翌朝、 出発した、 6人の 若者は。 オレグが 先頭、サニカが
(jaaba) nuani amjatali, biitene coo amjauxe. Sebie Olega eimi xeline
(耳が悪い) 彼の 後ろから、私は 一番 後ろだ。 最初 オレグは 急がずに
sualadaiŋi, amaixi eteŋisimide. Bii zaasazi sigoimi. Kutu eke ŋeneiti! Omo
スキーで行く、後ろを時々見ながら。 私は 楽々と 滑って行く。とてもゆっくり行く。 1
kilometra xeeŋkini utebede ŋeneemu. Bii eiwei amjasa isemie, Olega tugezi
キロ ぐらい こうして 行った。 私が 遅れないのを見て、 オレグが速く
duktemelien. San'ka eini amjasa. Bimie, xontogutu amjasaliŋi, utebede
進み出した。 サニカは 遅れない。 しばらくすると他の連中が遅れ始めた。こうして
duktemeemu ila kilometra xeeŋkizini. Amjasaiweti iseŋi, Olega San'kazi
走った、 三 キロ ほど。(うしろが) 遅れがちになったのを見て、オレグとサニカは
alasimi tukjaiŋi. Bii gusiŋi niogiemu amjasaigetuwe, gaiti boonjiem Olegawa
待ちながら進む。 私は 楽々と 追い越した、遅れている連中を。すぐに 追いついた、オレグと
San'kawade. Jaaba eini dogdi bii nuani amjatali duktemeiwei. Olega
サニカに。耳の聞こえないサニカには聞こえていない、私が彼のすぐ後ろを走っているのが。オレグが
dogdieni, eteŋien amaixi, minawa iseimi, agdaliŋi, kutu tuge boonjiewei. (6/7)
聞きつけて、振り向いて 私を 見て、 喜んだ、 こんなに速く追いついたのを。

Tuxi xoktolini ŋenemi, Biki zugetigini ougiemu. Nuatiwe alasiliemu
橇の 跡に沿って 行くと、ビキン川の氷に 出た。 彼らを 待つことにした。
moŋo kialani, toowe ilaamu. Madagu weeni isepteini, goolode eini bie:
氷が堆積しているそばで、火を起こした。モジゴウの山が 見える。 そんなに遠くはない。

akta kilometra xeenkini. Gookie alasiemu. Utatene iseemu kektimedigi
半 キロ ぐらいだ。しばらく 待っていた。そして 見た、丘から
sigonoiweti xontogutu naonzakazige. Olega xagzausini Genawa:
滑り降りて来るのを、ほかの若者たちが。オレグは とがめる、ゲーナを。

— Sii imi utebede amjasaaj. Ei mute tugezi duktemeimi? Iseje, Andale
「おまえはどうしてそんなに遅れたんだ。できないか、速く走ることが？ 見ろ、アンドレイが
kutu tugezi duktemeiweni. Nuani xotonku edeeni ei bie.
とても 速く 走るのを。彼は 都会人に なったんじゃないか」

— Bii sualai wenkini kjontooni, utemi bugduizi eini junda bii sualai, —
「ぼくのスキーは 毛が はみ出たから よく 滑らないんだ、ぼくのスキーは」
dianaini Gena, injemide, — Andaletene sportivne sualazi omoti tukjawasieni
と言う、ゲーナは 笑いながら。「アンドレイは、競技 スキーで いつも 走っていた
bize, utemi mai edeeni. (7/8)
のだろう、それで強くなったんだ」

Buu deuncendeesi, njanga digandaasi gaiti ineemu Sigonku weetigi. Tuxi
私達は 休んで、 少し腹ごしらえしてから、すぐにたどり着いた、シゴンク山に。櫓の
xoktoni Biki zugeleni xunagieni, utemi ima ujelini sualadaamu. Buu zulieleu
跡が ビキンの氷上で 塞がっていたので、雪の 上を 滑った。私たちの前にも
niike sigosineseeni, suala xoktoni kulem bisini. Bii Xabarskala sportivne
だれかが滑りに来たらしく、スキーの跡が できて いた。私は ハバロフスクで、競技
sualazi sigosiemi jamadaxem kektimeli Cherdymovka biasalani. Olotene,
スキーで滑ったことがある、いろんな丘を、 チェルディモフカ川岸沿いで。ここでは、
tuktiesi uixi, sigonju Biki zugetigini, utala tondozi wooti xoktowe. Sigoniesi,
上に登ってから、滑り降りる、ビキン川の氷へ、そこに真っ直ぐに作った、シュプールを。滑り降りて、
nia tuktigiu. Suala kjaņa ojojini dagbuse, utemi, uixi tuktilie, amaixi eini
また 登る。スキーにはアカシカの足の皮が貼ってあるので、上に 登るとき 後ろに
bugduigi. Uti kutu kule, eude manga kinde ŋalazi anagimi tiuzi.
滑らない。これはとても便利だ、 強い 力で 手で押さなくていいので、ストックで。
Sportivne sualazi tuktimi omoti temene biuj: amaixi sigosini tjak-tjaŋ (8/9)
競技 スキーで 登る場合はいつも注意しなければならない。下へ滑ってしまう、しっかり
elisi tugasi zuŋe tiuzi. Eimi mutegi, waŋtazi tuktiuj, lusamazi utempi
支えないと、二本のストックで。さもないと、よたよた歩いて登るしかない。ロシア語でこのような
kalawa "joločkazi (aiŋeizi)" gegbisiti, ŋaŋta gaani juinibedede edeini xokto
模様を 「モミ模様」と 呼んでいる。モミの 枝が 張ったようになるので、跡が
imala kektime ogdolini. Utebede tuktimi, kindeuzeŋe egdizi, buu sualaziutene
雪の 坂の 面に沿って。こういうふうに登るのは大変だろう、とても。私たちのスキーなら
kule tuktiuj, ali-ali tiuzi belesindemide.
楽に 登れる、時々 スtockに頼るだけでいいから。

Buu egdi muda sigosiemu utebede. Bii Olegazi emnede esimu tiŋme.
私たちは 何 度も 滑り降りた、こうして。私と オレグは 一回も 転ばなかった。

Nuatitene zuu-ilama muda tiñmesieti: esiti kokpigi tiuzifi tugaimi, utemi
他の連中は 二、三 度 転んだ。うまくできずに、ストックで制御するのが。それで
imatigi xuineemi amjalani bejeti teu imazi laktiweneeti degdifi, akafi, tiñefi,
雪に 突っ込んだ あとでは、体 中、雪だらけになっていた、顔から、背中、胸、
bugdifi. Utawa, iligiesi, gigjagiti, menzi injemide. Utatene nia caixi
足も。これを、立ち上がって振り払う、照れ笑いしながら。そうして また さらに
sigonaiti. (9/10)
滑り出す。

Suu kakta neñiweni duleneisini, guliñiemu zugtigifi. Moñolo iineesi,
日が 正 午を 過ぎて、帰路についた、家へと。氷の堆積している所に着いたら、
ilaamu toowe, utala njañga oloktoso ulewe digaasi, gili uliwe umiesi, xaata
起こした、火を。そこで 少し 煮た 肉を 食べ、 冷たい 水を 飲んで、勢いよく
geikpenjiemu. Njeñesindeesi, bai tuu gianaliemu tuxi xoktolini loxoizi, sualafi
走り出した。汗だくになると、ただそのまま歩き始めた、橇の 跡に沿って、徒歩で、スキーを
weñkilegiesi. ñenimie, Olega xauntasini Genawa:
ベルトに綱で結び付けて。途中でオレグが尋ねる、ゲーナに。

— Sii ono amjasawañki mamasai? Niide ezeneni zomi?

「おまえはどうして残して来たんだ、奥さんを？ だれかが盗るんじゃないか？」

— Aja, zugdu egdi nii biiti, etusiutuzede. Joudu ogzoni ezeneni zomi,

「大丈夫さ、家にはたくさん人がいて 見張ってるよ。どんな 悪魔だって盗るもんか」

— injeini Gena.

笑って答える、ゲーナは。

— Sii tiineñi mamasalaaj, saina, kui malaptaani bize sii

「おまえは最近嫁さんをもらったばかりだから、きっと力を使い果たしたんだろう、おまえは
omoti tiñmesiej sigosimi.

何度も 転んでいた、滑り降りるときに」

— Ali malaptawanakcai sii ilama neñizini. Aja, xai bie kui, tiñmemi

「いつ力を使い果たさせたいか、おまえは3日間で。大丈夫、まだある、力は。転ぶときは
(10/11) nii eini tiñme. Bii goo esimi sigosi weelee, utemi tiñmeemi zuu
だれが 転ばないか。ぼくはしばらく滑ってなかった、山で。それで 転んだんだ、二
muda, kutu mangazi jundawanaami sualai.

回も、あまりにも速く 滑らせすぎて、スキーを」

— Aja, Genai, ei nia managanagizeñi duktemesiesi, sigosiesi, — Olega

「そうとも、ゲーナ、今にもっと強くなるさ、走ったり滑ったりしているうちに」オレグが
utebede cezesini.

そう言って勇気づける。

Suu ejenini zulieleni emegiemu zugditigifi. Eniñe kutu zei zeuwe

日が 暮れる 前に 帰り着いた、家に。母が とてもおいしい料理を
oloktooni, teuniñe gie digasiemu. Pete Pabulikazi Oloñotigi ñeneeti muizi,
作ってくれて、みんな一緒に 食べた。ペーチャとパヴリクは、オロンに出かけた、馬で。

utala zube neḡini kinowe isewenezeḡeti Oloḡkozigetudu. Utala voenna
 そこで 二日間 映画を 見せるのだ、 オロンの人たちに。 そこには 軍の
 garnizonani biini, omo vzvoda svjazistazige bisiti, utigetude isesiti kinowe.
 部隊が あり、 一個 小隊の 通信隊員が 駐留していて、彼らも見ろのだ、映画を。
 Abuga muiwe iseneeni, jouktesini, onode tafjasiiweti. Nia ilama neḡini
 父は 馬を 見に行った。確かめた、どのように世話しているかを。あと三日間
 deunceesi, gulinezeḡeti Dabauxi zaawe (11/12) juḡkjalanagimi.
 休憩したら、出発する、 峠へ 荷物を 引き取りに。

Sikie klubatigi xuliemi dominozi, bil'jardazi gusineseemi. Olegazi xai
 夜は クラブへ 出かけた、ドミノや ビリヤードを しに。 オレグと また
 goo diasiemu. Nuani eninide geenzi biini, ele jatasizeḡeni. Amile ancizi
 長いあいだ話をした。彼の 母親も お腹が大きくて、もうすぐ生まれるそうだ。父親なしで
 bagdizeḡeni nuani neḡuni. Olega bodosini: Saina, Uligadigini banagieni
 生まれるのだ、彼の 下の子は。 オレグは思っている。たぶん ウルンガから 越して来た、
 Oloḡotigi omo lusa niintani biini. Enini eini diana, Olegatene azanaini
 オロンに、 一人のロシア人の男性 だと。 母親が話さないの、オレグは気が進まないのだ、
 utawa xauntasikcemi. Uti aja, neḡui bagdizeḡeni, nuanduleni niide anci
 このことを尋ねたくても。それでもいい、下の子が生まれるのだ。彼には だれもない、
 xamule, utemi agdaabade bisini.
 兄弟が。 それで 喜ばしく思っていた。

Pete, Pabulike emegieti amjalani zuu neḡini moowe moloomu, muizi
 ペーチャとパヴリクが帰って来たあと 二日間 薪割りをして、 馬で
 juḡkjalagiemu teumeni zugdi kiatigini. Bii ele guliḡizeḡei obozazi giede, teḡ
 運んで来た、 全部 家の 近くまで。 私はもうすぐ発つ、馬橇の一団と一緒に。ちょうど
 ele iḡizeḡeu tatusinemi caixi. Utebede kutu tugezi dulenee bii kanikulai.
 うまく間に合うだろう、授業が始まるのに、また。こうしてあつという間に過ぎた、私の休暇は。

XVII

Zakpunti janvaredu bii, abuge maafalileni unaasi, guliḡiemi, caixi
 一月八日に、 私は 父の 橇に 乗り、 出発した、 もっと
 tatusinemi.
 勉強するために。

Tiineḡi sikienitene eniḡe teluḡusieni mindu, onode emne ketige minawa
 昨日の 夜、 母は 話した、 私に、 どのように一度 あやうく 私と
 Mitewede tue ulitigi esimi tugbu. Utawa teluḡusilieni, bii dianaami amjalani,
 ミーチャを 冬 水中へ落っこしそうになったかを。これを話し始めた、私が 話した あとで、
 onode sigosiḡeu Madagule uli kialanigde juḡdawanasiemeu sualafi zugeli.
 どのように滑ったか、モジゴウで 水 際まで 全速力で走らせたかを、スキーを氷の上で。

— Cii tawai, ono temene eu bie suu, njoulaziga. Utebede ezi zuxele
「まったく、 何て 考え なしか、おまえら、子どもたちは。そんなまねはしないで、
odcaixini. Sualazi ulitigi tinmelie, niide uisigimi ezeneni kokpi: سوالاڭي
もう。 スキーで 水に 落ちたら、だれも 助けることはできないのよ。 スキーを
asitemi ezeneni mute ulile, suɲtadude bazi gee. Bii saimi: Madagu udeleni
外すことなんてできない、水中で、深い所では もっと 悪い。 私は 知ってる、モジゴウのあたりでは
Biki ulini asi suɲta. Nilifie ono nixeew suu, nia alide ezeneni (1/2) tinda
ビキン川は とても 深い。 恐ろしいことをどうしてしたか、おまえたちは、もう絶対許しませんよ、
bii sinawa, ei egze, ilede seuni biiweni.
私はおまえたちを。 わからない、どこに危険が潜んでいるか」

— Bii emuse nixeeminu utebede? Teuniɲe nixeemu, sebzenke bixini.
「ぼく 一人が したか、そんなふうに？ みんな やったよ、おもしろかった。
Joude geenii esini ede, — guɲiemi bii.
何も悪いことは起こらなかった」口応えした、私は。

— Zugezi eimi pekce gee, sitei. Nuati enitide unuseiti biibede.
「氷の上で ふざけちゃだめ、あんた。ほかの子のお母さんだって心配してるわ、私と同じように。
Utebede budelegeu niedewenkimunu buu mene sitefi, bagdilegeu tafjasiiu,
そんなふうになさるために育てて来たか、私たちは自分の息子を。生きていくように育てたのよ」
— eniɲe tagdaani.
母は怒った。

— Ezi miawasi, enisei, bii ei zuleixini temene bizeni, — ajaktugiemi bii.
「怒らないで、 母さん、ぼくはもうあんな無茶しないよ」 後悔した、 私は。
— Bii eidexi nilifi baimi zoɲimi, onode emne tuxizi gie ketige esimi
「私は 今でも ぞっとする、思い出すと、どのように一度 櫓 ごと あやうく
tugbu sunawa ulitigi. Sii amizii uteliɲini giantanasaamu Mitazatigi. Utadigi
落としたそうになったか、おまえ達を水中に。おまえの父さんとそのとき行った、メタヘザへ。そこから
Kajalutigi ɲenimi ese edei utebede. Amiuɲ, niondo ɲenemi, xoktonisini. (2/3)
カヤルへ 戻るとき、なったじゃないか、そんなことに。父さんが先に歩いて、道を示した。
Jogosoli zuge uɲelini zuu inaizi tuxiwe ɲuɲkjalaami. Tuxile bii sunawa
水路の 氷の 上を 二匹の 犬と一緒に私は櫓を引いていた。 櫓に 私はおまえたち
zuɲefetiwe boigiemi, daama xulala kaptaasi, suɲtizi ajazi xekegiemi, tuxi
二人を くくり付けていた、掛け 布団に くるんで 紐で しっかり 縛って。 櫓が
onomde kumtelisini, elegeu tinme tuxidigi. Amiu kektimetigi tuktieni, uli
突然 引っくり返っても転がり落ちないように、櫓から。父さんは川岸に 登った、 川が
esimeni gekti ailimi. Biitene imike esimi tiise inaizigewe, utemi, utala
凍っていない場所をよけて通るために。私はなぜだかとどめなかった、犬を。 それで そこに
iineimie xaata tukjandaati kektimele, tuge dulenelegemi utawa. Tuxi, ɲuɲdaimi,
近づくと、(犬たちは)勢いよく登った、川岸を、すばやく通り過ぎようとそこを。櫓は、勢いよく走り、
wakti xuugimi eletigi, kumteeni uli esini gekti kiankileni, utebede kumtesezi
急カーブして そちらへ、ひっくり返った、川が凍ってない 水際で。 そして引っくり返ったまま

ulitigi bugduilieni. Biitene kektimetigi esimi tukitigi xaisi. Inaizige asi
 水の方へ横滑りした。私は 川岸に 登っていなかった、まだ。犬が とても
 mangazi tandaliyeti, utemi tuxi ekieni, amjazanite ulitigi ljoundeeni. (3/4) Bii
 強く 引っ張ったので 櫓は止まった、後部だけ 水に 沈み込んだ。私は
 bogoliemi, miawalai jouke xegdegeibede bise. Xelibezi kektimetigi
 驚いた、 心臓で 何かが 破裂したみたいだった。すばやく 岸に
 xetigeneemi, tuxi tiuweni tjak-tjan zawaasi, siata tandandaami mentigi.
 登った、 櫓の 支えを しっかり 握り、 懸命に 引っ張った、自分の方に。
 inaizigede geikpenegieti, utebede, kumtese tuxiwe menje uixi junkjalagiemi,
 犬が 駆け出した、 そうして 引っくり返った櫓を そのまま 上に 引き戻した、
 utatene wanimegiemi tuxiwe. Miawaitene tuk-tuk ugiini, kutali xetigenjikceini.
 ようやく 真っ直ぐにした、櫓を。 私の心臓は ドキドキして、 喉から 飛び出しそうだ。
 Teesi, muisiliemi bii: «Ono nixemusei bii, onogde sunawa ulitigi tugbui
 その場に座り込んで考えた、私は。『どうしただろう、私は、もしおまえたちを水の中へ落として
 bisie? Ingule xetigenemusei ulitigi: ono bimiew, ono bimiew. Janami
 いたら？ すぐに 飛び込んだだろう、水の中に。なるように なる。 どうして
 bagdizemi, zunefeti sitenei nodolie? Uti aja, inaizige esiti eki, in-in
 生きていくか、二人の 息子を 失ったら？ それがよかった、犬が 止まらずに 一生懸命に
 geikpeneeti, utemi tuxi ulitigi esini pungemi. Aja, bua, kutu aja belesii
 走り続けたのが。それで櫓が 水の中へ 滑り込まなかった。よかった、神様、よくぞ助けてくれた、
 sii! Egdiwe (4/5) kesinei buje mindu, omoti belesije minawa». Amiu
 あなたは。多くの 幸運を お与えください、私に、いつもお助けください、私を』。父さんが
 minawa asalilegemi mudanjeni amaixi. Bii sonjomi teiwei, isemie, teu
 私を 迎えに 戻って来た、引き返して。私が泣きながら座り込んでいるのを見て、すべてを
 mejegieni: «Ono, baata enini, sii temene ei bie? Alasimde aja gieni
 理解した。『どうして、母さん、おまえは注意深くないんだ？ 待っていたほうがよかったのに、
 minawa, jouxu xelinei? Aja, ezi sonjo, teu ajazi duleneeni. Odcaixi bii
 私を、 どこへ 急ぐんだ？ 大丈夫だ、泣くな、 すべて無事で済んだんだ。これからは俺は
 sinawa gootigi ezenei imene. Sitezige aja?» «Jou geeni bizeneni, tjak-tjan
 おまえを遠くへ やらせない。子どもたちは大丈夫か？」 『何の悪いことがあるでしょう、しっかり
 boise daama xulala. Esede mededu, eku nuajiti bubu», — injamui oundegimi,
 くるまれている、掛け布団で。何も気がついてないわ、ぐっすりと眠っているでしょう』涙を拭いて、
 diagiemi bii nuaduni. «Aja, baata enini, teu gee dulenee, nenizefi zugtigi,
 答えた、 私は 彼に。『大丈夫、母さん、 すべて悪いことは去った、帰ろう、 家に。
 odcaixini temene bije, gee edeweni isemie, minawa alasije, biitene utempi
 今度は 注意するんだ。危ない 場所を 見つけたら 俺を 待て。俺も そういう
 udele sinawa alasizepei, ezenei pagadi». (5/6)
 場所ではおまえを待つようにするよ、もうへまはしない』

Abuga, injemi, duisieni eniṇe teluṇusiweni. Amjala dianḡkini:

父は ほほえみながら聞いていた、母が 話すのを。 そのあと、彼も話を始めた。

— Uti kesizi uisigiwenḡkini bua sunawa. Diṇne dajau Sulezi emegimi

「今回は運よく助けてくれた、神様がおまえたちを。ジグリノおじさんはワロージャと帰るとき、
ejeweneeti zuge xegitigini tuxifi, omo sagdi zaiwe, omo inaiwe. Xai
流した、 氷の 下に、 櫓ごと 一頭の 大きな 猪と 一匹の 犬を。 やっぱり
utempi udele, bagjazatigi zugeli dougimi, jepcugeweneeti zugewe. Zugele
そんな 場所で 向こう岸へ 氷上を 渡っていたとき、壊した、 氷を。 氷の上に
ekiesi, Sule buktalieni saaktawa. Imike ekti jepcugeeni zuge, uti udele
さしかかって、ワロージャが折った、柳の木を。なぜだか、たちまち割れた、氷が。その場所は
ejekte manga bisini, utemi zuge ingule ejelieni, Diṇne dajau zuke
流れが 強かった、 それで 氷塊は すぐに 流れ始めた。ジグリノおじさんはかろうじて
kokpigieni amaixi xetigenimi, Suletene tuxi tiuleni zawagimie, juṇḡjalagikceeni
できた、 戻って 飛び移ることが。ワロージャは櫓の握りを 掴まえて、 引っ張ろうとした、
bagja zugetigi, esini kokpi, zugetene gaiti jueni, Diṇne dajau xeetisini, tugezi
対岸の氷へ。間に合わなかった。氷塊はすぐ水の中へ沈み込んだ。ジグリノおじさんは叫んだ、急いで
xetiṇileni, teu weendeesi. Suletene kusigezi xwaijani inai suptiweni. Zuu
飛び移るように、全部投げ出して。ワロージャはナイフで切った、犬の 引き綱を。 二匹の
inaizige (6/7) xetigeneimi, siata tandaimi, tugbueti ulitigi ilientiweni, utemi uti
犬は 駆け出して、勢いよく飛び出して、落とした、 水に 三匹目を、それでそいつは
zuge xegitigini tiṇmeeni ulitigi, ejektezi xegdeliweeni xukuwe, alupti
氷の 下に 沈んだ、 水中へ。 流れで 切れた、 綱が、 つないでいた
xeḡenḡkuwe, utemi ingule zugezi diṇeuweni tuxizi giede. Suletene zuke
首輪を。 それで たちまち 氷塊に押しつけられた、櫓もろとも。 ワロージャはかろうじて
kokpigieni diixi xetigenimi, unṡai cimpeweneeni nṡangade. «Janami buktalieḡ
できた、 岸に 飛び移ることが、靴を 濡らしただけで、少し。 『何だって 折ったんだ、
sii, tukca siteni, uti saaktawa, daṇuleeninu? Ingule dulenei bisie, joude
おまえは、愚か者め、その柳の木を。何か邪魔でもしたか？ そのままやり過ごしていたら、何も
emuse bie, ei jou digazaṇafi, keṇḡkuzi zugtigi emegimi?」 — daṇsilieni Diṇne.
なかったものを。これから何を食べるんだ、積み荷なしで家へ帰ろうってのか?』怒った、ジグリノは。
«Idigi sazami bii, utebede bizeneweni, jou uti saakta zawasieninu zugemai
『どうしてわかったか、ぼくは、こうなることを。なんであの柳の木が支えていたか、氷ばかりに
bilegeni? Eimi egzegi, imide utebede ekti jepcugeeweni», — iṇamusimi diagieni
なるように。わからない、 どうしてこんなふう急に崩れたのか』 泣きながら 答えた、
Sule.

ワロージャは」

Abuga alusieni munawa: Biki zugeni kutu seuni. Imala, Xuule utebede

父が説明してくれた、私たちに。ビキン氷は 非常に危ない。イマン川やホル川はそうでは
eini (7/8) bie. Utala jaki amjalani zuge gektieḡde nekidexi tjak-tjaṇ biini,
ない。 そこでは氷の切片が流れ始めたあと凍って固まり、 春まで しっかりとしている。

eini calja imanaisini. Bikile ali imanaisini, ali zuge caljagini, diami zuge
 溶けない、雪が降っても。ビキン川では雪が降るたびに、氷が溶け出して、厚い氷の
 ujelinitene tjasi tikanagini. Amjala, uli waktiŋisini, keŋkuzi ceŋgelini uli
 上にしばしば薄い氷が張る。あとで水が引くと空洞状に覆いかぶさる、水の
 xooloni, utemi uguuwe eini ali, jepcugeini. Utempi buala ekieti Diŋne
 上に。それで重みを耐えきれずに崩れてしまうのだ。このような場所で止まった、ジグリノ
 dajau Sulezi, utemi uti zuge jepcugeeni, uti uguilenkini tuxiwe eimi ali
 おじさんとワロージャは。だからその氷は崩れた、その重い櫓を耐えきれずに、
 zawasimi. Sitezigei, temene bijeu Biki zugeleni. Utali tiule ancizide eziu
 支えるのが。子どもたち、気をつけるんだ、ビキンの氷の上では。そこを杖なしで歩いては
 xuli. Omoti jouktesiu tiu duezini tungasimide. Koŋgozi jaidaisini, zuge
 いけない。いつも確かめるんだ、杖の先で叩いて。にぶい音がしたら、氷は
 mai, ezeneni jepcugene, eimi ŋele ŋeneu. Ebede jaidaini «tuk-tuk», ugzani
 強くて崩れないから、恐がらずに歩くがいい。こんな音がする、『コツコツ』と、響きが
 anci. Ugzazi, uŋtubede jaidaisini — gee, zuge (8/9) ceŋgelieni uli xooloni,
 ない。響きのある太鼓みたいな音がしたら危険だ。氷がせり出している、水の上に。
 utemi, onode diami bimi, jepcugezeneni, ugui tuxi, mui maafalizi utali
 だからいくら厚くても、崩れてしまう、重い櫓か馬櫓でここを
 ŋeneisini. Ebede jaidaini: «teŋ-teŋ» — maŋga ugzaini. Omoti zoŋjieu bii
 行ったら。こんな音がする、『トントン』とよく響く。いつも覚えている、私の
 diaŋkimeŋi: temene bijeu, tiule ancizi eziu xuli Biki zugeleni. Utebede
 言ったことを。気をつけろ、杖なしで歩くな、ビキン川の氷の上を。このように
 abuge tatusieni munawa.
 父は教えた、私たちに。

Obozazi ŋenimi, bii egdi muda iseej, onode obozaŋkazige tiuzi
 馬櫓を連ねて旅したとき、私は何度も目にした、どのように御者達が杖で
 jouktasiweti zugewe. Bagbaimi, eke, temene gianaiti zugeli. Mai zuge
 確かめているかを、氷を。つつきながら、ゆっくり、注意深く歩いている、氷に沿って。頑丈な氷
 bilisini, tindaiti mui utali gianalagani, gee bilisini, ailiti uti udewe. Biide
 だったら、行かせる、馬をそこを走るように。危なかったら、避ける、その場所を。私も
 utebede pegemi jouktesimi. Diami zugewe keŋkudigi egzegiuj utebede. Bii
 同じように試しながら確かめる。厚い氷を空洞から区別する、こうして。私は
 utelienjini baaptaliemi, onofide zuge biiweni bugdii xegileni. Uti ŋeniu (9/10)
 そのときわかった、どんな氷があるのかを、自分の足の下に。今回戻る
 zulieleni imanandaani. Utemi tala olo maafali xoktoni caljagieni, utebede
 前には雪が降っていた。それで、あちこちで櫓の通り道が溶けていた。このように
 eimi jouktasi, tiamalazaŋai. Aja, uli suŋta elisini bie, mui taŋdagizeneni
 試してみないと落ちるかもしれない。まだいい、水が深くなければ、馬が引っ張りあげるので、
 maafaliwe, suŋta bilisini, muiwe uisigimi cilauzeŋe, utemi obozaŋkazige
 櫓を。深ければ、馬を救うことさえできないので、御者達は

temene biiti.

気をつけている。

Bii adime bagdimi, eimi saa, utempi kala bisiweni. Emnede ese
私は 何回 出会ったかわからない、こんな ことが あったのを。一度も
tiamasi mui Biki zugeleni. Tukca biasalanitene emne compoge mui bugdizi,
落ちた事はない、馬がビキンの氷から。ザヤチー・クリュチでは一度、踏み外した、馬が足を。
utawa bii zuliele onjoomi.
これについては私は前に書いた。

Buu ajazi iigiemu Ezeuxe Dabautigi. Buu kesiziu, utauxi masina emeeni
私たちは無事に着いた、ニジュヌィ峠に。 私たちにとって運良く、そこに 車が 来て
bisini, utala ingule unagiemu kuzovala, subazi, tanzazi nemegiemu elegefi
いた。そこで すぐに 乗り込んだ、荷台に。 毛皮外套や防水布に くるまった、
manga gekti. Munzi gie (10/11) Dabaula bagdiigetü ŋenieti, xai uti
ひどく凍えないように。私たちと一緒に 峠の 住人も 帰った、やはりこの
masinala unagiesi. Tolja Baxaev Zanala jeinti klassala tatusini, nuani
車に 乗って。 トーリャ・バハエフはビキン市で九年生として 学んでいる。彼は
minzi gie tatusieni Dabau skolalani. Nuani exeni seeni Tabala, gegbiweni
私と 一緒に勉強していた、峠の 学校で。 彼の 姉さんの 姓は タバラ、名前を
oŋmogiemi, sagdi xatala, njukteni caligi, Zanala bagdiini enizi, amizi.
忘れてしまった。背の高い娘で髪は金髪、ビキン市に住んでいる、母と父と。

Burlitala iinei ekindini, mangala gektiemu, utemi stancatigi tukjazimej
ブルリトに着いたとき、 すっかり 凍えてしまったので、 駅まで 走って
ŋeneemu, utala njamisigiemu. Dogbo poezdala unagiemu, timadule Xabarskala
行った。そこで 暖まった。 夜、 列車に 乗り込み、 翌朝 ハバロフスクに
iineemu. Utebede malaptaani kanikule, tatusii njoulazige deumpiuni. Timana
着いた。 こうして 終わった、 休暇が、 学 生の 休みが。 明日から
nia caixi tatusilizemu.
また さらに 勉強し始める。

XVIII

Nia timadule teegiuŋ, zarjadjkalauj, ouj, digauj, tatusineuj. Njuŋu chasadu
また 朝 起きて、体操して、顔を洗い、朝ご飯を食べて、勉強する。6 時に
radio dianaligini. Buu tatiemu utelieŋini mjadagimi. «Moskva dianaini. Teu
ラジオ放送が始まる。私たちは習慣にした、それで目覚めることを。「こちらはモスクワ放送です。全
Sovetska Sojuza radiostancani eteteini, Moskvala wai ila chasa». Uti
ソ連の ラジオ局で放送しています。モスクワでは二十 三 時です」。 この
Moskva dianalini zulieleni Gimnewe gusiti, Sovetska Gimneweni. Teuniŋe
モスクワ 放送の 前に 国歌を 演奏する。ソ連の 国歌だ。 だれもが

saiti utawa, caŋalaiti. Kejeweni S. Mixalkov El'-Registanazi onjooti «Sojuz
知っている、これを、歌う。歌詞は S.ミハルコフとエリ・レギスタンが書いた。「連邦は
nerushimyj Respublik svobodnyx...»
揺るぎなく、共和国は 自由にあふれ…」。

Utawa duisimi, kutu agdauj, mene golozii enduciuj. Utebede gjaŋa
これを 聞くと、 とてもうれしく、 自分の 国を 誇りに思う。 こうした 毎
nenjini, deumpiu nenjinitene gookie ŋuaw: jouxide ei xeline jaza. Utempi
日だが、休みの 日は 遅くまで 寝る。どこにも 急ぐ必要がないからだ。そんな
nenjiduni njoulaziga izidexem gusiiti, xotoli xuliiti, deunceiti, (1/2) knigawa
日には みんな いろいろ 遊んだり、街に 出かけたり、休息をとったり、本を
taŋiiti, geinigesiti, kinotigi, teatratigi xuliiti. Utebede sebusiiti teuzi. Uti
読んだり、試合をしたり、映画館や劇場に行ったりする。このように 楽しむ、 何でも。これは
kutu aja belesini tatusiule.
大変 よく 役立つ、 勉強にも。

Utelieŋini jamadaxem artistazige emeseduge Xabarskatigi. Buu institutau
そのころ いろいろな 俳優が 来ていた、 ハバロフスクに。 私たちの大学の
aktova zalalanide biduge. Emne baagdisiemu "Molodaja Gvardija" kinole
講堂でも (公演が) あった。 一度 会った、 「若き 親衛隊」という映画に
puundesieti artistazigezi: S. Bondarchuk, I. Makarova, N. Mordjukova, V. Ivanov,
出演していた俳優たちに。 S. ボンダルチュク、 I. マカロフ、 N. モルジュコフ、 V. イワノフ、
S. Gurzo xonogutude. Nuati caŋalaati, stixotvoreniewa taŋiet, leuleeti,
S. グルゾ など。 彼らは 歌ったり、 詩を 読んだり、 踊ったり、
teluŋusieti, onode kinole puundesiefi. Bii uti amjalani nia isenesiemi kino
話したりした、どのように映画で演じたかを。 私は その あと 再び 見に行った、映画
"Molodaja Gvardijawa", knigawade taŋigiem. Emne M. Kuznecov emeseeni.
「若き 親衛隊」を。 本も 読みなおした。ある日、M. クズネツォフがやって来た。
Nuani, scenatigi njumie, diaŋkini: «Minawa nii isemie, nii bodosini: (2/3)
彼は 舞台上に 現れると、こう言った。「私に 人は 会うと、その人は考えます。
bekule biinies, xonŋto biinies kinoroljadigini. Bii dianaimi sundu — bii alide
似ているか 違うか、 映画の主人公に。 私は 言います、あなたたちに、私が全く
eimi grimmirovala memi, onofi ei bimi, ono kinole puundeimi. Utemi bii
メイクしないと、 自分を。今あるままの姿で 映画を 撮ります。 だから 私は
ei joudaxem kinoroljalani bekule biimi». Buu sagiemu, utebede biiweni. Xai
今 あらゆる 主人公に 似ています」。 私たちは納得した、その通りなのを。 やはり
utebede degdini montolo, njukteni cigzaligi, jaani niom biini.
そのように顔が 丸くて、 髪の毛が 縮れ、 目は 深い青 だ。

Caŋalakci artistka Pantofel'-Necheckaja omo sikieni kai jexeeni
歌手の パントフェリ・ネチェックアヤが 一晚 たっぷり歌った、
jamadaxem caŋalaŋkuwe. Buu ljaŋi ŋalazifi akpiseemu, esimū goo tindaŋi
さまざまな 歌を。 私たちはおおいに拍手喝采し、 長い間帰さなかった、

nuamani, utemi nuani caṇalalieni "Ox, Samara-gorodokewe". Buu xai ljasu
彼女を。そこで彼女は 歌い始めた、「おおサマラ、愛しき街」を。私たちはまた大
akpisiemu. Nuani egdi muda caṇalaani uti jexe paiwani, ljasu deuweni, utemi
喝采した。彼女は 何 度も 歌った、この 歌の 一節を。とても 疲れていた
mejeweni ebede caṇalagieni: «...tindaṇijeu minawa, eziu nia gelegi scenatigi,
最後に こう 歌った。「帰らせて、私を、もう呼ばないで、舞台へ、
(3/4) bii nia ezeni emegi!» Dolgan Grisha, injemi, diankini: «Ceze, nia
私は もう 出ないわ」。ドルガン・グリーシャが笑いながら言った。「本当に もう
alide ezeni eme odcaixini muntigi, tagdaani». Cezezi, alide ese xulise
二度と来てくれないぞ、今後 ぼくたちの所へ。怒っていたから」。確かに 二度と 来なかった、
uti aanta Caula Vostokatigi.
この女性は、極東に。

Zugdidigi onjowe baami. Pete onjoini: mundule nia omo baatama neṇu
家から 手紙を 受け取った。ペーチャが書いている。私たちにもう一人の弟が
bagdieni, ilienti febraljadu. Gegbileeti Klimentazi. Eniṇe, eniṇe, nia omo
生まれた、二月三日に。名付けた、クリメントと。母さん、母さん、また 一
aṇani xabausizeni baatawa, ali wadizeni site baimi? Kesulii memi.
年 おっぱいを飲ませて、子どもに、いつ止めるの、子どもを産むのを？ 苦しめている、自分を。
Utawa saami, bii gagdazigei xauntasieti, adi see biiweni bii eniṇedui.
これを 聞いて、私の 友人たちが 尋ねた、何 歳 なのか、私の 母は。

— Diiza omo see duleneeni, — guṇkimi bii.

「四十 一 歳に なった」 と答えた、私は。

— Ee, nia sitewe baazaṇani. Bii saimi adide aantazigewe diiza tuṇa
「うん、まだ 子どもを 産めるよ。ぼくは知っている、何人もの女性を、四十 五
seedu sitewe (4/5) baamati. Sii enii nia ele geenzi edezeneni, — guṇkini
歳で 子どもを 産んだのを。君の お母さんはまたじきに妊娠するさ」 と言った、
Kime.
キムが

— Jou culii sii utebede, bii eimi ciala, nia eniṇe xeselegeni, — tagdaami
「何をふざけるか、君はそうに。ぼくは望まない、もう 母が 苦しむのは」 と怒った、
bii.
私は。

— Ono nixezei, utebede biiweni. Aja uti, zugdu ljasu egdi njoulaxi.
「どうしようもない、こうであるのを。いいことだ、これは、家にたくさん子どもがいるのは。
Minti sovska giafi belesizeneni niedelegeti, — Grisha, utebede dianami, bii
わが ソビエト 国家が 支援してくれるさ、育てるために」。グリーシャがこう言いながら、私の
akawai ṇalazi sasasini.
背中を 手で 叩いた。

Bii utelienini muisiemi: diiza see kutu egdi, nii sagdanini. Njoula bimi
私は そのとき、思っていた、四十歳というのは相当な年齢で、人は年寄りだと。若かったから

mejei waca bisini bize. Ei elusim xonfozi muisimi, njanga mejeleemi.
知恵が足りなかったのだろう。今は全然 違うふうに考えている、少し 知恵がついたのだ。

Pete onjoooni, zugdinkezi aja biiti, doozoti mai, nenuneu juiti. (5/6)

ペーチャは書いていた、家族は変わりなく、皆元気で、下の子どもたちも大きくなっていると。

Bii onjogiemi, enijewe, ajazi tafjasilegeti. Abuga obozazi xulimi wadieni,
私は、返事を書いた、母を よく いたわるようにと。父は 荷物運搬の仕事を 終えて、
buazegetigini neneeni wakcanami.

タイガへ 行った、 狩猟に。

Bii utelienini muisiemi, teu tatumnizige elu biiti. Tatusimie, sagiemi,

私は その頃 思っていた、すべて先生というのは立派な人だと。勉強しながらわかってきた、
utebede eiweni bie. Nii onofidexem biiti: mejexide biiti, exulede biiti, aja
そうではないことが。 人は どんなのも いる。 賢い人も いれば、愚かな人もいる、 善
niide biiti, gee niide biiti. Tatumni dolonide utebede bisini. Imi utebede
人も いれば、悪人も いる。 先生の 中でも こうだ。 どうしてこのようだと
sagiemi? Emne bii geografawe tatusii aantawa elumugiemi xonfozi dianaawani
わかったのか？ あるとき私は地理を 教える 女の先生に 指摘した、 間違っって言ったのを、
namule bii bugawa. Nuani omoti dianaiwani "Chichagove bugani" elindini
海に ある 島を。 彼女が 何度も 言うのを、「チチャゴフ 島」 の代わりに
"Chichagove bugani". Mintigi kilum jaazi etenjesi, joude esini diagi. Uti
「チチェゴフ 島」と。 私を きびしい目でにらみつけた、何も 言わずに。 この
amjalani, onode (6/7) ajazi telugusiewei "ilamai" onjoini zhurnalala. Bii
あと、 どんなに うまく 答えても 「三」 しかくれない、成績簿で。 私は
egzegiemi, imi utebede nixeiweni. Geografawe bii kutu ajuemi, utemi aja
わかった、 どうしてそんな仕打ちをするのか。地理が 私は とても 好きだったから、 よく
saami minti naafi ujeweni.

知っていた、私たちの地球上のことを。

Emnede nia "baitanisiemi" literatura urokalani. Bii Lava Vanjazi

あるとき また「罪を犯して」しまった、文学の授業で。 私は ワーニャ・ラフと
diasiemu, utawa medeeni Ulanova, xauntasieni joukewe, bii esimi dogdi uti
話していて、それに気づいたウラノワ先生が、質問した、 何かを。 私は聞き取れなかった、その
xauntauwe. Utemi nuani mindu diankini:
質問を。 それで 彼女は 私に 言った。

— Sii, Kaudiga, ezi diasii, joude ei dogdi. Dogdiinu, teuniye diagiweti,
「カンチュガさん、 話をやめて。何も 聞いてないわね。 聞いてるの、皆が答えているのを。
siitene teutu bii, teuniye nalafi uindeiti.

あなただけ黙っているでしょう。皆 手を上げているのに」

— Bii eimi ise omode nalala uindesewe, — injemi, diankimi bii.

「私には見えません、一人でも 手があがっているのが」と笑いながら言った、私は。

— Aa, jou zagbali sii. Teegie mene bualai, "zube" sindu, (7/8) bolo

「そう、何て 失礼なの、あなたは。座りなさい、自分の席に。『2』をあなたに 秋の

ekzamenawa tamagizeŋei, eitene tatusii aŋani mejege ezeŋei xauntasi sinawa.
試験では あげましょう。もう 学 年の 終わりまで、質問しません、あなたには」

Bii teenkule teegiemi, muisimi: «Bolo ali tamagizeŋei bii, saina, jeinti
私は 席に 座って 思った。 「秋に 試験を受けたら、 私は 多分、 九
klassala gagdjougiwenezeŋeti». Utawa saani buu klassau zangjaŋini Kiriŋ
年生に 残されるだろう」と。 これを 知った、私たちのクラス 担任の キリス・
Kanganovich, minzi diasimi, guŋkini:
カンガノヴィチ先生が。私との話し合いでこう言った。

— Sii, gee tatusiide ei bie, imi amjasagizeŋei nia jeinti klassala? Sii
「君は勉強してないわけじゃないから、どうして残るんだ、 また 九年生に？ 君は
tatumnidu janami zagbalii? Teutu bimide aja gieni. Ajaktugie xelibezi, ele
先生に なぜ無礼なことを言ったんだ？ 黙ってたほうがよかった。 謝りなさい、早く、もうすぐ
chetvert' malaptalieni. Ezi zangjaŋzala.
学期が 終わる。 意地をはるな」

— Bii jou geewenide esei diana, — guŋiemi bii.
「ぼくは 何も 悪いことは 言っていません」 答えた、 私は。
— Sii xai esei egze. Tatumni giani egdi, ezenefi galu utebede
「君は まだわかっていないな。先生には 権利がたくさんある、許されないんだ、そんな
zagbalimi. Ajazi tatusije, (8/9) uti coo aja gia.
不作法をするのは。しっかり勉強しなさい、それが最良の方法だ」

Bii bodosixike, utebede ceze bizeŋeni. Timanaŋi ajaktugiemi tatumnizigezi.
私は 思った、 それが 正しいかもしれないと。次の日に謝った、 先生たちに。
Literaturawa "diizi" muteemi chetvertiwa, geografitene "ila" esigieni, siasaŋa
文学の授業は 「四」で 終えた、 学期を。 地理のほうは 「三」のままだった、先生が
mintigi tagdami esini elu. Utebede bii attestatalai geografe "ila" esigieni.
私に怒りが収まっていなかったの。それで 私の 成績簿には 地理の 「三」が残っている。
Utebede mejeŋiemi: tatumni dolonide geŋku bisiti.
こうして 理解した、 先生の 中にも 悪い人がいるのだと。

Minzi gie omo baata tatusieni. Nuani seeni Cherkanoŋ, gegbini Kir'jak,
私と 一緒に 一人の少年が勉強していた。彼の 姓は チェルカノフで、名前はキリヤクだ。
kilebede gegbisieti utigetuwe, utemi nuati lusazimeŋi seesiti. Kir'jak kutu
エウエンみたいに名付けた、これを。それで彼らはロシア風の姓だけ持っている。キリヤクはとても
egdi knigawa taŋiini. Gjaŋa neŋini bibliotekala zawaini diami knigawa,
たくさんの本を読んでいる。毎 日 図書館で 借りる、 厚い 本を。
utawa, niŋmeibede, gaiti mutuini taŋimi. Jamadaxem pisatelezige onjooweti
それを 食べるように 速く 読み終える。 さまざまな 作家の 作品を
taŋiini. (9/10) A. Djuma, O. Bal'zak, L. Tolstoj, F. Dostoevskij, M. Gor'kij, F.
読んでいる。 A. デューマ、O. バルザック、L. トルストイ、F. ドストエフスキー、M. ゴリキー、
Panferov, A. Tolstoj, A. Fadeev, L. Leonov, I. Turgenev, M. Rid egdi
F. パンフォーロフ、A. トルストイ、A. ファデエフ、L. レオノフ、I. ツルゲーネフ、M. リッド、

xontogutude. Kamchatkala bagdimi, nuani teluŋusieni, skola bibliotekalani bii
たくさん他にも。カムチャツカに住んでいたとき、彼が言うには、 学校 図書館に ある
knigawa teumeni taŋigieni. Olotene jou bualani egdi, utemi teumeni
本を 全部読み尽くしたという。ここには どこでも たくさんあるから、全部を
kokpikceini taŋigimi.
読み終えたいと思っている。

Bii ljası xonoomi: ono bagdiuj taŋinzimei. Utemdu Kir'jaka kokpigini
私はとても驚いた、どうやって暮すのか、読んでばかりで。それでもキリヤクはやりおおせた、
kinotigi, teatratigi xulimi, munzi gie sportzalala njaŋga gusindei, tue stadiona
映画や 劇場に 行ったり、私たちと一緒に 体育館で 少々 運動したり、冬には
"Dinamo" kjagdalani kon'kizi sigosii. Kutu mai baata, nuani mindigi omo
ディナモ競技場のリンクでスケートを滑るのも。 とても 強い 少年だった。彼は 私より 一
seezi neju. Nuani wajanami esini nonii, zua lagerala deuncemi nonilieni.
歳年下だ。 彼は 泳げなかったので、 夏に キャンプで 休みながら 習っていた。

Bolo iseemi (10/11) bii, onode Maŋmu ulileni wajamasiweni. Ajazi
秋に 見た、 私は どのようにアムール川で 彼が泳いでいるかを。良く
nonilieni. Utempi baata bisini uti Kir'jaka. Bii imi onjoimi nuamani?
おぼえたものだ。そういう少年だった、このキリヤクは。 私はどうして書くのか、彼のことを?
Amjala onjogilemi, onode caixi bagdiemeni. Kutu guzje, uti mejelenkini nii,
あとで 書くためだ、どのようにその先 彼が生きたかを。とても残念だ、こんなに賢い 人が
utebede bagdii xoktowe woomeni. Nuani aiwe emnede ese umi. Teu
このように人生(生きる道)をたどったのは。彼はウォッカを一度も飲んだことがなかった。すべて
utebede tatusieni, egdiwe salagami. Grisha Dolganade kilebede bisini
こうして勉強していた、たくさんのことを知ろうと。グリーシャ・ドルガンもエウエン人のようだった
(utigetuwe, lamutazi gegbisieti). Nuanide aiwe esini umnasi, utebede njaŋga
(彼らのことをラムートと呼んでいた)。彼も ウォッカを飲まないで、 ときどき ちよっと
baaptawanai bise aŋmalai. Xontogutu egdinzi jegdigezige aiwe umnasieti. Bii
試す程度だった、 一口だけ。 他の ほとんどの若者たちは ウォッカを飲んだ。 私は
teluŋusigei utawa ei zulieni. Ei eimi gagdjougi. Safani!
話した、 それについてもう前に。 今は 繰り返さない。 気が進まない。

XIX

Bii xontogutu njoulazigazi adike muda xuliseej stadiona kjagdalani
私は 他の 若者たちと 何 度か 行った、競技場のスケートリンクに
kon'kizi sigosinemi. Kutu egdi nii sigosiiti uti kjagdali, elektrichestva deŋeni
スケートを 滑りに。 とてもたくさんの人が滑っている、このリンクで。 電 球が
iledexem zegdeini. Coo uligdiga biini imanaisini. Ima tiŋmeini, caligi
どこにも ついている。 一番 きれいだ、 雪が降っていると。雪が 落ちてくる、白い

gobodebede dieliwesini, radiole caṇalaiti. Kutu sebzeṇke! Ima eisini
 蠅みたいに 舞っている。ラジオでは歌が流れている。とても楽しい！ 雪が 降って
 imanatene, kutu iṇeni, utemi omoti njamaisiu tegewe asiteṇkule, utala nii
 いないときはとても寒いので、 よく 暖をとる、 更衣室で。 そこは 人が
 tjasi zalupta: utebede njamisiti. Nii jamadaxem kon'kizi bugduisiti: xokkej
 とても一杯だ。 こうして 暖まる。 人々はいろいろな スケートで 楽しむ。 ホッケーの
 kon'kizini, tukjai kon'kizini (utazi kutu mṇṇa juṇdaiti), figure kon'kizini
 スケート、 スピード・スケート (それはとても 速く 滑る)、 フィギュア・スケートで
 jamadaxem kalawani woiti: omo bugdizide pontoliti, amjadaiti, xetigesiti, (1/2)
 いろいろな 動きを している。一本の 足で 回ったり、後ろへ滑ったり、ジャンプしたり、
 cisoiti. Kutu uligdigazi tetisiti, xatalazige bugdileti xeigi anci, nemnese
 しゃがんだりしている。とてもきれいに着飾って、娘たちの足にはズボンもなく、薄手の
 sexizi ulise amaiti. Eitide xagza ailegde zoṇgoi biiweni.
 生地で縫ったのを履いている。恥ずかしがることもない、お尻まで丸見えなのを。

Bii eidexi munjalimi, caixi esimi xuli sigosinemi. Bii omoti xanalai
 私は今でも残念だ、そのとき以来行かなかったのが、スケートをしに。私はいつも風邪をひいて
 bisei, kutaide omoti unuseeni iṇenizi. Mindu tausiini dianṇkini elegei
 いた。 喉も いつも 痛くなった、寒さで。 私に 医者が 言った、
 gektiwene bugdii, utemi bii wadiemi tue stadionatigi xulimi. Kutu munjalie!
 冷やさないように、足を。そんなわけで、私はやめた、冬に競技場へ行くのを。 とても 残念だ！

Bii ali-ali xuligei inenṇi, isesilegemi, onode xokkejwe gusiwetṇi, kon'kizi
 私は、ときどき行った、昼間、 見に、 どのようにホッケーをやっているか、スケートで
 tukjawasiwetṇi. Emne iseemi omo xatala kutu tugezi tukjawasiweni. Sagiemi,
 競走しているかを。あるとき見た、 一人の 娘が とても 速く 滑っているのを。 わかった、
 uti chempionka bisini, gegbini Novozhilova Ljuba. Bii nuamani ei zulieni
 これは選手 だった、 名前は ノヴォジロワ・リューバだ。私は 彼女を これ以前に
 iseej (2/3) "Dinamo" parkalini velosipedazi krossala geinigesieweni. Bolo
 見た、 ディナモ 公園沿いに 自転車で コースで 競技していたのを。 秋
 bise uti. Utelienṇini Ljuba zuuntizini emegieni. Mai xatala, xai biibede
 だった、これは。その時 リューバは2着で 戻って来た。 たくましい娘で、まだ 私と同じ
 jeinti klassala tatusini, biibede zaa nada see biini. Nuamani omo artista
 九年生で 学び、 私と同様 十 七 歳 だ。 彼女を ある 俳優、
 Dramteatralla etetei trenirovalaini. Uti seeni Kamenev, nekteseide, xai
 演劇劇場で働いている人が、コーチしていた。彼の姓はカメネフといい、背は低い方だが、それでも
 mangazi tukjawasini kon'kizi. Bii isesiemi, onode xuugiuṇ udele tukjaiweni
 うまく 走る、 スケートで。 私は 見ていた、どのようにコーナーの所を 滑るかを、
 Ljuba. Treneraṇini omoti xeetisini: «ṇalai, ṇalai, ṇalai! Ono zawasii
 リューバが。コーチが たえず 叫んでいる。「腕、 腕、 腕！ どこに 構えてるんだ、
 ṇalai? Bugdii, bugdii, bugdii! Jouxi taṇdai eletigi?» Utebede egdi muda
 腕を。 足、 足、 足！ どっちに引っ張ってるんだ、そっちか？」 こうして何 度も

gagdjougini virazhawa Ljuba. Ono eini deu? Deumde joude ezeneni diana.
繰り返す、コーナーを、リ्यूバは。どうして疲れないのだろうか？ 疲れているが、何も口に出さない。

Xoŋtozi chempionkazi ezeneni ede. (3/4)

それ以外の方法では選手にはなれないのだ。

Uti Kamenev gegbini Nikolai bisees, xoŋtoke bisees, eimi saa, saina,
このカメネフの 名前は ニコライだったか、別の名前だったか、わからないが、多分

Nikolai bisini. Bii dramteatralla zuu spektaklela gusiweni isesiemi:

ニコライだった。私は 演劇劇場で、二つの 芝居で 演じるのを 見た。

"Port-Arturala" ibene generalawani, "Svad'ba s pridannem" Kurochkinewe.

「アルトゥル港」では日本の大将の役、 「持参金付き結婚」では クロチキンの役を。

Ajazi gusieni. Kurochkinawa gusiewenitene njanga xonoomi. Kinowe ei
うまく演じていた。クロチキンの役を 演じたのには 少し 驚いた。 映画を その

zulielani isesiemi "Svad'ba s pridannem" utala Kurochkinawa artiste Doronine

前に 見ていた、「持参金付き結婚」を。 そこではクロチキンを 俳優 ドローニンが

puundeseeni. Sagdi niinta, gugdade, uti Kamenevatene jou buadigini nektese
演じていた。 大 男で、背が高いのに、このカメネフは どう見ても 背が低かった、

Doroninadigi, nica, utemi xonoomi: ono biini, omo niiwe gusiiti artistazige

ドローニンより、小柄だ、それで驚いた。 どうしてか、 同じ 役を演じている、俳優たちが

xoŋto-xoŋto biiti. Utawa amjala sagieni, utebede iseiti (4/5) rezhissiora

別々 なのに。 それについてあとでわかったが、そのように見ている、 監督

taundini.

ごとに。

Tue stadionatigi alide uti amjalani esimi xuli. Buu ukeleu wooti bise
冬、 競技場へは 一度も このあと 行かなかった。私たちのキャンパスには作ってあった、

sportploshchadkawa, utala tuegisini, ulizi silusiesi, kjagdawanaati, utala ali-ali
運動場を。 そこで 冬になると、水を 撒いて リンクを作った。そこでときどき

kon'kizi tukjawasiemi xoŋtogutu njoulazigazi. Tatusidigi ekele bisini

スケートをした、 ほかの 若者たちと。 勉強の 暇な時は

sportzalala gusiu, geinigesiu, nii coo manga komandani bizeneweni buu

体育館で 遊んだり、競ったりする、だれが一番 強い チーム なのかを、私たちの

institutallau. Minawa zuunti komandala gusiliweneeti volejbolawa, basketbolawa.

大学で。 私を 二軍 チームで プレーさせた、バレーボールとバスケットボールを。

Jamadaxem instituta fakul'tetati geinigesiti. Buutene "ONS" komandalani

いろいろな 大学の 学部が 競っていた。 私たちは ONS というチームで

gusiu. Bonjo komandala gusieti jegdigezigemei: Kataev Tolja, Bessonov

プレーした。一軍では プレーしていた、青年たちだけ。 カタエフ・トーリャ、ベッソノフ・

Volodja, Bel'dy Misha xoŋtogutude. Emne ilekpesiemu mene dolo (5/6)

ワロージャ、ベリドゥイ・ミーシャほか。 一度、 試した、 自分たち同士で

gusimi. Bii komandai suuweneeni nuatiwe 2:1.

試合するのを。私のチームが 負かした、 彼らを、2対1で。

Uti amjalani Kataev Tolja (kapitana bisini) gaagieni mene komandatigi
 その後、カタエフ・トーリャが（主将だった）採用した、自分のチームに
 Lava Volodjawa, nia zuu niiwe. Bii mene komandatigi xontogutu
 ラーワ・ワロージャとあと二人を。私は自分のチームにほかの
 baatazigewe zawaami. Minawa inj-inj kapitana edewenekceeti. Bii eimi aju
 メンバーを補充した。私を何とか主将にしようとした。私は好きではない、
 zangjasimi, utemi Dolgana Grishawa kapitana edewenkimi. Amjala, cezezi
 リーダーになるのが。それでドルガン・グリーシャを主将にした。その後、本番で
 geinigesimi, buu suemu bonggo komandadu. Nuati zuke eteeti munawa.
 試合したが、私たちは負けた、一軍チームに。彼らはやつのことで勝った、私たちに。
 Coo manga komanda fizmata edeeni, utala Gosha Chmutine kapitana,
 一番強いチームは物理数学部だった。そこではゴーシャ・チムチンが主将で、
 xontogutude aja gusiti. Bii komandai esini mutu megjegde geinigesimi.
 ほかの選手もうまかった。私のチームはまだ終わっていなかった、試合するのを。
 Minawa Tolja Kataev bonggo komandatigi zawagieni, bii gagdau esiti ciala
 私をトーリャ・カタエフは一軍チームに引き込んだが、私の仲間たちは望まなかった、
 caixi geinigesimi bii ancizi. (6/7) Buu utelienjini suemu fizmatadu.
 この先、戦うことを、私ぬきで。私たちはそのとき負けた、物理数学部に。
 Fizkul'tura fakul'tetani puga gusieti mene dolo, dii kursa. Coo manga zuunti
 体育学部が別に試合を行なった、自分たち同士で、4つのクラスが。一番強かったのは2
 kursa edeeni, utala aja gusigetumei bisiti: Red'ko Pete, Bobylev Zhenja
 年生だった。そこではいい選手ばかりいた。レジコ・ペーチャ、ボビリョフ・ジェーニャ
 xontogutude. Utebede utelienjini bisini.
 など。そんなふうだった、当時は。
 Bii boksa sekcijalanide tatusiemi. Buu trenereu Ivan Vasil'evich Pudov,
 私はボクシング部でも習った。私たちのコーチのイワン・ワシリエヴィチ・プドフは、
 chempiona bisini, chempiona *Dal'nego Vostoka Sibirede* dulianti uguile.
 チャンピオンだった。チャンピオンとは極東シベリア中量級でだ。
 Nuani sebie minawa menzi santusiweneeni. «Sii ŋalai kutu tugezi uguni», —
 彼は最初私を自分で打たせた。「おまえの腕はとても速く動く」と
 gunei bise omotide. Nuani mangazi eini ŋanawana minawa, njenjeini,
 言っていた、いつも。彼は強くは殴らない、私を、かばっている。
 ali-ali bii xejelei santuleini, dianamiede: «Imi ei dakpise dilii ŋalazii,
 ときどき私の額を軽く打つ、こう言いながら。「どうしてガードしないんだ、頭を両腕で。
 iseinu, ono baami xejelei, bii mangazi esimi tungala, bagjouj (7/8) ezeneni
 わかるか、どう効くか、額は。俺は強くは打ってないが、相手は思わないんだ、
 munjali, siata tikpelezeneni, nokautalazani». Utebede alusieni minawa
 かわいそうとは。強く入ったらノックアウトさ」そんなふうに、説明していた、私や
 xontogutuwede. Biimie minawa Bel'dy Goshazi omosieni. Gosha anana,
 他の人にも。しばらくして、私をベリドゥイ・ゴーシャと組ませた。ゴーシャはかつて

junga biŋei, tatusieni boksawa, utemi mindigi paki bisini santusiile. Pudov
見習い水夫だったとき、習っていた、ボクシングを。それで私より上手だった、打つのが。プドフが
diankini: «Mangazi eziu duktee, dianau, imide teŋ nagdaafi».

言った。「強く 打つな、 言ってみろ、どうやったら正確に打てるか」

Bii eimi saa, imide Gosha utebede minawa dukteliemeni ingulede: omoti
私はわからない、どうしてゴーシャがそんなふうに私を 殴り始めたのか、やすやすと。いつも
bii xemulei nagdaini, biitene nuani gedigelenime. Nuani bii ŋalai xegilinime
私の 顎を とらえる、私のほうは彼の 後頭部ばかりだ。彼は 私の 腕の 下にばかり
xujesini. Utebede pontoliemu gagda-gagda egelieni. Pudov ekiweneeni, mindu
潜り込む。そうしてぐるぐると回っていた、お互いの回りを。 プドフはやめさせて、 私に
diankini: «Sii dilizii aja muisije, onode nuamani ajazi santulemi, iseje
言った。「おまえの頭でよく考えろ、どうやったら 彼を うまく 殴れるのか。見るんだ、
temene: jamda nuani (8/9) pagadizeneni. Dogdigei?»

しっかり、きっと 彼は ミスするはずだ。わかったか？」

Nia caixi santusiliemi. Ei temene isesiliemi nuani jaatigini. Emne-emne
また 続けて 殴り合いを始めた。今度はじっと見るようにした、彼の目を。 ときどき
nagdaliemi, kokpigiliemi ailiwesimi, utemdu, nagdaisini, dililei jaalai paam ede.
当てたり、身をかわしたりできるようになったが、やはり殴られると、頭や 目が クラクラした。
Biide nuani dilileni omoti nagdaliemi, emne kjam-bjem edeemeni medeemi,
私も 彼の 頭を 常に とらえだし、一度彼が顔を歪めたのに 気がついた。
uti amjalani njanga usawasieni. Utebede edeisini, nuani, kuzundemie,
その あと 少し 彼はよろけた。そんなふうになって、彼は 身をかがめて
ŋanawanaini minawa, biitene, njanga ailindeesi, ujezeŋezi xemuleni tikpeneimi.
打ってきた、私を。 私は 少し 身をかわして、上から 彼の顎を 殴った。

«Tek!», — utebede bii santui nagdaini nuani dilileni. Gosha omoti dilizii

「ガツン」と 私の 拳が 当たった、彼の 頭に。 ゴーシャはしきりに頭を
gigjalieni. Nuani mindigi nektesee, utemi bii ujezeŋezime santusimi sasalani.
振り始めた。彼は 私より 背が低いので、 私は 上の方から 殴り付けた、彼の頬を。
Ali-ali bii ŋalai nuani mioloni nagdaini, uti amjalani gediem edeini, uti
ときどき私の 手が 彼の 首に 当たると、その あと 一瞬動かなくなる。その
ekindini (9/10) bii eimi santusi, alasimi, dilini nejegizeŋeiweni. Nuani
とき 私は 殴らずに、 待っている、彼の頭がはっきりするのを。彼は
minawa amjala emnede ese nagda, bii koololoime nagdasieni. Bimie, Gosha
私を その後 一度も打つことができず、私のグラブばかり殴っていた。しばらくしてゴーシャは
ekieni, dilizii gigjaimi, teenkule teenegieni. Pudov joude eini diana, injeini.
やめ、 頭を 振りながら ベンチに 座った。 プドフは 何も 言わずに 笑っている。
Bii dilileide xaunilieni, diankimi utawa Pudovedu. Nuani dianaini:
私も頭がくらくらしたので、 言った、 そのことをプドフに。 彼は 言う。

— Aja, amjala dulenezeneni, sii sebie kutu manga baaj. Sii mejexi bii,
「大丈夫、じきに 直る。 おまえは最初にひどく強いのを食らった。おまえはスジがいいぞ、

bii sindu diankimi amjalani temene edeej, ajazi dukteej nuamani, keigzi,
おれがおまえに言った あと、 注意深くなくて、 よく 攻撃した、彼を。それが大事だ、
utebede bizeni. Bii joude nuanduni diankimei esini dogdi, utebede elegeni
それで結構。 俺が 何でも 彼に 言っておいたのを聞かなかったんだ、そうやって
dukte sinawa, eitene aja, tjasi manga baani.

痛めつけないようにと、おまえを。だからいいんだ、おおいにひどい目に会ったんだ」

— Bii dilii aasigizejeni? Gee ata bie?

「私の 頭は 治るでしょうか？ 悪くなったりしませんか？」

— Aja, njanga xaunindeesi, dulenezejeni. (10/11) Sii ezi weendegi boksawa

「大丈夫、少し めまいはするが、良くなる。 おまえはやめるな、ボクシングの

tatusimi, bimie aja nonilizejei.

練習を。 じきに うまくなるから」

Utelie dogboni bii jaaktasiliemi, bagjaza kaŋalatene Gosha ŋuani, nuani

その 夜 私は 胸がむかむかした。隣の ベッドでは ゴーシャが寝ていた。彼は

bii ŋuami amjalani ingule jaaktalieni bii mjagdaisi, nuani ŋuagieni. Njoulazige

私が 眠った あと、 すぐに 吐いた。 私が目を覚ましたときには、彼は寝ていた。仲間たちが

melexizi tegdeeti, utemi palatigi esimu jaakta. Timadule mjagdaisi, dilii

バケツを 用意してくれたので 床へは 吐かずにすんだ。 朝 起きると、 頭が

xauniweni medeemi, utemi esimi teegi tatusinelegemi. Xai eemei. Bii
フラフラするのがわかった。それで起きられなかった、授業に出るために。まだ吐き気がする。私の

bagjalai Gosha unuseini. Keptemie, xokonosini. Amjala diasiliemu.

隣では ゴーシャが苦しんでいる。横になって、うめいている。あとで 二人で話した。

— Kutu mangalaami bii, ljasii duktei sii minawa, — gunkini Gosha.

「ひどい目に会った、 ぼくは。ひどく痛めつけた、君はぼくを」 と言った、ゴーシャが。

— Siine minawa ono dukteej? Janami sebie utebede zawaŋdaaj? — diagimi

「君こそ ぼくを どうして殴ったんだい？ なぜ初めからあんなふうにやり出したの」 尋ねた、

bii.

私は

— Bii muisiemi: sinawa emnekcem nokautirelezejei. (11/12) Kutu mai

「ぼくは思った、 君を すぐに ノックアウトできると。 とても 強い

baata bii sii. Esimi muisi bii, amjala, manga baazaŋai. Jou dianka Pudov

奴 だ、君は。 思わなかった、ぼくは、あとでひどい目に会うとは。何て言ってた、ブドフは、

sindu?

君に？」

— Diankini, onode sii dililei santusilegei, mejezi aja etetelegei.

「彼は言ってた、どうやったら君の頭を 殴れるか、 自分の頭をよく使うようにと」

— Aa, saina, nuani mintigi tagdaani, bii nuamani esimi dogdi. Dianka,

「そうか、多分、彼はぼくに腹を立てた。ぼくが彼の言うことを聞かなかったから。言ったんだ、

bii sinawa manga elegei dukte, esimi dogdi. Eje, kutu xouni dilii.

ぼくが君を ひどくやっつけないように。それを聞かなかった。ああ、くらくらする、頭が」

Utebede kepteemu omo neŋi tai, zeude digakcami esimu mute: eemei.

そうやって私たちは寝ていた、一日中。食事を取ることもできなかった。むかむかした。

Dogbo, gagda neŋide unuseemu, omoti ŋuamu. Sikie mindu aja edelieni,
夜も、次の日も具合が悪くて、ずっと寝ていた。夕方になって私のほうは良くなってきたが、
Goshatene xai unuseeni. Uti sikieni mintigi emeeti jegdigezige basketbola
ゴーシャはまだ具合が悪かった。その晩私の所にやって来た、仲間が、バスケットボールの
komandadigini: timana geinigesilizenefi instituta fakul'tetani doloni. Minawa
チームから。明日試合が始まる、大学の学部間で。私を
(12/13) uchitel'ska instituta komandalani gusilegei geleiti. Bochkarjov Misha,
教育大学のチームでプレーするように頼んだ。ポチカリョフ・ミーシャは、
matematikawa tatusiini, kapitana edeeni, utemi bii nuani komandalani gusilegei
数学を学んでいるが、主将になって、それで私が彼のチームでプレーするように
keleneeni.

招請したのだ。

— Bii unimi, dilii xaunii, eemei, ezeŋei mute gusimi, — guŋkimi bii.

「ぼくは病気で、頭がふらふらして、吐き気がするから、できない、試合は」言った、私は。

— Bii sinawa tausigizeŋei, gaiti aasigizeŋei. Sii gudiej jousulaktu biini,

「ぼくが君を治してやるよ、すぐに良くなる。君は胃が悪いから

utemi eemei. Alasinde njaŋgade, bii efili emegizeŋei, — utebede dianamie,
それで吐き気がするんだ。待ってろ、少し、ぼくはすぐ戻るから」そう言うと、
njugieni. Goode eimi bie xebueni ila litra margancovkawa ulizi solisewe.
出て行った。しばらくすると、持って来た、3リットルのマンガン水を溶かしたのを。
Utawa umiweneeni mindu.

それを飲ませた、私に。

— Teumeni umije, ajazi sikigileni doomoni.

「全部飲んだ、よく洗浄するように、お腹を」

— Eimi mute teumeni emnekceem.

「できないよ、全部いっぺんには」

— Umije, umije!

「飲んで、飲んで！」

Bii, jaaj nifiesi, umiemi. Njanga esimi mala. Bindemie (13/14)

私は目をつぶって、飲み干した。少しだけ飲み切れなかった。しばらくして

jaaktasiliemi.

吐き出した。

— Aja, utebede jaaktagije teumeni.

「よし、そうやって吐くんだ、全部」

Uti amjalani xoloptoomeni umigiemi. Bindeesi, teumeni jaaktagiemi.

その後、残っていたのをまた飲んだ。やがてまた全部吐き出した。

Utebede sikigiemi gudiej. Misha goo teeni bii kialai. Utaatene zeu
こうして洗浄した、胃を。ミーシャはずっといた、私のそばに。それから食事を

geeneesi, digawan̄kini minawa. Sebie wacazi bueni zeuwe. Digami amjalani
持って来て食べさせた、私に。最初は 少しでもくれた、食べ物。食べたあとは
eide eemei edeeni.

もう吐き気は起こらなかった。

ɲuagiemi, dogbo aja ɲuami, joude esimi toosi. Timadule Misha nia
また寝て、夜はぐっすり眠った、何の夢も見ずに。朝、ミーシャが再び
emeeni, digalagai zeuwe xebueni. Kepteme digasiemi, uti amjalani nia
来た、食べるように食事を持って来てくれた。横になったまま食べた、そのあとまた
ɲuagiemi, utebede sikiegde eku kepteemi. Diliide njanga xounesieni. Misha
寝て、そのまま夕方までたっぷり寝た。頭は まだ少し くらくらし。ミーシャが
sikie dian̄kini:

夕方、言った。

— Timana tatusineje, aja, joude ezeneni bie.

「明日は 学校に行けよ。大丈夫、何でもない」

— Pegetemize, — guneemi bii.

「頑張るよ」 答えた、私は。

— Ga, aja ɲuaje. Bii ɲenimi. Timansikieni geinigesilizenefi.

「じゃあ、ゆっくり寝るんだ。ぼくは帰る。明日の夜は 試合だぞ」

XX

Bii utawa amjala sagiemi, joude bisimeni. Gosha xai zuu neɲini
私はこれをあとで わかった、どうであったかを。ゴーシャはさらに二日
unuseeni, utaatene doktoratigi ɲeneeni. Nuamani bol'nicala tausileni
苦しんで、その後 医者に行った。彼を 病院で 治療するために
keptewen̄kiti: dujeni gigjamueni. Wai omo neɲini tausizeneni. Amjala saami
入院させた。脳震盪を起こしていた。二十一日間の治療が必要だという。あとでわかった、
bii: mindulede duje gigjaptaamani, utemi xouni, eemei bisini.
私は。私も 脳震盪を起こしたので めまいや吐き気がしたのだ。

Sikie zawaɲdaamu geinigesimi. Timadule neɲi dulaɲkidigini tatusiemu.

その夜、始めた、競技を。朝から 昼 過ぎまでは 勉強した。

Literatura urokalani onjoini N. G. Cherneshevskaja knigawani taniemu. Bii ei
文学の 授業では 作家 N. G. チェルニシェフスキーの本を 読んだ。私は 今
ezen̄ei teluɲusi, onode tatusiemu. Uti knigala omo mai nii biuweni onjooni,
話すつもりはない、どのように学んだかを。その本の中で、一人の 強い 人が いるのを 書いていた、
onode memi, mene bejei, doozoi manga bilegeni tatusieni. Coos sebzen̄ke,
どのように自分を、自分の身体を、心を 強くするために鍛錬したのか。特におもしろかったのは、
onode uti Raxmeta tikpezigele ɲuasieni, utebede alisieni mai bilegemi. (1/2)
どのようにそのラフメトフという人物が釘の上に寝て、それで 鍛えたか、強くなるために。

Sebie xonoomi, ono eini gafai tikpe dueleni keptemi n̄uajmi. Utebede
最初は 驚いた、どうして刺さらないのか、釘の 上に 横になって寝て。 そうして
omoti keptemi, tatiti, nii niani mai edeini, utemi ajazi aliseliti. Utawa
いつも 寝て、 慣れると、人の皮膚は 強く なって、それで よく 耐えられるのだ。これを
muisiemi: Raxmeta tikpele n̄uajni, biine mutezemi gusimi, dilii njanga-njanga
考えた。 ラフメトフが釘の上に寝るのなら、私だって試合できるだろう、頭が 少しぐらい
xouweni. Ilekpesizemi!
ふらふらしても。やってみよう！

Sikie buu mene "ONS" komandazini gusiliemu. Sebie gusiliyeu, bii dilii
夜、私たちは自分の ONS チームと 対戦した。初め、プレーしたとき、私の頭は
tauxi-ouxigigjamaini, utemi, njanga usawasimi, tukjawasimi. Njenesimi
あちこち ふらついて、それで 少し よろけた、 走るとき。 汗をかい
amjalani mindu aja edelieni. Uti sikieni bii imike omoti korzinala
あと、 私は 良くなった。 その 晩、 私は なぜか いつも バasketを
basketbola mjachizini nagdasiemi: onode, idigide weenteisi, doofo nagdaimi.
ボールが 捕らえた。どのようにしても、どこから投げても正確に入った。

Buu utelienjini dijeemu minti "ONS"ewe. Utala xai Tolja Kataev
私たちはそのとき打ち負かした、わが ONSを。 そこではまたトーリャ・カタエフが
kapitanalaini. (2/3) Xai utigetumei gusiti: T. Kataev, M. Bel'dy, V. Lava, V.
主将を務めていた。 やはり彼らばかりプレーした：T.カタエフ、M.ベリドゥイ、V.ラフ、V.
Bessonov, G. Dexal' (nivxa). Nuati mindigi njanga gugda, utemi minawa
ベッソノフ、G.デハリ (ニブフ人)。彼らは 私より 少し 背が高いので、それで私を
mene komandalau esiti gusiwene. Suefi amjalani, T. Kataev minawa
自分たちのチームでプレーさせなかったのだ。負けたあとで、 T.カタエフは私を
komandatigi suegilieni. M. Bochkarjov eini bugi minawa. Utagei Tolja
チームへ入れようとしたが、M.ボチカリョフは許さなかった、私を。 すると、トーリャは
diankini sud'jadu:
言った、 審判に。

— Nuani giala ancizi gusini uchitel'skij instituta komandalani, studenta
「彼は 権限 なしで 試合している、教育大 チームで。 学生では
eini bie, jeinti klassalatene tatusini, utemi "ONSa" komandalani gusizeneni.
ない、 九 年生で 学んでいる。だからONS チームで プレーすべきだ」

— Sebie imi esi zawa nuamani, unjemeni imi esiu tausi. Bii
「最初からどうして採らなかったか、彼を？ 病気だったのをなぜ治さなかったか？ 私が
tausigiemi nuamani, utemi nuani einenji gusilieni. Andale, ono biini sii
治しました、彼を。 だから 彼は 今日 試合に出たのです。アンドレイ、どうだい、君の
doozei ei? — uti M. Bochkarjov zagbaligini (3/4) minawa. Sud'ja (utelienjini
気分は今？」こう言ってM.ボチカリョフは擁護した、 私を。 審判 (当時
fizkul'tura studentani A. Suchilov) guṇkini:
体育学部の 学生だった A.スチーロフ) は言った。

— Tolja cezewe dianaini: Andale studenta eini bie, utemi giala anci
「トーリャは正しいことを言っている。アンドレイは学生ではない。だから 権利がない
biini uchitele instituta komandalani gusimi. Gusilisini, uti komandawa ezenei
のだ、教育 大学の チームで 試合するのは。もし試合を続けたら、このチームには
gusiwene.
試合をさせない」

— Nuani elisini gusi, niiwe baazami tunaitiwe? — Misha elusim bogolien.
「彼が 出れないなら、だれを見つけたらいいか、五人目の選手に？」とミーシャが途方にくれた。

— Zawaje niwedede, studenta biinide aja.
「入れろ、 だれでも、 学生 だったらいい」

— Pegezemi. Munjalie, Andale, baadulegifi. Ezi uni odcaixini.
「やってみよう。残念だが、アンドレイ、お別れだ。 病気になるなよ、もう」

Misha niwede esini baa, niide esini ciala uti komandala gusikceimi.
ミーシャはだれも見つけられなかった。だれも望まなかった、このチームでプレーしたいと。
Utebede bii gusiliemi "ONSa" komandalani. Xai suemu fizmatadu, xai
こうして私はプレーすることになったONSチームで。 また 負けた、 物理学部に、再び
zuunti udewe baamu. (4/5)
二 位に なった。

Uti amjalani bii esimi xuli santusinemi. Doktorala xauntasiemi amjalani
その後 私は 行かなかった、ボクシングをしに。医者を訪ねると
nuani teluusiwenenei mindu teumeni, onode bisimeni. Goo jouktesiemi
彼女は 話させた、 私に すべてを、どうだったかを。 長いこと検査した
amjalani, diankini:
後で 彼女は言った。

— Jou boksawanide odcaixini kakta anani ezi tatusi. Bia taundini
「どんな ボクシングも この先 半 年間 してはいけません。毎月
jouktesilegei emeje, sindule enimecezi dujei gigjandaani, utemi mangazi esii
検査しに 来なさい。あなたは 軽い 脳震盪で済んだから、そんなに ひどく
uni. Caixi temene bije. Pudove dansizegei, imi utebede zuxelewenenei
痛まなかったのよ。今後気を付けなさいね。プドフには言っておくわ、どうしてそんな乱暴をさせたか、
sunawa. Dillii unini?
あなたに。 頭は 痛い？」

— Kakta neji edeisini unilini sikiegde.
「半 日 たつと 痛み始めます、夜まで。」

— Dulenezegeni. Sii sportawe ezi weente, izidexem tatusije, boksawatene
「じきに治まるわ。 あなたはスポーツをやめずに、何でもやりなさい、でもボクシングだけは
kakta anazini ezi tatusi. Aja biteize, baata.
半 年間 しないように。 じゃ、お大事にね」

— Asasa, doktora.
「ありがとうございます、先生」

Nekigieni. Bonjo apreljadu aña taundini (5/6) joudem tamawani waca
春になった。四月一日から 年 ごとに いろいろな物価が引き下げられて
edeweneiti adike procentazi. Ei aňanide gazetala onjogieti tama zaasa
いる、 数パーセントずつ。今年も 新聞に 書いていた、物価が 安く
esigiemeni. Magazinala, bazarala, iledexem jou anci, tapci biini zeu, sexi,
なったことを。店や 市場では 至るところ 何がないか、たくさんある、食料品、日用品、
xonjo xazude. Waali wadiendigini nadate see duleneeni, gaiti aja bagdilieti
その他 何でも。戦争が 終わってから 七 年が 過ぎた。急速に 良く 暮らし始めた、
niizige. Pete onjooni: maja biaduni emezeňeni mintigi, amjalatene, bii
人々は。ペーチャが手紙をくれた：五月に 来る、 私の所に、そのあとまた 私の
tatusimi mutuisi, geenegizeneni minawa aanazi.
授業が 終わったら 迎えに来てくれる、私を 舟で。

Sune Vova omoti mentigi gaisini. Nuani enini kolxozala bagdini
スン・ヴォーヴァはいつも家に呼んでくれた。彼の お母さんはコルホーズで暮らしている、
aerodroma kialani. Kolxoz gegbini "Kantonskaja kommuna", utala in̄kazigemei
飛行場の 近くで。コルホーズの名前は「広東人 コミューン」で、そこでは中国人ばかり
egdi. Sebie emeňei, daaniňe Nadja (utebede bisini Vova enini gegbini)
多い。はじめて来た時、 ナージャおばさん（こうだった、ヴォーヴァのお母さんの名前は）が
dian̄kini mindu:
言った、私に。

— Sii zogoboi bimi, (6/7) kutu alagdiga baata bii. Bii sii nica biňei,
「あんたは合の子だから、 とってもハンサムなのよ。 私はあんたが小さいとき、
xabausiemi sinawa, sii Vovazi omo aňani gie bagdiew.
おっぱいをあげたものよ、あんたに。あんたはヴォーヴァと同じ年に生まれたのよ」

— Eimi saa, eniňe joude ese diana, amjala xauntasizeni utawa, —
「それは知りませんでした、母は何も言ってなかったから、あとで聞いてみます、そのことを」
gun̄kimi bii, xonomide.
と言った、私は 驚いて。

Zua emegiseňei zugtigi, xauntasiemi eniňele. Eniňe dian̄kini:
夏に帰ったとき、家へ、尋ねた、母に。母はこう言った。

— Vova jou buadigini ai sinzi. Nadja Mitewe xabausieni bii amii
「ヴォーヴァはずっと年上よ、おまえより。ナージャはミーチャにおっぱいをくれた、私の父が
budeeni aňaduni. Bologieni bise, buu Oloňotigi xuliseňeu abuge buňjetigini
亡くなった年に。 秋 だった、私たちがオロンに 行ったとき、 父さんのお墓に
emesen̄eu. Utelien̄ini Vova tene bagdieni, omo bia xeen̄kini bisini. Bii
来たとき。 そのときヴォーヴァはちょうど生まれたばかりで、一ヶ月ぐらいだったわ。私は
Mitawe imeneemi nuanduni, utemi xabausieni bii ancizi. Sinawatene niide
ミーチャを預けたの、彼女に。それでおっぱいをくれたの、私がいなくて。おまにはだれも
esini xabausi, bii mene juwen̄kimi sinawa.
おっぱいをあげてないわ、私が自分で育てたのよ、おまえを」

— Aa, utebede biiniew. Dianazani nuaduni. (7/8)

「ああ、そうだったの。言っておくよ、彼女に」

Nia enije diankini, Mite avguste bialani bagdieni omo minga jei tangu
また 母は 言った、 ミーチャが八月に 生まれたと、一 千 九 百
ilaza zunti anaduni, Vovade uti anani bagdieni, omo biazini neñui Mitezi.
三十 二 年に。 ヴォーヴァもこの年 生まれた、一ヶ月 年下だ、ミーチャより。
Maja bialani bii belesiemu nuani naawa gwanculeiweni, uiwe uiwenide. Zua
五月に 私は 手伝った、 彼女が 畑を おこして 種を 蒔くのを。 夏には
canaiweni belesiemu. Daaniye Nadja zua uile juemeni bazarala xudasieni.
草刈りを 手伝った。 ナージャお婆さんは、夏に 畑で 育てた作物を市場で 売っていた。
Utazi bagdieni.

それで 暮らしていた。

Petewe vokzalala timeedule asalineseemi. Bii bagdii zugditigi loxoi
ペーチャを駅で 朝早く 出迎えた。 私の 寮まで 歩いて
emegiemu: Pete avtobusezi esini ciala neneimi, Xabarskawa ajazi iselegemi
帰った。 ペーチャはバスでは 望まなかった、行くのを。ハバロフスクを よく 見るために
gianadaani. Bii nuanduni joudexem isewenemi dianaami. Mene bagdii
歩いたのだ。 私は 彼に あちこち 見せて、案内してやった。 自分の 住んでいる
komnatalla imeneesi, tatusinegiemi. Pete dogbo esini nua, wagonala nii tapci
部屋に 彼を残して、授業に出かけた。ペーチャはタベ 眠れなかった。車両が 人でいっぱい
zalupteeti, utemi teemi ekiwesieni, utemi ei (8/9) nualagami nixeeni bii
あふれていたのだ、座ったまま、うとうとただけだ。だから今は眠っていたかったのだ、私の
urokai malaptaitiginiede.

授業が 終わるまで。

Ineji xotole saljasineemu, uti amjalani jougu-jougu gadalagami
午後、 街で 昼ご飯を食べた。 その あと 何か 買い物をしようと
magazinazigetigi iiseemu. Omoti xauntasieni, joude mindu gadalagami, bii
店を 歩き回った。 しきりに 尋ねた、 何でも 私に 買うように。 私は
joude esimi ciala, mindule teu bie (munawa agba tetiweneini, digawanaini).
何も ほしくなかった、私には 全部あるので（私たちに 国が着せたり、食べさせたりしている）。
Kinoteatr "Gigantala" kino isesiemu, sikie zugtigi emegiemu.
映画館 「ギガント」で 映画を 見て、 夜 寮へ 帰って来た。

Digasiemi amjalani Pete jouxike neneeni, bii goo alasiemi, alide
夕食の あと、 ペーチャはどこかに出かけ、 私は長いあいだ待っていた、いつ
emegizeneweni. Dogbo dulanjinide dulene, nuani xai esini emegi. Bii
帰って来るかを。 夜 半を 過ぎても、彼は まだ 帰って来ない。私は
njuemi baixi, iledexem galaktaliemi, utemi baagiemi omo skveralu: xatalazi
出た、 外へ。 あちこち 探し始め、 そして 見つけた、 ある 公園で。 娘と
diasini teenkule. Kiatigiti emeesi, tagdagiemi Sipina Valjawa, nuani (9/10)
話している、ベンチで。そばへ 近づくと、わかった、 シーピナ・ワーリャだと。彼女は

zuunti kursala tatusieni, gwasani mutuzeŋe uchitel'ska institutawa. Utawa
二年生のクラスで学んでいた。来年 卒業する、 教育 大学を。 これを
sagiesi, ŋuanagiemi, alide Pete emegiemi, esimide dogdi.
見て、 帰って眠った。 いつ ペーチャが帰って来たのかも気づかなかった。

Gagda sikienide utebede bise, mindu dianaani, aja xatala biini uti
次の 夜も このようだった。 私に 言った、 良い 娘 だと、この
Valja. Petedu wai tuŋa see edeeni, utemi mamasalazani dookooni bize,
ワーリャは。 ペーチャは二十五歳になっていたから、もう 結婚しても いい頃だっただろう。
utemi muisiemi: baani mamasatanami. Bii aja saimi uti Valjawa, aja xatala,
それで私は思った、見つけたんだ、嫁さんを、と。私はよく知っている、このワーリャを。良い娘で
gee mamasa ezeneni bie bii agadui. Zuu dogboni aŋasiesi, gulinjeni Pete
悪い 妻 ではないだろう、私の兄にとって。二 晩 泊って、 帰った、ペーチャは
zugtigi: etetei alasini.
家に：仕事が待っているのだ。

Amjala nuani mindu onjoimi Valjadude onjosieni. Bii omo onjoowe
あとで 彼は 私に 手紙を書いて、ワーリャにも書いてよこした。私は一通を
bugiemi xataladu, nuani utawa zawaimie, niamandaani. Mindule jouke dolo
渡した、 娘に。 彼女は これを 受け取りながら、悪態をついた。私には 何かが 心の中で
xegdegeibede bise. Xoŋto onjoweni esimi bugi.
プツンと途切れるような気がした。ほかの手紙を渡すことはなかった。

XXI

Bii Grishadu diankimi utawa. Nuani tagdaani:
私は グリーシャに話した、 これを。 彼は 怒った。
— Sii agai kutu alagdiga jegdige, ileze nuani uti Valjazi, damisini,
「君の 兄さんはとても 男前なのに、 どうして彼があんなワーリャになんか。煙草を吸ったり
xuktuleini. Geemei mamasa bizeŋeni.
遊んだりしているのに。悪い奥さんになるよ」

— Bii xagzaimi agadu utawa dianaimi, alide ezeneni diana. Joude eini
「ぼくは恥ずかしくて、兄さんにそんなこと言うなんて絶対 できない。 何も
saa aja. Valjade nuanduni ezeneni onjogi onjoowe, utebede bizeŋeni, — bii
知らせないほうがいい。ワーリャも彼には書いたりしない、手紙を。それでいいんだ」 私は
utebede bodoimi.
そう 考える。

— Petedu dianaje, onofide xatala biiweni uti Valja, — Grisha jaaj
「ペーチャに言えよ、どんな娘なのか、このワーリャってのが」 グリーシャが目
kilum-kilumesimi tagdamai dianaini.
怒りをこめて 激しい口調で 言う。

— Ee, bii joude geeweni eimi saa Valjala, uti niamaiwenitene dogdimi
 「でも ぼくは何も 悪いことを知らない、ワーリャについて。彼女が悪口を言ったのを聞いて
 xonoomi. Tene dogdiemi utebede xatala niamaiweni. Eimi cialade, ingule
 びっくりした。初めて聞いた、こんなふう若い女性が口汚く罵るのを。もしその気がないなら、すぐ
 mindu dianagimi aja, — bii xai (1/2) eimi ceze Valja utempi aanta biiweni.
 ぼくに 言えばいいのに」 私は今でも 信じられない、ワーリャがそんな 娘 だとは。
 Bii amjala Petedu onjogiemi, diankimi elegeni onjo Valjadu, imidele, esimi
 私は その後 ペーチャに手紙を書いて言った、もう手紙を書かないようにワーリャには。なぜかは
 diana.
 言わなかった。

Maja malaptaisini ekzamenawa tamaanku ekini edeeni, utemi gjaŋa
 五月の 終わりに 試験 期間が 始まったので、 毎
 neŋini taŋiu, onjou ei zulieni tatusisewe. Bii fizikawatene ajazi eimi egzegi,
 日、 読んだり書いたりする、今まで 学んだことを。私は 物理学だけは よく わからなかった
 utemi utawa taŋimi, egdimeni eimi zoŋigi. Fizikawa ekzamenalaimi zuke
 ので、それを 読むが、多くは 覚えきれない。 物理学を 試験では 何とか
 "ilawa" baami. Xontogutuwe ajazi tamagiemi. Uti amjalani zuanti
 「三」 をもらった。 ほかの科目は いい 成績だった。 この あとは 夏
 kanikulatigi ŋenizeŋeu. Bii gulinjii zulielini sportawa gusii tatumni Buda
 休みで、 帰るのだ。 私が 出発する前に コーチ（スポーツ実技教師）のブーダ・
 Anatolij Sergeevich diankini mindu:
 アナトリー・セルゲーヴィチが言った、私に。

— Sii gusizeŋei volejbolawa zuunti instituta komandalani.
 「君はプレーするんだ、バレーボールを大学の第二チームで」
 — Jou geinigeni? — xauntasiemi bii. (2/3)
 「何の 試合ですか？」 尋ねた、 私は。
 — "Iskra" obshchestvani mene dolo geinigesiti, utemi minti zuunti
 『イスクラ』隊が 学内で 試合をする。それに われわれの第二
 komandafi gusini.
 チームが 出るんだ」

Ilama neŋini gusiemu, emneete suemu, utemi zuunti udewe eteemu.
 三 日間 試合をして、一回しか 負けなかったので、 第二位に なった。
 Bii oŋmoomi onjozoŋei, onode estafetala tukjawasiemu buu,
 私は 忘れていた、書くのを、 どのようにリレー競走で走ったか、 われわれ
 "severnikaŋige". Zuunti majadu gjaŋa aŋani tukjawasiti xoto ulicalini
 「北方チーム」が。 五月二日に 毎 年 走る、 市内の 通りを
 estafetazi. Buude cialaamu tukjawasimi, adike muda tukjasigeu uti
 リレーで。 私たちも 参加しようと、 何 度か 走ってみた、この
 marshrutalini. Bii startovalaami ploshchadile, omo tangu metra xeenkini
 コースを。 私は スタートを切った、広場で。 百 メートル ほどを

tukjaasi, bugiemi Goshadu estafeta mooweni ilientizi, minawa niogieti zuu
走って、渡した、ゴーシャに バトンを 三着で。私を 抜かした、二人の
baata xoto skolala tatusiget. Kutu gee tukjaami, bugdii zuke ugibede bise.
若者が、市内の学校の生徒だ。 (私は) ひどい走りっぷりで、足が辛うじて動いているようだった。

(3/4) Uti amjalani muisiliemi: kutu gee biini aiwe umiemi amjalani
この あとで 思い返した。とてもひどいのは 酒を 飲んだ あとで
tukjawasimi. Tiinenji Bongo Maja guanjawani asaliemu, utemi umiemu
走ったからだ。昨日 メーデーの 祭りを 祝って 私たちは飲んだ、
xutaligi vinowe. Bii omo stakanawa umiemi, utemi bii doozoi geebede bise.
赤 ワインを。私は 一 杯だけ 飲んだが、それで 気分がすぐれなかったのだ。

Amjala Misha Bel'dy mindu diankini, bii degdii caam bisini tukjanai:
あとで ミーシャ・ベリディが私に 言った、私の顔が 青かった、走っているときに。
utebede gee edeeni aiwe umiemi amjalani. Utelienjini buu zaa omontizini
たしかに具合が悪くなった、酒を 飲んだ あとから。そのとき 私たちは十 一着
emegiemu: ilaza xulemie skolaziga njoulati tukjaati. Bii amjala sagikceemi,
だった。三十 以上の 学校の 若者が 走った。私は あとで わかった、
niide suemeni — niide esini sue, ilientizime estafeta bugieti gagdadufi.
だれのせいで負けたかを。だれも負けなかったのだ。ずっと三位でバトンを渡していた、次へ。

Sebzenke! Uta imi Kir'jake zaa omontizini tukjagieni finishatigi? Kir'jaka
不思議だ。それならなぜキリヤックは十 一着で 帰って来たか、ゴールへ? キリヤックは
dianaani: (4/5)
言った。

— Aa, Tolja Delkini, gianaibede emeiweni, xeetiemi, tugezi tukjalagani,
「ああ、トーリャ・ジェルキニが歩くみたいにして来たから叫んだ、早く 走るように。
utatene geikpeneeni, zaa ilantizi bugieni mindu estafetawa, biitene zuute
そしたらようやく少し急いで、十三位で 渡した、ぼくに バトンを。ぼくは 二
niiwe niogiemi.
人を追い抜いたんだ」

— Bii, xai goo bizeem, muisiemi, utemi esimi xeline, — utebede
「ぼくはまだ 遠い だろうと 思った から 急がなかったんだ」 こう
ajaktugieni Tolja. Bou, nektese jegdige, tukjawasimi ajuni, utemdu eimi
言い訳した、トーリャは。太っていて小柄な若者で、走るのは 好きだが、そんなわけで
xeline tukjawasini.
早く 走れない。

Utebede emneete tukjaamu estafetala, utadigi caixini alide eseu tukjawasi
そんなふうに一度だけ走った、リレーで。それ 以来 決して 走らなかった、
estafetawa. Utelienjini bii isesiemi, onode santazige tukjasiiweti estafetawa.
リレーを。そのとき 私は 見物した、どのように大人の選手が走るのか、リレーで。
Seresheza ulicadigini, sebie xegixi ouwesi, uixi degdegini Kalinina ulicani,
セリシェフ 通りから 最初は 下ってから、 上がって来る カリーニン通りを。

utali tukjaigetü dabagiti (5/6) Karla Marksa ulicatigini, utali ploshchadila
それから選手は 出る、 カール・マルクス 通りへ。 そこを通過して広場で
finishirovalaiti, uti ploshchad' Staline gegbiweni gegbisilieni. Bii utala
ゴール・インする。この広場は スターリンの名を付けられていた。 私は そこへ
iseneemi jalude: uti etapawa zuu manga jegdigezige geinigesizejeti: "Dinamo"
見に行った、わざわざ。この区間を 二人の 強い 選手が 走らなければならない。「ディナモ」
komandala sagdi jegdige tukjaini, Batov nuani seeni, buu komandalaute
チームから 大柄の 選手が 走る。 バトフが彼の 名前だ。 私たちの大学チームからは
Red'ko Pete tukjaini. Nii niiwe dijezeni, nii niiwe niogize. Gagdai
レジコ・ペーチャが走る。 だれがだれを 負かすか、だれがだれを 追い抜くか？ 仲間を
alasimi, Pete ljasi damisini, Batovtene elele ekenesizi tukjawasini. Bii
待ちながら、ペーチャはしきりにタバコを吸っていたが、バトフはあたりをゆっくり駆けていた。私は
diankimi Petedu:
言った、ペーチャに。

— Janami damisii egdiwe, eikpesimi kutu gee bizeneni, tukjamide gaiti
「何だって タバコを吸うんだ、そんなに。息をするのがつらくなって、 走ったら すぐ
deuzenjei.
疲れちゃうぞ」

— Sindu jou bie, kujaka? Teutu bije, bii saimi jou nixeimi,— tagdasieni
「おまえに何がわかる、ガキのくせに。黙ってろ、俺はわかっているさ、どうすべきかは」 怒った、
Pete.
ペーチャは。

— Mindu joude ei bie. Bii saimi onode doozoi ugui biiweni aiwe
「ぼくには何のつもりもないよ。ぼくは知ってる、どんなに気分が悪くなるか、 酒を
(6/7) umise amjalani. Damiwede weendegiem.

飲んだ あとは。（それでぼくは）タバコをやめたんだ」
— Mindu gee bizeneni, gunei? Bii tiineni aiwe umiemi. Aja, nienje
「俺が具合が悪くなるとでも言うのか？ 俺は 昨日 酒を 飲んだ。 大丈夫、汗が
njuisini, mangagde esigizenei, — injelieni Pete.
出れば、 すぐ元どおりさ」 笑った、ペーチャは。

Buu Petezi dia-dia komnatala bagdiu. Timadule buu zarjadkawa woimi,
私とペーチャは隣同士の 部屋で 暮らしている。毎朝、 私たちは体操を して、
ljasi tukjawasiu, utemi nuati nuajwati siugiu. Emne Pete, njuesi,
激しく走り回るので、それが 彼らの 眠りを 妨げる。 ある日 ペーチャは部屋に来て、
igbesilieni munawa, biitene, batarejala nalazi zawaasi, ugiweneemi deuxii.
追い出そうとした、私達を。私は 暖房のパイプを手で つかんで、回していた、 腰を。
Pete teunijewe igbegieni buu eetigiu, minawada igbelieni. Bii dianaimi:
ペーチャは皆を 追い立てた、私たちの方へ。 私のことも 追い出そうとした。私は言う。

— Ei gere nii buani, jou giazini igbesii?
「ここはみんなの 場所だ、何の 権利があつて追い払うんだ？」

— Suu kutu danuleu buu nuajweu.

「おまえらはおおいに邪魔している、俺たちの睡眠を」

— Bii eimi jempene, eku gigjaimi, joude eini jaide.

「ぼくは騒いでなんかいない、静かに運動してるだけだ、何も音を出さずに」

— Iseje, ezi ugzawane joudede, ingule igbegizeŋei, (7/8) — Pete,

「見てろ、音を出すなよ、何も、すぐ 追い払うからな」 ペーチャは

komnatatigi ŋenimie, dianaani.

部屋に 戻りながら 言った。

Pete Red'ko mindigi tuŋa see xulemizi ai. Nuani Birobidzhanala

ペーチャ・レジコは私より 五 歳 以上 年上だ。彼は ビロビジャンで

tatusieni kul'tprosvetexnikumele, teemeti mutueni, duxovoj orkestrala gusieni,

勉強した、文化教育専門学校で。 一昨年 卒業した。 管楽器を やっていて、

utemi ali-ali dogdiu buu, nuani mene komnatalai gusiweni "korneta-omozi".

それでときどき 聞こえる、私たちは、彼が自分の 部屋で 演奏しているのが、ホルネット独奏で。

Nuani shtangawa uindeseeni, emne bogdoloŋ xuudulieni, uti amjalani,

彼は バーベルを 持ち上げていて、ある日 肩を 挫いてしまい、その後

volejbolawa gusimi, ŋalazi (aŋaza) mjachiwa dukteimi tjasi uni baini, utemi

バレーボールをするのに、手 (右の) で ボールを 打つと 激痛が 走るので、

zieŋeze ŋalazii tatusilieni dukteimi. Eitene zuunti kursala tatusini fizkul'tura

左 手で 練習していた、打ち返すのを。今 二年生のクラスで勉強している、体育

fakul'tetalani. Shtangawa eini uindeesi, volejbolawa, basketbolawa gusini,

学部で。 バーベルを 持ち上げずに、 バレーボールやバスケットボールをしたり、

tukjawasini.

走ったりしている。

Utelieŋini nuani estafeta Batov (8/9) amjalani zawagieni, utemi xaata

そのとき、彼は バトンを バトフに 続いて 受け取った。そして全速力で

tukjalieni, nuamani boonilegemi. Goode eimi tukja, boonieni, njanga gie

駆け出した、彼に 追いつこうと。 あまり走らないうちに 追いつき、しばらく並んで

tukjandaasi, niogieni nuamani. Etapa malaptalisini, deuweni, utemi Batov nia

走ってから、追い越した、彼を。 区間の 最後で 疲れてしまい、それで バトフがまた

niogieni Petewe, utebede bugieti estafetawa: Batov niondo, ila metrazi

追い越した、ペーチャを。そのまま渡した、バトンを。 バトフが 先で、 三 メートル

amjala — Pete. Utebede mutueti tukjaimi. "Dinamo" niondo, buu komandau

遅れてペーチャだ。そうして 終えた、 レースを。「ディナモ」が優勝し、 私達のチームは

uti amjatali. Pete amjala, minawa obshchezhitile isegiesi, diankini:

その次だった。 ペーチャはあとで、私に 寮で 会ったとき、言った。

— Sii ceze gunei, aiwa umnasimi, damisimi kutu gee gusimi,

「君は正しいことを言った。酒を飲んだりタバコを吸ったりすればとても悪い、運動したり

tukjawasimi. Bii, Birobidzhanala biŋei, asuli maŋga bagjoude anci bisini,

走ったりするには。ぼくはビロビジャンにいたとき、そんなに強い 相手も いなかったから、

utemi esimi mede utebede gee biiweni, mangazi esimi geikpene. Tiinejitene
それで 気づかなかった、そんなに悪いということに。あまり 努力しなかったんだ。きのう
uti jegdige minawa dijeeni, bii tjasi damisiendii (9/10) emugdei ogdoloni
あいつが ぼくを 打ち負かした。ぼくはやたらにタバコを吸ったあと、脇 腹を
ljasi sekilieni, utemi tukjakcami cilaami, uti ekindini Batov niogieni. Sii
ひどく刺されるような感じで走るのがきつかったよ。それで バトフに追い越されてしまった。君は
idigi sai utebede biiweni?
どうして知っていたんだい、こんなふうになるのを」

— Biide nicadigi damisiemi, njuju seedigi. Dabaula, skolala tatusiṇe,
「ぼくも小さいときからタバコを吸ってたんだ。六歳からさ。峠の小学校で学んでいたとき、
tukjawasiemi njoulazigazi fizkul'tura urokala, utelieṇini medeemi utebede
走ったんだ、友達と、 体育の 授業中に、そのとき 気がついたんだ、そう
biiweni, utemi damiwe weendegiemi damisimi, mindu zaa ila see bisini
なることに。だからタバコを やめたんだ、 吸うのを。 ぼくは 十 三 歳 だった、
utelieṇini. Aiwe umimi gee biiwenitene tiineṇi saami estafetala tukjaimi, —
そのとき。 酒を 飲むと 良くないということは、きのう わかった、リレーしたときに」
teluṇusiemi bii.
話した、 私は。

— Aa, njoula bimide sagiej uti "amtawani". Asasa, bii jaajwei nientilei,
「そうか、子どものくせに知っていたとはね、この『味』を。ありがとう、ぼくは目が覚めたよ。
odcaixini alide ezenṇei damisi, aiwetene geinigesii zulieleni ezenṇei umi, siide
これからは もうタバコはやめるし、 酒も 試合の 前には飲まないようしよう。君も
utebede nia ezi nixe, — Pete injemi, diagieni. (10/11)
そんなふうにはもうするなよ」ペーチャは笑いながら言った。

Pete ceze manga nii bisini. Uti amjalani emneede esei ise damisiweni,
ペーチャは本当に強い 人間 だった。それ 以来、 一度も見えていない、タバコを吸ったり、
aiwe umiweni. Bogdoloitene omoti tausiiweni isei bii bol'nicala (biide
酒を飲んだりするのを。肩を いつも 治療をしているのを見かけた、私は、病院で（私も
daamai omoti tausiemu kvarcazi). Utebede gie tausiemu: nuani — bogdoloji,
腰を ずっと 治療していた、光線で）。こうして 一緒に 治療していた、彼は 肩を、
bii — daamai.
私は 腰を。

Ekzamenawa tamagiemi amjalani, ila neṇini gusiemi volejbolawa, utatene
試験が 終わってから、 三 日間 やった、 バレーボールを。そのあと
guliṇiemi zugtigi. Poezdazi Burlitale iineemi, utala Petewa asaliemi. Zaawa
出発した、家へ。 列車で ブルリトまで行って、そこで ペーチャを出迎えた。荷物を
teugiesi, guliṇiemu aanazi. Togolo aja zaasazi aana juṇḍaini. Emne Pete
積み込んで、出発した、舟で。 ゆるやかな流れに向かって軽やかに舟は進む。 一度 ペーチャが
iseeni waṇba ulitigi tukjagiiweni.
見つけた、亀が 水の中へ逃げようとするのを。

— Saina, onjoktolo umaktaini bize, ekizefi, iselegefi, — guneesi,
「たぶん 砂の中に 卵を産んだんだ。止まって 見てみよう」そう言って、
agdawaŋkini aanawa. (11/12)
岸に付けた、舟を。

Onjoktome bitali ɲeneemu saaktaitigi. Utala lɲasi egdizi, onjoktowe
砂州に沿って歩いて行った、ヤナギの繁みの方へ。そこにはとても沢山、砂を
ulendeesi, umaktaati waŋbazige. Pete dianaini:
掘って 産卵していた、亀が。 ペーチャが言う。

— Taigizefi umaktawa, oloktoosi, digalagafi, utitene xei bizeneni, bii
「集めよう、卵を。 ゆでて 食べよう、それは うまいぞ。 俺は
anana digai utawa.
前に食べたことがあるんだ、それを」

— Anana umaktaamati ezenefi tai, saina, doloni nica waŋba bagdieni
「前に 産んだのは 集めないようにしよう。きっと中にもう赤ちゃん亀がいる
bize. — guneimi bii Petedu.
かもしれない」と言う、私はペーチャに。

— Onjoktozi daigisewe ezi ulegi, bizeneni menɲede, joloi biiwenitene
「砂に 埋まっているのは掘り出さないで、残しておこう、そのまま。上にあるのだけ
taizenefi. Xamaazi oloktozoŋofi, uti kala imike teu eini aada, caligini
集めよう。あとで ゆでよう。こいつはどういうわけか完全にはゆで上がらないで、白身は
tenje-tenjetene edeini, xoliginitene aadaini, utazi gie digau, kutu xei.
ブヨブヨに なって、黄身しか 固まらない。だから全部一緒に食べるんだ、とてもうまいぞ」

Zaamba umaktawa onjoktomo xuileni neegiemu: nia waŋba bagdigileni.
十個の 卵を 砂の 穴に 残した。 また 亀が 育つように。
Bikiwe dougisileeti iineemu, saljasilegemi (12/13) oloktoomu waŋba
ビキン川の渡し場に 着いて、昼食をとるために 準備した、亀の
umaktawani, xoŋto zeuwede. Umakta kutu ajazi isesiti mintigi, sagdide eiti
卵や ほかの 食べ物を。卵は とても良さそうに見えた、私たちには。大きくは
bie, asi zeibede biiti. Sebie ilekpesiemi. Ajabede bie, digauzeŋe. Caligini
ないが、とてもおいしそうだ。初め 味見してみた。良さそうだ、食べられる。白身は
aja esini aada, xoligini tjak-tjaŋ biini. Utawa gie menɲe digasiemu. Aja,
よく固まっていないが、黄身は 固くなっている。これを 全部 一緒に 食べた。 よし、
lalimi euzeŋe bude, joude digakcini anci bilisini, waŋba umaktazini
餓えて 死ぬことはない。何も 食べ物が ないときでも、亀の 卵で
bagdiuzeŋe! Utebede zepteemu uti umaktawa. Xoŋto onjoktomo bitala nia
生きられるだろう。そんなふうにして食べた、これらの卵を。ほかの 砂 州でも また
taigiemu umaktawa, utemi eimi ozosi digaamu.
集めた、卵を。それで 遠慮なく 食べた。

Utelienjini iineemu Ezeuxe Dabaule. Utala Sulezi baagdiemu. Nuani
その日のうちに着いた、ニジュヌィ峠に。そこでワロージャに会った。彼は

nalani kaptasa, seleme abdjawa xebuimi, aanala teugilemi, onoko imi
腕に包帯をしていた。鉄板を運んでボートへ積むときに、どうしたわけか
cuptigewenikini, utemi kusigebede piandaani nalawani, utemi amjasagieni
手元が狂って、それでナイフのように切った、腕を。それで遅れていたのだ、
gagdadigi.
仲間から

XXII

— Ali emegiej, neju? — xauntasini Pete.

「いつ着いたんだい、おまえは？」尋ねる、ペーチャが。

Nuani saani, Sule utebede endeemeni memi. Pozharska bol'nicatigini

彼は知っていた、ワロージャがこんなふうに怪我をしたのを。ポジャルスカヤ病院に

nexueti Sulewe, utala tausindeeti amjalani, digeefe emegieni Dabautigi,
運んだ、ワロージャを。そこで治療を受けた後、歩いてやって来た、峠まで。

munawa alasilieni, munzi gie nenilegemi zugtigi.

私たちを待っていた、私たちと一緒に帰るために、家へ。

— Tiinenji emegiem. Sinawa Burlitala esimi alasi, odu xatalanji biini,

「きのう来たんだ。君をブルリトで待たないで、ここには彼女がいるから、

utemi ouxi emegiem, — telujsini Sule.

それでここまで来たんだ」と言った、ワロージャは。

— Ono bie sienji? Manga unini?

「どうだい、怪我は？ ひどく痛い？」

— Aja, aasigilieni, njanga-njanga unindeini. Omo nalazi goundazejei,

「大丈夫、治ってきている、ちょっと痛いけど。片腕でも舟を漕げるよ、

ezejei tee.

座ってなんかいられない」

— Timana gulinjeje. Bii Sasawa asalineseemi, ingule zaawe teugiem,

「あした出発しよう。俺はサーシャを出迎えに行ったとき、すぐ荷物を積んだんだ、

kenkuzi elegemi sologi. Jougu-jougu ziawani taulagiude aja. (1/2)

空荷のままでのばらないように。せつせと金を稼ぐのも悪くない」

Buu niala egbenewe gigdeemu, utala anasizejeu. Sikie, digasiendi

私たちは岸でテントを張り、そこで夜を過ごす。夕方、食べた

amjalani, agazige jouxike nenekteeti: bii egzeemi, jouxu neneemeti — xatalatigifi.
あとで、兄たちはどこかへ行った。私はわかっていた、どこへ行ったかを。女の所だ。

Ali emegiewetide, eimi saa, eseide mede. Timadule nuati goo nuati, bii
いつ彼らが帰って来たのか、知らない。気がつきもしなかった。翌朝、彼らは遅くまで寝ていた。私は
digalafi oloктоosi, alasiliemi, alide mjagdagizejeweti.

朝食の支度をして、待った、いつ目を覚ますかを。

Ezeuxe Dabau soljoloni, bagjaza eeleni, bise ude, ile kiu goboweni
ニジュヌィ峠の 上流の 対 岸には、あった、場所が、そこで蜂を
igisieti, utawa Ul'janovkazi gegbisieti. Neki, utauxi temtigezi doukcemi,
飼っている。そこをウリヤノフカと呼んでいた。春、そこへ ボートで 渡ろうとして
tiamalaani omo aanta, Farxutdinixezi gegbisieti nuamani. Amjala baagieti
溺れ死んだ、一人の女性が。ファルフトジニハといった、彼女を。あとで 見つけた、
ezele, bejeleni iledexem jouke kixieni, dianaduge, sifazige kixieti. Utawa bii
下流で。身体中何かにかじられていた。人々は話した、ナマズがかじったのだと。このことを私は
jalu zonigimi, sikie njumdi baami teluŋusimi (2/3) egzelegeti taŋiigetū ei
わざわざ思い出した。夕方愉快なことがあったのを話そう、わかるように、読む人が、この
knigawa.

本を

Sologimi, bii zuliemdimi, Pete jaŋcaini, Sule dulamdini. Utebede eimi
川をのぼりながら、私は前方にいて、ペーチャは舵取り、ワロージャは真ん中にいた。そうして
xeline, ekeŋesezi goundeu. Dabau soloixi omoti ugbeneini, utawa xaata
急がずにゆっくりと竿で押して進む。峠の 上流は 常に 流れが速くて、そこは 全力で
juŋdawanau aanau, togolo iineesi, nia ekeŋesezi goundou. Pete Sulezi omoti
進める、舟を。ゆるやかな流れに入ったら、またゆっくり押して行く。ペーチャとワロージャはずっと
diasiti, tjasi injeiti, njumdi baami teluŋuzi. Bitā kialini goundaimi, omoti
話をしていて、楽しそうに笑っている。愉快な話で。 岸辺に沿って 押し進みながら、たえず
iseimi umaa tulesewe, sugzjada taamani iseimi. Sifamai egdi, sagdjan̄kude.
私は見ている、釣りの仕掛けを、魚が かかるのを見ている。ナマズばかり多い、大きいやつだ。
Suu ejeŋilien̄eni, buu Soljoxo Dabauwe duleneemu, utala eseude ekuse.
日が 沈むころには、私たちはバルフヌィ峠を 通り過ぎた、そこで 止まりもせずに。
Agazige dianaiti, Kapkana udeleni aŋasizen̄efi, utemi sikie, timadule (3/4)
兄たちは 言う、 カプカンの 所で 泊まろうと。それで 晩や 朝に
digalagafi umala asitezefi adimede sifawa.
食べるために釣り上げなければならない、数匹のナマズを。

Njuŋume sifawa asiteemu, nii taundineni zuuzi. Bii sifawa eimi diga,
六匹の ナマズを 捕った。一人に 二匹ずつだ。私はナマズを 食べない。
eemei baimi, imoni xoligi bixini nixemi bize, mindu imike nii imoni
胸がむかついてくるのだ。脂身が黄色っぽいからだろう、 私には なぜか 人の脂身
biinibede bisini. Kapkana datawani jefineesi, agdaamu bitala: olo aŋasizen̄eu.
みたいな気がする。カプカンの 河口に 入ると、 着けた、 岸に。ここで一泊する。
Kapkanazi uti jogosowe lusazige gegbisiti, saina, ciazabada mogoliweni nixeeti
カプカン(罌)とこの支流はロシア人に呼ばれている、 たぶん、罌のように曲がっているのを例えた
bize. Biki, soloixi sololie, aŋaza eeleni esigieni. Kapkanalimei solowositi,
のだろう。ビキン川は、流れをさかのぼると右側に続く。 いつもカプカンに沿ってさかのぼるが、
utala egdi togo, ejektenide waca, utemi olimei sologiti.
ここはたいそうゆるやかで、流れが弱いので、いつもここに沿ってのぼるのだ。

Egbene gigdeesi, sikie, timadule digalagafi oloktolieti agazige, biitene
テントを張ってから、晩と 朝に 食べるものの支度を始めた、兄たちは。私は
moowe taimi bitala, utala egdi (4/5) lengeeti moo painani mude bineni,
薪を 集める、岸で。そこにはたくさん 流されていた、木切れが、 洪水のときに。
eitene suule ogogieti kua-kuada, utemi aja zegdeiti. Bii sebie kjafaktawa
今では 日に 干されて、カラカラに乾いているのでよく燃える。 私は まず 枯れ枝を
taiemi tugezi jendelilegeni too, utatene ilaimi xonto moozi. Pete, sifawa
集めた、速く 燃え付くように、火が。そのあとでくべる、ほかの薪を。 ペーチャはナマズを
tegesiesi, meneweneeni, Sule dijmizi gampawa oloktoini, aadaisini, konsirvazi
洗って、 蒸し焼きにする。 フロージャは米でお粥を 作る。 できあがったら缶詰めと
soligizeneni, utawa bii digazanjai, agazigetene sifawa digalagafi nixeti.
混ぜて、 それを 私が 食べて、 兄たちは ナマズを 食べようと していた。
Caixitene sebzenge bise. Oloktoso zeuwe mene-mene moxotigifi sooloosi,
ここからが おもしろいことになった。できあがった料理を各々が 自分の腕に 入れ、
digaliew biseu, Pete gusimi dianajani:
食べ始めたところで、ペーチャが冗談を言った。

— Ee, kutu bogo sifa oloni, uti Farxutdinixewe digami uti xeenjini
「うーん、とても脂っこいな、ナマズの肉は。こいつはファルフトジニハを食って、そのせいで
zalanami baati. Aja, kutu xei. — utebede dianaimi, digaini.
脂肪が付いたんじゃないか。いいね、とてもうまい」 そんなふうに言いながら食べる。

Sule sebie digasieni adimike (5/6) paiwe. Pete dianaiwani duiisimie,
フロージャははじめ口にした、数 切れを。ペーチャが言うのを聞いているうちに、
sebie alukpunjeni, amjatali iligimie, eleixi tukjaimie, jaaktasilieni. Jaaktasimi,
まず背を向けたかと思うと、すぐに立ち上がり、脇に 走って、 戻し始めた。 吐き出したり、
simpini tjaside, ligbani, inamuni ejeini. Bii sebie bogoliemi, amjala njumdi
咳込んだり、ひどく、鼻水や 涙を 流している。私は 初め びっくりしたが、あとで 愉快地
baaliemi, Pete, ljasi injeimi, dianaisini:
なった。 ペーチャがひどく笑いながら言う。

— Oo, kutu aja, bii emuse eledexi digazanjai sifa oloweni. Siitene,
「おお、これは結構、おれは 一人で腹いっぱい 食うぞ、 ナマズの肉を。 おまえは、
Sule, eexu bii, sifa jou ei diga: bui bunjenide bizeneni, xonto bunjede
フロージャ、馬鹿だなあ、ナマズが何を食わないものか。動物の死体だろうと、ほかの死体
bizeneni, nii bunjenide bizeneni, uti sanja joude eini kala, jou baimi, jou
だろうと、 人の 死体だろうと、 こいつは 何でもかまわず、何か見つけたら、何でも
zepteini, utemide gudieni teumeni oloktogini, amjala sanjamugeli teumeni
貪り食うんだ。それでも腹では何でも消化して、そのあと尻から全部
njugiweneeni, joude ololoni, imoloni anci biini, vitaminatene sukpanaini
出しちまう。 何も 肉や 脂肪には 残さずに、 ビタミンだけを 吸い込んでな。
vitamine ile anci? (6/7) Utemi sii bai-bai zeuwe njaisiej. Digaje, aja,
ビタミンがどこにないものか？ だからおまえは無駄に食べ物を粗末にしたんだ。食えよ、大丈夫、

ezeŋei bude.

死にはしないさ」

— Xee, aga, ezeŋei diga sifa oloweni, eimi mute, sii bai mindu

「ヒュー、兄さん、食えないよ、ナマズの肉は、無理だ。君はまったくぼくに

injemi dianai. Fu, kutu eemei! Sashazi digasizeŋei diŋmi gampawani, —
冗談を言うんだから。フー、ひどくむかつく！ サーシャと食べるよ、米 粥を」

injektemi, diagieni Sule.

笑いながら答えた、ワロージャは。

Utebede tene saami utempi niizige biiweti. Amjala mindu Volodja Sune

こうして初めて知った、こういう 人が いることを。あとで 私に ワロージャ・スン

teluŋusieni xai utebede bisimeni. Nuani nica amini eteteeni lusamazi iŋka

話してくれた、またこんなことがあったのを。彼の 継父は 務めていた、ロシア語で 中国

kejeweni dianagii, iŋkamazi lusa kejeweni dianagii. Omo sovetstva majorani

語を 通訳したり、中国語で ロシア語を 通訳するのを。一人の ソビエトの 少佐がいて、

kutu maŋga salikpesikci bisini, joudexem dianai bise. «Zaagizemi bii sindu
とても 威張りくさった奴で、 何やかやと 話していた。「仕返ししてやる、俺はおまえに

alidede», — muisieni nica amini. Emne iŋka bualani iŋkazige kutu xei

いつか」 と思っていた、 継父は。 あるとき 中国で、 中国人が とてもおいしい

zeuwe digawaŋkiti lusazigewe. Amjala nica amini xauntasieni uti

料理を ふるまった、 ロシア人に。 食べた後で継父が 尋ねた、 その

majorala: (7/8)

少佐に。

— Sii sainu, joude uleweni digasiemi?

「あなたはわかりますか、何の肉を 食べたか？」

— Imi atami saa, barana uleweni kutu xeizi oloktoometi digasiemi.

「何で知らないものか、 羊 肉を たいそう見事に料理したのを 食べた」

— Sii pamasii. Uti barana uleni esini bie, inai uleweni oloktooti,

「あなたは誤解しています。これは羊の肉 ではなく、 犬の 肉を 料理したものです。

iŋkazige kutu ajuti uti uleweni.

中国人はとても好きです、この肉が」

Uti majora degdini caam edeeni, amjala baixi zuke tukjami iineesi,

この 少佐の 顔が 青く なり、 そのあと 外へ 辛うじて駆け出すと

tjasi jaaktalieni. «Keigzi, utebede odcaixini joude ezeŋei enduci, joude

激しく戻し始めた。「いい気味だ。これで もう 何も威張りちらしたりしなくなるし、何も

geeweni niidude ezeŋei diana», — injekteeni Sune.

悪いことを人に 言わなくなるだろう」とほくそ笑んだ、スンは。

Bii, gagda neŋini goundaimie, muisiemi: «Imi utebede gee baiti jougu

私は、翌 日、 竿を押しながら考えた。「どうしてこんなふう to 具合が悪くなるのか、ある

niizige, onofi doozoti biini utempi, bai dianaitigizi jaaktasii. Xontogutu,

人たちは。どんな 体 なのか、そんなふう to、ただ 話だけで 吐き気を催すなんて？ わけが違う

nialuguwe iseimi, (8/9) njoujwe, pinjiwe eikpendeimi. Xonoimi bii, eimi saa,
腐ったものを見たり、悪臭や 臭気を嗅いだりするのとは。不思議に思う、私は、わからない、
onodo nii doozoni biiweni». Amjala bii sagiemi, utebede biiweni, utempi
どうして人にはそんな仕組みがあるのか」。後で私はわかった、そういうことがあるのを。そんな
niiwede baagdisei.
人にも 出会った。

Zuu nenji sologiemu Sjainetigi. Sjainkezige, niide aanani emegiweni,
二 日間、川をのぼった、シャインまで。シャインの人々は、だれの舟が やって来ても、
asaliti niala. Munawada asaliyeti. Buu zugdinkeu teuniye emeeti. Eniye
出迎える、岸で。 私たちも 迎えてくれた。うちの 家族 全員が 来ていた。母は
Klimawa Zinadu tootowerjini. Nuanduni tunjanti bia edeini, sagdi baata, kutu
クリムを ジーナに 背負わせていた。彼は 五ヶ月になっていたが、大きい男の子で、とても
aja zala baagieni, einide soŋo, mintigi jaa paapalizi ajazi isesini, eini saa
順調に体重を増やしていた。泣きもしないで、私の方を黒い目でじっと見つめていた、知らないので、
minawa, bii nuamani tueleisi, ŋalazi memi daiseini, Petetigi ingule nioloni
私を、 私が 彼を 抱き寄せると 手で 顔を 隠す。 ペーチャにはすぐ 首に
tuelegimi, njeneini. Aja saini jaza! Amjala, bimie, sagiteze minawa.
抱きつこうと近づく。よく知っているからだ、もちろん。あとでじきに、わかるだろう、私のことも。

Uiwe ilantunye gaiti canagiemu, amjala teumeni bejegiemu. (9/10) Pabulika
畑を 三人で 手早く 草取りして、その後 全部 盛り土をした。 パヴリクは
asi mai baata edeeni, gjaŋa nenjini selewe uindeseini, ŋalani, bugdini
とてもたくましい少年になった。毎 日 鉄の重りを持ち挙げていて、腕と 足は
gaŋabede edeeni, mosonimi kutu pakizi boontisi. Emne ilekpeemi nuanzini
鋼鉄のようになり、 取っ組み合いも大変上手になっていた。 一度 勝負してみた、彼と、
mosonimi, eseide ete.
取っ組み合いで。勝てもしなかった。

Zugdile teu njoulazige lusa kejezinimeŋi diasiti. Eniye, abuge minzi
家では 皆 子どもたちは ロシア 語でばかりしゃべっている。母と 父は 私に
udieleiweti, biide lusamazimeŋi dianagimi. Udiemezi teumeni egzeimi,
ウデへ語で話すが、私はロシア語でだけ答える。 ウデへ語で 全部 わかるが、
dianakcami tala-olo udie kejeweni zonigimi. Utebede biini, goo eimi diana,
話すのは ときたま ウデへ語を 思い出すぐらいだ。こんなふうに、長いあいだ話さないと
oŋmogi kejewu. Biide medeemi utawa, utemi omoti dianakcaimi, sebie
忘れてしまう、ことばを。私も気づいた、そのことに。それでつとめて話そうとした。はじめは
diasimi doloni lusadagimi, eniye, abuge injekteimi, xonoiti:
話しているうちにロシア語に戻る。母と 父は 笑いながらも驚きを隠せない。

— Jou uti, mene kejeŋi oŋmoi, saina, (10/11) lusa kejezinimeŋi tatusiti
「何てことなの、自分のことばを忘れるなんて。きっと ロシア語でばかり 勉強している
jamata. Njoulaziga elusim oŋmooti mene kejeŋi, buude lusalau egdizi,
せいね。子どもたちはすっかり忘れてしまった、自分のことばを。私たちもロシア語で話すほうが多い。

ono jazai, njoulaziga eiweti ciala udiemezi diasimi.

どうしたらいいの、子どもたちが望まないのを、ウデへ語で話すのを」

— Lusa kejezini kule bixini nixeiti, — gunegimi bii, — skolala tatusiti

「ロシア語の方が 便利なもの」と 言い返す、私は。「学校では 勉強する、

lusamazimei, kniga, gazeta, zhurnala, radio, kino — teu lusa kejezinimei

ロシア語でだけ。本や 新聞、 雑誌、 ラジオ、映画だって全部ロシア語でばかり

dianaiti, utemi, noniliesi, kule baiti.

話しているから、気がつくのと、便利になっているんだ」

— Goode ezeneni bie, eigetu njoulaziga mene kejeji elusim onmozonoti,

「遠くないかもしれない、 今の 子どもたちが 自分のことばをすっかり忘れてしまうのは」

— utebede guzjezi dianaiti enije, abuga. Lusamazi ebede dianaiti: na

そう さびしそうに話す、 母と 父が。 ロシア語で このように言う、「ナ・

pecal'noj note.

ペチャーリノイ・ノーチェ（さびしい調子で）」と。

Abuga banzawa laini. Nuani gagdani Kjaludiga Ivana, Gambu siteni.

父が 板を 切り出す。彼の 相棒は キャルンジガ・イワンだ、ガンブの息子の。

Pete Ivana nejnuni. Bii gjaņa nejnini xuliemi abugawa belesilemi, ziuzide

ペーチャはイワンの弟だ。私は 毎 日 出かけた、父を 手伝いに。 鋸でも

noniliemi laimi. Abuga ujezeleni iliini, Ivanatene (11/12) xegjeixi tanđagini

できるようになった、切り出すのを。父が上に立ち、イワンは 下へ 引き戻す、

ziuwe, abuga uixi uindeemeni, utebede, tauri-ouri tagdimi, laiti banzawa.

鋸を、 父が 上に 引いたのを。 こうして 上へ下へ 動かして、切り出していく、板を。

Bii ei zulielenide laagai banzawa. Eitene njumdizi zawaŋdaami. Bii, tene

私はこの前も 挽いたことがある、板を。 今度は 面白く 感じた。 私は、初めて

emeesi, uixi tuktilegemi nixeemi, abugawa kalagilemi, Ivanatene mindu

来たとき、上に あがろうと した、 父の 代わりに。 イワンは 私に

dianaini:

言う。

— Jou jaŋzalai sii, eedekce, ziuwe uindemde atai mute, xai laakcai,

「何て馬鹿なことを、坊主、 鋸を挽くこともできないくせに 板を切り出そうなんて。

teeje elele ekude, ajazi isesije nonilegemi, manganaasi, laataize.

座ってろ、脇でおとなしく。よく見てろ、覚えるように。強くなったら 挽くがいい」

Bii ekindeemi xonoosi. Abugatene injem-injem ilini uile, alasini minawa.

私は立ち止まった、驚いて。 父は 笑いながら立っている、上に。待っている、私を。

Utemdu tuktiliemi, Ivanatene minawa, amaixi tanđagimie, guŋkini:

かまわず 登ろうとすると、イワンが 私を 下へ 引き降ろし、こう言った。

— Mosonizefi, minawa tugbulisi, laanazaŋai, elisi (12/13) tugbu, eku teeje,

「勝負しよう、 俺を 倒したら 挽かせてやる。倒せなかったら おとなしく座ってろ。

ajazi isesije.

よく見てるんだ」

Bii esimide ciala dilimasiwe, nuani inj-inj tugbukceini minawa naatigi,
私は したくない、 喧嘩なんか。 彼は しつこく引き倒そうとしている、私を地面へ。

biitene omoti dianaimi:

私は 何度も 言う。

— Ezi zuxele, Ouje, eimi ciala bii mosonimi, tindanje.

「からかうのは止めて、義兄さん、したくないんだ、ぼくは喧嘩なんか。放してよ」

Utemdu Ivana boontileeni minawa, bii ketige tijmeemi, nuani, nia

それでもイワンは一発あびせてきた、私に。 私はあやうく倒れそうになった。 彼がまた

gagdjoukceiweni, niogiemi nuamani boontilemi. Zaasazi tijmee naatigi,
二発目を繰り出すのを、お返しした、彼に一発あびせて。 あっけなく倒れた、地面に。

utala, akazii keptemie, jaaj bugdam mintigi isesini. Joude eimi diana,
そこに 仰向けになって、 目を 丸くして 私を 見ていた。 何も 言わずに

iligimie, ziuw zawagieni, bime dianaini mindu:

立ち上がると、鋸をつかみ、 しばらくして言う、 私に。

— Minawa tugbuemi muisinu, ezi enduci, bii mene tijmeemi, jalude.

「俺を 倒したと 思うな、 威張るなよ、 俺は 自分で倒れたんだ、わざとな。

Tuktije, laazafi minzuje.

上がれ、鋸を挽くぞ、二人で」

— Bii eineji ezejei laa sinzi, kuinemi baagije, Ouje, — dianagimie,

「ぼくは今日は 挽かない、あなたとは。 強くなって、義兄さん」と 答えて、

(13/14) neniemi zugtigi.

帰った、 家に。

Gagda neninitene laaliemi. Bii Ivanawa imi Oujezi gegbisiemi? Nuani

次の 日から 挽き始めた。 私は イワンをなぜ「義兄さん」と呼んだのか？ 彼の

mamasani Kaudiga Klava, Sanjuje azigeni, abugadu doo zaalani bisini,
妻 カンチュガ・クラワは サンクイの 娘で、(サンクイは) 父には親戚にあたる。

utemi Klava mindu exe biini, utemi nuani mafawani Oujezi gegbisimi.

だから クラワは 私の 姉にあたり、そこで 彼女の 夫を 「義兄(オウエ)」と呼ぶのだ。

Ivana uti amjalani emneede ese mosonikce, emneete diankini:

イワンとはこのあと 一度も 争うことはなかったが、あるときこう言った。

— Xotodu bagdimi, aja zeuwe digami, manganai, utemi mindigi mai

「おまえは街で暮らして、いい 物を 食って 大きくなった。それで 俺より 強く
edeej, buu odu jou digau: caiwe, ountewe, zaktawa, ali-ali sugzjawa, ulewe.
なったんだ。俺たちはここで何を食ってる？ 野菜、草、薄い汁、 たまに 魚や 肉だ。

Utebede bagdiu. Sii ezi enduci minawa tugbuemi, bii mene jalu tijmeemi.
そんなふうに暮らしている。おまえはいい気になるなよ、俺を倒して。俺は自分でわざと倒れたんだ」

Utebede injekteeni Ouje.

そんな風におどけてみせた、義兄は。

XXIII

June malaptaini zulieleni emegieni Dunka Kolja. Nuani mutueni bongu
六月が終わる 前に 帰って来た、ドゥンカイ・コーリヤが。彼は 終えた、一年生の
kursawa, ekzamenawa tamagiesi emegieni zugtigi. Emne mintigi emeeni,
課程を。試験を 受けてから、帰って来た、家に。 ある日 私のところに来た、
kelelegemi.
頼み事をしに。

— Belesije, gagda, bii udie nimaŋkuwe onjogilemi nixeimi, lusamazi,
「手伝ってよ、君、 ぼくはウデへの昔話を 書きとめたいと思ってるんだ、ロシア語で。
siitene udie kejedigini lusamadagije, biitene onjogizeŋei.
君が ウデへ語から ロシア語へ訳してくれよ、ぼくが書きとめるから」

— Belesitemze, bii xai esimi oŋmo udie kejeweni, eniŋezi, abugezi,
「手伝うよ。 ぼくはまだ忘れてないさ、 ウデへ語を。 母さん、 父さんや、
odozigezi, mamazigezi diasimi, gaiti udiemezi diasiliemi. Ali zawaŋdazafi?
爺さんたち、婆さんたちとも話している。すぐにウデへ語を取り戻したんだ。いつ始めようか？」

— Ekele bilisii, timana.

「もし暇だったら、明日でも」

— Inke, emeje timana, xulizeŋefi nii zugdini taundileni, saŋtazigewe
「いいとも、来いよ、明日。 訪ねてみよう、人の家 ごとに。 年寄りに
nimasiwenezeŋei bii. (1/2)
話をしてくれるように頼もう、ぼくが」

Gagda neŋini ŋeneemu Kaudiga bagditi zugditigiti, uti sagdi zugdi,
翌 日、 訪れた、カンチュガー族の住んでいた家を。これは大きい 家で、
anana bii onjoi niide bagdiiweni utala. Inŋana odo xai inixi bisini, utemdu
以前に私は書いている、だれが住んでいるのか、そこに。インサン爺さんはまだ生きていたが、
kutu maŋga sagdaŋieni. Bii janamide emeemei dogdimie, tagdaani:
すっかり 老いていた。 私が何のために 来たのかを 聞いて、 腹を立てた。

— Sii mene onjogimine udiemezi, janami jouke maŋmuduni onjogiwenei
「おまえは自分で書きとめるんだ、ウデへ語で。 どうしてナーナイ人なんかに書き取らせるんだ
lusamazi. Joude ezeŋei teluŋusi nuanduni.
ロシア語で。何も 話すもんか、 あいつには」

— Odoi, bii, sii joude teluŋusiewei, teumeni zoŋigiemi, joude esimi
「お爺さん、ぼくは、あなたが何でも話してくれたことは全部覚えています。 何一つ
oŋmo, alide ezeŋei oŋmo, amjala teumeni onjogizeŋei, tatusimi mutuesi.
忘れてないし、これからも忘れません。あとで全部 書きとめます、勉強が終わったら」

— Amjala sindutene teluŋusizeŋei, nia niide ezeŋeni mute minawa
「あとで おまえだけに話を聞かせよう。ほかの奴には できん、 わしに
keleimi, — utebede dianaasi, teutu esigieni. Odo doozoni, saina, gee bisini,
頼むことは」 そう 言って、 黙り込んだ。 爺さんの健康は、 たぶん 悪かった。

utemi, jaaj nifiesi, eku kepteini. (2/3)

それで 目を とじて、静かに 横になっている。

Bii utagde keleliemi Njubizja daanijewe.

私は 次に 説得し始めた、ジーナ おばさんを。

— Daanijei, xaulie, telujusije joude nimaŋkuweni, sii anana mundu,
「おばさん、お願いだから聞かせてよ、何か 昔話を。 あなたは昔、ぼくたち

njoulazigadu, egdime telujusigei. Kolja onjonkuni edelegemi nixeini.

子どもに、たくさん話してくれたでしょう。コーリャは作家に なりたいと 思ってるんだ」

— Jou biini uti, udie nimaŋkuweni lusamazime onjogii, udiemezine imi
「何てこと、これは。ウデへの昔話をロシア語だけで書きとめようなんて。ウデへ語でどうして

eiti onjogi, — utebede xonooni daanije.

書かないの？」 こう言って 驚いた、 おばさんは。

— Aja, sebie Kolja lusamazi onjogizeneni, biitene amjala udielegitemize.

「大丈夫、最初にコーリャがロシア語で書いて、 ぼくが あとからウデへ語で書くから。

Xaulie, nimasije daanije, — ajazi geleimi bii.

お願い、聞かせて、おばさん」 何度も頼みこむ、私は。

— Alasinde, bii efili zawaŋdazane. Ga, eimi xeline nimasizene, sii

「待ってて、 私は 今 始めるから。 さあ、ゆっくり 話すから、おまえは

kokpigizenei lusadagimi, Koljatene — onjogimi, — utebede dianaimie, zawaŋdaliene:

頑張ってロシア語に訳しなさい。コーリャはしっかり書くんだよ」 こう言って 始めた。

«Anana, anana uti bisini...» Caixi nimaŋkuwe nimasieni. (3/4)

「昔むかしのことだった…」 その先 話を 話してくれた。

Utebede, niitigide ŋeneusu, teu minawa danjieti, utemdu nimaŋkuleeti.

こんなふうになれの家に行っても、みな 私を とがめたが、それでも昔話を聞かせてくれた。

Ei eimi saa, adimede nimaŋkuwe onjogiemu utelienini, saina, wai xulemiede

今では覚えていない、どのくらいの昔話を書きとめたのか、そのとき。 たぶん 二十 以上

bize. Utebede belesiemii bii Koljawa.

だった。こうして 手伝った、 私は コーリャを。

Pete jamadaxem gazetawa tamazi onjooni. Julje bialani Fine xotoloni

ペーチャはいろいろな新聞を 取り寄せていた。 六 月に フィンランドの街

Xel'sinkala zaa tunjanti Olimpijske gusiizi zawaŋdaati. Bii gjaŋa neŋini tanjimi

ヘルシンキで第十 五回 オリンピック 競技が 行なわれた。私は 毎 日、読んでいた、

gazelata, saimi, onode minti, sovska sportsmenazige geinigesiweti. Tene

新聞で。 知った、どのようにわが ソビエト 選手が 戦っているかを。ちょうど

gusilieti sovska sportsmenaziga utebede geinigesimi. Utemdu kutu maizi

参加したばかりだった、ソ連の選手が このような競技に。 それでも、おおいに頑張って

geinigesiti. Egdi minti niifi edeeti chempionazi. Aisime medalewa ljasii

戦っていた。 多くの わが 国民が 優勝した。 金 メダルを 大変

egdi nii tauleeti: tukjaigetii, mosonigetii, selewe uindeigetii, (4/5)

多くの選手が獲得した。陸上競技、 レスリング、 重量上げ、

gimnastalaigetū, temtigewe seudeigetū xontogutude. Bii eidexi zōjimi
体操、 ボート など。 私は 今でも 覚えている、
championaziga seeweti: Chukarin, Tjukalov, Chimishkjan, Udodov, Lomakin,
優勝選手の 名前を。 チュカーリン、チュカロフ、チミシキャン、ウドードフ、ロマーキン、
Romashkova, Muratov, Urbanovich egdi-egdi xontogutude. Mai nii bisiti.
ロマシコワ、 ムラトフ、ウルパノヴィチ等々たくさんの他の選手も。 強い 選手 だった。

Tene geinigesilimi, utebede gie Amerikazi tauleeti aisime medalewa.

初めて競技に参加して、このように肩を並べてアメリカと獲得したのだ、金メダルを。

Teumeni tanjigimitene Sovetska sportsmenazige niogieti SShA-we. Ei zulieni
全部 数えたら、 ソビエト 選手が 凌いだ、 アメリカを。 この 前までは
amerikana sportsmenaziganime niogisieti xontogutuwe. Utebede bisini.

アメリカ 選手が 凌いでいた、他を。 そんなふうだったのだ。

Bii sagiemi, utempi Olimpijske gusinkuwe anafi grekazige geinigesieti, uti
私は 知った、 こうした オリンピック 競技は 古代 ギリシャ人が 競ったが、 この
ekindini waalimide wadisieti. Utadigi zuu minga see xulemie duleneeni.
期間中、 戦争をやめていたと。 そのときから二 千 年 以上 経っている。

Kutu sebzenkezi bagdieti anafi grekazige. (5/6)

とてもおもしろい生き方をしていた、古代ギリシャ人は。

Minti sportsmenalafi egdin̄ku nemcazi waalieti. Uti waali ekindini esitide
わが国の選手のうち 多くはドイツとの戦争に参加していた。この戦争中は
gusi, utemi zuu Olimpijska gusigu esini bie: zaa zuuntini, zaa ilantini.
大会が行われなかったのだ、二つのオリンピック大会がなかった。第十二回と第十三回だ。

Zaa diintinitene Angle xotoni Londonole bisini, ingule waali amjalani 1948
第十四回大会は イギリスの都市 ロンドンで行われた、 戦争直後の 1948

aṇaduni. Egden̄ke, anafi nii grekazige Gitleradigi ziṇe bisiti bisini? Imi
年に。 驚きだ、 古代ギリシャ人が ヒットラーより利口だったとは。 どうして
esini ekiwene waaliwe? Imi esiti gusiwene zaa zuunti, zaa ilanti Olimpijske
戦争をやめさせなかったのか? なぜ行われなかったのか、第十二回、 第十三回の オリンピック
gusiwe? Utemi ei biigetū zangjazige kutu kee biti. Joude esiti pekce uti
競技は? それほど 現代の リーダーたちは悪意に満ちている。まったく従わなかったのだ、この
Olimpijske xartijalani onjoso giawa. Kutu gee nii bisini Gitlera, tumuzini
オリンピック憲章によって定められた規則に。 とても 悪い 人 だった、ヒットラーは、何百万も
magieni jamadaxem niwe. Waalimide esini eki, Olimpijske gusiwe
殺した、 さまざまな 人を。 戦争さえやめなかったのだ、オリンピック競技を
geinigesileti. (6/7)

行うために。

Utawa bii teumeni gazetala onjosowe taniemi, tjasi xonoomi. Ljasi
こうしたことを私はすべて新聞に 書いてあったのを読み、 大変 驚いた。 大変
agdaami bii, minti sovetska sportsmenafi teunigewe niogiemeti.
うれしかった、私は、わがソ連 選手が どこよりも 優位に立っていることが。

Avgusta zawaṇdaisini eniṇe minawa Pabulikawade xebuktesieni ziktewe
八月の 初めに 母は 私と パヴリクを 連れて行った、ブルーベリーを
tailegeu. Zaama neṇini taijeemu, egdi ziawa taulegiemu.
採りに。 十 日間 集めて、 たくさんお金を 稼いだ。

Bii omoti xulimi abuga banzawa laitigini, belesimi. Abuga zuu muda
私は よく 行く、 父が 板を 切り出すのを手伝いに。 父は 二 度、
xulisieni soloixi wakcanasaani, ulewe gazieni, biitene Ivana zuṇe laamu,
行った、 上流へ 狩りをしに。 肉を 獲って来た。私は イワンと二人 板を挽いたが、
nuani minzide tatieni eteteimi. Abuga emegieni amjalani, Pete minawa
彼は 私とも 慣れていた、働くことに。父が 帰って来た あと、 ペーチャが私を
gaisieni sugzjamanalafi. Ugdazi zuṇe soloomu Zaalitigi, utala, biasali soloimie,
誘った、 魚獲りに。 ボートで二人、川をさかのぼった、トホロまで。そこで流れをのぼりながら、
sugzjamaamu. Bikili solonḡou, bii ilime (7/8) goundeemi, Petetene seuzi
魚を獲った。ビキン沿いにのぼるときは、私が立って 竿を押し、 ペーチャは櫂で
jaṇcaani, amjazala teimiede. Zaalitigi jefinemi zulieleni adilisiemu ila aasala,
舵をとった、後ろに 座って。 トホロへ 入る 前に、 網で獲った、三つの入り江で、
taawaṇkimu kaktjawa, jabadawa, sonsonowe, njaṇga gwesewe. Zaalitigitene
獲った、 鯉、 ラッド (コイ科の一種)、ニゴイ、少しばかりのカワカマス。トホロには
zouṇewe, zeliwe akilegefi soloomu. Biasala bii, Pete zuesimi akisiemu
コクチマスやイトウを刺しに のぼった。 小川で 私とペーチャは交互に 突いた、
zouṇewe. Zeliwe esimu ise, saina, biasa doloni biini bize, utemi duixini
コクチマス。イトウは見かけなかった。たぶん小川の奥に いるのだろう。それで そこへ
soloomu. Zuliele kaṇgjasai ugbewe eeteliemu gougazi. Ele ugbe xooloni
のぼって行った。前方の細い 川瀬を 切り抜けた、小さい櫂で。ほとんど川瀬の端に
iineliw biseu. Uti ekindini bii kjaṇa jeeweni iseemi, kektime kialani ulitigi
近づいて いた。 この とき 私は シカの角のあるやつを見つけた、岸 辺の 水の中に
oloosi iliiweni, dilii xegixi kuzuesi, jaaj nifiesi. Bii ingule mjoundewe
入って立っているのを、頭を下に 傾け、 目を 閉じて。 私が すばやく 銃を
zawaami, zugikceiwei, Pete mudouseini:
取り、狙いを定めようとするのを、ペーチャが止めた。

— Alasije, bii uti kiatigini buisizeṇei (8/9) emnekcem waalagami, sii
「待て、俺がこのアカシカの所まで忍び足で行こう、一撃で仕留められるように。おまえは
zawasije ugdawa, elegeni ejegi.
押さえてろ、ボートを、岸から離れないように」

Pete mogzoi (buu zuṇe mogzoi bisimu, truseutene bisini) bitali eke
ペーチャが裸で (私たちは二人とも裸だった、 パンツは履いていたが) 岸伝いに用心深く
buisilieni. ṇamakta imike anci bisini, igatene dieliwesini. Pete daasala
忍び寄った。蚊は なぜだかいなかった、 アブだけ 飛んでいる。ペーチャは近くに
edeesi, zuugimie, tikewenḡini mjoundai. Bii isei ile maali tiṇmeeweni:
寄ると、狙いを定め、発射した、 銃を。 私は 見る、どこに弾丸があたったかを。

abulieni imikede zuu-ila metra xeenkini. Kjaṇa, sunjandamie, uli eetigini
届かなかった、なぜか2、3メートル手前までしか。アカシカは身震いして、川の方へ
xetigeneeni, taṅkileni iligieni, utadigi jaaj bugdam isesieni Petetigi.
跳ね、中ほどに立って、そこから目を見開いて見つめていた、ペーチャのほうを。
Nuanitene mindule maaliwe geleini, bii ugdawa bitatigi taṅdaasi, maaliwe
彼は私に弾薬筒を要求したので、私はボートを岸へ引っ張り、弾薬筒を
zawamie, tukjaliemi ulili. Bii ulili siata tukjaimi, bugdizi swatigesimi,
つかんで走った、水際を。私は水際を全速力で駆ける、足でしぶきをあげながら。
kjaṇatene mintigime i sesilieni. (9/10) Pete alasini minawa, bii asi xelinemi,
アカシカは私の方ばかり見ている。ペーチャは待っている、私を。私は懸命に急いだ。
kjaṇa xai eini susagi. Zee Petedu maaliwe bugii ekindini kjaṇa, enimecezi
アカシカはまだ逃げない。ようやくペーチャに弾薬筒を手渡すと同時に、アカシカは軽々と
xetigenemie, ancigde kektimele mooktoizi dakpiuweni. Goode eimi bie diindigi
跳びはね、忽然と岸の繁みの中へ姿を消した。しばらくすると、向こうから
goondeeni «xoux!» — caixi sim-sim edeeni.
響いた、「ホーッ」と。その後静かになった。

— Imi esei weende mindu maaliwe? — injemi, dianaini Pete.

「どうして投げなかったんだ、俺に弾薬筒を？」笑いながら言う、ペーチャは。

— ṇeleemi, ulitigi tiṇmezeṇeweni. Imi nagdaani maali ulile, abuliede? —

「恐れたんだ、水の中へ落ちるんじゃないかと。なぜ当たったの、弾が水面に、届かずに？」

xauntasimi bii.

尋ねる、私は。

— Bii esimi ise, ilede maali tiṇmeemeni. Bai pagadiemi, nia ṇeneuzeṇe

「俺は見えなかった、どこに弾が落ちたか。馬鹿なことをしちゃったな、もっと近づいて
bisini kialanigdede, esinide mede bisini, ekisieni, igadigi digenemzi. Xonto
いればなあ、そばまで。あいつは気づかないで、じっとしていた、アブを避けて。ほかの
mjounde bimise, (10/11) waamusei bii uti jeewe. Imi esimi zawa bii nia
銃だったら、仕留めたのになあ、俺はこの角のあるやつを。どうして持たなかったんだ、俺は予備の
maaliwe? Utebede edezeṇeweni, esimi muisi.

弾薬筒を？ こんなことになるなんて思ってもいなかった」

Buu utebede diasu ekindini, soljozonodi Kaudiga Valentine ugdazi ejenjieni

私たちがそんなふうには話していると、上流からカンチュガ・ワレンチンがボートでくだって来た、
ilime, ṇalalai meijmewe zawasini, utebede sugzjamaini. Nuani, buu kiatigiu
立って、手にヤスを握って、そうやって魚獲りをしている。彼は私たちのそばまで
ugdadaasi, xauntasieni:

来ると、尋ねた。

— Egdime akiew zouṇewe zeliwede?

「たくさん刺したか、コクチマスやイトウを？」

— Zouṇewetene akiemu, zeliwe eseu ise. Buu mjoundalaaw ugzawani

「コクチマスは刺した、イトウは見えない。俺たちが撃った音を

dogdigei? — dianaani Pete.

聞いたか？」言った、ペーチャが。

— Anci, esei dogdi, saina, jaini mangazi esini ugza.

「いいや、聞こえなかった。たぶん音があまり響かなかったんだ」

— Bii baibai esimi mjoundelewene Sasadu ingulede, saina, nagdamuse.

「俺は残念ながら 撃たせなかった、サーシャにすぐ。たぶん当たっていたかもしれない」

— Ee, eli waawana, onode mjoundalami ezenei nagda. Utebede biini.

「なあに、当たらないときはどう 撃ったって 当たりゃしない。 そんなものさ。

Uti kjaņa kesini (11/12) egdi, goo bagdizeņeni, — injeini Valja, — suu ei

このアカシカは運が 強い、 長生きするだろう」と笑う、ワーリャは。「おまえたちは今
ejenilefi nixeu?

くだろうとしているのか？」

— Aa, jou nixezemu nia olo, ejenizeņu ingulede, sugzjawa gazimide

「うん、何を するか、 またここで。 くだるよ、 すぐに。 魚を 持って帰るのも
aja, zugdiņkeziģe digalagati. Ule zugdu bie, abuga tiineņi waņnasaani.

いい、家族が 食えるように。 肉は うちに ある、 親父が こないだ 獲って来た」

— Aa, bii bagdigisei nuandini. Biide tiineņini waami sigisawa, ei sunzi

「ああ、俺も 会ったよ、 彼に。 俺もきのう獲ったんだ、若いアカシカを。 今、おまえたちと
gie ņenizeņei zugtigi. Kjaņawa siigiesi, guliņizeņei, zii ulile kofoloji ulaami,
一緒に帰るとしよう、家に。 アカシカを剥いで、 出発しよう。 泉の 水に どっぷり浸けといた、
utebede aja, eini nia.

これなら大丈夫、腐らない」

Buu nuamani esimu alasi, ingule seudegiemu zugtigi, zune seudemi gaiti

私たちは彼を 待たずに、 すぐに櫓を漕ぎ始めた、家へと。二人で漕いで、あっと言うまに
iigiemu Sjainjele. Utebede sugzjamasanaamu sebzēkezi.

着いた、シャインまで。こうして 魚獲りをした、 楽しく。

XXIV

Sjainkeziģe gjaņa neņini, tigde ancidini, volejbolawa gusiti. Uteliņini

シャインの人々は毎 日、 雨が降らない限り、バレーボールをする。このときばかりは
aiwe umiģetu asi waca bisiti, teuniģe gusinemi emeiti kluba kialani.
ウォッカを飲む人も少なく、みな試合をしに集まって来る、クラブのそばに。

Sikietene klubala kinowe isesiti, dominowe, shaxmatawa, xonģto gusikcizi

夜は クラブで 映画を 見たり、ドミノや チェスや、 ほかの ゲームで

gusiti. Jegdigeziģe, xatalazige ajumesiti, klubala leuleiti garmoshka ugzaizini.

遊ぶ。 若者は 娘と愛を語ったり、クラブで踊ったりする、アコーディオンの音楽に合わせて。

Utebede zua deunceiti. Bii imike aantazigezi ņeleliemi. Nuati minawa

こうして 夏は 余暇を過ごす。私は なぜか 女性を 怖がっていた。彼女らは私を

omoti baixi njuwenekceiti, biitene dominozi gusimi, eimi dogdibede bisimi.
いつも 外へ 出させたがるが、私は ドミノをしながら、 聞こえないふりをしていた。

Xatalazigezide eimi ciala leulemi. Imi utebede bisimeni, bii amjala
娘と、 思わない、ダンスしたいとは。どうしてそんなふうだったのかを、私はあとで、
sagiemi, utawa paga (1/2) teluŋusizeŋei alideede.
わかった、これを、また 話そう、 いつか。

Uteliŋini Muna wadieni magazinala eteteimi, artel' zangjani edeeni.
そのとき ムノフはやめていた、店で 働くのを。協同組合の議長になっていた。
Magazinala Avvakum Ivanova etetelieni, bii anana onjoi, onode nuani
店で アウワクム・イワノフが働くようになった。私は前に書いた、どのようにして彼が
kinowe gaziemeni Sjaŋetigi. Ei Pete emuse etetelieni kinowe isewenemi,
映画を持ち込んだのかは、シャインに。今ペーチャは一人で働き始めた、映画を 見せるために。
Avvakumetene xudasilieni magazinala. Nuani aiwa kutu maŋga umii bise,
アウワクムは 商売を始めた、店で。 彼は 酒を ひどくたくさん 飲むので、
utemi, elegemi umi, aiwa wacazi gaziweneini, utemi Sjaŋkezige waca umiti.
それで自分が飲まないように、ウォッカを少なく仕入れる。 だから シャインの人も少しだけ飲む。
Pete Pabulikazi Dabautigi ejeneeti kinowe utala isewesineeti.
ペーチャとパヴリクは峠へ 出かけた。映画を そこで 見せに行った。

Bii neŋunezii gusimi ineŋi, sikie volejbolawa gusimi. Teu niintazige,
私は下の子たちの相手をする、昼間は。夕方はバレーボールをする。 すべての男たちや
jegdigezi gusineiti. Tatumni Uza Mixail Vasil'evich adiliwe, mjachiwa
若者が 参加する。 教師の ウザ・ミハイル・ワシリエヴィチがネットとボールを
gadaani. (2/3) Tuŋa-njuŋu komandaziga kalagimi gusieti sueti eelindini.
手に入れて来た。 五、六人の チームが、 交替で ゲームをした、負けるまで。
Utebede gjaŋa neŋini. Ali-ali bii Mixail Vasil'evichezi shaxmatawa gusimi,
そんな 毎 日だ。 ときどき 私はミハイル・ワシリエヴィチとチェスを する。
nuani egdime eini aju dianami, utemdu mindu emne diankini:
彼は あまり 好きではない、話すのが。それでも 私に ある日、言った。

— Sii kutu tuge maŋganaaj, taamati nica bisei, ei aŋani mindigi gugda
「君は とてもはやくたくましくなった。去年は小さかったのに、今年は 私より 背が高く
edeej. Bimie elusim saŋtanazaŋai, kuide egdi bizeŋeni.
なった。じきに すっかり 大人になるだろう、力も 強くなるだろう」

— Bii xotolo omoti trenirovalaimi, utemi maŋganaimi. Caixide utebede
「ぼくは 街で いつも身体を鍛えています。だから強くなっています。これからもう
nixezeŋei, eede bimi eimi ciala.
します、 弱虫にはなりたくないから」

— Xetige, baata, maŋganaje tugezi, — utebede zasieni. Mixail
「よし、 坊や、強くなるんだ、はやく」 そう励ましてくれた。ミハイル・
Vasil'evich mai niinta, ŋalani kuixi, waali ekindini razvedchike bisini. (3/4)
ワシリエヴィチは屈強な男で、腕力もあり、 戦争のときは 偵察兵 だった。

Tigde amjalani Biki mudendeeni. Oloṇodigi Pete telefonali dianḡkini
雨のあと、ビキン川の水かさが増した。オロンからペーチャが電話で話した、
mindu nuatiwe asalilegei. Bii ugdazi ejeneemi Oloṇotigi, Uzazige nialati
私に彼を迎えに来るように。私はボートで下って行った、オロンまで。ウザの所の岸で、
Pete Pabulikazi alasiti.
ペーチャとパヴリクが待っていた。

— Gaiti iineeḡ sii, Sasha, uli mudeeni jamata. Janami meese emeeḡ
「早かったな、おまえは、サーシャ、水が増えたからな。 どうして 一人で来たんだ、
ugdazi, bii sii niide emeisini gie emelegei dianḡkimi. Buu ele gulinḡliemu
ボートで。俺はおまえがだれか来るのと一緒に来るように言ったのに。俺たちがそろそろ出発しようと
zulieleni kokpigiej, ajazi dubdai, buu jogoso culini sologilefi nixeu, njanga
ときにちょうど間に合って、うまく会えた。おれたちは支流沿いに くだろうとしていた。少し
amjasai bisie, emuseide munawa olo baagi, utemi amaixi ugdazi mene
遅れていたら 俺たちにここで会えなかっただろうな。そしたらあとから ボートで 一人で
sologimusei, xa-xa! — injekteini Pete.
のぼるはめになってたな、ハハハ！」と笑う、ペーチャが。

— Niide eixini ḡene, ejeneemi meese ugdazi, abugade kajaani
「だれも付き合ってくれないから、くだって来たんだ、一人でボートで。父さんが寄こしたんだ、
bii sunawa asalilegei, ugdawatene (4/5) maḡmuzigele imenezeḡefi, amjala abuga
ぼくが君たちを迎えに行くように。ボートは ナーナイ人の所に置いて行こう。あとで 父さんが
genegizeḡeni menede, — bii dianagiemi.
取りに来るよ、自分で」 私は 答えた。

Utadigi, sebie digasiesi, gulinḡiemu ilantunḡie jogoso culini, uti datani
それから まず腹ごしらえしてから、出発した、三人で 支流 沿いに。その 口が
Uzazige bagditi soljozonḡkini bisini, utemi, Bikili omo tangu metra xulemie
ウザの住んでいる所から少し上流にあったので、 ビキン川を 百 メートルちょっと
solondoosi, jefineemu jogosotigi, utala ejekteni waca, maḡgade eini bie,
さかのぼって、入った、 支流に。 ここは 水量も 少なく、きつくもない。
utemi buu xaata goundagiemu tueme xokto kialinide, utebede Sienḡkelegde
それで私たちは頑張って竿を押した、 冬の 道に 沿って。 そうして シゴウまで
goundeemu. Utala njanga deuncendeesi, Bikili sologiemu ila kilometrawa
漕いだ。 そこで 少し 休んでから、ビキン沿いにさかのぼった、三キロを
Sjaḡnelegde. Kutu tuge emegiemu, saina, omo chasa gagda kaktazini bisimu
シャインまで。 とても 早く 着いた。 たぶん、一 時間 半 ほど だった、
xoktole. Pabulika kutu mai baata, omoti siata goundaini. Maḡga baata!
道中。 パヴリクはとても 強い 子で、 つねに 懸命に竿を動かしている。たくましい少年、
Utebede kui nii edeje! (5/6)
そんなふうに強い人になれ！

Suu xai gugda bise buu zugditigi emegiḡeu. Apparaturawa teumeni
陽は まだ 高かった、 私たちが家に 戻ったとき。 映写機材を 全部

daudaŋalagiemu klubatigi: Pete sikie kinowe isewenezeŋeni. Bii pjouwe
 移動した、クラブに。ペーチャが夕方 映画を 見せるのだ。私は 切符を
 xudasiliemi. Njoulaziga jamadaxem kopejkawa buiti, biitene pjouwe nuatidu
 売り始めた。子どもは それぞれ コペイカをくれると、私は 切符を 彼らに
 buimi. Santagetu zuu tiezewe buiti. Amjala taŋigiem, zuu bileta ziawani
 渡す。大人は 二 ルーブルを出す。あとで 数えると、二枚分の お金が
 abuliem, utebede kutu geezi xudasiemi. Pete injektesieni utazi. Uti
 足りない。そんなふうにとても下手に売った。ペーチャが笑った、このことで。それ
 amjalani nia emnede esimi xudasi pjouwe, safani!
 以来、もう 一度も 売らなかった、切符を。もうご免だ。

Eniŋe cwaawe taiweni belesiemu Pabulikazi. Njoulaziga mene gusiti,
 母がエゾノウワミズザクラの実を集めるのを手伝った、パヴリクと。下の子たちは自分で遊び、
 Zinatene Klimawa emusini, nuani sagdi edeeni, zua kutu aja jueni. Buu
 ジーナが クリムの お守りをした。彼は 大きく なった、夏 とても よく 育った。私たちは
 eniŋezi zube melexiwe taijemu cwaawe, utawa nuani jaanjeni, (6/7) suule
 母と 二つ バケツを 集めた、ウワミズザクラの実を。それを彼女が餅にした。日に
 wagisigieni, tue digauzeŋe. Abuga, banzawa laami mutueni, ei internatawa
 干した。冬 食べるのだ。父は 板を 挽き 終えた。今は 寄宿学校を
 woimi mutusini mene brigadazii. Bii guliŋii dakcaini, njaŋga guzje,
 建て 終える、自分の作業班とともに。私は 戻るのが近づいてきて、ちょっと憂鬱だ。
 tatigiem zua zugdu bagdimi, xototigi gjaŋdaimi ŋenimi. Ono jazai, emne
 慣れた、夏のあいだ家で暮らすのに、街へ 戻りたくない。どうしようもない、一度
 tatusiliemi, ei aŋani zaanti klassawa mutusizeŋei, uti amjalani, joude
 勉強し始めたのだ。今年は 十年生を 終える。その あと どの
 fakul'tetalani caixi tatusizeŋeide esimi bodosi, skolawa mutuesi, isetemze.
 学部で さらに 勉強するか、まだ考えていないが、学校を 終えるまでにはわかるだろう。
 Bii telii jegdigezige teu eteteiti, biide etetelimusei, ei tatusii bisie. Sjaiŋele,
 私と同年齢の青年はみな働いている。私も働いていただろう、勉強を続けていなければ。シャインでは、
 bii bagdiemi aŋala, omo baatada anci, bii emuse bimi omo minga jeitangu
 私が生まれた 年には、一人の男の子もいない。私 一人が いて 千 九百
 ilaza diintini aŋa. Xontogutu omo aŋazini ai, omo aŋazini neŋu. (7/8) Uti
 三十 四 年だ。あとは 一 年 上か、一 年 下だ。これが
 bii telii, nuatizi gie tatusiemu skolala. Ceze eniŋe diaŋkini: teu baataziga,
 私の同年代で、彼らとは一緒に勉強した、学校で。実は 母が 言った、すべての男の子は、
 minzi omo aŋani bagdiegetu, budeeti njoula biŋefi.
 私と 同 年 生まれは、死んでしまった、子どものときに。

Bii guliŋii zulieleni Pakula susu wakcaini endeeni. Dogbo zempule,
 私が 出発する 前に、パクラおじさんが狩りで間違いを起こした。夜中、入り江で
 kjaŋa bizem, mjoundeleeni, nii xokonolisi, egzegieni, gaiti kiatigini ŋeneesi,
 アカシカと思い込んで発砲した。人が うめき出して、気がついた。すぐに そばへ 行くと、

tagdagieni Gjagduwe. Pianka Gjagdu gugda niinta, sagdanilieni, njuŋuza
 見つけた、ギャグドゥを。ピアンカ・ギャグドゥは背の高い男で、老境に入っていた、六十
 xulemie edeeni, utemdu pagadieni, uti zempu datalani saigu bisimeni esini
 あまりになっていた。それでうっかりした。この入り江の口に[人がある]印が掲げてあったのを
 mede, dogbo, soljodigi ejeniesi, jefineeni. Utelienjini xai anci bisini fonarka,
 気付かずに、夜、上流から くだって 入った。 そのときは まだ なかった、 懐中電灯が。
 uti sauzini esitide sjakpa baali bisiti, utemi, poupu bixini, esini ise (8/9)
 その 灯りで 使うことはなかった、暗いときに。だから 暗かったので、 見えなかった、
 Pakula saiguwe luendeemeni aasa datalani. Gjagdu, ugdazi eke ŋenemi, esini
 パクラが 印を 掲げたのを、 支流の入り口に。ギャグドゥはボートで静かに進み、
 dogdi soljolo eku Pakula teiweni. Ugdai guesi, umilieni uliwe ŋalai
 気づかなかった、上流でじっとパクラが座っているのを。ボートを結び付け、飲み始めた、水を手の
 xanjazini: «sua, sua!» Eiwene medeeni Pakula, nuandigini goode esini bie,
 平で、「ピチャピチャ」と。 これを 聞きつけた、パクラは。彼から 遠くはない。
 utemi mjoondaleeni uli gikpesitigini. Gjagdu niamami xokonoiweni egzegieni
 それで 銃を放った、 水の 光った方へ。 ギャグドゥが罵りながらうめくのを 気づいた、
 niiwe waantaami.
 人を 撃ったと。

— Ee, endeemi bii, aziga amini, geewe ezi muisi, ile nagdaani maali?
 「あー、間違ったんだ、俺は、親父さん、悪く思わないでくれ。どこに当たったんだ、弾は？」

— Emdei xekui, saina, utala nagdaani. Sipichkawa cuendaasi, iseje ile
 「腹が焼けるみたいだ、たぶんそこに 当たった。 マッチを 付けて、見てくれ、どこを
 sienjiemi.
 怪我したか」

Pakula susu, sauleesi, iseeni ile maali nagdaamani.

パクラおじさんは、火を付けて、見た、どこに弾が当たったか。

— Pogdolieni, sulaktawai esini cika, xelibezi kaptazami siewe, utatene
 「貫通したが、 腸には 触れてないようだ。急いで 縛ろう、 傷口を。そして
 (9/10) ingule gazizeŋei sinawa Oloŋo aerodromatigini, timadula menedielikci
 すぐに 連れて行こう、あんたをオロン飛行場まで。 朝の 飛行機で
 gaziginelegeni sinawa Imatigi, utala tausigizeŋeti, aja, aga, ezi ŋele,
 運ぶために、 あんたをイマンに。そこで 治してくれる、 大丈夫だ、心配しないで、
 uisigizeŋeti sinawa, xai goo bagdizeŋei.
 助けてくれるとも、あんたを。まだ長生きできるさ」

Zaampai guzaltiesi, kaptaani susu Gjagdu sieweni, mene ugdalai teugimie,
 蚊帳を 引き裂いて、縛った、 おじはギャグドゥの傷を。 自分の ボートに 乗せ、
 siata seudegieni ejeixi.
 大急ぎで漕ぎ出した、下流へ。

Gjawanaisini iineeni Oloŋolo, ingule pochtadigi telefonali saawaŋkiti Imala
 夜明けに 着いた、オロンに。 すぐに 郵便局から 電話で 知らせた、イマンに

biigetū tausinkuwe.

いる 医者に。

Bol'nicala operacalaati Gjagduwe, sulaktawani njanga xwaindeesi, uligieti.

病院では 手術した、 ギャグドゥを。腸を 少し 切り取って縫い合わせた。

Aasigieni Gjagdu, amjala abuga susuzi ajaktugieti uti baitawa. Mindu

回復した、ギャグドゥは。そのあと父は おじと 処理した、 この 事件を。 私に

amjala Pete onjogieni. Gjagdu mene pagadiemi saawankini milicawa,

あとでペーチャが手紙で知らせてくれた。ギャグドゥが自分に非があったと報告した、警察に。

Pakulawa esitide sudele. (10/11) Wakciami ali-ali utebede pagaditi. Ei aja,

パクラを裁判にかけなかった。 狩りではときどきこうした事故が起こる。今回はよかった、

nii waagieni, esini bude. Emnekcem waitide bise. Omo utempiwe amjala

人が 治った、 死なずに。 ときには殺してしまうこともある。一つのそんなことをあとで

telusizenjei, bagdiule jou ei bie, jamadaxem kala doojni nii bagdileni.

話そう。 世の中には何がないものか、あらゆる ことが 起こる、人が暮らしている所では。

Bii gulijizejeide dakcaani. Ei teunige tatusiigetū gie ŋenimu, munzi gie

私の 出発の日が やって来た。今回はみな 勉強している連中と一緒に帰る。私たちと一緒に

tene tatusineemi gulineiti Sulaidiga Pete, Suanka Vova, Munova Ljuba,

初めて勉強に 出る、スリヤンジガ・ペーチャ、スアンカ・ワロージャ、ムノワ・リューバが。

nuati ei aŋani nada klassawa mutueti, utemi caixi tatusineiti Xabarskatigi.

彼らは 今 年 七年生を 終えたので、 さらに勉強しに行く、ハバロフスクに。

Gie zanazi ejenijemu, poezdazi xototigi emegijemu, mene bagdizenjei

みなでにぎやかにくだって行った。列車で街に 着いた。 自分が 暮らす

komnatala soktuwe soktugijemu. Timancaalani nia tatusilizenjei, eitene zaanti

部屋で 寝床を こしらえた。 あさってから また 勉強が始まる、今度は 十年生の

klassala.

クラスで。

XXV

Bii klassalai zuu jegdigezige tatusilieti. Ul'cha Ude Serjozha

私の クラスで 二人の青年が 勉強し始めた。ウリチ人のウディ・セリョージャは

Nikolaevskadigi emeeni, zogobai Sipin Kolja Polina Osipenkadigi emeeni,

ニコラエフスクから来た。混血のシピン・コーリャはポリナ・オシペンコ記念の集落から来た。

nuani Sipina Valja neŋuni. Kolja minzi omo aŋani bagdieni, Serjozha zuu

彼は シピン・ワーリャの弟だ。 コーリャは私と 同じ 年に 生まれた。セリョージャは二

seezi ai mundigi. Kolja gugda jegdige, lusa kilezi soliktu, degdini caligi,

歳 上だ、私たちより。コーリャは背の高い青年で、ロシア人とエウエンキ人の混血で、顔は白く、

njukteni xexeligi, njanga konoktu. Serjozha mindigi nektese, utemdu

髪の毛は 茶色っぽく、少し 痩せている。セリョージャは私より 背は低い、それでも

kagbali-kagbali biini, kuixi, ŋalani myshcani mai, bicepsani sagdi, degdini
がっしり していて、力もある。腕の 筋肉が 強く、二頭筋が 大きく、顔が
montolo. Sportsmena biini.
丸い。 スポーツマンだ。

Emne Grisha Dolgan gaisieni "Dinamo" tancploshchadkatigini. Utala minti
ある日 グリーシャ・ドルガンが誘った、ディナモ 舞踏場に。 そこで うちの
institutafi aanta komandani gusizeneti Waizala bii basketbolistkezigezi.
大学の 女子 チームが 試合を行う、ウラジオストクにあるバスケットボール・チームと。
Tancploshchadkala (1/2) basketbola shchiteweni looti, utala geinigesiti. Uti
舞踏場には バスケット用のボードが備えてある。そこで 試合をする。 その
nejini Vladivostoka xatalazigeni njoulazigezibede gusieti, keiga sinezibedede.
日はウラジオストクの女性陣が子供相手に試合したようなもので、まるで猫と鼠みたいだった。
Buu xatalau chempionkazige bisiti Xabarovska bualani, utigetuzi gusimitene
うちの女子チームはチャンピオン だった、ハバロフスク 地区では。彼らと 戦うと、
kutu geezi ugieti, bai zukede.
たいそう下手に動き回った、ただ何とか。

Vladivostokazige kutu gabzizi tukjawasieti, utigetule omo xatala coo
ウラジオストクの選手たちはとても機敏に走り回った。その中で 一人の 娘が 最も
pakizi gusieni. Xatala gegbiweni, seeweni sagiemu: Lugovceva Ljusja,
うまくプレーした。娘の 名と 姓を わかった。ルゴフツェワ・リューシャという、
gugda, alagdiga xatala, nuani emuse egdime mjachawa wesieni korzinkatigi.
背が高く 美しい 娘で、彼女 一人で たくさん ボールを 投げ込んだ、かごの中へ。
Mundu xagzafie edeeni: buu xatalau jaabede bisiti. Utemi njoulaziga
私たちは恥ずかしくなった。 わが 女性陣は 牛みたい だった。 それで 若者たちは
xeetisilieti: «Jaaziga, jaaziga, eimi mute tukjawasimi, jaŋnau suu ouxi? Utebede
叫んだ。「牛さん、牛さん、 走れもしないで 何しに來たの、君たちはここへ? あんなふうに
tukjawasijeu, Ljusja tukjawasinibede». (2/3)
突っ走れ、 リューシャが走るように」

Ljusja emuse guzasieni bagjeu aliweni, nuanduni belesieti xontogutu
リューシャは一人で突き破った、敵の 守りを。 彼女を 助けた、 ほかの
xatalaziga. Kutu ajuleemu buu uti xatalawa, nuani, buu amjala sagiemu,
娘たちが。 とても 好きになった、私たちはこの娘を。 彼女は、私たちはあとで 知ったが、
studentka bisini Waiza pedinstitutalani diinti kursala tatusizeneni, zua
学生 だった、ウラジオストク教育大学の 四 年生で 学んでいて、 夏に
mutuzeneni. Kutu xagzafi bise mefi xatalazigefizi, utebede suemeti.
卒業する。 とても恥ずかしかった、 わが 女性陣が このように負けたのが。

Tatusii aŋawani zawandaamu bonggo sentjabr'du. Bii saimi, ei aŋani
学 年を あらためた、 九月一日に。 私は 知っている、今年が
amjaxu biiweni, utemi njaŋga guzje bisini, saina, alide ezenei nia tatusi
最後 なのを。 それで 少し 気がふさいだ。 たぶん、もう再び学ばないだろう、

skolala, santanazani, institutala tatusilizeŋei joude fakul'tetalani, jamala, eimi
 学校では。大人になって 大学で 学ぶのに、 何の 学部で、 どこでかを、
 saa eidexi. Mindu nojabr'le zaa zakpu see edezeŋeni, elusim jegdigeneemi,
 わからない、まだ。私は 十一月で 十 八 歳に なる。 すっかり 青年になった。
 njoula ekini (3/4) gaiti duleneeni, caixi joude bizeneweni, niide eini saa,
 少年の 時は すぐに 過ぎた。 この先 どう なるのか、 だれにもわからないが、
 eitene tatusiuzene zaanti klasa programmawani. Nia tatusiliemi zakpu
 今は 学ぶのだ、 十 年生の 課程を。 再び 学び始めた、八
 chasadu timadula, zaa dii chasatie inenji dulan'kileni, utebede gjaŋa neŋini,
 時に、 朝は、 十 四 時まで、 午 後は。 そんな 毎 日だ。
 deumpi neŋinisene eu tatusi.
 日曜日(休日)だけは 授業がない。

Lusa literaturawani tatusimitene egdime tanjuzene, jamadaxem onjoiniget
 ロシア 文学を 学ぶときは、 たくさん 読まなければならない、さまざまな作家が
 knigafi onjoometi. Badi egdi knigawa onjooti Sovetska onjoiniget. Zaanti
 本を 書いたのを。 さらに多くの 本を 書いた、ソビエトの 作家が。 十年生の
 klassala tatusiliemu utigetuwe: M. Gor'kij, V. Majakovskij, A. Tolstoj,
 クラスでは勉強し始めた、それらを。 M. ゴーリキー、V. マヤコフスキー、A. トルストイ、
 M. Sholoxov, M. Isakovskij xontogutude. Fadeevatene paga onjoimi, nuani
 M. ショーロホフ、M. イサコフスキーなど。 ファデーエフについて特に書く。 彼は
 minti udiezigewe onjosieni knigala "Coo amjaxu udiezigele". Esini mutu
 私たち ウデへについて書いた、 本で、 『最 後の ウデへ人』で。 できなかった、
 mudagde (4/5) onjogimi. Fadeev onjoomeni knigawa tatusizeŋeu, utawa
 最後まで 書くことが。 ファデーエフが書いた 本を 勉強する。 これを
 "Molodaja gvardija" gegbisiti. Jegdigezige, xatalaziga nemcazi waaliemi uuweti,
 『若き 親衛隊』と いう。 青年や 娘たちが ドイツ人と 戦って 殺された。
 tunjaza xulemie bisiti, komissaranjiti Olega Koshevoj bisini, zaa njunute seedu
 五十人 以上 だった。親衛隊員 オレグ・コシェヴォイもいた。 十 六 歳で
 uuweni. Bii, utempi knigawa tanjimi, ketige eimi soŋoli, munjalimi sitezigewe
 殺された。私は そのような本を 読むたび、ほとんど泣きそうになる。かわいそうだ、子どもたちを
 magieweti, utemi omoti muisimi: janami waaliti?
 処刑するのは。それで いつも 思う、 どうして 戦争をするのかと。

Leningradadigi tatusinegieni omo maŋmu, gegbini Andale, seeni Passar.
 レニングラードから勉強しに来た、一人のナーナイ人が。名前はアンドレイ、姓はパッサールだ。
 Nuani, utala tatusimi cilaani, Boolitigi emegieni, zakpunti klassala tatusilegemi.
 彼はそこで勉強することができなくなって、ハバロフスクに戻って来た、八年生のクラスで勉強しに。
 Andaledu wai nada see, maŋmu kejezini onjosini stixotvorenijawa. Emne
 アンドレイは二十 七 歳で、ナーナイ 語で 書いている、詩を。 一度、
 koncertala tanjieni stixotvorenijawa, maŋmu kejezini onjosowe, menebezi
 朗読会で 読んだ、詩を ナーナイ 語で 書いたのを、みずから

onjoomi. (5/6) Bii utawa eidexi dogdimi: «Mirbee! Mirbee! Mirbee! ...»
 書いて。 私は これを 今でも 聞く。 「平和を！ 平和を！ 平和を！…」
 Utebede zaudaini, gere nii elegeti waali mene dolo, elegeti magi niizigewe,
 そう 呼び掛けている、すべての人が争わないように、お互いに。 破滅させないように、人や
 wooso zugdiwe, fabrikawa, zavodawa, uiwe, xonto xazuwe. Nuani
 作った 家や 作業所、 工場、 畑や ほかの 物を。 彼は
 stixotvorenijawa onjoooni ljasi egdi, mindu imike iseweneeni, xelenelieni bize,
 詩を 書いた、とてもたくさん。私になぜか見せてくれた。一目おいてくれたのだろう、
 sainade.
 たぶん

Andale "Sambo" mosonizini tatusieni Leningradala, utemi ali-ali minawa
 アンドレイはサンボという護身術を習っていた、レニングラードで。それでときどき私に
 tatusieni jamadaxam boontiwe. Mindule eke ancizi, esimi elusim zawaŋda
 教えてくれた、いろいろな技を。 私は 暇がなかったので、真剣に取り組まなかった、
 utempi mosoniwe ajazi nonilimi. Bii volejbolawa, basketbolawa gusimi,
 そんな 技を うまくできるようにと。私はバレーボールやバスケットボールをしたり、
 sportgimnastikawa trenirovalaimi. Andale kuini egdi, emne buu gie
 体操の 訓練をししたりしていた。アンドレイは力が強く、一度、私たちが一緒に
 medosmotrala dinamometrawa diŋesiemu ŋalazi. (6/7)
 身体検査で、 握力計を 握った、 手で。

Nuani sebie esini ciala zikpeimi, xaizeŋei, guneini. Doktora diankini
 彼は 最初、握ろうとしなかった、壊してしまうから、と言って。検査医は 言った、
 zikpilegeni, elegeni enduci, utemi Andale munawa niondo zikpiweneeni. Bii
 握るように、うぬぼれずに。そこでアンドレイは私たちに 先に 握らせた。 私の
 xanjalai kui waca, utemi aŋazai ŋalazi njuŋuzate kilewe diŋeemi,
 握 力は 弱くて、 右 手は 六十 キロを 出したが、
 zieŋezazitene tuŋaza tuŋawa. Xontogutu nadazawa-zakpuzawa zikpisiti. Andale
 左手は 五十 五キロだ。ほかの人は 七十～八十キロを 握った。アンドレイは
 nia diankini doktoradu: «Xaizeŋei, eu munjali?» Doktora iŋ-iŋ diŋewenŋkini.
 再び 言った、 医者に。 「壊しますよ、惜しくないんですか?」。医者とはとにかく握らせた。
 «Minawa eziu geenisi», — dianaimie, zikpieni, utegde aptalieni ŋalama
 「私を 悪く思わないで下さい」と言って 握った。 そうして 握り潰した、
 dinamometrawa. «Leningradala bii adimeke cikaami utebede!» Uti
 握力計を。 「レニングラードでも、私はいくつか 壊しました、こんなふうに」。この
 dinamometra obolini omo tanŋu kile bisini.
 握力計の 目盛りは 百 キロまでだった。

Utelienini Passara ŋalazii teuniŋewe diŋeseeni, niide esini (7/8) galuu
 そのころ パッサールは腕相撲でもみんなを押さえつけた。だれも太刀打ちできなかった、
 nuadini. Nuani mindu omoti dianai bise: «Sii udiemezi onjosije, amjala
 彼に。 彼は 私に いつも 言っていた。 「君はウデヘ語で 書け、 あとで

knigawa onjologemi. Bii maŋmu kejezinime i onjosimi, lusa kejezini lusazige
本を 書くために。 私は ナーナイ 語だけで 書いて、 ロシア語に ロシア人が
onjogiti, bii ceze maŋmu onjonku nii biimi. Xontogutu maŋmuzige, ul'chazige,
翻訳している。私は本当のナーナイの作家 だ。 ほかの ナーナイ人、ウリチ人、
kilezige, chukchazige lusamazime i onjositi, utemi lusa onjonku nii biini».
エウエンキ人、チュクチ人はロシア語でしか書いてないから、 ロシアの作家（と同じ）だ」。
Njanga niogimi dianaimi, utitule tueni Passara knigawani Boolile pechatalaati:
少し 前もって言うておくと、この年の冬に パッサールの本を ハバロフスクで出版した、
maŋmu kejezini, lusa kejezini. Utebede Andale Passara maŋmu poetani
ナーナイ語と ロシア語で。 こうしてアンドレイ・パッサールはナーナイの詩人に
edeeni.
なった。

Uti boloni buu xai eteteemu tuduzewe ulegimi "Garovka" sovxozalani.
その秋、私たちは再び働いた、ジャガイモを収穫するのに、「ガロフスキー」というソフホーズで。
Jaa zugdini cherdakala aŋasiemu egdi niizi, sikie joudexem sebzenkeweni
牛 小屋の 屋根裏で 寝た、 大勢で。 夜には いろいろ おもしろい話を
teluŋusiemu (8/9) mene dolo: nimaŋkuwe, taŋise knigewe, anekdotowe. Co
語り合った、 お互いに。 昔話や 読んだ 本、 小話などを。 一番
maŋgazi injekteemu anekdotazi. Emne adimeke neŋini injeemu omo
ひどく 笑った、 小話で。 一度、 何 日も 笑い続けた、一つの
anekdotazi. Utawa omo studenta teluŋusieni, nuani gegbini Kolja, seeni
小話で。 それを 一人の 学生が 話した。 彼の 名は コーリヤ、姓は
Epov, fizkul'tura fakul'tetalani tatusieni Red'ko Petezi omo kursala. Kolja
エポフで、体育 学部で 学んでいた、ペーチャ・レジコと同学年で。 コーリヤは
waalieni nemcazi, egdime teluŋusieni, onode waaliemi.
戦った、 ドイツと、 いろいろ聞かせてくれた、どのように戦ったか。

Uti anekdotawatene mundu tene teluŋusieni: «Omo gruzina taŋieni
この 小話を 私たちに 初めて 話した。 「一人のグルジア人が述べた、
dokladawa A. Pushkine bagdieni neŋini: A. S. Pushkin — coo sagdi gruzina
演説を、 A. プーシキン の誕生日に。 A. S. プーシキンは偉大な グルジアの
poetani, teemeti vekala bagdieni, stixotvorenijawa, teluŋuwe onjosieni.
詩人で、 前の 世紀に 生まれた。 詩や 物語を 書いた。
Onjologomi bazarala bogo njumja aileni, ofoktowe taŋdaasi, suleeni, utazi
書くために、 市場で、 太った ガチョウの 尻から、羽を 引っこ抜いて、尖らせた。それで。
oniosieni. Egdime onjooni, niide utebede (9/10) ajazi alide esini onjo,
書いた。 たくさん 書いた。 だれも こんなに うまくは絶対 書けなかった。
utemi nuamani bagjou nii koso caadigini mjoundaleeni bugdegde. Eitene
そこで 彼を 敵の 者が 物陰から 撃ち殺した。 今
A. S. Pushkina njaligi naa doloni kepteini, quaje booboime gagda, sii utawa
A. S. プーシキンは湿った 土の 中に 眠っている。眠れ、 親愛なる 友よ、あなたはそれに

sjakpanai!»

ふさわしい」

Kolja, teluŋusimi, emnede esini injendee, mutueside, teutu biini. Buutene
コリャは話しながら、一度も 笑わずに 話し終わると、黙っていた。 私たちは
tjasi injeu. Nuani gruzina akcentazini teluŋusieni, utemi njumdi baamu buu
大いに笑った。彼が グルジア 訛で 話したので、おかしくてたまらなかった、私たちは、
teuniŋe. Nia xontogutu teluŋusieti njumdiwe, coo injeme Epov teluŋusieni
みな。 また ほかの者も 披露した、 愉快的話を。 最もおもしろいのはエポフの話した
anekdota.
小話だ。

Kolja Epov mindigi nektese, tatusimie, eteteini, sportzalawa tafjasini.
コリャ・エポフは私より背が低くて、勉強しながら働いている、体育館を 管理して。
Buu omoti nuandileni geleemu gusilegefi volejbolawa, basketbolawa. Jamaka
私たちはいつも彼に 頼んだ、させてくれるよう、バレーボールやバスケットボールを。なぜか
nejiduni munjalieni. Esini tinda munawa, buu nuandini zagbaliu utempi
日によっては許可しなかった。入らせてくれなかった、私たちを。私たちは彼と口論になった、そんな
neŋindini. Nuani (10/11) munawa kajaisieni "Dinamo" sportzalatigini
日には。 彼は 私たちに 勧めた、 ディナモ 競技場へ
isesilegeu, onode geinigesiweti coo aŋŋku komandazige, gusiizige. «Iseneu,
見に行くように、いかに競技するか 最強の チームや 選手が。「見てきたら」
— guneeni, — onode gusiweti V. Pasternaka, A. Magera, P. Red'ko xontogutude».
と彼は言った。「どんなふうにプレーするか、V. パステルナークやA. マーゲル、P. レジコなどが」。

Ali-ali buu xuliu uti "Dinamo" sportzalatigini, eŋme, wanimi biini, jou
ときどき私たちは行く、このディナモ 競技場へ。 広くて、奥行きが あって、どこ
buadigini sagdi buu sportzaladigiu. Bii utala alide gusizenemide esei muisi.
よりも 大きい、私たちの体育館より。 私はこんな所で決して試合したりするとは思わなかった。
Konstitucija SSSR neŋini, tuŋanti dekabr'du, Waiza volejbolistazigeti Boolile
ソビエト連邦の憲法の日である十二月五日に、ウラジオストクのバレーボール選手がハバロフスクで
geinigesiti omo aŋani, gagda aŋanidutene Booliŋku Waizala geinigesineiti. Ei
試合を行う、一度、年に。 翌年は ハバロフスクの選手がウラジオストクで試合しに行く。今
aŋani Waizaziga gusineeti Boolile. Utawa iseneseemi bii emuse, bii gagdanau
年はウラジオストクの選手が来る、ハバロフスクに。これを見に行った、私一人で、私の友達が
esiti ciala sikie utauxi ŋeneimi. (11/12) Xabarovska komandalani teu
望まなかった、夜 そこへ 行くのを。 ハバロフスク選抜チームは みな
gusiigetu "Lokomativedigimeŋi" bisiti, zuute nii "Dinamodigi" zawaati.
選手が 「ロコモチフ」からだけだった、二人だけ 「ディナモ」から取った。
Red'kowa, Maslowa esiti zawa, utemi nuati "unuseede" eiti.
レジコも、 マスロフも はずされたので、彼らは応援団（心配する側）に入っていた。

Waiza komandalani gugdaŋku jegdigezige, omo niintatene asi gugda.
ウラジオストクのチームは背が高い 若者たちだが、一人の男性が 特に長身だ。

Nuati menzi gie mjachikawa esiti xebuu, utemi mjachikazi eiti njamisi mefi, 彼らは自分たちでは ボールを 持って来ておらず、それでボールで ほぐさず、 体を、 xetigesiti basketbola shchitalani kol'cowa ṇalazifi tungasiti. "Unuseigetu" 跳びはねたり、バスケットのボードの所でかごの輪に手を伸ばしたりしていた。応援席の連中は injeiti, pigositi, xetiti. Niike, guzi baimi, diaṅkini, mjachikawa nuatidu 笑ったり、口笛を吹いたり、野次が浴びせたりした。だれかがあわれんで言った、ボールを彼らに bulegeti. Biseesi, bueti. Njamisiefi amjalani gusilieti. Waizaṅkuzige gaiti 与えるように。ようやく与えた。準備運動のあと、試合が始まった。ウラジオ・チームはいきなり sueti zube partijawa (tuṇa partijazi gusieti). Ilienti partijawade sebie suulieti, 落とした、二 セットを (五 セットで 戦う)。 三 セット目も はじめは劣勢だった。 utemi deuncelegefi (12/13) omo minutawa zawaati. Omosigiesi, duisieti joude そこで 休むために 一 分間を 取った。 集まって、 聞いた、 何と trenerati dianaiwani. コーチが 言うかを。

Deumpiemi amjalani ambasibede gusilieti. Booliṅku muisieti, eedekcezigewe タイムをとったあと、見違えるように戦い始めた。ハバロフスク・チームは思った、弱い相手に janami kuindeuzeṇe, utemi temene gusimi wadieti, utemi sueti ila partijawa どうして頑張るべきかと。それで 荒い 試合運びになり、 結局 落とした、三セットを diada matchawa giede — zube : ila. Waizaṅku ei mai bisiti. Bii utelienjini 続けて、試合を 全部で 二対三で。ウラジオストクの選手たちが今回は強かった。私はそのとき tene iseemi, onode mjachawa dukteiweti ploshchadka dulaṅkidigini. Waiza 初めて見た、 どうやってボールを 打つかを、 コートの 真ん中から。ウラジオストク・ komandalani omo gugda niintati utebede ṇanawasieni, mjachatene pou チームで 一人の 長身 選手が そうして 打つと、 ボールは 大砲の maalinibede dielieni, niide esini kokpigi alisemi. Bai Pasternaka keigebede 弾丸のように飛んだ。 だれもできない、打ち返すことが。 むなしくパステルナークが猫のように xetigesieni, joude esini mute kokpigimi. Utebede Booliṅkezige sueti uti 飛びついたが、どうすることもできなかった。 こうしてハバロフスク・チームは負けた、この matchawa. 試合に。

X X V I

Tue, kanikuledu, bii xulisegiseemi zugditigi. Zugdiṅkezige xai tuu biiti. 冬 休みに 私は また帰った、 家に。 家族はやはり変わりなく暮らしている。 Eniṇe xabausieni Klimawa, utemtulu nia geenzi biini. Eniṇe, eniṇe, ali 母は乳をやっていた、クリムに。 しかも また 身ごもっていた。 母さん、母さん、いつ wadizeṇei siteṇisimi? Bii utelienjini muisiemi, eniṇe, abuga sagdanjieti, nuatidu やめるのだろう、子どもを生むのを？ 私はその当時思っていた、母と父は 年をとったと。彼らは

diiza omo — diiza zube see bisini. Amjala, santanaasi, egzegiemi bii, onodo
四十 一歳と 四十 二 歳だった。 あとで 大人になってから理解した、私は、どんなに
pagadiemi, utebede muisimi.

まちがっていたか、そう考えることが。

Bii Pabulikazi zuu muda xuliseemu buazegetigini kjaṇa uleweni
私は パヴリクと 二 回、 往復した、 森へ アカシカの肉を
sinalanasaamu. Pakula susu zugdidigini kakta kilometra xeenkini weetigi. Pete
背負って。 パクラおじさんの家から 半 キロ 余りだ、山まで。ペーチャは
bii emegii zulieleni wagnasaani kjaṇawa utala. Omo kaktawani wafilegieti,
私が 帰省する前に、 しとめた、 アカシカをそこで。 一方の 半分は 持って帰ったので、
gagda kaktani xoloptoweni geenegiseemu. Weele iineesi, (1/2) esimu tukti
あとの 半分 残ったのを 取りに行ったのだ。山のふもとに着くと、 登らず、
utauxi, biasaziga zegelini xoktoli neneemu. Pabulika teluṇusini mindu:
そこへ、小川の ほとりの小道に沿って歩いた。 パヴリクが 話す、 私に。

— Kjaṇa ei udele oṅkooni, Pete eke kacieni. Bui olo egdime

「アカシカはちょうどここで草をはんでいた。ペーチャはそっと近づいた。シカはそこでたくさん
kjompowe baani (utempi kjompowe lusamazi aralijazi gegbisiti), boule
棘のある草を見つけた (この棘のある草をロシア語で aralija [ウドの仲間]と呼ぶ)。太いのは
waktawani kixieni, nicaṅkuletene dueweni iktemesieni. Utebede oṅkoitigini
皮を 剥ぎ、 小さいのは 枝ごと かじった。そうやって食っているところへ
buisieni, iseinu Pete ono gianani imali, umacazi, ekeede, kjaṇa esinide
近づいた。ほら見て、ペーチャがどうやって歩いたか、雪の上を小さな歩幅で、そっと。アカシカは
mede, utemi aga kulezi tugbueni buiwe. Iseje, taatile ilieni, Pete
気づかない、そこで兄さんはしっかり狙いを定めた、獣に。見て、あそこに立っていたのをペーチャは
odigi mjoundeleeni, kjaṇa zuu muda xetigenemie, tiṇmeeni sagbamde, bugdizii
ここから撃ったんだ。 アカシカは二 度 跳びはねると、倒れた、 ばったりと、 足を
bançasimi patanaani. Maali euteweni pogdolieni, utemi sakia egdizi ejeeni.
引きつらせ、震わせて。 弾丸が 肺を 貫通して、 それで 血が たくさん流れ出した。
Aga, utawa siijesi, paintugieni, amjala imazi daijeeni, (2/3) wali, gai, paampai,
兄さんはこいつの皮を剥ぎ、解体した あと 雪で 覆った。ワタリガラスやカラス、カササギ
juuxia elegeti zogzo. Iseje, sulaktawani teumeni zogzogieti, joude esiti imene.
カケスが突っつかないように。見ろ、腸を すっかり 啄んでいる、何も 残っていない。
Uletene njanga elele bugese, utemi esiti zogzo utawa.
肉は ちょっと離れた所に埋めた。だから突っついていない、これを」

Bii iseemi teumenide, joude neṅui gaiwasieweni. Emnekcem teumeni
私は 見た、 すべてを、 何でも 弟が 示したのを。 一度で 全部を
euzenṅeu mute sinalagimi, utemi, zube bugdiweni ulegiesi, sinatigi xekegiemu
できない、 背負うのが。 それで 足を二つ 掘り出して、背負子にくくりつけた、
suptizi. Njanga teendeesi, gulinjiemu. Bii, njoula biṅei, sinadaaj adimeke
紐で。 少し 休んでから 出発した。 私は 子どものころ背負子で運んだ、何

muda, ei bogdoloji imike uninii. Pabulike enimecezi nenini, nuani tatieni
度か。今は肩が なぜか 痛い。パヴリクは 楽々と 歩いていた。彼は 慣れていた
jamata. Bii sinai tauri-ouri uguni, asi manga uguide esini bie, zaanada-wai
せいだ。私の 荷は あちこち 揺れ動く。それほど重いわけでも なく、 十七か 二十
kile xeenkini bisini, uta imi kutu uninii bogdoloji? Bii esimi saa, sinasimide
キロぐらいだった。こんなになぜひどく痛いんだ、肩が？ 私は知らなかった、背負子を運ぶのにも
tatigiuzezewe, biitene (3/4) gookie esimi sinala, utemi bejei esini tati.
慣れる事が必要だと。私は 長いこと背負っていなかったの、体が慣れていなかったのだ。
Sebie, usawasimi-usawasimi, gianaami, Pabulika injekteini. Iketei zikpeneesi,
最初は、ふらふらしながら 歩いた。パヴリクが笑っている。歯を 食いしばって、
teutu gianaami bii nuani amjatalini.
もくもくと歩く、私は 彼の 後ろを。

Nenii omoti dianaini deuncelegei, bii zanjanzalaimi, inj-inj gianaami, eimi
弟は たえず 言う、休憩するように。私は 意地を張って、粘り強く歩き続けた、
ciala deuncekeemi, aja, manga goode esini bie, utemi zugdilegde iineemu
休みたくなんかないと。幸い あまり 遠く なかったの、 家まで たどり着いた、
eimi deumpide. Amjala bogdoloji, bejei unieni, utemi gagda nenini
休まずに。あとで 肩や 体が 痛くなったので、次の 日は
deunceemi. Bii utawa muisiemi, imi teu uninii sinalaami amjalani? Bii
休んだ。私はこのことを考えた、どうして体中が痛むのか、荷物を運んだあとで。私は
fizkul'turazi omoti nixeimi tukjawasiwe, gimnastikawa, volejbola, basketbola
運動を いつも している、走ったり、 体操や バレーボール、バスケットボールを
gusiwe, sualazi duktemesiwe.
したり、 スキーで 走ったりしているのに。

Abuga utawa ebede alusini: «Tene (4/5) joude zawaḡdami, utebede biini:
父は これをこのように説明する。「初めは 何を やっても、 そうなるものだ。
nii bejeni esini tati, goo bimde utebede biini, utemi sii bejei uninii,
人間の体は 覚えてないから、しばらくたつとそんなふうだ。だから おまへの体が 痛むんだ、
xontowe uguseeni». Saina, utebede biini. Amjala cezegiemi bii utawa.
ほかのことをすると」。 たしかにそのとおりだ。あとで 確信した、私は これを。
Deumpiemi nenii amjalani bejei unimi wadieni, utemi geenegiseemu xolopto
休んだ、 日中、そのあと 体の 痛みは やんだ ので、取りに行った、残りの
ulewe, teumeni sinalagiemu, mangazide esei uguse, saina, tatindeemi.
肉を。全部を 背負って、 辛くも なかった。 たぶん、慣れたのだろう。

Kanikule malaptaisini nenieni bii Boolitigi, nia caixi tatusiliemi zaanti
休みが 終わると 戻った、私はハバロフスクへ。またさらに勉強を続けた、十年生の
klassala. Sochinenijawa onjoomu, zadachawa woomu, stixotvorenijawa mejezi
クラスで。作文を 書いたり、問題を 解いたり、詩を 暗唱して
tanjimu. Bii geometra zadachawani imike cilaliemi woimi, einide tenj ede.
読んだりした。私は幾何学の問題がどういうわけか苦手になって、解こうとしても答が出せなかった。

Emne bii kiatigi emeeni Vania Ramus', ilienti kursala tatusieni fizmatala.
 一度 私のところにやって来た、ワーニャ・ラムシが、三年生のクラスで学んでいる、物理数学部で。
 Ei zulieleni nuani seleme xokto (5/6) institutala tatusieni, imike inzhenera
 これ以前、彼は 鉄 道 大学で 勉強していたが、なぜか 技師に
 edekcemi esini cialaga, tatumni edelegemi banagieni buu institutatigiu, minzi
 なるのを あきらめて、 教師に なろうと 移って来た、私たちの大学へ。 私と
 omo komnatala bagdileni. Kutu mai egzeini matematikawa, utemi, bii
 同じ 部屋で 暮らし始めた。大変 得意 だった、 数学が。 それで 私が
 keseiwei, belesilieni nonilegei. Nuani mindu kutu aja alusieni, bii egzeliemi,
 悩んでいるのを助けた、できるように。彼は私にととてもうまく説明してくれたので、私はわかってきた、
 onode zadachawa wouzenewe. Utemi bii geometrijawa ajazi egzeliemi.
 どうやって問題を 解いたらいいかを。それで 私は 幾何学が よく わかるようになった。
 Fizikawatene xai keseemi, Ivanala xauntasikcemi azanaami bai utebede nixeemi,
 物理学にはまだ悩まされていた。ワーニャに 聞くのも 恥かしかった。ただ そんなふうにして、
 amjala munjaliemi. Xonjo predmetawa aja egzeemi, ximijawa xaiajuemi.
 あとになって後悔した。ほかの 科目は よく できた。 化学は相変わらず好きだった。

Tatusii ekeleni kinotigi, teatratigi xuliktesiu, sportzalala gusiu. Xai
 授業の 合間には 映画や 劇場に 行ったり、 体育館で運動したりした。また
 geinigesiemu volejbolawa, basketbolawa. Buu xai suemu fizmatadu, mangazi
 試合をした、バレーボールやバスケットボールの。 私たちは再び敗れた、物理数学部に。懸命に
 dilimasiemu, njanga buu suemu. (6/7)
 頑張ったのだが、ちょっとの差で私たちが負けた。

Uti amjalani minawa zawaati instituta volejbola komandatigini. Pete
 この あと、 私を 加えた、 大学の バレーボール・チームに。 ペーチャ・
 Red'ko iseeni bii kutu gabzizi gusiwei. Trenirovkala nuani minawa
 レジコは 見た、 私がとても機敏にプレーしているのを。練習のとき、彼は 私に
 tatusieni nuanduni pasawa bulegei, zienjeze nalazii duktelegemi mjachikawa,
 教えた、 彼に パスを 寄こすよう、左 手で 打てるように、 ボールを。
 aagazai ozosini, bogdoloji elegeni cuptige. Minawade mjachikawa duktelegei
 右手はかばっていたのだ、肩を こわさないように。 私にも ボールを 打つように
 buini. Buu sebie zuu chasa xeenkini trenirovalamu, bimie — ila chasazi.
 くれる。私たちは最初は 二 時間 ほど 練習した。 そのうち 三 時間。
 Trenirovkala tukjawasiemu, xetigesiemu (uixi, wanimitigi), brus'jala, turnikala,
 練習では、 走ったり、 跳んだりした (上や 前に)、 平行棒、 鉄棒、
 shtangazi, akrobatikazi. Sikie tjasi deujimi. Sebie zuke zugdile iigii bisei,
 重量上げや 軽業で。 夕方には疲れ果てて、初めのころはやつとのことと家で帰っていた。
 satama cajawa ljasi egdime umnasiemi, xai kogomei eini dulene. Bimie,
 甘い 紅茶を ととてもたくさん 飲んだが、 まだ 渴きは おさまらない。 そのうち
 tatiliemi. Pete omoti Suvorov diankimani dianagii bise: «Tatusiule ugui (7/8)
 慣れてきた。ペーチャがいつもスヴォロフの言葉を 言って いた 「練習が きつければ、

— waalile enimece».

試合は 楽だ」。

Buu Petezi ajazi tatiemu kombinirovalami. Mindu mjachikawa adilitigi
私はペーチャとしっかり練習した、連係プレーを。 私へ ボールを ネット際に
pasowalaiti, biitene junḡaasi, xetigeneimi mjachikawa, ali dukteimi, ali pasawa
上げさせ、私は 助走して 飛び上がり、ボールを、あるときは自分で打ち、またあるときはパスを
bugimi Petedu, omo ḡalazii nḡanga tungalandaasi, utatene Pete xokcoini,
渡す、ペーチャに。片 手で 軽く トスすると、それを ペーチャが打つ、
zienjeze ḡalazii katazi nifandaini, mjachika xegixi dielini palatigi, agdibede
左 手で 力いっぱいたたく。ボールは 下へ 突き刺さる、床に、雷のような
jaidagini. Utebede chasazini, gjaḡa neḡini (tuḡa muda omo nedeljala).
音を轟かせて。こうして何時間もかけて、毎日 (五 回、一 週に)。

Biide noniliemi katazi dukteimi. Emne Igor' Maslov ketige tiḡmeeni
私もできるようになった、強く打つのが。一度イーゴリ・マシロフがあやうく倒れそうになった、
bii nifandaami mjachawa zawakcami, uti amjalani mindu dianaani:
私の 打った ボールを 受けて。そのあと 私に 言った。

— Sii, kuḡaka, lḡasi maḡanaaḡ, ogzo siteni.

「おい、坊や、すごいじゃないか、悪魔の子だ」

— Nii skolani? — injeḡieni Pete. (8/9)

「だれの 学校で(習ったか)?」笑った、ペーチャが。

Geinigesii ekinide dookco. "Lokomotive" munzi gusilegefi idumeeti
試合の 日が やって来た。「ロコモチフ」が 私たちと 試合するために借りた、
"Dinamo" sportzalawani. Uti tovarishcheske geinigesii bisini. Bii nḡanga
ディナモ 競技場を。それは 交歓 試合 だった。私は 少し
bogoliemi. Alide esei muisi ei zalala gusizeḡei. Efili gusilizeḡei uti
戸惑っていた。絶対に思わなかった、この場所でプレーするとは。今や試合しようとしている、この
sagdilenḡkini sportzalala. Bii mendilei tatiemi, olotene eimi saa, joude jouzele
巨大な競技場で。私は自分の所でプレーするのは慣れているが、ここはわからない、何がどっちに
biiweni, utemi bii temene biimi.
あるか。それで 私は 緊張している。

Sud'ja pigondoisini, iligiemu: "Lokomotiva" touze eeleni, buutene ouze
審判が 笛を吹き、私たちは整列した。ロコモチフは 向こう 側、私達は こちら
eeleni. Tradicijazi baagdisiemu: «Fizkul't-privet!». "Lokomotiva" eeleni imexi
側に。伝統にのっとして挨拶した、「お願いします!」と。ロコモチフ 側には 新しい
jegdige gusilieni: Novikov Ljova, gugda, bogdoloni eḡmee, xanjani bii
選手がプレーしている。ノヴィコフ・リョーワという、長身で肩幅が広く、手の平は 私の
xanjadigi jou bualani agbi, eḡme, zienjezenku, Pasternakadigi gugda, njukteni
手の平より はるかに 幅広くて厚く、左利きだ。パステルナークより背が高く、髪は
caligi, usiktu, mindigi omo seezi ai. Tatusini bonḡo (9/10) kursala
薄い色で縮れている。私より 一 歳 年上だ。学んでいる、一 年生で、

seleme xokto institutalani. Katazi dukteini. Mindu imike seuni ese. Tene
鉄 道 大学で。 強く 打つ。 私は なぜだか恐くなった。 初めて
gusiliemi bize instituta komandalani.
試合をするからだろう、大学のチームで。

Bongo partijawa buu gaiti suemu, nuati mjachawa dukteeti seunizi, buu
一 セット目を私たちはあっさり負けた。彼らは ボールを 打った、 強烈に。私たちは
onode alisimi, esimu mute nuatiwe dakpigimi ŋalazi, mjacha buu eetigiu
どうにも受けることができなかった、彼らをブロックすることも、手で、ボールが私たちの方へ
elegeni dieligi. "Unuseigetü" tjasi xetisiti, pigositi, niamaiti, egdiŋku
飛んで来ないように。応援席でははでに叫んだり、口笛を吹いたり、野次を飛ばしたりで、ほとんどが
"unuseiti" "Lokomotive" eeleni. Biide xagza baami. Bii diinti buala bisimi,
応援している、ロコモチフの 方を。 私も恥ずかしい思いをした。私は四番のポジションだったが、
mintigi mjachawa pasowalaati, biitene ajazi esimi muisigi, onode nixezeŋei:
私に ボールを 渡されたとき、私は うまく 判断できなかった、どうしたらよいか、
pasowalagizamies, mene nifandazamies. Uti ekindini mjacha xegixi tiŋmelieni,
パスを回すべきか、 自分で 打つべきか。 そのうちに ボールが 下に 落ちてきて、
biitene xokcoimie nifandaami, bai cooli ujaami. Muisimi: (10/11) efili
私は 思い切り 打ったが、 打ち損じた。 私は思う。 さぞかし
"unuseigetü" pigosilizeneti, xetizeneti, xagzausizeneti, niamazaŋati minawa.
応援席が 口笛を吹き、 どなり、 からかい、 罵るだろう、 私を。
Pete minawa eini danŋsi, aja guneini, utebede ali-ali biini. "Unuseigetutene"
ペーチャは私を 責めずに 「大丈夫」と言う、「こんなことはよくある」。 応援席は
teutu biiti, niide ese pigondo, xetinde, niamande, minawade niide ese
静かで、 だれも口笛を吹いたり、叫んだり、 罵ったりせず、私を だれも
xagzausie. Bii xonoomi: imi utebede biini? Imi teutu biiti? Utemie
非難しなかった。私はびっくりした。どうしてこうなのか？ どうして黙ってるのか？ すると
dianalieti: «Ezi ŋele, baata, dukteje mangazi uti sagdilenŋkini niintazigewe,
こう言っている、「遠慮するな、坊や、たたけ、強く、 この でかい 奴らを、
xagzaune nuatiwe! Kuixi bije!» Pete dianaini: «Dilizi asasalagije
鼻をあかしてやれ、やつらの！ 頑張れ！」。ペーチャが言う、「頭を 下げて、
"unuseigetüwe"». Bii dilizi kuzuemi tauri-auri, utemdu xanjazifi gagda-gagdazi
応援席に」。 私は 頭を 下げた、 あちこちに。すると 手を 互いに
jaidawanalieti. Pete dianaini: «Munjaliti sinawa, egzeiti, sii tene
打ち合わせ出した。ペーチャは言う。「激励してるんだ、君を。みな知っている、君が始めて
gusiliwei». (11/12)
試合に出たのを」。

Gagda partijawa buu zuke suuweneemu nuatiwe. Utigetü, saina, muisieti:
第二 セットを 私たちは辛うじて勝った、 彼らに。 この連中ははたぶん思った、
«Eedenkuzi jou kuindeuzeŋe, mene suuzeŋeti». Buutene temene gusiemu.
「弱虫相手に 何を 頑張るか、 勝手に負けるだろう」と。私たちは 必死で 頑張った。

Ilienti partijawa buu suemu. Nuatide temene gusiligieti. Buu ljas mangazi
 三 セット目を私たちは落とした。彼らも 気を引き締めてきた。私たちはおおいに頑張って
 eektesiemu mene eefi, nuati zuke suuweneeti munawa. Pete Igorjazi mene
 防御した、自 陣を。彼らが辛うじて 負かした、 私たちを。 ペーチャとイーゴリが
 blokafi aisigieti, utemi Pasternaka xeetisini omotide: «Nifajeu uti, kujaka
 ブロックを組んだので、 パステルナークが叫んだ、たえず。 「打て、 そいつを坊やに
 xoondilini!» Buu nuati dukteiweti blokalami, ketige amaixi eimi pungeli:
 回して」。 私は、彼らが 打ったのをブロックしたとき、あやうく後ろに転びそうになった。
 utebede ɲanawanaiti mangazi. Buu suemu utelienjini diinti partijawade, xai
 それほどにたたいた、 強烈に。 私たちは負けた、そのとき 第四 セットも。 再び
 nuati zuke eteeti munawa.
 彼らが何とか 勝った、私たちに。

XXVII

Marta zawaɲdalisini radioli diankiti, I. V. Stalina katazi unuguleemeni.
 三月の 初め、 ラジオで 言った、 I.V.スターリンが重体だと。
 Gjaɲa neɲini sawanaiti, onode tausiiweti, utemi eiweni aasigi. Sagbali biini,
 毎 日、 知らせる、どのように治療しているかを、それでもよくならないことを。意識不明だ、
 duileni sakia tenkieni. Nii iledexem bogoliebede biiti, ɲeleiti budezeneweni.
 脳内 出血だ。 人々は至る所で困惑したようにして、恐れている、彼が死ぬことを。
 Gjaɲa neɲini dogdimi bii, nii omoti dianaiweti: «Stalina anci edeisini, ono
 毎 日、 聞く、 私は、人々がたえず言うのを。「スターリンが亡くなったら、どうやって
 bagdizenefi caixi? Nii kalagizeneni nuamani? Utempide ezeneni bie. Joux
 暮らすのだろうか、この先？ だれが代わるのか、彼に？ そんな人は いないだろう。 どこへ
 xebuzeneni caixi mintiwe?» Bii muisimi: «Ceze, jou edeze nuani amjalani?
 運ぶだろう、これから私たちを?」。私は 思う、 「たしかに、どうなるのだろうか、彼のあとに?
 Ono bagdizenefi odcaixini?» Utebede, saina, egdi nii muisiti.
 どんな生活になるのだろうか、この先?」。このように、たぶん多くの人が思っている。

Tuɲainti martadu Stalina, eimi mjagdagizi, budeeni. Nii iledem sonjoiweti
 三月五日に スターリンは、意識を回復しないまま、亡くなった。人々が至る所で泣くのを
 dogdiemi. Cezezi (1/2) ajueti niizige Stalinawa. Radio dogbo inenide traure
 聞いた。 本当に 愛していた、人々はスターリンを。ラジオは 夜も 昼も 追悼の
 muzykawani gusini. Agba zangjanjiti jeinti martala bugezeneti Lenina
 音楽を流している。 国家の 指導者は 三月九日、 葬られる、 レーニン
 mavzoleelani. Niizige nilifi baiti, jou bize caixi, waali eimi biede aja.
 廟に。 人々は不安にかられた、どうなるのだろうか、これから、戦争にならなければよいが、と。
 Gazetala onjoiti xonɲo goloziɲe zangjanjiti dianaiwati: Stalina budeeni
 新聞に 書いている、外国の 指導者が 論評するのを。スターリンが死んだ

amjalani, xonŋto epoxa edezeŋeni. Nii eini saa, utebede bizeneweni, gere nii
あとには 違う 時代が 始まる、と。だれが知らないか、そう なるのを。 多くの人が
saini utawa! Sovetskij niini iledexem xauntasini: sexi, xazu, zeu tamani
知っている、これを。ソビエトの人々は至るところで尋ねる、 布や、 品物、 食べ物の価格が
odcaixini tiŋmezeŋenies, ezeneni tiŋmees?
この先 下がるのか、 下がらないのか。

Jeinti marta. Eineŋi bugeiti I. V. Stalinawa. Moskvala kakta neŋini,
三月九日。 今日、葬儀を行う、I.V.スターリンを。モスクワでは正午で、
Boolile — sikie. Aktovyj zalala tapci nii, Radioli omoti traurna muzyka
ハバロフスクでは夕方だ。大講堂は いっぱいの人で、ラジオからはたえず追悼の 音楽が
jaidaini. Mitingele nii soŋoini, nii iŋamusini, (2/3) nii sunjaimi dianaini:
流れている。集会である人はすすり泣き、ある人は涙を流し、 ある人は 震え声で話している。
teuniŋe munjaliti, radiotransljacijawa Moskvadigi duiŋimide. Mavzolejala
みな死を悼んでいる、放送を モスクワから 聞きながら。 霊廟に
nedeeti amjalani saljuteleti, Sovetska Gimnawa gusieti. Teluŋusiti,
葬った のち、 弔砲が放たれ、ソビエト連邦国歌が 演奏された。 人々の話では、
ploshchadila tapci nii bisiti, Moskvatene egdime niiwe aptalieti Xulaligi
広場に 群集が 殺到し、モスクワでは たくさんの人が 押しつぶされた、赤の
Ploshchadila. Utebede bisini. Bongo apreljala xai cenawa tugbugieti.
広場で。 そんなふうだった。 四月一日から また 物価が 下がった。
Utawa niidexem dianaiti: ei amjalani ezeneti tugbugi Stalina ancidini.
これをだれもが話している。このさきまた下がることはないだろう、スターリンが亡くなったからには。

Buu xai caixi tatusiu, ono bagdiemu culini bagdiu. Biitene omo
私たちは再び勉強を続け、これまで暮らしていたとおりに暮らしている。私は 一人の
xatalawa ajuliemi. Nuani zakpunti klassala tatusini, gegbini Ella, seeni
娘を 好きになった。彼女は 八年生で 学んでいて、名前はエーラ、姓は
Vizhaikina. Ella amini Nikolai Vizhaikin buu institulau direktora
ヴィジャイキナだ。エーラの父ニコライ・ヴィジャイキン是我たちの大学で課長
belesinŋkuzini eteteeni, xazuwe tafiasieni. (3/4) Nuati Krasnodonska ulicalani
補佐として 働き、 経営を担当していた。 彼らは クラスノドンスカヤ通りに
bii obshchezhitijala bagdieti. Nikolai Vizhaikin waali ekindini oficera bisini,
ある 寮に 住んでいた。ニコライ・ヴィジャイキンは戦争のとき 将校 で、
gugda niinta, bogdoloni eŋmee. Oficera shinelewani alide eini toologi,
背が高い男で、 肩幅が 広い。 将校の 軍用外套を いつもボタンをしていない。
utemi xulisini shineni gamda-gamda edimusini.
それで 歩くと 外套が ひらひらと 風になびく。

Minzi gie Ude Serjozha trenirovalalieni volejbolawa. Nuani xatalani
私と 一緒にウディ・セリョージャが練習を始めた、バレーボールを。彼の 女友達は
omo studentka bisini, xai uti Krasnodonska ulicalani bii obshchezhitijala
一人の 学生 で、 やはりこのクラスノドンスカヤ通りに ある 寮に

bagdieni. Buu Serjzhazi gagdalaamu. Emne nuani minawa xebueni mene
 住んでいた。私はセリョージャと友達になった。 あるとき彼は 私を 誘った、自分の
 xatalatigii, utitene Ellazi gagdamule bisiti, utemi buali gie xuliliemu. Elladu
 女友達の所に。彼女は エーラと仲良しだったので、 通りを 一緒に歩いた。 エーラに
 onode dianazajei xagzaimi, bii tene ajuliemi, utemi xagzafi baimi. Omo
 どうやって言うか 恥ずかしい。私は初めて好きになったので、 恥ずかしく思う。 ある
 sikieduni Serjzha (4/5) mene Larisanjizi (utebede bisini xatala gegbini)
 晩、 セリョージャは 自分の ラリーサと (こう だった、娘の 名前は)
 kinotigi njeneeni, minawa Ellazi emuse amjasawanaani. Utelienjini bii zuke
 映画に出かけてしまい、私を エーラと二人きりで残した。 このとき 私は思い切って
 memi dianawanami: «Bii, Ella, sinawa ajumi». Xatala esini xono, saina,
 自分に 言わせた。 「ぼくは、エーラ、君が好きだ」。 娘は 驚かなかった。たぶん
 saani bii nuamani ajuemei. Njanga biseesi, nuanide mindu dianjini: «Biide
 知っていた、私が彼女を好きだったのを。少し間をおいて、彼女も 私に 言った。 「私も
 sinawa ajumi». Bii tuelemi xatalajii, njugasindeemi, amjala sagiemi: gee
 あなたのことが好きよ」。私は抱き寄せて、彼女を、キスをした。 あとで 思った。下手な
 njugandaami, esimi noni — tene teliniemi.
 キスだったが、うまくできなかった、初めて経験したのだ。

Uti amjalani gjaņa neņi baadiseemu, buali xuliemu, kinotigi.

この あと 毎 日 会い、 外を 歩いた、 映画に。

Ekzamenawa bugilemi onjosiu, taniu eemu. Utawa saimie, bii klassalai
 試験の 準備をするために、書いたり、読んだり一緒にした。このことを知って、私のクラスに
 biigetuxatalaziga onodexem danuleiti. Ali-ali, injeimi, dianaiti: «Sii xatalailai
 いた 娘たちが いろいろと 横槍を入れた。ときどき 笑って 言う。 「あなたの彼女には
 nia bie omo jegdige». Biitene injem-injem nixeimi. (5/6) Esimi ceze,
 さらにいる、一人 彼氏が」。 私は 笑って やり過ごす。 信じなかった、
 utebede ajuemi. Elladu zaa nadanti see njeneini, zua bagdieni, utemi ele
 それほど好きだった。エーラは 十 七 歳に なる。 夏に 生まれたので、もうじき
 bagdieni nejini edezeneni.
 誕生日に なる。

Zaanti klassawa mutulegemi, egzamenawa tamaliemi. Bii sebie aja

十年生を 卒業するために、試験を 受けた。 私は初めのうち良い

ocenkawamai baami, fizikawatene esimi etegi. Xauntasikci pjouwe zawaasi,
 成績ばかりを 修めたが、物理学を 取り損ねた。 問題 カードを 取って、
 iseemi, zube xauntasinkuwe eimi saa ajazi, utemi (amjala mejejiemi
 見ると、 二 問 わからない、よく。 それで (あとで わかった、
 pagadiemi) njanga teendesii partala, pjouwe tatumnidu bugimie, njugiemi, bii
 間違いだっただと) 少し 座って、 机に、 カードを 先生に 戻して、 教室を出た。私の
 amjatali nuani dianaini, bii xonjo pjouwe zawalagai, utawa esimi pekce,
 うしろから、彼が 言う、 私が 他の 問題カードを取るように。それに 従わなかった。

jouke ikpeleinibede bise, amaixi elegei mudani. "Zubeme" nedeeti mindu.

何か 唆されたかのようにだった、あとへ 戻らないように。 「二」を 付けた、 私に。

Kiris Kanganovich amjala mindu diankini, zua ajazi tatusigilei fizikawa. (6/7)

キリス・カンガノヴィチは、あとで私に 言った、 夏に よく 勉強するように、物理学を。

Utebede edeemeni saasi, Chmutine Gosha diankini mindu:

こう なったのを 知って、チムチン・ゴーシャが言った、 私に。

— Mintigi imi esei emee, bii belesimusei sindu, eitene omo anani kai

「僕の所へ なぜ来なかったんだ、ぼくが助けてやったのに、君を。今じゃ一 年 また

bizepeni sii zaanti klassawa mutuzepei olindini iinezeneweni. Utebede biini

かかる、 君が 十年生を 終えるまでに、これから合格するのを。 こう なってる、

koli, gwasajanitene ekzamenawa tamagizepei. Aja, bii belesizepei sinawa.

決まりが、次の年にしか 再試験を 受けられないと。大丈夫、ぼくが手伝ってやるよ、君を」。

— Mindu dianaati, bolo tamagilegei. Asasa, Gosha, bii onokui

「私に 言った、 秋に 受けるようにと。ありがとう、ゴーシャ、ぼくは何とか

tamagitemize bolo.

合格するよ、 秋に」

— Munjalieti sinawa, utemi bolo tamagiweneiti. Sii ezi gjanđa, zua

「可愛そうに思ったんだ、君を。だから秋に再試験を受けさせるんだ。君は怠けるなよ、夏に

ajazi tanije fizika knigawani.

よく 読むんだ、物理学の教科書を」

— Inke, tanitemize. Avgusta malaptaisini tamagitemize. Caixi lusa

「わかった、読むよ。 八月 末に 再試験だ。 そのあとロシア

kejeweni tatusizepei mene klassazii giede. Lusa kejeni tatumni edezepei,

語を 勉強するつもりだ、自分の同級生と一緒に。 ロシア 語の 教師に なるのに、

utemi janami (7/8) fizikawa aja sazami?

それでもなぜ 物理学をよく知らなきゃいけないんだ？」

Gosha injeeni bii dianaiwei.

ゴーシャは笑った、私の言葉に。

Uti amjalani geinigesiemu Booli zegeleni chempiona edelegemi. Buu zuu

このあと 試合があった、ハバロフスク地方選手権をかけて。 私たちは二つの

komandadu suemu, sebie "Lokomotivedu", amjala porta Vaninedu, utemi

チームに 負けた、最初 ロコモチフ、 次に ワニノ港に。 それで

ilienti buala edeemu. Pete dianaini:

三 位に なった。 ペーチャが言った。

— Ussurijsketigi xuliefi amjalani, zua kanikulatigini nenizepefi, bolo

「ウスリースクに 行った あと、 夏休みで 帰省するけど、秋に

baagdigizepefi niade.

会おう、 また」。

— Ussurijskala niizi geinigesizepefi minti?

「ウスリースクで どころ 試合をするの、 ぼくたちは？」

— Dal’nij Vostoka chempionatani pedinstitutazigele. Mintile bie shansa
「極東の 選手権大会だ、 教育大学間で。 俺たちにはある、チャンスが、
championa edeimi.
優勝する」

Ussurijskatigi buu Igore Maslove ancizini ĵeneemu, nuani mutueni
ウスリースクへ私たちはイーゴリ・マスロフ抜きで 行った。 彼は 卒業した、
institutewe, utemi etetezeĵei buatigi guliĵieni. (8/9) Ussurijskala buu omoto
大学を。 そして 就職先へ 行った。 ウスリースクで私たちは一
muda gusiemu Waiza pedinstitutazini, xontogutu komandati esitide emee,
度、試合を行った、ウラジオストク教育大学と。ほかの チームは 来なかった。
utemi buu, Waizaĵkuzigewe suuweneesi, chempiona edeemu. Xatalazigede
それで私たちはウラジオストクのチームに勝っただけで、選手権を獲得した。女子チームも
geinigesieti, chempionazi Waizaĵku edeeti. Uteliĵini nia iseemi Ljusja
試合をしたが、優勝はウラジオストク・チームが手にした。そのとき再び 見た、リュージャ・
Lugovceve, amjala buu zuu chempionazige digasikcile gie aiwe umindeemu.
ルゴフツェワを。試合後、私たち二つの優勝チームは 食堂で 一緒にウォッカを飲んだ。
Ljusja Petela xauntasieni:
リュージャがペーチャに尋ねた。

— Ile baaw suu uti baatawa, xai njoulagde biini, studenta eini bie.
「どこで見つけたの、あなたたちはこの男の子を。まだ子どもで、 学生 じゃないわ」
— Andale zaa klassawa mutueni. Buu institutalau bie Severa
「アンドレイは十年生を 終えたよ。 うちの 大学には ある、北方
otdelenijani, utala tatusiti zakpunti klassadigi Dal’ne Vostoka niizige siteweti,
科が。 そこで 教えている、八年生から、 極東 民族の子どもたちを。
utala mutueni waatani zaanti klassawa. Bii nuamani kajaimi fizkul’tura
そこを卒業したんだ、こないだ、十年生の課程を。 俺は こいつを 行かせる、体育
fakul’tetalani (9/10) tatusilegeni.
学部で 勉強するように」。

— Tatusizeneni, kutu gabdi baata, aja sportsmena edezeni.
「そうしたらいいわ、とても機敏な子だから、すばらしい選手に なるわ」
Bii joude esimi diana, xagzafi baami, esimi zaanti klassawa mutu. Bii
私は 何も 言えなかった、 恥かしくて、 まだ十年生を卒業していないので。 私は
pivawesene ilekpesiemi, jegdigezige tjasi utawa umieti, utemi omoti
ビールを 味見しただけだが、若者たちは たくさんこれを飲んでいたので、しょっちゅう
tukjawasieti cjaktasilegemi. Dogbo xoktolo bisimu, timadule Boolitigi
走っていた、 小便しに。 夜、 帰途につき、 朝 ハバロフスクに
emegiemu. Serjozha Ude omoti gaisini bii nuani buatigini giantalagai, bimie
着いた。 セリョージャ・ウディが何度も 誘った、 私が彼の故郷へ遊びに来るように。しばらくして
bii cialaami, isenezemi, nii onode xonto udele bagdiiweti. Zugditigi utawa
私は同意した。見に行ってみよう、人々がどのようによその土地で暮らしているかを。家にこのことを

onjogiemi, elegeti bogoli, bii imide esimi zuktigi emegi. Serjozha dianaini:
手紙で知らせた、心配しないように、私がどうして家に帰らないか。 セリョージャは言う。

— Pjouwe ezenefi gadaa, "tukcazi" nenezenefi.
「切符を 買わずに、 キセル（ウサギ）で行こう」

— Ono unazañafi (10/11) paroxodala?
「どうやって乗るんだ？、 汽船に」

— Aja, mintigi agduseje, bii omoti xulimi pjoule ancizi. "Kominterna"
「大丈夫、ぼくに 任せとけ。 ぼくはいつも 行ってる、切符なしで。 コミンテルン丸は
dampi paroxoda, asuli eiti jouktesi pjouwe. Bii Dmitrienko Stjopazi
オンボロ船で、 別に 確かめない、 切符を。 ぼくはスチョーパ・ドミトリエンコと
sanlijeleemi, nuani minti duñsifiuj nexuzeneni duixini, amjala unazañafi,
打ち合わせて、 彼が ぼくたちの荷物を 運んでくれる、中に。 そのあと 乗り込むんだ、
gruzchikazigewe belesimiede.
人夫を 手伝いながら」

Utebede nixeemu, kulezi unaamu. Stjopa Dmitrienko mutueni tatumni
このようにして、 無事に乗り込んだ。スチョーパ・ドミトリエンコは卒業した、教育
institutawani, ei neneini etetei बातigi. Uti gugda, alagdiga jegdige, buu gie
大学を。 今は向かうところだ、配属先に。こいつは背が高く、ハンサムな青年で、私たちは一緒に
xuliseemu Ussurijskala geinigesineñeu. Nuani kañalani teemu, bejenitene
行ったことがある、ウスリースクに試合しに。 彼の 寝台に私たちが座り、彼のほうは
restoranatigi neneeni.
レストランに 行った。

Bii ei zulieni alide esei xuli paroxodazi. "Kominternatene" seuzi
私は それまで 一度も乗ったことがなかった、汽船に。コミンテルン丸はスクリューで
seudeini, utemi (11/12) lñasi gigjaini paroxoda bejeweni. Bii ingule ñuami
進む ので、 細かく振動していた、船 全体が。 私は すぐ 眠った、
Stjopa kañalani. Dogbo lñasi edinelieni, utemi bazi mangazi gigjalieni
スチョーパの寝台で。 夜中、 ひどく風が出て、 それで いっそうひどく 揺れだした、
jakile. Mindu kutu gee esee. Jaaktasiliemi, dilii, soktosobede, xounini.
波で。 私はたいそう気分が悪くなった。吐き気がして、頭が、酔っぱらったようにめまいがした。
Utebede adimeke chasawa keseemi. Amjala minawa Serjozha Stjopazi
そんなふうに数 時間 苦しんだ。 そのあとで私を セリョージャとスチョーパが
siugieti, pivawe, zeuwe gazieti. Bii dilii uindekcemi cilaami. Serjozha bii
起こし、 ビールと 食べ物をあてがった。私は頭を上げることもできなかった。セリョージャは私の
anmatigi pivawe kuñgedeeni, ketige xañkaasi, umiemi teumeni, ingule nia
口に ビールを 流し込んだ。あやうく息が詰まりそうになりながら飲んだ、全部。すぐまた
keptegiemi. Saina, ñuami bize, mñagdagisi, eñegde duleneemeni medeemi.
横になった。 たぶん 眠ったのだろう。目が覚めると、苦しみは去ったように 感じた。
Edi xai tñasi edineeni, paroxodawa tauxi-ouxi jakizi wesiweneeni. Timadule
風は まだ 強く 吹き、 汽船を あちこちへと 波で 揺らした。 朝

Troickala iineemu. Utala Serjozha jouxike njueni, goode eimi (12/13) bie
トロイツコエに着いた。そこでセリョージャはどこかへ出かけ、しばらくして
emegimie, minawa siugieni.
戻ってくると、私を 起こした。

— Teploxoda "Kalinine" mintiwe boonjeni, utauxi banagizefi xelibezi,
「ディーゼル船のカリーニンがわれわれに追い付いた。そっちに乗り換えよう、すぐに。
minti kialafi zifi ilieni, xelibezi nenezefi.
われわれの横に並んで停まっているから、早く行こう」

— Pjoule ancizi nii tindazajani mintiwe?

「切符 なしで だれが乗せてくれるの、ぼくたちを？」

— Sii teutu bii amjatali neneje. Bii saimi, joude nixeimi.

「君は黙ってぼくのうしろからついて来い。ぼくは知っている、どうすべきか」

Bii nuani amjatalini dabagiemi teploxodatigi. Eje, olo kutu kika, enee,
私は 彼の うしろについて突進した、船の中へ。ああ、ここはとてもきれいで広々としている。
ingule passazhirazigizi gie teeneemu xegile, utala ilienti klassa bisini.
すぐに 乗客と 一緒に進んで席を取った、下の船室に。そこは 三等席 だった。

Teploxode kutu tugezi neneeni, gagda nenjini sikiegisini iineemu

汽船は とても 速く 進み、 次の 日の 夕方、 着いた、

Bogorodskala, utala Serjozha enini meese bagdieni, uli kialani kektimele
ボゴロツコエに。そこにセリョージャの母が、一人で暮らしていた、川 沿いの 崖の
zugdile, amini baadulegieni, (13/14) pazige bagdieni joxo Kol'chomele. Nuani
家で。 父は 離れて、 一人で 暮らしていた、コリチョーム村に。 彼は
utala kolxoza zangjanini bisini. Bogorodskala zaa nenjini bagdiemu,
そこでコルホーズの指導者 だった。 ボゴロツコエで 十 日間 過ごした、
volejbolawa gusiemu, tukjawasiemu, xetigesiemu. Emne Serjozha sagdi
バレーボールをしたり、 走ったり、 飛び回ったりして。一度、セリョージャが大きな
adiliwe geeneseeni mene susulei. Timadule buu adilisiliemu Manmu bitani
網を 借りて来た、自分のおじの所から。朝、 私たちは網をしかけた、アムール川の浅瀬の
kialani zuawxe dawa soloiweni. Serjozha dianaani sikie, adilisimi amjalani:
岸で 夏サケが のぼって来るのを。セリョージャは言った、その晩、 網をあげたあとで。

— Imike kutu waca soloini dawa. Wai dawawa taawanaafi, uti kutu
「なぜだかほんの少ししかのぼって来てない、サケは。二十匹のサケを獲ったが、こんなに
waca.
少ないなんて」

— Imi boloixi dawadigi nica biini? — xauntasiemi bii.

「どうして秋サケより 小さいの？」 尋ねた、 私は。

— Utempi biini zuawxe dawa, sagdizi eini juu.

「こんなもんだ、 夏サケは。 大きくはならない」

— Bii anana utempiwe mundule esei ise.

「ぼくは今まで こんなのを うちの方では見たことがないよ」

— Utemi esei ise, utigetu sundule eiti iinee. Ei udele gaditi, caixi
「そりゃ見てないさ、こいつらは君らの所まで行き着かないから。今ここで産卵して、これ以上
eiti solo. (14/15)
のぼらないんだ」

Kutu njamai nejnini bise, buu adilisiŋeu, utemi buu zongoi olosiemu
とても 暖かい 日 だった、私たちが網を入れたのは。それで私たちは裸で過ごした、
Manjmu ulileni. Gagda nejnini bii ŋalalai pusilakta bagdieni, saina,
アムール 川で。 次の 日、 私の 腕に 水腫れができていた。 たぶん、
xanalandaami. Utawa doktora, puseliesi, butusieni jouke ŋou mazjazi, bintazi
冷やして痛めたのだ。これを医者、 切開して、 塗った、 何か くさい 軟膏を。 包帯で
kaptagieni. Sikiegsini bagjaixi douwemu Uxtatigi, utala Serjozha guguni
巻いた。 夕方、 対岸に 渡った、 ウフタ村へ。そこにはセリョーギヤのおばが
bagdieni. Anasiesi, sagdiulieli katerazi soloomu Soloncatigide, utala
住んでいた。一泊して、 川沿いにモーターボートでのぼった、ソロンツォフまで。そこに
lespromxoza bisini. Sagdiuliewe Kol'chomezi gegbisiti, Serjozha amini
営林署が あった。 この川は コリチョームといい、 セリョーギヤの父が
bagdileni joxowede Kol'chomazi gegbisiti. Soloncadigi goo esimu gulinji:
住んでいる 村も コリチョームと呼んでいた。ソロンツォフからなかなか出られなかった、
niide Kol'chomatigi eini ŋene.
だれもコリチョームまで行かないので。

Bimie Serjozhadu niike bueni mene temtigi, utala unaasi, gjoudeemu
そのうちセリョーギヤにだれかが貸してくれた、自分のボートを。それに乗って、漕ぎ始めた、
soloixi, aja, ejekteni mangade esini bie. Serjozhazi (15/16) kalagisimi
上流に。幸い、流れは きつくはなかった。 セリョーギヤと 交替で
gjoudeew. Bii ŋalai unini, utemi goo eimi gjoude. Sikie iineemu Serjozha
漕いだ。 私は 腕が 痛いので、 長くは漕げない。 夕方 着いた、セリョーギヤの
amitigini. Omo nejnini deunceesi, sugzjamanaamu tolstolobikewe. Serjozha
父の所に。 一 日 休んでから、獲りに出かけた、 レンギョを。 セリョーギヤが
dia-dia tuleeni zube adiliwe. Bii xonoomi, zee xauntasilegemi nixeemi bisei,
並べて 仕掛けた、二つの網を。 私は 驚いて、 ちょうど聞こうと 思って いたら、
uti ekindini Serjozha xeetindeeni: «Bazije, uuzei, dilii kuzuje!» Adike sugzja
そのとき セリョーギヤが叫んだ。 「気を付けて、上に！ 頭を下げて！」。何匹か 魚が
zontileeti temtigi xoondilini, omoos zubees buu kialau tinmeeti temtigi
飛びかかって来た、ボートの上に。 一匹か 二匹は 私たちのそばに 落ちた、 舟の
dootigini. Xontogutu, omo adiliwe duleneesi, gagda adilile taagisieti. Aa,
中へ。 ほかのは 一つ目の網を 飛び越し、 二つ目の網に 引っ掛かった。ああ、
utempi sugzja biiniew! Bikile anci utempi sugzja, utemi esimi saa, utebede
こんな 魚だったとは！ ビキン川にはいない、そんな魚は。それでわからなかった、こんなふうに
xetigesiiweti adili xoondilini.
飛び越えるなんて、網の上を。

Gagda neñini gajawa mjousasineemu. Serjozha jouke pou sacjañawani
 次の日はカモを撃ちに出かけた。セリョージャが何やら散弾銃を
 bueni omoto maalizi. (16/17) Olo bii buala moozige nektesenjkude, wacazi
 貸してくれた、一緒に、弾薬筒と。ここにある土地の木は低くて、まばらに
 tala olo iliti, saaktaide nica, mundule jou bualani sagdi, gabam bagditi,
 あちこち生えている。ネコヤナギも小さい。私たちの所ではどこでも大きく、豊かに茂っていて、
 jamadaxem moo ilini: bula, kunka, aikte, eigde, amigde, ii, talu, sikte
 いろいろな木が生えている。トネリコ、杉、モミ、シナノキ、ポプラ、カラ松、白樺、ハコヤナギ
 xontogutude. Woktode gugdazi eiti juu bize olo. Serjozha minawa kajaani
 等々。草も高く伸びていないようだ、ここでは。セリョージャは私に行かせた、
 jouke tonjotigini, utadigi igbesilegei gajawa, nuanitene alasizeneni, dieliweti
 どこかの沼地へ、そこから追い立てるようにカモを。彼はといえば、待ち構える、飛んでくるのを
 waalagami. Bii zubete nicanku gajawa iseemi, mjoundeleemi, Serjozha eetigini
 狙うために。私は二羽の小さいカモを見つけて、撃った。セリョージャの方へ
 dieligieti. Utigetuwe mjousalaani nuani zuu muda, bai cooli. Joude eimi
 飛んで行った。これを撃った、彼は二発、外した。何も
 waa, emegiemu zugtigi.
 獲らずに帰った、家へ。

Timadule Serjozha kajaani minawa zuu aantazigazi ziktewe tainelegei. Bii
 翌朝、セリョージャは行かせた、私を二人の女性と一緒にブルーベリーを採りに。私は
 sebie temtigewe esimi gjoude: aantazige, kalagimi, mene gjoudeeti, saina, bii
 最初舟を漕がなかった。女たちは、交代しながら自分たちで漕いだ、たぶん私が
 eimi noni gjoudeimi, muisieti. Bii kalagilemi nixeiwei, xauntasieti, (17/18)
 漕げないだろうと想着。私が代わろうとしたとき、尋ねた、
 mutezeminu gjoudeimi. Joude eimi diana, kalagiemu aantawa, utebede
 漕げるのかと。何も言わずに代わった、女と。そうして
 gjoudeemi mudagde. Zikte mooni nekteseide, omoti xenefuleesi taiw.
 漕ぎ続けた、最後まで。ブルーベリーの木は低くて、たえず膝まづいたまま採らなくてはならない。
 Mundule njoule zikte mooni gugdade, ilime taiw. Melexiwe zaluesi,
 私たちの方の湿地ではブルーベリーの木は高いので、立ったまま採る。バケツを一杯にして、
 gulinjimu amaixi, bii zugdilegde meese gjoudeemi.
 帰路についた。私は家まで自分で漕いだ。

Nia omo neñi biseesi, gulinjimu Bogorodskatigi, Serjozha amini
 もう一日過ぎて、戻った、ボゴロツコエへ。セリョージャの父が
 katerawa kajaani munawa neugimi. Zuu neñi duleneisini, pjouwe gadaasi,
 モーターボートを出した、私たちを送るのに。二日たって、切符を買って、
 unagiemu xai utitulu teploxodala "Kalinin". Aja iigiemu Boolile. Bii
 乗った、再び同じ汽船カリーニンに。無事に戻り着いた、ハバロフスクに。私の
 koxoitene xaisi ajazi esini aasigi, caixi tausiliemi. Fizikawade tamagiemi.
 傷はまだすっかり癒えてないので、さらに治療を続けた。物理学に合格した。

Caixi mene otdelenijala tatusizeŋei lusa kejeweni.

これから自分の 学科で 勉強するのだ、ロシア語を。

Caixi studenta bagdizini bizeŋei!

これから学生 生活が 待っている！

Marta, zaanti neŋini, zuu minga zuunti aŋani.

三月 十 日、 二 千 二 年

Xutaligi Kekttime.

クラスヌイ・ヤール (赤い崖)、

Kaudiga Saunderi Saunderi Siteni.

カンチュガ・アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ